
真の海防

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真の海防

【Nコード】

N3668G

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

太平洋戦争において、日本の商船隊は大きな打撃を被った。それによって資源を断たれた日本は文字通り敗戦へと転がり落ちた。しかしながら、もし日本が違う道を歩んでいたらどうなっていただろうか？

プロローグ（前書き）

前回の作品が失敗に終わったので、今度こそやり遂げる所存で書きます。そのため更新ペースは第2話更新の後は7日から5日に1回ぐらいで行きたいと考えています。

ブローグ

1941年12月8日から1945年8月15日までの所謂太平洋戦争において、軍に所属しない汽船・機帆船・漁船併せて7240隻が撃沈され、船員60600名、便乗民間人59200名、便乗軍人101000名、便乗捕虜10800名の命が失われた。

この内物資輸送を行った輸送船や貨客船、タンカーと言った商船の場合2568隻（843万総t）が撃沈もしくは沈没し、それらによる船員の犠牲は35000人以上とされている。戦死率50%というこの数字は、戦死率19%の陸海軍軍人を大きく上回り、日本における戦時輸送がいかに過酷な物であったかを物語っている。

開戦時米英に次ぐ世界第3位の保有量を誇った日本商船隊は、敗戦時には事実上全滅しており、動ける船は80万総tに過ぎなかった。それらさえ、南方と日本を繋ぐことは不可能となっていた。それはすなわち日本に石油や鉄を始めとする重要物資が一切入らなくなったことを意味していた。

当時日本の海防を担う日本海軍においては、艦隊が敵艦隊と直接もしくは間接的に数回の海戦を行い、勝利を得ることで戦争を勝利へ繋げるという短期決戦思想が幅を占めていた。中には「船団護衛は女子供の仕事だ。」とまで言う軍人がいたという話もある。

その結果商船の護衛は後回しにされ、昭和19年半ばまで商船は危険な独航もしくは少数の護衛艦のみに護衛されて航行するという苦しい状況に置かれていた。

これに対し連合国（特にアメリカ）はその生産力に物を言わせて

潜水艦や航空機を輸送船団攻撃に活用した。特に米潜水艦によるドイツ潜水艦顔負けの群狼戦術、新型レーダーやソナー等日本軍を遙かにしのぐ高性能な電子兵器、航空機による命中率の高い反跳爆撃の採用などで日本輸送船を撃沈していった。

昭和18年後半に入って本格的な海上護衛部隊である海上護衛総隊が設立され、昭和19年後半になってようやく護送船団方式を本格的に採用したものの、泥縄的な作戦と組織体制、旧式の対潜兵器、圧倒的な戦力の不足は損失を止めるには至らず、日本の輸送船団は悲劇的な末路を迎えることとなる。

戦時急造船の建造等も全てが泥縄的に行われ、日本の商船は自らの身を守ること、また守ってもらうことも満足に出来ないまま悪戯に失われていった。

先に書いたことに加えて終戦時大型と呼べる戦前型商船の残存数は1桁に留まり、残されていたのは戦時急増の粗製乱造船ばかりであった。世界に誇った日本商船隊は3年8ヶ月という期間で事実上全滅していた。

海路の壊滅は、四方を海に囲まれ重要資源のほぼ全てを輸入に頼る日本にとっては死活問題であり、死を意味していた。その簡単な事実さえ日本は気づくことなく、例え気づいていても見て見ぬ振りをして戦争を行った。

鉄やアルミ、石油の欠乏は大戦後半になって深刻な生産力不足と燃料不足をもたらし、航空機や艦艇の生産はストップし、艦艇は動くことが出来なくなり、航空機は訓練を行うことが出来ず、体当たりによる片道攻撃を行わなければならぬ所まで追い詰められた。

そんな無謀な戦争中でも、船乗りたちは懸命にお国のために働き続けた。軍人でも軍属でもないために、たとえ戦死しても靖国神社には入れずその扱いは軍馬以下とされ、軍の命令はどんな理不尽なものでも従わざるを得ず、恩給さえ出ない彼らはそれこそ数え切れない辛酸を味わったことだろう。

現実に成功の宛がない作戦を命じられ、船団ごと全滅したこともあった。軍に自らの意向を却下され、その結果船を失った船員がいた。また脱出時救命具を軍人にとられ、命を落した者もいた。

しかし彼らはそれらに対して文句を言うこともなく（もしくは言う機会を与えられないままに）戦い、そして多くが二度と故郷の土を踏むことなく、海深く沈んでいった。

彼らの苦労と功績は戦後忘れ去られ、ようやく最近になって陽の目を見るようになってきた。それでも人知れず海の底へと消えていった彼らの無念と怒り、そして彼らを取り巻いていた事実を知る者は少ない。

どうしてそのような事態が起きてしまったのだろうか？もちろん海軍の無策や無理解にその原因を帰すことも出来るが、では何故そのようなことに至ってしまったのだろうか？日本という国が航路防衛の重要性を認識する機会はいくらでもあったはずである。

秀吉の朝鮮侵略の際は朝鮮の李提督の補給路攻撃により補給が途絶え、日本軍は撤退を余儀なくされた。日露戦争の際は日本海に出没したウラジオ艦隊によって大陸へ向かう多数の商船が沈められ、多くの物資や人員が戦わずして失われた。近衛師団座乗の「常陸丸」が沈められたのは良く知られている。第一次大戦では同盟国として補給線を遮断された英国の窮状と現実を目の当たりにし、自らも地

地中海でUボートと死闘を演じている。

しかしながら、それらの前例や教訓はことごとく無視され、太平洋戦争においては全く生かされなかった。もし生かされていたならば、少なくとも多少なりと注意されていたならば、あの戦争の結果も変わったのではないだろうか。

歴史にIfはつき物である。現実になんか覆すことは不可能であるが、それをシュミレートし、可能性を探ることは不可能ではない。

この物語は、そんな可能性を探る物語である。

ブローグ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日露戦争

1904年、満州と朝鮮の利権を巡って勃発した日露戦争は満州や旅順をはじめとする陸の戦いと、主に日本海で行われた海の戦いが主戦場となった。

日本軍はロシアのアジア進出の拠点たる遼東半島の旅順攻略を目指した。当時ロシアの租借地であった旅順には帝政ロシア艦隊の半分であり、日本の連合艦隊に拮抗する戦力を持つ太平洋艦隊の主力が駐留しており、日本にとっては脅威以外の何物でもなかった。

旅順を落すために帝国陸海軍は総力を挙げて攻撃に移った。特に海軍としてはヨーロッパから派遣されるであろうバルチック艦隊到着前に、是が非でも旅順の攻略と艦隊の撃滅が必要だった。

しかし、海軍が行った旅順攻撃は当初の駆逐艦による夜襲戦こそ成功したが、その後の閉塞作戦や連合艦隊による攻撃は、堅固な陸上要塞に阻まれて不成功に終わり、逆に主力戦艦2隻（「初瀬」、「八島」）をはじめとする貴重な艦艇を多数失う結果に終わった。

もともとロシア艦隊も港内に封じ込められ、士気と練度の低下という事態に見舞われた。さらにその後行われたウラジオストクへの脱出にも失敗し、旅順のロシア艦隊は大して戦局に寄与できぬまま、旅順陥落を迎えることとなる。

一方旅順攻略に失敗した海軍に代わって陸軍が占領した大陸側から旅順攻略に移った。しかし、ロシアは海側のみならず陸側にも要塞を構築し、攻略せんとする陸軍の前に立ちはだかった。

旧来の歩兵突撃を仕掛ける日本軍に対して、ロシア軍は機関銃（機関銃は日本軍の方が多かったという説もある）を多用して対抗した。結果日本側は実に6万もの兵員が死傷するという大損害を被ってしまった。司令官の乃木大将も息子2人をこの戦いで失っている。

旅順攻略戦は長期戦と化し、日本陸軍は歩兵の突撃以外にも色々と策を講じた。当時もっとも大型と言われた28cm榴弾砲の投入、塹壕を掘り進めて敵陣地の下から進撃を図る等々。また海軍が派遣した重砲隊も山越えによる港湾や、港内の艦艇への攻撃を実施している。

しかしこれらの方法はいずれも長期的、または後半戦に入ってから行われたもので、結果を求められている乃木大将が手っ取り早く行えるのは歩兵による突撃だけだった。

相次ぐ歩兵戦力の消耗のために、本土からは多数の兵員が増援として海を渡り、大陸の戦場へと向かった。

1904年6月14日、近衛第一歩兵連隊や多数の武器、食料を乗せた輸送船「常陸丸」は広島県の宇品港を出港、関門海峡と玄界灘を経由して大陸へと向かった。

「常陸丸」は1896年竣工の6000t級中型貨物船であった。当時2000t程度の貨物船しか建造経験のなかった日本で初めて建造された5000t越えの貨物船で、戦争前はスエズ運河経由で日欧航路に就航していた。

当時の日本の海運業界は、商戦の保有量こそ世界第6位に躍進していたが、海軍と同様明治になってからたった36年しか経っておらず、建造技術や運用技術が完全な自立を遂げていたわけではな

った。そのため「常陸丸」の場合も船長のキャンベル他高級船員の多くがイギリス人で占められていた。

熟練したイギリス人船員、そして日本海運業界の発展を担うために彼らから一生懸命に学ぶ日本人船員たちの手で動かされた「常陸丸」は、日露戦争が勃発すると陸軍の輸送船として徴用されていた。

この時期日本近海は決して商船にとって安全とは言い難かった。旅順の艦隊こそ港に籠っていたが、3隻の巡洋艦を中心とするウラジオストクの艦隊は開戦直後から日本の商船を襲っていた。中には太平洋に出て東京の鼻先で襲撃を受ける船もあった。

もつとも襲撃の多くは日本海上にて行われた。ロシア艦隊の商船襲撃のパターンは、まず商船に停船を命じ、臨検を行わないまま短時間での退船を促した後砲撃や雷撃で撃沈し、乗員救助をせずに素早く遁走するというものだった。

「常陸丸」以前にも「金州丸」他数隻が撃沈されており、特に「金州丸」の場合は退船時間が短かったために、船長と同乗の海軍士官が敵艦に直談判に行っている間に時間切れとなり、問答無用で撃沈されている。

座乗の陸軍兵たちは一矢でも報いようと、小銃を敵艦に向けて発射したが、もちろんそんな物が効果を挙げられるはずもなく、「金州丸」は魚雷を受けてあっけなく爆沈、197名の命が失われた。

そうした犠牲があったものの、この時期はまだ船団護衛という概念はなく、日本海を行きかう商船は護衛無しの丸裸、加えて全くの非武装であった。もつとも、航路防衛という概念自体ないこの時代にこれらを避難するのは少しばかり酷と言えよう。

こうした犠牲に国民の非難は海軍に集中し、特に日本海で敵艦隊撃滅に燃える第二艦隊司令官の上村中将はその矢面に立たされた。

第二艦隊はそれこそ血眼になってロシア艦隊を追ったが、まだ航空機もレーダーもない時代であるから、敵艦隊の捕捉は簡単ではなかった。

そんな時期に起きたのが「常陸丸」事件であった。出港翌日の6月15日、「常陸丸」は敵艦が時折現れる玄界灘を航行中であつた。

この日の玄界灘は靄がたちこめ、視界は良くなかつた。そんな時に、まず近くで砲声がするのを乗員たちは確認した。これはロシア艦隊が別の商船に砲撃を浴びせている音であつたが、「常陸丸」では連合艦隊の訓練と誤認し、そのまま航行を続けた。

そこへいきなり前方から軍艦が2隻現れた。そして「汝停船せよ」という信号を「常陸丸」に向けて掲げるや、間髪を入れず砲撃を開始した。しかもこの砲撃は威嚇ではなく、明らかに「常陸丸」を狙った物であつた。

この砲撃は船体中央部に命中し、さらに数発が「常陸丸」に命中したために機関は停止した。最終的に「常陸丸」は30発以上の15cm砲弾が直撃し、さらに300発近い速射砲弾を浴びせられた。もちろんそれによって「常陸丸」の船体は穴だらけになった。

多数の砲弾の直撃により乗船者の多くが戦死し、また近衛部隊の幹部は自刀して果てた。かろうじて200名あまりが退船するに留まり、戦死者は船長含めて1027名に及んだ。ここまで来るともはや虐殺に近いが、もちろん攻撃したロシア軍艦は乗員救助を行わ

ず遁走した。

戦死者が1000名を超えたことは日本国内に大きなショックを与えた。さらにその後もウラジオ艦隊の跳梁は続き、計13隻が撃沈されたため国民の非難は上村中将の自宅へ投石するにまで膨らんだ。

9月に入り、第二艦隊はようやくウラジオ艦隊を捕捉し巡洋艦1隻を撃沈し、2隻を戦争が終わるまでドックから出られないほどに大破させて仇を討った。

そして陸上では、その後苦戦が続いたもののついに旅順は陸軍によつて攻略され、太平洋艦隊は壊滅した。

だが5月に入り、ロシア海軍はついにヨーロッパからバルチック艦隊を回航して来た。日本連合艦隊はこれを迎え撃ち、一方的な大勝利を得た。しかしながら、この時遁走したネボガトフ中将率いる第3艦隊の脱出阻止に失敗し、徹底さを欠いた。

第3艦隊はその後ウラジオストクを拠点に終戦までの短期間ながら活動を行い、以前ウラジオ艦隊が行ったのと同様、日本海や太平洋において神出鬼没の襲撃を展開した。その結果さらに複数の商船が撃沈されてしまうこととなった。

これによって連合艦隊は再び辛酸を舐めさせられることとなった。ただし、幸運なことに間もなく終戦となったため第3艦隊の跳梁は非常に短期間のみで収束し、さらに日本海海戦の勝利のイメージが強かったために国民からの非難はほとんど起きなかった。

それでも東郷司令長官が完璧な勝利を得られなかったことは、彼

の発言力を高めるのを少しばかり阻害することとなる。この事が後の海軍に与えた影響はそれなりに大きかった。

また海軍自身も、広い洋上において少数の艦艇が神出鬼没の行動を採った場合捕捉することが難しいということを、身を持って知らされた。

加えて商船を運用する各社は非武装で護衛のない商船が敵艦艇に狙われた場合、非常に脆弱であることを思い知らされることとなった。

ただし、それによつて海軍が本格的に航路防衛を思い至ることはなく、商船側も自分自身で武装すること等出来るはずがなかった。しかしながら、この戦争においては複数の商船が海軍に徴用されて特設艦船として活動した。その中には大砲を備えて仮装巡洋艦になるものもあった。この内「信濃丸」のバルチック艦隊発見の功績は有名である。また木製の砲を付けて武装商船に化けた船もあった。

そこで、複数の商船会社では船団による航行という概念や海軍艦艇による護衛という発想こそ生まれはしなかったが、有事に際して仮装巡洋艦として武装が出来るよう甲板強度を強化する船や、擬装砲座を付けるために船首を設計する船、また消火器具を数多く備えられるよう余裕を持った設計を行うようになる。

日露戦争（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の歴史改変はごく小さな範囲です。ただし、東郷元帥の発言力低下は、長い目で見ればそれなりに大きくなると思っています。

次回はWW1に突入です。更新は17日、もしくは21日を予定しています。

第一次世界大戦 上

1914年9月、ボスニア・ヘルツェゴビナの州都サラエボにて、現地を訪れていたオーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子フェルディナント夫妻が、セルビア人の青年に暗殺された。これを口実にオーストリア＝ハンガリー帝国はセルビアを併合、一方のセルビアはロシアを味方につけた。ロシアはもちろんセルビアを支援する目的でオーストリア＝ハンガリー帝国に宣戦布告した。

その後オーストリア＝ハンガリー帝国のお隣に位置するドイツ帝国は、それに味方してロシアに宣戦布告した。対してロシアに味方する形でイギリス・フランス等がドイツに宣戦布告し、連合国となつて対抗した。

帝国主義時代、ヨーロッパの中心国同士の戦いは即世界的な覇権を巡る戦争に繋がることを意味し、後に第一次世界大戦と呼ばれる戦争はこうして始まったのであった。

戦争の初期こそ、ナポレオン時代以来変わらない戦術や装備で戦われていたこの戦争も、間もなく各国が機関銃を始めとする新兵器を投入したために、前線の兵士は進撃を阻まれ、西部戦線では戦線全体が膠着した。

さらに国家の全力を挙げて戦う総力戦という形態で維持したこの戦争は、これまでの戦争と比べて犠牲者の数や物資の消費量も飛躍的に増大することとなった。例えばフランスではパリのルノー・タクシーが大量動員され戦場へ兵士をピストン輸送した。ロシアでは1ヶ月で弾薬が底をついた。

灯火管制や子供の疎開、さらに代用品の生産や切符による配給制等、後の第二次世界大戦で大々的に導入された方法が生まれたのもこの戦争である。

クリスマスまでには決着が着くとほとんど全ての人々に思われた戦争は、1年目からそうした予想を裏切って長期戦の色を濃くした。独仏国境の西部戦線には機関銃の射撃から身を守るために塹壕が掘られ始め、その長さは北海にまで達した。

前線における両軍兵士は塹壕の1本1本を多大な犠牲を出しながら、奪ったり奪い返されたりを繰り返した。

こうした膠着した戦況を打破するために、さらに様々な新兵器が投入された。急遽実用化された戦車や毒ガス、新型のトラックや装甲車。こうした兵器は前述した戦争の犠牲者や物資の消耗を伴うと共に、それまでの戦争になかった新しい戦術や概念を生み出していた。

また陸上以外の兵器の進歩も目覚しかった。空ではライト兄弟の初飛行から10年ちよつとしか経っていないにも関わらず、初歩的な偵察機や飛行船からあつというまに本格的な戦闘機や爆撃機へと進化を遂げた飛行機が飛び回るようになり、有名な戦闘機同士の空中戦や大型爆撃機による都市爆撃、果ては戦場への物資の空輸まで行われた。

海上ではイギリスの「ドレッドノート」以来急速にその攻撃力や防御力を向上させた大型戦艦や、水中から目に見えない攻撃を仕掛ける潜水艦が走り回った。

ユトランド、シュットランド沖海戦ではたった10年前の日本海

海戦を上回る性能と量の戦艦が激突し、その戦闘距離も主砲の大型化や新型砲の採用によって大幅に伸びていた。戦艦の主砲射程の長距離化は、砲弾の進入角の増大も意味し、それまでの防御装甲では敵の砲弾に対処できなくなった。

そうした直接の艦隊同士の戦いも然ることながら、この戦争で大きな威力を発揮したのがドイツ海軍による通商破壊戦である。

1870年に独立したドイツは、建国がかなり後であったこともあって、精強な陸軍こそ保有していたが、海軍についてはしばらくの間貧弱であった、ようやく20世紀に入る頃から急速にその戦力を拡大した。

皇帝ヴィルヘルム2世の夢とも言えたこの大海艦隊は、英国海軍と戦えるまでに成長した。しかしながら、所詮は陸軍国家の海軍であった。英国海軍と戦えるまでには成長できても、圧倒できるまでにはならなかった。

艦の性能的にはイギリス海軍を上回っている点があったにも関わらず、最終的に皇帝自慢の大海艦隊はロイヤル・ネービーの前に敗れることとなった。

そこでドイツ海軍は、自国の貧弱な海軍力で強力な連合国海軍に対抗すべく、少数の水上艦や仮装巡洋艦、さらにはこの時代の最先端兵器であった潜水艦による通商破壊に移行した。

10年ちよつと前の日露戦争では、ロシア海軍が日本の商船を襲い戦果を挙げたが、攻撃の規模自体は小規模であり、あくまで満州行きの輸送船が主目標であった結果、日本という国自体を危機的状況に陥らせるには至らなかった。

しかし先にも書いたがこの第一次大戦は総力戦である。すなわちあらゆる分野に戦争が関係することとなった。（ただし民間への攻撃は戦争がどんな形態であっても国際法違反）そのため例え軍と関係しない商船や客船を沈めても、それが何らかの形で響くようになるわけである。

そしてその洗礼を受けたのが、イギリスであった。イギリスは島国という特性上、どうしても近代的な生活を送る上での必要物資を海外へ依存する必要がある。この時代の場合はそれが植民地であったが本質的には何も変わらない。

インドやオーストラリア、カナダ、マレー半島と言った世界中の植民地からもたらされる様々な資源あつてこそ、七つの海を支配した大英帝国は成り立ったわけである。しかし、それには絶対条件としてそれら国々からの輸送が滞りなく行われなければならない。

民需・軍需関わらず、輸送が何らかの支障をきたせば即英本土では物資不足が起きる。そしてそれは現実に起きてしまった。

ドイツ海軍は多数の潜水艦（Uボート）を実戦投入し、英国の通商路を破壊しようとしてきた。この時代のUボートは潜航することが可能な艦という程度の性能で、積んでいる魚雷自体の性能も低かった。

しかしながらこの頃英国の商船のほとんどは船団を組まずの独航であり、しかも非武装であった。また潜水艦を狩るべき水上艦艇の対潜兵器はまだ初歩段階であった。ようやく爆雷が開発された程度で、敵の潜望鏡を見つけてカッターで近付いて布を掛けるといった戦法も真剣に討議された時代だ。また上空から襲う対潜哨戒機という

概念もまだなかった。そのためUボートは魚雷どころか、浮上して積んでいる小型砲で砲撃するだけの余裕が充分にあった。

ドイツは英国海軍によって通商路を締め上げられていたが、ドイツは新兵器を使ってこれに報復したわけである。数多くの英国や英国へ物資を運ぶ中立国の商船が討ち取られ、数多くの物資と共に海深く沈んでいった。

さらにドイツは水上艦艇や仮装巡洋艦による通商破壊も実施している。この内東洋艦隊に所属し、インド洋方面で暴れまわった軽巡「エムデン」の活躍は伝説となったし、また仮装巡洋艦も活躍している。ちなみに余談であるが、日露戦争で悲劇の船となった「常陸丸」の2世はドイツの仮装巡洋艦によってインド洋で撃沈され、現在に至るも船主の日本郵船は「常陸」という名を船に冠していない。

さて、そんな世界規模でありなおかつ様々な新機軸が投入されたこの戦争に当然日本も参戦している。当時の日本は英国の同盟国であったため、即座に連合国として参戦した。（ちなみにこの参戦には、日本のアジアにおける勢力拡大を怖れたイギリスが反対を示したなど、諸説ある。）

日本軍が攻撃したのは中国の青島であった。青島はドイツの租借地であり、数少ないドイツにとっての海外領土であった。また港町でもあるため、ドイツ東洋艦隊の基地でもあった。

日本軍はこの青島のドイツ軍要塞と、東洋艦隊撃滅を図った。しかしながら、シュペー提督率いるドイツ東洋艦隊は強力な日本艦隊との交戦を避けるため逸早く脱出しており、日独の海戦はついに生起しなかった。

最終的に青島のドイツ軍は数に物を言わせた日本軍に対して降伏した。なおこの時日本は袁世凱率いる中国政府（清朝崩壊当時の中国で正当な政府がどれであるかを判断するのに苦しむが）に対して21か条の要求を出し、中国はこれを国辱としたのは有名な話である。

またこの青島の戦いでは日本軍が初めての独自の航空部隊を実戦参加させたが、性能的に欧米の飛行機に劣った日本軍航空部隊はたった1機のドイツ偵察機に掻き回されるという苦い経験を味遭うこととなった。

これに対して、フランス軍航空隊に義勇兵として参加した滋野男爵他のパイロットたちの方が戦争に貢献したと言えるかもしれない。

ドイツとのアジアにおける戦闘はそれだけであつたが（マリアナ等の攻略はほとんど戦闘が起きていない）、日本軍は先にも述べた「エムデン」掃討のために戦艦「伊吹」を派遣したりしている。この時は残念ながらオーストラリア巡洋艦「シドニー」が「エムデン」を撃破している。

さて、それ以外にも日本軍は連合国としてこの戦争に関与することとなる。もちろんそれはヨーロッパの戦場である。ここからまたも違う歴史が動き出すこととなる。

第一次世界大戦 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次回更新は22日から24日にかけて行つ予定です。帝国海軍がヨーロッパへと出撃します。

第一次世界大戦 中

ドイツが持っていた中国の利権を奪取し、さらに太平洋上の島々を手にした日本であったが、これらの動きは遠くヨーロッパでの戦いとはほとんど無縁であった。なぜなら中国の青島にあるドイツ軍要塞は数で圧倒して力押しで攻略し、マリアナ諸島などは無欠占領、ドイツ海軍は既に逃亡していたのだからだ。

それに対してヨーロッパの戦いは凄惨を極めており、新兵器の投入によって戦死者やその他の物理的損害がかつて無いほどに昇っていた。そのため、各国は戦力確保に苦心することとなった。

まず英国では本土の人間だけでは当然足りるはずも無く、カナダ・オーストラリア・南アフリカ・インドと言った植民地などから大量の兵士を動員している。所謂植民地兵だ。イギリス軍の4人に1人はこの植民地兵だった。

またフランスも後のベトナムとなる仏印インドシナやセネガルから植民地兵を集めてヨーロッパの戦場に投入している。加えて兵士ではないが、当時は安価な労働者の市場と見られていた中国大陸からも相当数の労働者がヨーロッパに送り込まれている。

こうした大量の海外からの戦力動員が行われたものの、史実では日本からの本格的な派兵や大規模艦隊の遠征は行われなかった。

しかし、この世界ではヨーロッパでの戦闘が史実よりも若干連合国側に分が悪く、イギリスを始めとする各国はさらなる兵力を動員する必要に見舞われた。

そこで英仏は1915年末に同盟国であり、なおかつアジアでドイツの利権を掠め取った日本に対してヨーロッパへの派兵を要請した。自分だけ甘い蜜を吸うだけというのは許さないということだ。

これに対して、日本国内では賛成と反対意見が出た。賛成意見としては同盟国の義務としての出兵、さらなる利権の獲得に繋がるや、戦後の国際社会における日本の発言権拡大に繋がるというものだ。反対意見は、地球を半周して兵力を派遣しなければならないこと（遠征能力が不十分）、白人同士の戦いに日本人が血を流す必要性なし、最終的に犠牲が割に合わなくなる可能性などが挙げられた。

結局喧々諤々の議論の末、日本政府は欧州戦線への本格的派兵を決定した。表向きの理由は友邦連合各国の救援であるが、実際のところは戦後の利権を見据えたものであった。

海軍は最新鋭の巡洋戦艦「金剛」「比叡」を中心とする援英派遣艦隊と、地中海における海上護衛戦を支援する巡洋艦「明石」を旗艦とする第一特務艦隊が派遣されることとなった。

陸軍では1個師団プラス1個旅団3万名が第一陣として派兵された。いずれも日露戦争後の武器や装備の改編を受けて最新式の装備に身を固めた精鋭部隊であった。

海軍部隊は1916年2月、陸軍部隊は3月にそれぞれ横須賀・呉・宇品を出撃し、一路遠くヨーロッパを目指した。

しかし、彼らはその移動中から思いもよらぬ事態に巻き込まれることとなった。まず、陸軍部隊を乗せた輸送船団がスエズ運河を通過し、地中海に入った所でオーストリア＝ハンガリー帝国、さらにはオスマン・トルコ側の潜水艦による襲撃を受けた。

この時は護衛していた英国海軍の対潜部隊によって大事には至らずに済んだが、乗船していた兵士たちは見えない敵に襲われる事態に恐怖した。

また海軍部隊も派遣後から予想外の事態に陥った。援英派遣艦隊は地中海を無事切り抜け、英国本土の北にあるスカパ・フローを指したのであるが、あと少しのドーバー海峡において巡洋艦「筑摩」が潜水艦の雷撃によって轟沈してしまった。

しかも、「筑摩」の撃沈は魚雷が命中するまで全ての将兵が気づけなかっただけに、艦隊司令官加藤定吉中将を驚かせた。おまけと来て、日本艦隊の全ての艦が対潜装備を持っていなかったために、艦隊は「筑摩」の乗員救助を早々と切り上げて、遁走するしかなかった。

まさに出出してから散々な事態に陥った訳であるが、援英派遣艦隊の苦闘はこの後も続くこととなる。特に同艦隊が到着してわずか3カ月後に参加したユトランド沖海戦では、ドイツ海軍の巡洋戦艦1隻を大破させたものの、「比叟」が爆沈し旗艦であった「金剛」も大破している。

幸運であつたが加藤中将や、観戦武官としてイギリス戦艦から「金剛」に乗り換えていた伊東大佐が無事であつたことだ。

後にこの最新鋭戦艦が意図も簡単に爆沈し、逆に戦果を充分に挙げられなかったことは日本海軍上層部に大きな衝撃を与えることとなった。この事件によって、海軍は建造中の「扶桑」型戦艦2番艦である「山城」を艤装中であるにも関わらず設計を大幅に変更している。

「比叡」の爆沈に伴い、同艦の同型艦である「霧島」、「榛名」も大幅な改修を受けている。また2年以上ヨーロッパに留まることとなった「金剛」は英国で改修を受けている。そのため、「霧島」、「榛名」とは少しばかり趣が異なる姿で帰国することとなる。

また上記した2名が日本へ生還したことで、戦闘の様子が直に伝えられ軍艦の設計や戦術の変更等に用いられることとなる。

その後援英派遣艦隊には「扶桑」が「比叡」の代替艦として派遣され、ドイツ海軍主力艦隊と対峙している。ただし、援英艦隊の苦労はその後も続き、シュットランド海戦でも両艦は大破している。また「扶桑」はUボートの雷撃を受けて2ヶ月間ドッグ入りを余儀なくされている。さらに巡洋艦2隻が同じく潜水艦によって失われた。

これらの戦訓によって、それまで潜水艦を軽視していた海軍は威力を認めざるを得なくなった。当時の日本海軍の潜水艦は「ホランド」型を中心とする性能劣悪な物しかなく、とてもドイツのような長期間外洋で活動できるようなものではなかった。

ところが、日本海軍は自分がやられる側になって潜水艦の威力というものを目の当たりにすることとなった。それまでの沿岸防御用にしか使えないという概念から、一気に攻撃兵器としての用途が注目されることとなった。

一方同時に派遣された陸軍部隊もヨーロッパ上陸後に大きなショックを受けることとなった。日露戦争でロシア軍の機関銃に苦杯を舐めさせられた陸軍であったが、ヨーロッパの戦場はそれ以上の機関銃、さらには戦車、毒ガス、航空機による爆撃という凄まじいま

での攻撃にさらされた。

日本陸軍も機関銃や砲等を持ち込んでいたが、ヨーロッパの戦線ではあつと言う間に手持ちの弾薬を消費してしまった。そのため日本からの取り寄せと共に、それだけでは間に合わないで英国やフランスから借りた銃や砲を使用することとなった。中には捕獲したドイツ製の兵器を使う部隊も出た。

さらに装備の面でも大きな変化が起きた。まず軍刀を携行する人間が大きく減った。ヨーロッパの塹壕戦ではあまり役に立たず、拳銃や短剣、ナイフ等を携行する人間が増えた。軍刀に拘る頭の堅い人間もいるにはいたが、そう言った人間の多くは早々と戦死する運命にあつた。

軍馬も大量に送り込まれていたが、一部の部隊では消耗や機動性に限界があることから、バイクや英国製の装甲車を使用する部隊も出た。

また将兵の戦死に関する問題も大きかった。当初派遣軍では当初欧米列強が行っていたような歩兵突撃を多用するつもりであつたが、その戦い方が全く通用しないことが直ぐにわかった。

突撃しても塹壕に潜んだ敵から機関銃や小銃で狙い撃ちにされ、さらに敵の前線に到達しても長い銃剣や軍刀は狭い塹壕内では扱いにくく戦果を拡大出来なかった。もちろん被害も大きく、わずか1週間で2000名の戦死者と、ほぼ同数の戦傷者を出すこととなった。

3万の兵士しかないというのに、短期間で15%近い兵力を失ったのは由々しき事態であつた。旅順のように母国が近く、しかも

攻略すれば敵の拠点を落せるといふなら良いが、わずかの塹壕を奪取するためにこのような戦い方をしていたのであれば割にあわない。

帝国陸軍はその後実に戦死傷者1万名という高い代償を払うこととなるが、近代的な戦術を肌身で感じ、体験することで近代化への転換を図ることとなる。

そしてもう1つの派遣部隊。地中海へ派遣された特務艦隊も地味ながら激しい戦いに巻き込まれていった。

第一次世界大戦 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次回更新は26日から28日の間に行います。

第一次世界大戦 下

欧州戦線へ派遣されたもう1つの大規模部隊が、地中海を中心に活動することとなった巡洋艦「明石」を旗艦として、2個駆逐隊からなる第二特務艦隊であった。司令官は佐藤臯蔵少将である。

この部隊の主任務は、地中海における連合国側の船団護衛任務であった。当時の地中海はエジプトやアルジェリアと言った欧米諸国の北アフリカ植民地からフランス、イタリア方面へ向かう輸送船。さらにアジアや中東方面から紅海から北上してスエズ運河経由で地中海を抜けてヨーロッパへ向かう輸送船や客船が通る重要な航路であった。

もちろん、こうした船の動きはドイツを中心とする同盟諸国側にとっては重要な攻撃目標となり、ドイツ・オーストリア・ハンガリー帝国・オスマン・トルコ帝国の潜水艦が連合国、さらには連合国側物資を運ぶ中立国輸送船を攻撃し始めた。

同盟国側の潜水艦は48隻と数的には決して多いとは言えなかったが、潜水艦に対する攻撃手段が充分に発達していないこの時代においては、これだけでも充分であった。

一方その地中海へ勇躍出撃してきた第二特務艦隊であったが、幹部を除く乗員には欧州行きが出港するまで通達されておらず、さらに長距離航海を強いられたために血気盛んな青年士官まで、疲れ果てていたとされている。

それでも、「欧米諸国の連中に日本海軍の精強さを見せ付けてやる。」という意気込みで、彼らは連合国海軍の一員として任務に就

いている。

しかしながら、当時の日本海軍では対潜戦術や対潜兵器等はなく、イギリス海軍から爆雷と投射機を借りて搭載している。

日本海軍による船団護衛は1917年4月25日に開始されている。到着したのが4月13日であったから、爆雷の搭載や乗員の休息期間は2週間にも満たなかったことになる。それどころかこれでは訓練も充分ではない。それだけ連合国側も切羽詰っていたと言っただけだ。

そんなぶつつけ本番で投入された第二特務艦隊の駆逐艦であったが、始めて直ぐに手痛い攻撃を受けてしまった。

護衛任務に就いた8日後の5月3日、その日駆逐艦「松」と「榊」の2隻はフランスのツーロンからエジプトのアレキサンドリアまで、英国陸軍の将兵3000名を載せた輸送船「トランスシルバニア」号を護衛していた。

「松」と「榊」は排水量595t、速力30ノット、武装は12cm砲と8cm砲を1門ずつに47mm砲4門と45cm連装魚雷発射管を2基積んだ「樺」型駆逐艦であった。

1隻を駆逐艦2隻で護衛するのは随分贅沢であるが、護衛している側の日本駆逐艦は対潜戦闘にはズブの素人であるため、それこそ見張りの兵士たちは血眼になって海上を眺め、魚雷の接近を察知しようとした。

しかしながら、その意気込みをあざ笑うかのようにドイツ潜水艦が発射した魚雷が「トランスシルバニア」号に一本命中した。

日本側の乗員からしてみれば、「しまった!」「してやられた!」瞬間であつた。

ただちに「松」が「トランスシルバニア」号に接舷して救助作業を開始するとともに、「榊」が周辺を走り回つて潜水艦を牽制した。

「トランスシルバニア」号には1万tを超える大型客船であつたために、当初は応急処置を施せば、なんとか沈没は避けられると思われた。

ところが、「松」が接舷している場所から10m先の船体にさらに1本が命中し、ついに総員退船に追い込まれてしまった。さらに「松」も艦首のリベットが飛び、浸水の被害を受けた。

これに怒つた「榊」、さらに「松」は周辺に主砲を乱射し、油とらしい物が浮いているのを発見すると爆雷1発を投下した。しかしながら、闇雲に撃ちまくつたそれら砲撃と爆雷攻撃が敵潜水艦に打撃を与えられるはず等当然有り得ず、結局戦果未確認で終わった。

「榊」と「松」は潜水艦の撃沈に失敗したが、その後沈み始めた「トランスシルバニア」の救助に専念し、救援を聞きつけてやって来たイタリア駆逐艦とともに3200名の乗船者中3000名を救助することに成功した。

「トランスシルバニア」が海面に没したとき、3隻の上は救助した乗船者で一杯であつた。

日本駆逐艦の乗員たちはイギリスの船をムザムザ沈められてしまったことに意気消沈したが、イギリス側は対潜技術を知らない日本

駆逐艦が乗員救助に奮闘したことを高く評価し、両艦の士官7名、下士官20名に対して王室の名前で勲章を授与した。

もつとも、やられた日本側からしてみればやっぱり悔しい事には変わりないので、その後対潜技術の向上に心血を注ぐこととなった。イギリス海軍から対潜術を知っている艦長や司令官を呼んで講和をして貰ったり、自分たちからイギリス艦に乗り組んで実地体験したり、自ら戦術や兵器の研究をしたりもした。

しかし、そうした研究や勉強も身を結ぶまではしばし時間が掛かる。おっつけ仕事の段階では充分に生かせなかった。

それを象徴するように、6月には潜水艦を狩る側の駆逐艦「榊」がドイツ潜水艦の攻撃を受けて、艦首部に被雷して吹き飛ばされ大破するという大被害を受けている。人的被害も艦長以下59名が死亡するという、地中海における日本海軍最大の被害を受けた。

1ヶ月程の間にたて続けに辛酸を舐めさせられた第二特務艦隊では、俄然ドイツ潜水艦を倒す研究を熱心に行うようになった。その成果が発揮されたのか、以後日本海軍艦艇にも、さらに護衛した1200隻近い船舶にも被害は全く出ていない。

敵と真正面から戦う対潜戦闘は地味で、忍耐を必要とする戦いであり、日本人からすればかなり性に合わない戦いであった。

さらに地中海派遣艦隊はその他にも様々な苦勞に接している。特に食事を始めとする文化の違いは乗員たちを苦しめた。日本からはるばる米を運んできた輸送船が撃沈され、乗員たちにパンしか出せなくなり、士官までもが「これでは戦えない！」と上官に訴えたこともあった。

さらに日本人には欠かせない調味料である味噌がイギリスの税関で腐っていると判断され、捨てられるという珍事まで発生した。

こうした光景を目の当たりにした佐藤少将は、後に地中海における戦闘に関するレポートを提出するさい、食事や乗員の休養などが与える効果に関して言及し、軍の遠征における補給の重要性、さらにその補給の維持を訴えている。

それはまた、英本土へ派遣された加藤中将も同じであった。

後にこの問題に関しては欧州戦線に派遣された陸軍の例もあり、それまで輜重や補給を軽視していた日本軍内部に一定の変化を与えることとなる。

一方補給の面だけではなく、精神的な問題も発生した。神経衰弱やホームシックなどである。これに関しては、陛下や帝国のために戦っているという実感が薄かったことも要因と成った。

また派遣初期の頃は東洋から来た黄色人の艦隊、素人の艦隊ということで差別を受け、補給の順番を後にされたり、停泊地を一番遠い場所にされたり等の嫌がらせを受けている。

ただ上記の「トランスシルバニア」号事件や、その後の奮戦が伝えられてくると次第にそうした目も変わり、逆に日本駆逐隊は各方面から引つ張りダコとなった。そして重要船団の護衛任務を行うまでになる。

その後旧式化した旗艦の巡洋艦「明石」が装甲巡洋艦「出雲」と交替したり、増援の駆逐隊が新たに日本から派遣されてきたり、イ

ギリスから武装トロールと駆逐艦が貸与される等の動きがあった。

武装トロールとは、徴用したトロール漁船（底引き網漁船）に対潜用武装を施して、海上護衛に投入した船のことである、後の第二次世界大戦でも使われている。

イギリスからの艦艇貸与は、同海軍における乗員不足の処置からで、武装トロールには「東京」、「西京」、駆逐艦には「梅檀」、「橄欖」とそれぞれ和名が付けられ、日本海軍の手で運用されている。

第二特務艦隊は終戦に至るまで、地味な船団護衛と対潜戦闘に奮戦した。乗員たちは苦しい状況を時に異国観光、時に商船乗員からの感謝、そしてUボートの撃沈による喜びで打破し、戦った。

任務が終了となり、日本に帰国する際には佐藤少将には英国を始め数力国の政府から勲章が授与され、また貸与されていた艦艇はいずれも協力への感謝から供与へと切り替えられている。

地味で苦勞が多く、それでもって直接的な戦果（間接的には艦隊決戦の比ではない程重要）の少ない戦闘であったが、それでも第二特務艦隊は多くの教訓と経験を日本に持ち帰った。

史実ではそれらの殆どが生かされず、日本海軍は旧来の艦隊決戦主義一辺倒に拘ったまま歴史を歩み、やがて大日本帝国そのものを道連れにして、滅亡へと向かうこととなった。

しかしながら、欧州戦線への積極的参入という歴史の相違が、この世界の未来にそれなりの影響を与えることとなる。

第一次世界大戦 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

味噌の話や嫌がらせについては、自分が調べた限りでは事実です。

一次大戦後 1

1918年11月にドイツで革命が発生、皇帝ヴィルヘルム2世は退位しオランダへと亡命した。これによってドイツ帝国はわずか48年の歴史に終止符を打つこととなり、それと同時に戦争は連合国側の勝利で幕を閉じることとなった。

第一次世界大戦はそれまでの戦争と一変した様相を呈し、各国の軍備や戦術に大きな影響を与えることとなった。それはまた連合国側に参加し、はるばる大西洋・地中海・欧州西部戦線に兵を派遣した日本も同じであった。

日本はこの戦争でドイツのアジア・太平洋地域の植民地を正式に自国領土へと編入することに成功し、その一方で戦艦・航空機・Uボート等多量の兵器を戦利品として獲得することにも成功した。

この内航空機とUボートは日本では大幅に立ち遅れていた分野であったことから、日本に到着後は徹底的な調査が行われ、その技術的進展に大きな役割を果たした。

しかしながら、戦争の結果自体には多くの国民・軍人から不満が出た。確かに多くの戦利品は得たが、はるばる軍を遠征させた割には犠牲に対して実入りが少ないという意見がその過半であった。特に最新鋭の戦艦の撃沈や、西部戦線における膨大な戦死者数は問題であった。

さらに中国における利権も、当初21箇条で要求したもののほとんどは青島の租借と引き換えにベルサイユ条約で破棄されてしまった。これには要求を突きつけた袁世凱政権が直後に倒れてしまったこと

も原因にあった。

これらと戦後に襲い掛かってきた不景気が影響して、世間の政府と軍に対する風当たりは強くなり後のシベリア出兵の際日本軍は大幅な兵力と駐屯期間の削減を余儀なくされた。

また第一次大戦後に帝国海軍が策定した八八艦隊計画にも国内から反対が続出することとなった。大西洋と北海での海戦において、「金剛」が撃沈され、「比叡」が大破されたことが海軍の威信を大きく揺るがしていたからだ。

ちなみにこの予想外の戦艦撃沈に対して日本側は講和条約でゴネテ、ドイツ海軍の超弩級戦艦であった「ザクセン」級1隻を戦時賠償として取得している。またUボートもさらに2隻多く取得している。

「ザクセン」は日本到着後に「美濃」と改名され、その後の改装で40cm砲搭載艦となっている。

こうした動きとは別に、地中海で経験した海上護衛を重視する声も出始めた。特に第二特務艦隊司令官であった佐藤中将はその急先鋒であった。またそれに賛同する声はその他の軍人や、補給に苦勞した陸軍からも出た。

しかしながら、やはり頑固に艦隊決戦主義に凝り固まってきた海軍の多勢の意見を覆すのは容易ではなかった。もつとも、彼らも対潜能力の向上については研究を進展させるべきであると考えていた。「金剛」、「比叡」、その他の艦艇が多数魚雷を発見できぬまま被雷し撃沈はされていたことから目を背ける（国民も知っていたので土台無理がある）ことは彼らと言えど出来なかった。

一方海上護衛の概念は充分に海軍内で根付いたとは言えなかったが、代わりにそれを重視したのが攻撃される側であった商船会社と陸軍であった。彼らの間で「海軍がやらないなら俺たちでやる」という考えが生まれるのは至極当然の話であった。

貧乏国である日本において本来このような非効率な考えを浮かべることは全く持って不利益なのだが、それを知ってか知らずかやつちやっつのが昔の日本であった。（今もか？）

まず商船会社の方は、日露戦争時から始まっていた砲座の取り付けに関する船体の強化や、船の武装化を本格的に進めた。武装化といっても機銃を1〜2基取り付け小銃を船内に持ち込む程度であったが、本来日本では武器を持つのは統帥権の下に置かれた陸海軍であるからこれは御法度である。

当然海軍から商船会社に批判が起きたわけだが、あくまでこれは戦時において独航する船から浮上してきた潜水艦を威嚇するためと特設艦船への転用を予想しての処置とした。それに加えて、商船会社としては平時も海賊船対策として武器を載せるメリットがあった。

結局船体の強化と武装化については認められることとなった。ただし武装化については海賊多発地域を通過する船舶のみで、その検査は厳重なものとされた。

ちなみに、後にこの考え方を逆手にとって船舶助成施設制度（事実とは内容が違う）が施行されることとなる。

また陸軍の方は、本格化するのはいくから10年後であったが少なくとも自前で部隊を運び上陸させることと、そのために輸送部隊

に武装船舶を使う構想がこの頃から想定された。特に上陸用舟艇は第一次大戦時のトリポリ上陸作戦の失敗の戦訓が伝わったために急速に進められた。

こちらにも本格的な武装輸送艦艇を建造しようとした所で海軍から横槍が入ることとなるが、そうなるのはもう少し後の話である。

これに対して海軍は具体的にどのようなことをしたかというところ、取り敢えず戦利品として獲得したUボートを徹底的に研究した。前記したように日本側が獲得したのは9隻であったが、その性能は日本の保有する潜水艦を遥かに上回る性能であったため、すぐに日本海軍に編入されるとともに、これらを模倣した新型潜水艦の建造を開始している。

また模倣だけでは当然今後の技術的發展が望めないので、敗戦国となったドイツから技師を招聘して、若い造船士官の教官として働かせている。

ちなみに敗戦国となったドイツであったが、そのゲルマン魂は健在でヴェルサイユ条約で航空機や潜水艦の開発を禁止されながらも中立国や新興国であるソ連等で開発を継続している。彼らは祖国のために辛酸を舐めつつも、決して技術の進歩を怠らなかつたのだ。

日本海軍に編入されたUボートは早速水上艦隊との演習に用いられたが、やはりここでも水上艦艇が気づかない内に魚雷を発射し、見事有効弾を与えている。このことは改めて日本海軍に潜水艦の発見が困難であることを気づかせた。

その一方で、水上艦艇側も潜水艦が鈍足であることに目をつけ高速による回避運動を行う等している。ただし、それは敵の攻撃を防

げるが撃沈できるわけではなかった。

そこでまず駆逐艦に対して、当時はまだ新装備であつた爆雷の搭載が始まっている。当初は軽巡に載せる動きがあつたが、演習の結果敏捷な駆逐艦の方が効果的と判断された。

ただしソナーの開発はまだ先であつたため、敵潜水艦を発見する手段については今しばらく目視に頼らざるを得なかつた。

一方通商保護については、上記したように充分な概念が育たずに終わった。第一世界大戦では英国やドイツが通商路を締め上げられて苦戦したが、やはり遠い異国の話に過ぎなかつた。ただし、佐藤少将や陸軍が指摘した遠征軍の補給に対する問題は真剣に討議された。

陸軍ではまずそれまでの現地調達の考え方が改められ、充分な兵站線の確保が新たに定義され、それはまた機械化と共に進展した。

海軍についても、第二特務艦隊や陸軍の実情を鑑みて少なくとも遠征部隊に対する補給と、そのための輸送手段や、その保護についての考え方が重要視された。

そのため戦時においてそれらを輸送する船舶の護衛を行う艦艇の建造が提起された。後にこれはワシントン条約で主力艦艇が制限され、補助艦艇の建造が重視されたために実現することとなる。

また前線が延びればそれらの艦艇数も増えることから、人員の動員に関しても見直しが始まり、第一次大戦で英国の影響を受けたこともありそれまで有効に活用されていなかった予備士官・下士官制度が見直されることとなる。

一次大戦後 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

一次大戦後 2

西洋列強が言う所の近代化が遅れた日本では、海軍は幕府・明治政府という交替こそあったがその創設は政府が中心となっている。ところが、日本海軍がお手本にした英国海軍の場合は、海賊の寄り合いからその歴史がスタートしている。

そうした歴史的背景が影響してか、英国海軍では古くから一般の商船や漁船の水夫・漁夫を戦時になつたら動員して戦う英国海軍予備員制度があり、それら水夫らは予備団という組織に属していた。

これら英国海軍の予備員は定期的に海軍に呼び出され軍艦に乗り込む等して訓練を行い、専用の練習船まであった。なお日本海軍の英雄東郷元帥も英国への留学中にこの練習船に乗り組んで訓練している。

こうして平時からたしなむ程度とはいえ戦う訓練を施されていた予備員たちは戦時になると逼迫する艦艇の乗員不足を埋めた。第一次世界大戦において英国海軍が多数のQシップや対潜トロールと言った対Uボート艦艇を運用出来たのも、これら予備員の存在あつてこそだった。中には代将とは言え将官にまで出世した人間も出た。

予備員制度は、四方を海に囲まれた小さな島国である英国が、海を支配し自国の生存を守る上で必要不可欠な制度であつたのだ。

一方その英国海軍を範とした日本海軍にも、この予備員制度があり高等商船学校を卒業した商船士官がそのまま海軍予備士官、予備下士官に任命されていた。

ところが、制度こそあるものの日本海軍がそれを上手く使っていたかと言つとそうではなかった。むしろ宝の持ち腐れの感が強かった。

日本側では確かに予備士官、予備下士官を大量にプールしていた。ところが、それらを実際に使った場面はこれまでにほとんどなかった。演習に参加させたり、それどころか艦艇に乗せたりすることさえなかった。

日本海軍がようやくこの状況に気づいたのは、第一次世界大戦において地中海と英国へ派遣された艦隊が現地の英国海軍将兵と交流を行い、さらに戦後になって各国海軍の現状調査を行つてからだつた。

第一次世界大戦に参加して、進んだ欧州の海軍の現状を見た日本海軍では、再び欧州から学ぶ気運が高まっていた当時、この予備兵制度の見直しも再び行ふべしという意見が出てきた。特に地中海で英国海軍の戦いを見た特務艦隊の乗組員や、商船船員から顕著だった。

一方で戦後不景期となり、さらに終戦後間もなくワシントン軍縮条約や不戦条約が締結され軍備縮小へ向かう時代、ただでさえ正規の軍人の雇用を守るのさえ危機を迎えている状況で、予備兵のことなど構っている場合かという意見も当然出た。

結局議論の末、いつ起こるかわからない戦時において陛下からお預かりした戦力を上手く使うのが軍人の務めとして少数ずつを毎年行われる演習で艦艇に乗せるということで決着した。

そして大正13年の演習から、予備士官と予備下士官の演習によ

る招集が開始された、その多くは航海科・機関科であり乗せられた艦も軍艦は少なく、多くが補助艦艇に乗せられたが、むしろそちらの方が予備士官、予備下士官にしても使いやすかった。

この数年後には海軍内で、戦時の補助艦艇を使うのは予備士官、予備下士官であるというイメージがほぼ固定した。

そして時代は1920年代を過ぎ1930年代へと向かって言った。その間に上記したようにワシントン軍縮条約が締結された。この軍縮条約は当初日本側の外交暗号が解読され手の内を読まれたため、米英側にリードされた。

その途中で、ついに日本側が外交暗号を解読されているのに気づき形勢逆転を狙った。しかしながら、会議全体の流れを覆すのには至らなかった。結局日英同盟の破棄や、南洋諸島の非武装化を受け入れざるを得なかった。

それでも主力艦保有量に関しては日本側の最後の粘りによって、当初の対米英7割から8割にまで近づけた。日本側が極端な保有量減は軍民問わずの大規模反発を招くことをチラつかせ、さらに日本側が非武装となる南洋諸島を含む広い海域の制海権保持の重要性を訴えた結果だった。

この会議によって旧式戦艦のほとんどは廃棄するか処分、格下げとなったが、ドイツから賠償として得ていた低速ながら40cm砲搭載の「美濃」、そして完成間近だった「陸奥」の保有が交換条件無しに認められたのは画期的な成果だった。

また高速の巡洋戦艦2隻が空母として転用されることとなった。「赤城」と「天城」である。「天城」は関東大震災に被災して一時

期復旧は絶望と見られたが、ドッグ内での固定がしつかりしていたので、その後「赤城」からみて4年遅れで竣工している。そのため「天城」は当初から1段式甲板で完成している。

一方対潜技術に関しては、しばしの間大規模な進展はなかった。一応第一次世界大戦の教訓を生かす形で、艦隊における対潜運動や戦法に関しては大きく進展した。これには日本海軍側も潜水艦の能力と技術が大きく発展したことも関わっている。また航空機の性能が飛躍的に進歩すると、水偵や飛行艇による対潜警戒と言う概念も誕生して取り入られている。

しかしながら船団護衛に関しては十分な概念が生まれず、その研究も進まなかった。一応フィリピンを基地とする潜水艦の近海航路への攻撃を想定して駆潜艇の建造が行われた。

海中の音を探る聴音機の開発も行われた。採用された91式聴音機は、雑音も多く低速でなければ使用できないという欠点を持っていたが日本海軍としては、潜水艦は潜航中のスピードが遅いということからこれで十分な性能とされた。

また同時に91式探信儀も開発された。こちらは海中に音波を飛ばし、その反射から敵の位置を探る機械のことである。こちらも、日本の電子技術の遅れから性能が不安定であった。

双方ともに改良型が現れるのは日中戦争後に92式の感度を高めた99式までまたなければならなかった。

当時の日本海軍では国家全体への補給線がそこまで長くならないとされていた。性格には千島・本州・朝鮮半島・遼東半島・台湾・南洋諸島間とされていた。アメリカとの戦争重視であるため、南方

との輸送路はまだそこまで重視されていなかった。だからこそ後の海防艦のような1000t弱ではなく、500tにも満たない駆潜艇を建造したのであった。

先ほども書いたとおり、フィリピンの米軍が気になるところであるが、これは早期に占領するのが日本海軍の方針であった。

そうした通商路防衛の軽視は、その役割を担う各鎮守府の防備部隊の士気下げという形で現れた。一応潜水艦の脅威が認められ、艦隊における対戦技術は向上の兆しが見えた、現に水雷学校でも対潜術が新たに科目として取り入れられている。

しかし防備部隊は元々が花形の前線戦闘部隊とは無縁の地である上で、その装備や活躍が見向きされないのであれば問題であった。防備部隊が人材の墓場という向きさえ出てきたのもこの頃だった。

この状況は、中国大陆でキナ臭さが増してついに満州事変が勃発しても何ら変わるところがなかった。ところが、状況がそれこそ大きく激変する事態がついに訪れることとなる。

その翌年日本の傀儡国家である満州帝国が成立（一応日本国内にも完全独立形式を望む声があった）し、ソ連と直接国境を接するようになった。いきおい、それは日本がソ連と名を変えたロシアに再び目を向かせる要因となった。

一次大戦後 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

一次大戦後 3

第一次大戦中に発生したロシア革命は、それまでロシア全土を治め、世界一の富を保有していたロマノフ王室を玉座から追い出し、世界初の社会主義国家を誕生させた。

もともと、労働者と農民が統治する平等な国というのはスローガンに過ぎず、実質はレーニンが提唱した中央政府指導型の独裁国家であった。ロマノフ王朝や、それを支えていた貴族や教会関係者を追い出して、共産党という名の新たな支配者がロシア全土を征服したに過ぎなかった。

そうして誕生したソビエト社会主義連邦であったが、実質の所内情はお寒い限りであった。ロシアは広大な領土こそ持ち合わせているが、近代化やインフラの整備は遅れており不完全であった。さらに第一次大戦で国力は疲弊しており、そのためソ連が設立後最初に行ったのはドイツとの講和と、フィンランドやポーランド一部地域の独立承認だった。

レーニンはそれらを平和のためと明言したが、果たしてそれが本当にソ連の容認せざることであったかは、その後第二次世界大戦時の膨張主義を見れば分かるであろう。少なくともレーニン以後は違ったようだ。

そんな感じで出来上がったソ連であったが、最初の頃は皇帝派や反共派が抵抗して内戦状態であり、ロシア全土の統一が成ったのはもう少し後のことである。

統一がなった後も、ソ連は苦しい状況に置かれた。社会主義は王の存在や資本主義の否定等、諸外国から見れば過激な考え方であっ

た。当然、さすがに攻めるまではいかないまでも、容認しない国や関係を持つとしない国は沢山出た。

おかげでソ連は民生的にも軍事的にも国際的に孤立した。ソ連が混乱から脱して、経済的にもある程度立ち直り、本格的に世界の表舞台に登場するのは1930年代後半からだ。それも多くの粛清やら資産没収の上でだ。

国際社会に復帰するまでは同じように国際的に孤立したドイツと仲良く付き合ったりしている。第一次大戦で敗戦国となったドイツは、経済的には多額の賠償金に苦しめられた。また軍備も大きく制限された。特に航空機と潜水艦の保有が禁止されたのは大きな打撃であった。

しかしゲルマン魂は敗戦しても健在だった。ドイツは戦勝国の目を潜って、保有を禁止された兵器の研究を進めた。航空機の場合は主に外国にダミー企業が作られ、そこで研究が続行された。潜水艦もそうである。これらの研究が後の第二次大戦で大いに生かされたのは言うまでもない。

そうしたドイツが研究を行った国には先ほども少し書いたとおり、ソ連もあった。ドイツとソ連はラッパロ条約という秘密条約を結び、ソ連はドイツに兵器開発と兵士の訓練用の場所を提供した。対するドイツはソ連に兵器の技術（もちろん1世代遅れ）や戦術を提供した。

ドイツとの交流を通して、ソ連はドイツから多くの技術を吸収して行った。そうした技術を活用したからこそ、1930年代後半には経済的のみならず、軍事的にも復興を成し遂げるのである。その頃ソ連の指導者はレーニンから、グルジア出身の独裁者スターリン

へと変わっていた。

ソ連が軍事的に復興しつつあった時期は、日本が満州国を建国し、さらに中国大陸への進出を図った時期と同じであった。かつては軍事的には大きな脅威とならなかったソ連も、この頃には思想的のみならず、軍事的にも大きな脅威となってきた。

ソ連を軍事的に重視したのは、もちろん明治以来仮想的をロシアと定め、満州国を操る帝国陸軍であった。人口の面から大きく日本を上回り、過去から極東の不凍港を求め、日本と直接国境を接しているのだから当然である。

一方の帝国海軍の方は、日露戦争までは仮想敵国はロシアであったが、その後は太平洋を挟んで対峙するアメリカに仮想敵国を移している。

ロシア海軍は帝政の最終期になって大幅に拡張され、極東とロシア本土に2個艦隊を保有し、戦艦を20隻近く保有していた。しかしながら、戦力的には日本海軍を上回っていたにも関わらず、運用の不味さからそのほとんどを日露戦争で失ってしまった。

その後ニコライ2世皇帝は海軍の再建を行い、第一次大戦時にはさすがに日露戦争当時のような大艦隊まで行かないまでも、30cm砲12門を持つ弩級戦艦を7隻保有するまでに復活した。

しかしながらそれら復活した海軍力も、第一次世界大戦とその後
の革命戦争の中で失われてしまった。わずかに残った戦力もボロボロであり、しかも沿岸警備をする能力しか残されていなかった。

その後もしばらくの間は国内の復興や陸軍の整備が優先された。

広大な国土を持つ陸軍国であるから、海軍の整備が先送りされるのは当然である。

ようやくソ連で海軍力の整備が開始されたのは、スターリンが台頭した頃であった。つまり国内が一応落ち着き、軍備の復興が軌道に乗った頃であった。

スターリン政治の特徴は、極端な反対派の粛清や膨張主義が上げられる。どちらもその後の歴史において悪名高い（何せ殺した人間の総数ではナチス以上）が、膨張主義は軍備拡大とイコールであった。その中で海軍に関して進められたのが、「ソビエツキ・ソユーズ」、「クロンシュタット」を始めとする超弩級戦艦や高速巡洋戦艦の建造であった。

日本海軍がその誇りとして建造した「大和」級や「長門」級にも対抗できる戦艦の保有による海軍の復活こそスターリンの夢であった。

この辺りは同じ陸軍国のドイツ海軍が策定したZ計画と通ずる物がある。そもう1つ通ずる物として、あまりにも国力を無視した計画であったことだ。

復興してきたとはいえ、ソ連の国力は未だ心細く特に重工業の分野では大きく立ち遅れていた。加えて海軍の戦艦の建造も20年近くストップしたために、当然建造ノウハウ等ない。保有してさえいないから、あらゆる面で経験不足であった。駆逐艦でさえイタリアから技術供与を受けて建造された物であった。

スターリンが進めた大艦隊計画は、ソ連にとって絵に描いた餅であった。こればかりは国力と直結しているだけに、スターリンも認

めざるを得なかった。

しかしながら、大艦隊計画が出来る出来ないに関わらず、とりあえず老朽化した艦艇の取替えや、ある程度の海軍の整備は重要であった。

ソ連海軍では上記したとおり、イタリアから駆逐艦の技術供与を受けたりして当座の海軍力整備を開始した。そしてそこで目に付けたのが、第一次大戦時に連合国を震撼させた潜水艦であった。

潜水艦であれば建造コストが割高となるが、乗員の数は水上艦より少なく、多数を集中投入すれば大きな効果が挙げられる。しかも敗戦国であるドイツから建造技術や運用ノウハウを買うことも出来た。

そう言う訳で、ソ連海軍では大幅な潜水艦の整備が行われ、1930年代中盤からそれらが次々とロールアウトし、各方面の艦隊へと配備された。当然極東艦隊にも多数の潜水艦が回航され配備されている。

この事態に慌てたのが日本海軍であった。ソ連海軍が潜水艦隊を配備したのは日本から目と鼻の先であるウラジオストクやナホトカだ。もし日ソが戦争状態となった場合、数少ない水上艦艇等は連合艦隊や基地航空隊で一蹴できる。しかし潜水艦が日本の港湾に侵入したり、大陸や朝鮮半島との交通線を攻撃されたりしたら一大事であった。

ここに来て、帝国海軍は再び対潜作戦と対潜戦備に関心を傾けざるを得ない事態に陥った。

一次大戦後 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

一次大戦後 4

1931年に満州事変が発生し、その翌年には日本の傀儡国家満州国が成立すると日本と大陸間の交通は活発になった。満州にはこの時点で石油こそなかったが（ただし1933年に日本の調査チームが発見）、石炭に鉄、そして豊かな穀物資源を持ち合わせていた。

これらの資源は、資源のほとんどを海外からの輸入に頼っている日本にとっては貴重であった。石油がないとは言え、石炭や鉄も重要な戦略資源である。

その資源を輸送するルートは遼東半島の旅順や大連から黄海、玄界灘を通って博多や長崎と言った九州に至るルートと、朝鮮北部の元山や羅津から日本海を横断し敦賀や新潟と言った日本海沿岸の港へ至るルートである。

これらのルートはいずれもソ連海軍の根拠地であるウラジオストクやナホトカから目と鼻の先である。もし日ソ戦争が起こるものなら、すぐに封鎖される可能性があった。

しかしながら、それらに対する海軍の防備は不十分だった。日本海軍は第一次大戦の反省からとりあえず対潜戦備の忠実と訓練を行ってはいた。しかし、それらはあくまで艦隊を潜水艦から守るものだった。通商路の護衛についてはほとんど整備が進んでいなかった。

そこで海軍では慌ててソ連潜水艦から通商路を守る方策を考え始めたわけだが、まず始められたのが専門部隊の整備だった。しかしながら、その整備は開始早々難航した。海軍側の無知もあったが、それ以上に問題だったのが予算の獲得だった。

この時期は未だ軍縮条約が有効に作用している、所謂海軍休日の期間中だった。しかも戦艦や巡洋艦といった主力艦の保有を制限したワシントン条約に加えて、補助艦艇の保有を制限したロンドン条約も利いていた。ちなみにこの世界では、天皇自らが全権団に向けて声明を発表したため、統帥権云々と言った問題は発生していない。

これらの条約のために、軍拡を影で進めるドイツとかソ連、共産党や日本と対立する中華民国を除く殆どの国が軍事費を抑制していた。例えばアメリカではこの時期戦車や小銃と言った装備の更新が滞ったりしている。またフランスの場合はなんと唯でさえ抑制された軍事費をマジノ要塞の建設に集中投入していた。

こうした状況が大きく変わるのは、ヨーロッパではナチス・ドイツが台頭して以降のことである。そして日本の場合は、今回のソ連の軍事力増強と満州国を日本の影響圏に置いたことによる。

海軍が通商路護衛組織設置のための予算を要求すると、帝国議会では紛糾した。日本にはこれまで通商路を守るという概念はほとんどなかったし、さらに戦時において地味であり、平時においては戦争勃発をただ待つだけの役割というのも、議会側に洩い顔をさせた。

また海軍内でも、通商路護衛よりも既存艦艇の改装や、航空隊の拡充に予算を振り向けるべきという意見が多く出た。

しかしながら逆に歓迎する動きもあった。特に日露戦争と第一次世界大戦で辛酸を舐めた海運業界からは顕著であった。それに加えて、実際にソ連の潜水艦の数は徐々に増えていた。また太平洋艦隊に配備される水上艦艇も少しずつではあるが増えていた。

そしてトドメとなったのが、満州事变直後に中華民国が自国防衛の名目の下海軍の大幅拡充をスタートさせたことであつた。

本来なら帝国海軍にとって中国海軍など気にもしない存在に過ぎなかつた。中国海軍がまともな近代海軍を保有したのは1回だけ、それも日清戦争で日本海軍に敗れているからだ。その後も国内の政治的混乱から、小規模海軍を脱することが出来ず、この時点で中国海軍が保有している外洋航行可能な艦艇は両手で数えられる程だつた。しかも最大の艦は第一次大戦直前にオーストリアに発注し、戦後になってようやく竣工した5000t級軽巡のみだつた。

しかしながら今回中国海軍が発表した計画の中には、大型巡洋艦や外洋型駆逐艦のみならず、なんと潜水艦が20隻も含まれていた。

当初この計画を帝国海軍では単なる絵に描いた餅にすぎないと考えていたが、まもなく上海や香港の造船所で艦艇の建造が開始され、さらに海洋学堂（海軍士官学校）の大幅な定員増がなされたという報告がスパイからなされた。

この内艦艇の建造というのは、中国の工業力が貧弱なことから駆逐艦や潜水艦、それに砲艦と言つた小型艦に限られていた。しかし大型の艦艇も確かに建造を開始していた。もちろん中国国内ではなく、外国であつた。

その国というのはドイツであつた。実はドイツという国は結構な武器を中国に売りさばいていた。特に第一次大戦後は、敗戦国であるドイツからでもがっぱがっぱ兵器を買ってくれる中国は大事な顧客であつた。

また退役軍人を中心にして軍事顧問団も中国に派遣していた。中

華民国陸軍の軍装がドイツ式となったのもこの辺りが大きく影響していた。

そのドイツは第一次大戦後に大きく軍備を制限されたが、それにもめげず諸外国でその研究と開発を続けたのは前話でも書いた。中国もその1つだった。敗戦国となり、その後の世界恐慌で大打撃を受けたドイツとしては、それこそ何でも商売の種にする必要があった。

そこでドイツは、陸上兵器や航空兵器のみならず海上兵器も中国に売ることにした。何しろ陸上兵器は大量に売れるが利益が少ない、航空兵器は技術的に未完成の部分が多く（実際ドイツが中国に売り込んだ機体は低性能）、さらに中国ではアメリカ製が幅を利かしていた。そうなると売れそうで、大きな利益を得られるのは海上兵器だった。

しかも海上兵器は各国が軍縮条約に縛られて新規建造を打ち止めているため、出しぬくまでは行かないまでも、同水準を保っておける。中でも潜水艦は自国での保有が禁止されているから、なるべく建造と運用の両面でノウハウを溜めておきたい物だった。だからこそソ連向けに作った。ここで中国向けに作ればさらにノウハウを溜められる。しかも中国の場合はソ連と違って、それなりに大きな海に面している国というのも好都合だった。

一方中国からしてみれば、潜水艦は少人数で扱えるし、戦艦や空母を中心とする大艦隊を保有する日本海軍に対して、反撃できる有効な手段と見られた。

そう言う訳で、ドイツから出張した技術者の指導の下で中国製Uボートの建造が開始されたのであった。ちなみに水上艦艇で巡洋艦

以上は先程も書いたとおり全てドイツで建造されている。これらは後にナチス海軍の「M」級軽巡にデータを提供している。

さらにスパイ情報からこれら中国潜水艦隊は、朝鮮半島から目と鼻の先にある青島に配備される可能性が濃厚となった。これは日本にとってはソ連に続く脅威である。

結局これが決め手となり、日本海軍は通商路防衛に用いる艦隊である近海防衛艦隊設置の予算を議会で成立させたのであった。ちなみに護衛艦隊ではなく防衛艦隊という名称になったのは、平時でも救難や国境警備、漁業監視などの任務を担当することとなったからだ。

とにかく紆余曲折の末、1934年に近海防衛艦隊が設置され司令部は対ソ戦を意識して舞鶴に置かれることとなった。初代司令官には英国留学の経験があり、第一次大戦時は第一特務艦隊に参加し、軍縮の煽りで予備役編入となっていた杉下左京少将が現役復帰の上で就任した。

また一部の勢力が中国進出を企む陸軍の方でも、自前の航空機搭載強襲揚陸艦や高速輸送艦、外洋航行能力を持つ砲艦の建造を開始した。

一次大戦後 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

一次大戦後 5

ソ連と中国の海軍力増強から日本周辺（日本海や東シナ海）を守るべく造られた近海防衛艦隊であつたが、その実情はお寒い限りであつた。

近海防衛艦隊が設立当初の時点でその担当海域とされたのは、日本列島沿岸の太平洋側と千島列島、南樺太沿岸、日本海、そして朝鮮半島沿岸側の黄海であつた。

連合艦隊主力が米海軍との主戦場と定めていた中部太平洋から小笠原近海までの海域と比べれば狭いほうだが、それでもかなり広い海域である。

しかしながら近海防衛艦隊に割り振られた予算は連合艦隊より遙かに少なく、当初配備された艦艇は旧式軍艦（日露戦争当時の装甲巡洋艦や巡洋艦）、駆潜艇、掃海艇、敷設艇等総計40隻にも満たなかつた。しかもその殆どが2線級艦艇だつた。また指揮下に入つた航空隊は飛行艇と水上機が少数ずつに留まつた。しかもこれまた旧式機ばかりであつた。

無論これだけでは担当海域全域の哨戒さえおぼつかない。（それよりも狭い海域で数に勝る海上保安庁が北朝鮮の工作船を見過ごしていた事実からも、海上防衛の難しさがわかる。） それに加えて艦艇の性能にも大きな問題を孕んでいた。

配備された艦艇の多くは小型や旧式であつた。これはまだ良い。この時期の潜水艦はスピードが遅く、水中での動きも鈍かつたからだ。しかし、それを沈める肝心要の兵器に問題があつた。

なんと爆雷投下軌条と投下台は備えていても、聴音機や探信儀を備えていない艦艇が多かったのだ。これではソ連や中国海軍が増強しているという潜水艦に対処するには心もとないレベルを通り越して無謀であった。

そのため艦隊司令官の杉下少将は設立後すぐに、上層部（海軍省）に意見具申を行っている。その内容は既存艦艇の対潜装備改善は元より、水上・航空両戦力の増強や、新造艦艇の設計・建造、さらに専門の人材の育成などであった。

杉下少将と言う人間は、性格が少しばかり変わっていたが的確な意見をする人間であった。実際これら意見具申は当然と言えるものばかりだった。

そして近海防衛艦隊にとって幸運なことに、間もなく満州国内で石油が発見されその重要度が再認識されるとともに、ソ連の脅威がより現実味を帯びたものとなった。

だから杉下の意見具申の内、まず対潜兵器の全艦装備が決定された。また専門の人材育成も、横須賀に海軍防備学校が設置されることとなった。これは近海防衛艦隊のみならず、これまで格下であった海軍の防備担当者を勇気付けた。

ところが新造艦艇の建造については、この時期戦艦や空母の近代化工事が立て込んでいることと、条約切れとなった際の連合艦隊用艦艇を建造するのに必要とされ暗礁に乗り上げた。

その代わりとして、旧式化している軽巡「天龍」型2隻と二等駆逐艦「樫」型、「若竹」型の艦隊配備からの退役を早めて近海防衛

艦隊に配備することとなった。軽巡は護衛巡洋艦、二等駆逐艦は護衛艦に種類変更された。

これらの艦艇は武装を減らし（特に水雷装備）、一部の艦は老朽化していた缶を降ろし、対潜用装備を大幅に強化した。^{ボイラー}

この処置は、旧型艦を艦隊配備から外して、新型艦の建造を早める意味から連合艦隊にとっても都合の良い処置であった。この時期はまだロンドン軍縮条約が期限切れを迎えていなかったために、雷装を撤廃して駆逐艦でないと言い張り、条約で定められた排水量枠を増やそうと画策したのである。

しかしながら杉下としては、これではまだまだ不十分であった。特に新造艦の建造がストップされたのは腹立たしい限りであった。旧式艦では夏はともかく、冬の千島や日本海で働くのには、能力的に不十分であったからだ。船団護衛や対潜作戦どころか航行さえ覚えないこともしばしばあった。特に比較的小型の艦艇ばかりなので、輪をかけてそうなる。

「これでは日本海を守ることさえ出来ません！」

と彼は何度も海軍省に上申したが、実際の所予算がないの一点張りであった。もちろんこの裏には、近海防衛艦隊を疎んじる勢力が存在していたのもあった。

結局昭和9年、10年と2年間は近海防衛艦隊にとって苦難の2年間となった。この間艦隊に配備されたのは上記した通りの性能的に不十分な二線級艦艇と、質的に劣る乗員ばかり。対潜訓練を行っても、潜水艦を撃沈できないどころか、逆に撃沈判定を受ける始末であった。

連合艦隊の人間から笑われても、ただ我慢するしかない日々が続いた。

状況が好転するのは昭和11年に入ってからであった。この年口ンドン軍縮条約の期限切れを見越して艦艇の建造計画が新たにスタートしたが、これにともなって駆逐艦の一部も取替えとなり、新たに一等駆逐艦の「峯風」型が改装の上で近海防衛艦隊に回されてきた。

「峯風」型も既に老朽化が激しく、北方海域での使用には困難が付きまとう艦ではあったが、それでもようやく1000t越えの艦艇が配備されたことは、近海防衛艦隊配備の乗員たちを勇気づけた。

さらに不足していた予算も、通商を司る逓信省や満州国の会計から補助される形で補填されることとなった。これによって昭和11年度予算で、ようやく新造の対潜艦艇として4隻の「占守」型海防艦が建造されることとなった。

「占守」型は2年間の近海防衛艦隊の訓練結果や既存艦艇の活動を踏まえて排水量960t、速力26ノット、武装は12cm砲3基と25mm連装機銃2基、爆雷60個と決定された。

「占守」型は北方国境警備任務を念頭に置かれた設計が為され、耐寒設備が忠実にしていた。また対潜訓練の戦訓から、水上・水中における潜水艦を圧倒する速力が求められたため速力は当初計画の20ノット強から大幅に強化された。ただし、その生産性自体は日本の艦艇に特徴的な手の込んだ設計がなされており、大量建造には向かないタイプであった。

またこの時期研究が始まった艦艇に魚雷艇（高速艇）があった。日本では魚雷艇の開発は行われていなかった。後に連合艦隊司令長官の小沢中将にしても「役に立たない」と結論付けていた。

これにはちゃんと理由があつて、日本海軍が定めていた主戦場が外洋の太平洋であつたため、モーターボートに毛の生えた程度の魚雷艇を有効に使えないと考えられていたからだ。

しかしながら、近海防衛艦隊の場合は対馬海峡の警備や朝鮮半島・日本列島沿岸地域の防衛・警備には充分使えろと考えた。コスト的にも安く上がる。

ただしこの魚雷艇の開発も当初は上手く行かなかつた。何せ日本側に技術的蓄積がほとんどなかつたからだ。1号艇はエンジンの騒音が五月蠅く、振動があり、さらに最高速度も27ノットと完全な失敗作であつた。その次の2号艇では振動と騒音を抑えたが、速力は伸び悩み29ノット強が限界であつた。

最終的にまともな魚雷艇が出来上がったのは昭和13年中期完成の6号艇からで、ようやく巡洋艦と同程度の速力35ノットをキープした。

後に量産が始まった魚雷艇は主に対馬の厳原駐屯地に配備され、日本海へ侵入する可能性がある中国潜水艦や、逆に太平洋へ進出を図るソ連潜水艦の監視任務を行った。また日中戦争では中国大陆占領地沿岸の監視任務を、太平洋戦争では港湾警備や諸島における戦闘に投入された。

またこの時期日本の傀儡国家となつた満州国の海軍も増強された。当初日本海軍では陸軍との縄張り意識から、海上警察の忠実を画策

したが、それに近海防衛艦隊司令部が横槍を入れて阻止し、陸軍の要求どおり海軍を忠実させた。

結果満州国海軍には、旧式ながら二等駆逐艦3隻を始めとする艦艇が供与された。これらは主に渤海における警戒任務に使われた。

こうして日本周辺の通商路警備と対潜作戦の準備が少しずつではあるが進められていった。だがそのスピードは遅く、増強されつつはあったが貧弱な体制に変わりにはなかった。そして、そんな中で昭和12年7月7日を迎えることとなる。

一次大戦後 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

大学がスタートして、ゼミのテーマを戦没商船に決定しました。
小説とともにがんばります。

日中戦争 1

昭和12年7月7日、中国北京（この時点では北平）郊外の盧溝橋で事件は発生した。条約に従い同地に駐屯、演習中だった日本軍部隊へ何者かが発砲したのだ。誰が撃ったかはわからない。中国共産党の陰謀か、それとも本当に国民党軍だったのか、そもそも発砲自体が悪意ある物だったかさえわからない。

しかしながら、そのような事情は当の撃たれた側に見れば感知する所ではなかった。攻撃を受けたのであるから、軍隊として反撃を行うのは当然である。

こうして日中両軍が衝突する所まで事態はエスカレートし、日本と中華民国は宣戦布告なき戦争に突入したのであった。

ちなみに両国がともに宣戦布告もせずズルズルと泥沼の戦争に向かって行ったのは、正式な戦争にすると捕虜の扱いや物資の輸出入に支障を来すからである。

さて、この戦争は日本の陸海軍にとってはそれなりの好機と言えるものであった。陸軍からしてみれば、満州地域に次いで華北・華中地域をその勢力下における。こうすれば満州地域の安全をより強固な物に出来、さらに豊富な労働力や日本が欲する一部の資源を得ることも出来た。

また海軍からしてみれば、第一次大戦後からこれまでに整備してきた軍備を試すチャンスであった。特に航空兵力は新型の96式陸攻と96式艦戦の配備が始まっていた。これらはいずれも世界水準を追い越した記念すべき機体であった。

日本政府は当初、中国との全面戦争については不拡大の方針を採った。現に最前線では一旦日中両軍の停船条約が結ばれていた。

しかしながら、満州事変以来続く前線部隊の独断専行がここでも行われてしまった。独断専行は時と場合によつては臨機応変という名で賞賛される時もある。現にドイツでは独断専行は奨励されていた。もちろん、それ相応の結果と責任が求められる物であったから、やる方も真剣であつた。

一方日本軍の独断専行と言つのはどうもドイツとは違い、あくまで自分または自分たち（つまりは軍）の利益、それも視野の狭い目先の利益を求めて起こす傾向があつた。もちろん石原莞爾が起こした数十年も先を見据えたような高度な物もあつたが、それは例外中の例外といえた。

しかも日本陸軍はどうも謀略という物を好む傾向にあつた。それさえも、目先の成功に捉われた物ばかりで、広い目で物を見るという視点に掛けていた。

とにかく、政府の意思とは無関係に軍は勝手に中国大陸における戦線を広げ始めた。陸軍は増援兵力を大陸へと送り、海軍は台湾や長崎からの渡用爆撃を始めてしまった。

首都を占領、もしくは破壊さえしてしまえば蒋介石は怖気づいて停戦交渉を持ち掛けてくるはず。そのような樂觀論が日本の軍部には広がっていた。しかしながらそれは中国軍と中国という大陸を余りにも舐めきつた論理だつた。

日本陸海軍はその洗礼をすぐに受けることとなつた。

開戦から間もなくの昭和12年10月、日本陸軍の増援部隊が日本本土から上海へ向かって輸送船に乗りこんで出発した。この時出撃した部隊は、第一次大戦の教訓を下に大幅な機械化と近代化を進めた精鋭の第7師団であつた。

第7師団は当時まだ最新の95式短機関銃や他の部隊よりも定数の多い迫撃砲や速射砲、その他の野戦砲にトラック、車両を保有していた。

満州事変時の関東軍は、一応第一次大戦の教訓からある程度の近代化や機械化が為されていたが、やはり貧乏で工業力の低い日本においては色々と限度というものがあつた。完全な近代化・機械化とは言い難い状態だつた。

しかしながら今回派遣される第7師団は貧乏国日本がようやくにして作り上げた精鋭部隊であつた。

陸軍としてはこの第7師団の実力を発揮するとともに、その力を持って中国軍を短期間で撃破して首都である南京への道を開こうと考えていた。

第7師団を乗せた輸送船団は、陸軍の要請に応じて海軍が派遣した連合艦隊の重巡2隻、軽巡1隻、駆逐艦6隻に護衛されることとなつた。

さすがに戦艦や空母こそ出さなかったが、それでも重巡を出したのは青島に根拠地を置く中国海軍北洋艦隊を警戒してのことだつた。中国海軍北洋艦隊は、この時点においてドイツからの援助もあつて巡洋艦2、小型巡洋艦3、駆逐艦6隻の戦力を揃えていた。

連合艦隊の敵とはいい難いが、それでも輸送船団には重大な脅威であつた。

先に行われた2回の戦争から、中国との戦争が本格化すると各商船会社は陸海軍に協力を要請して、主に中国大陸方面へ向かう船や中国大陸至近を通る船への武装化を行った。

これに伴い、各商船には1〜2門程度の大砲と1〜2基程度の機関銃が搭載された。もちろんこれだけでは不足であるが、それでも丸裸よりは100倍もマシというものだった。

だがこの時期になると、かつてのように商戦に武装を施せば戦力となりうるという時代は過ぎ去りつつあつた。どんなに武装を積んでもやはり商船は商船に過ぎない。この戦争ではその片鱗が見え始めることとなる。

第7師団を乗せた船団は広島の子品港を出港、門司で待機していた護衛艦隊と合流して一路上海へと向かつた。

この時期連合艦隊の主力戦艦は未だ瀬戸内海にその巨体を浮かべていた。そして空母機動艦隊は遙か南方へと派遣され、上海方面の陸軍を援護していた。

連合艦隊では一応青島の中国海軍北洋艦隊の動きに気を配っていたが、やはり数で劣る弱小艦隊という印象を拭いきれていなかった。

その中国北洋艦隊であるが、では近海防衛艦隊を作る切欠となつた潜水艦の状況はどうなつていたのかというと、この時点において少なくとも16隻の配備がスパイからもたらされていた。

帝国海軍では訓練中や修理中にあると考えて、この内の半分程度が出撃できる限度であると考えていた。さらにこれが出撃しているとしても、広大な海域に広がったとすれば大した脅威とはなりえないとも考えていた。仮に中国海軍が集中運用を行ったとしても、それは上海等激戦地近海であるという予測をしていた。

そのため一応海軍では中国潜水艦出撃の可能性ありとは、陸海軍と各商船会社に伝えてはいたが、終始楽観的な態度を採っていた。

それが大いなる間違いであることは、間もなく判明することとなった。

第7師団を乗せた輸送船団と護衛艦隊は、予定通り門司を出港し東シナ海を南下していた。ところが、五島列島の西200kmの海域において突如として中国潜水艦の襲撃を受けた。

その時の状況をまとめると、まず前衛駆逐艦の「吹雪」が聴音器に敵潜水艦らしきものを探知し、現場へと急行しようとした。そこへ今度は輸送船団左舷を進む駆逐艦「白雪」が同じく潜水艦らしきものを探知した。

意外と早くに敵潜水艦を探知したが、これは護衛艦隊が輸送艦隊に合わせて速力を18ノットに落していたことと、優秀なソナーマシンのお陰であった。

「白雪」も敵潜水艦攻撃のために一旦その場を離れた。

しかしながらそれが大きな失敗だった。その2隻の護衛艦が離れた隙について、今度は別の潜水艦が攻撃を行ってきたのだ。その数

4隻で、各艦からそれぞれ4本ずつの魚雷が放たれた。

その結果足の速い駆逐艦と軽巡は回避行動でなんとかあったが、旗艦である重巡「古鷹」が1本を被雷し航行不能、さらにもう1本が船団内に飛び込み兵員輸送船であった貨物船「さんとす丸」を直撃した。

「さんとす」丸には3000名の兵士が乗っていたが、魚雷は船体中央部に命中したため真つ二つに折れて沈んでしまった。しかも悪いことに、兵員の多くは暗い船倉の中にいたために脱出する暇がなく、わずかに300名が他の艦船に助けられたに過ぎなかった。

それに対して日本海軍側の戦果は未確認撃沈1に留まり、完全な完敗を決した。

船団はその後襲撃を受けることなく、上海に入港したものの精鋭の第7師団は戦う前にその戦力の4分の1を失った。前代未聞の事態であった。

この事件による波紋はまもなく陸海軍、さらに日本全国へ広がることとなった。

日中戦争 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日中戦争 2

「さんとす丸」が中国海軍の潜水艦に撃沈され、精鋭である第7師団の将兵3000名が戦死したことは、陸海軍に大きな衝撃を与えた。

陸軍としては虎の子の近代化・機械化部隊の将兵が戦わずして海に沈んでしまったことに、海軍としては敵潜水艦の襲撃を許して、あまつさえ敵潜水艦を撃沈できなかったことに。

しかも、悪いことに撃沈地点が日本本土からそう離れていなかったことや、中国側が大々的に戦果を報じたがために、この事件は日本国民の知るところとなった。

日露戦争の「常陸丸」に続いて再び日本の軒先で、兵たちが戦わずして海に飲み込まれたことに国民が激昂したのは言うまでもない。しかも、海軍にライバル意識を持つ陸軍の一部がこれを煽った。

さらに「さんとす丸」を保有していた商船会社もめずらしく海軍に対して遺憾の意を示す文書を送りつけた。（これは陸軍や市民の抗議に便乗した説も根強い。）「さんとす丸はこの3年前船舶助成施設で出来上がったばかりの新鋭船であつたからだ。

船舶助成施設とは昭和7年に始まった政府や軍の資金援助の下で、当時大量に残っていた明治・大正期の貨物船を新鋭船に取り替える制度だ。欧米列強の商船会社が続々と新鋭高速船を竣工させたため、日本の海運業界は速度やサービス面で大きな苦境に立たされた。

そこで、そうした問題を解決しつつ戦時には特設艦船として優先

的に徴用できる制度が船舶助成施設であった。これによって造られた「さんとす」丸は真つ先に徴用され、そして真つ先に沈められてしまった。商船会社にとっては新鋭の船と優秀な船員を失ったのだから、抗議して当然と言えた。

結局のところ、これを受けて護衛艦隊司令官を始めとして複数の軍人が予備役編入や降格という処分を受けたが、もちろんそれは問題を根本から解決することにはならない。

さつそく海軍内で研究会が開かれ、原因の究明が行われた。

第一要因に挙げたのが、敵潜水艦が複数にて襲撃してきたことであつた。後の言葉で言うところの群狼戦術ウルフバックである。これにより駆逐艦が1隻を追っている内に防備に穴が開き、別の潜水艦が襲撃を行へた。

当初中国海軍潜水艦の練度は劣悪であり、そんなことは起こりえるはずがないという意見が出たが、現実に駆逐艦や巡洋艦が複数の潜水艦を捉えたのは事実であつた。

現実に中国海軍は群狼戦術を実行に移していた。これは潜水艦の建造技術を提供したドイツが、ついでに軍事顧問として派遣した元Uボート乗りや、若手のUボート士官によるものであつた。

ドイツ軍が兵器の輸出先のお得意様として中国を見ていたのは以前にも書いたが、日中戦争が本格化するとその意味合いは大きくなつた。ヴェルサイユ条約を破棄し、新兵器を続々と開発したドイツはその実験場を求めていたからだ。

その1つがヨーロッパのスペイン内戦であり、そこではイタリア

製兵器と共にソ連製兵器との戦闘を行った。ただし海軍の出る幕はあまりなかった。

一方アジアでその実験場となったのが中国で、ドイツは1・2号戦車やHe 51・Me 109戦闘機、He 111爆撃機やJu 86爆撃機等をスペイン内戦ほどではないが輸出し、それを扱える軍事顧問も派遣していた。

そして何より重視したのが上記したUボートの乗組員であった。日中戦争では不甲斐ない面も目立った中国軍であったが、一部の精鋭は高い愛国心を持ち、優れた教育を受けていた。こうした兵士たちがいたからこそ、中国軍も光り輝く部分を持てたと言えるよう。

中国版Uボートの場合もそうで、水上艦隊が日本の連合艦隊を警戒して内海や華南方面への非難を余儀なくされたのに対し、彼らは反撃の準備が整うと積極的に反撃を始めた。

潜水艦は単価が高く、水に沈む分保守が面倒という欠点があるが、乗員自体は40名ほどで済み水上艦より遥かに少ない。おまけに乗員が少ないので家族的雰囲気の一一致団結が容易という利点があり、この事が比較的高い練度を維持することに役立った。

こうした背景があつて、中国海軍潜水艦は群狼戦術を採ることが出来たし、さらに水上艦よりも数を揃えることが出来た。日本海軍では稼動している潜水艦は20隻以内と見ていたが、実際に中国海軍がこの時期保有していた潜水艦は32隻で、内22隻を稼動させていた。さらに4隻ほどが竣工間近であつた。

ちなみに、これだけの潜水艦を揃えられたのにはドイツ以外にアメリカやソ連が艇入れしていたからである。特にソ連からやってき

た若い海軍将校たちは、ドイツやアメリカの軍事顧問が採る戦法や戦術を大いに学ぶという、どっちが教えるのか教わるのかかわらない珍妙な現象まで起こしていた。

第二の要因として挙げられたのが、船団護衛のノウハウの不足だった。今回護衛していた艦艇については、数こそ多かったがその内3分の1が水上艦艇の襲撃に備えて対潜装備を持たない艦艇であり、残る駆逐艦6隻も艦隊における対潜戦闘は熟知していたが、スピードや動きが全く違う船団護衛では勝手が全く違い、隙を生んでしまった。

ただしこれに関しては海軍側だけではなく、守られる側の商船も船団形成には不慣れであった。船団は安全性こそ増すが、船足が遅くなる等非効率な面も多く平時だったらずまず間違いなく行いはしない。

もっともこれに関しての責任を追及したら、それこそ戦争責任の追及にまで飛躍してしまうので、誰も口に出すこと等しなかった。

とにかく、この件に関しては連合艦隊駆逐艦に再度マニュアルや訓練の徹底をさせること以外対処する道はなかった。ちなみに近海防衛艦隊では、平時からそうしたマニュアルの改正や訓練をしっかりと行っていた。何せ短い航路とはいえ彼らの主目的の1つは通商路保護であつたからだ。

第三の要因として挙げられたのが駆逐艦に搭載されていた爆雷の数であった。実は日本の特型駆逐艦の場合爆雷は20個から30個程度しか搭載しなかった。これでは敵潜水艦に致命傷を与えるには不十分である。

爆雷は海中で爆発し、水上に凄まじい水柱を生むが、その派手さとは裏腹に打撃を与えるには潜水艦の至近もしくは下方で爆発する必要がある。いきおい、かなり正確な位置に投下しないと撃沈には至らない。

実はこれに関しても、近海防衛艦隊では以前から指摘されていた問題であった。対潜訓練を行う中で、彼らは潜水艦が以外と小回りが利き、的として小さいことを熟知していたからだ。しかしながら、海軍内ではその戦訓は生かされず、クローズアップされるのは潜水艦に撃沈判定をされることばかりであった。

近海防衛艦隊の意を受けて建造された「占守」型では訓練結果を踏まえて爆雷定数を60個と特型駆逐艦の2〜3倍という数にしたが、これさえも当初は無駄遣いだの下手糞の泣き言などとバカにされた。

しかしながら、そんな感じで近海防衛艦隊をバカにして戦訓を無視した連合艦隊の将兵は、代償として一般国民からのバッシングの嵐に晒されることとなった。

近海防衛艦隊の兵士も同様にバッシングされることがなかったこともないが、彼らの場合は比較的地域密着で働いていた（特に救難）ため、少なくとも母港周辺ではそのようなことはなかった。

連合艦隊はこの事件を契機に、ようやく船団護衛の難しさと重要性（ただし航路防衛とは違う観点で）悟り、駆逐艦の爆雷を増やしたり新たなマニュアルを配ったりした。

しかしながら付け刃的なそうした処置では効果が挙がったとは言いがたく、それどころか中国海軍のほう調子にのって積極的な攻

撃をしてくる始末だった。

結果連合艦隊は最強と自負していた特型駆逐艦3隻をUボートの雷撃で失い、軽空母「龍嬢」や戦艦「陸奥」大破と言った大火傷をする結果となった。

さらに海南島沖合いで空襲により空母「赤城」が大破したことから、連合艦隊は艦艇の投入に慎重になり、船団護衛に関してはすっかり意欲を失ってしまった。そこで昭和13年2月から近海防衛艦隊が船団護衛を受け持つこととなった。

日中戦争 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日中戦争 3

昭和13年初頭において、近海防衛艦隊は日中戦争勃発により艦艇が幾らか補充されていた。しかしその多くは旧式「神風」型駆逐艦や沿岸警備程度にしか役立たない駆潜艇等であった。もちろん、全く役立たないわけではないし、一応対潜用装備を備えていた。

しかし防衛艦隊司令官である杉下中将（前年11月進級）にしてみれば、そうした能力的に制限される艦艇よりも嬉しかったのが、航空隊の増強であった。

近海防衛艦隊指揮下の航空隊は、当初飛行艇と水上機がそれぞれ20機ずつにも満たない貧弱なものであった。もちろん防衛艦隊側では再三にわたって航空隊増強を訴えたが、それがようやくにして実現した。

新たに配下に加えられたのは念願の陸上機であった。もちろん最新鋭機ではなく、既に型落ちとなった96式艦攻と95式艦戦であった。いずれも複葉機としてはそれなりの性能であったが、後継の97式艦攻と96式艦戦の登場により短期間でお役御免となった機体だ。その数合計40機。

これらの航空隊は済州島や対馬等日本に比較的近い離島や日本海側の基地に分散配備された。中国潜水艦への脅威に対処するには不適切な配置と言えなくはないが、他に適当な基地もないためにやむをえなかった。ただそれでも、6月には玄界灘へ進入を試みた中国潜水艦を1隻撃破し、日本の内海への敵侵入を阻止している。

この時近海防衛艦隊司令部では芽生え始めていた空母もしくは水

上機母艦保有論がより強くなることとなる。

ただしこれについて実現するのは、結局日中戦争も終わりに近付いた昭和15年になるまで待たなければならなかった。

航空隊の配備と共に大きな動きとして注目されていたのが、新型海防艦である「択捉」型の建造であった。この時期ようやく「占守」型が竣工し始めていたが、これに続いて旧式駆逐艦の代替目的に建造が決まったのであった。

「択捉」型の基本性能は排水量950t、速力24ノット、12、7cm両用砲3門、25mm連装機銃4基、爆雷80個であった。

「占守」型に比べて大きさはほぼ同等であるが、日中戦争での航空機の活躍を受けて主砲は平射砲から高角砲を改造した両用砲へと変わっている。また爆雷の搭載数が20個アップされている。

そして何より特筆すべきことは「択捉」型から新たに大量生産と低価格の視野を入れた設計が始まったことである。これは旧型の二等駆逐艦の退役年月が集中すること、その数が多数に上るからだ。そのため短期間で数が揃えられ、なおかつ厳しい予算の中で揃えられる艦が求められた。

「択捉」型では直線的なデザインを多用し、装飾等は最低限に控えられる。ただし戦時急造艦とは違い、15〜20年程度の就役を見込んだため、3ヶ月で竣工という訳には行かず、そういう面では徹底していなかった。

それでも、大量建造を意識した建造であることは、個艦優秀性を追及する日本海軍においては画期的なことであった。もっとも、連

合艦隊からはそのせいでバカにされることとなるのだが。

また海防艦より一回り大きい新鋭護衛駆逐艦も建造が決まった。これが「松」型で、主砲は「択捉」型と同じ12.7cm高角砲3門であったが、排水量は1200t、敵水上艦との戦闘に備えて速力は30ノットが確保され、61cm4連装魚雷発射管1基を備えた。その他に40mm連装機銃2基、25mm3連装機銃2基、単装機銃6基を備える等対空戦闘も考慮され、爆雷も80個搭載が計画された。

「松」型は「峯風」型の代替とされ、主に海防艦の嚮導役や遠距離海域における作戦を行うことが考慮された。こちらにも「択捉」と同じく直線を多用し、大量生産と低コストが目指され、また日本の駆逐艦としては始めて生存性の高い機関のシフト配置がなされた。

「択捉」型は10隻、「松」型は4隻の建造が計画された。

そうした新戦力の配備や新造艦艇の建造は近海防衛艦隊上層部を喜ばせはしたが、目の前の任務に当たることが彼らにとっては正念場であった。

昭和13年3月3日、門司より出撃した4隻の陸軍輸送船の護衛が近海防衛艦隊の中国への初派遣任務となった。同船団には護衛軽巡「天龍」、護衛駆逐艦「神風」級4隻、護衛駆逐艦「若竹」級2隻の計7隻が護衛として付いた。

輸送船の数の割りに護衛艦が多いのは、復路で中国大陆からの輸送船と合流する予定であったからだ。

この時期中国大陆における戦況は微妙であった。開戦時の盧溝橋

事件等の戦闘こそ勝利を得られた日本軍であつたが、その後は一方的な敗走こそしないものの、苦戦を強いられた。

中国軍は米独ソ等から受け入れた軍事顧問団の指導の下良く訓練されており、兵器の質も決して悪くはなかった。また地の利を生かして戦えることも大きく彼らに味方した。

そのため当初は首都である南京さえ落せば勝てると見ていた日本側の楽観論は大きく覆され、南京へ進撃するのさえ危うかった。

海軍も中国空軍の予想外の奮戦により、巡洋艦「足柄」、空母「赤城」が損傷して戦線離脱するという被害を被っていた。

陸軍部隊の進撃停滞とともに、こうした暗い戦況は国民や兵士の士気を落した。また陸軍の進撃停滞には国際的な世間体を気にしているのも原因となっていた。

日本軍は第一次大戦の折りヨーロッパへと出兵したが、そこで待っていたのは欧州で定められたルールによる戦争だった。そのため日清・日露で行ってきたような現地調達という名の食料補給が出来ず、やろうとした部隊は国際社会から激しく非難を浴びた。また、例えやったとしても、米等があるはずもなく、その時になつてようやく日本側は武器の欠乏と共に補給の重要性に気づかされた。

そのため、日本陸軍は大陸と日本の間に何度も人員・燃料・食糧・弾薬を満載させた輸送船を往復させなければならなかった。これにより出費が増えたのは自明の理であり、その輸送船も「さんとす丸」をはじめとして既に3隻が沈められ、2隻が全損、3隻が撃破という決して無視できない被害を被っていた。もちろん補給物資の到着が遅れたため進撃も鈍った。

近海防衛艦隊に与えられた役目は大きかった。護衛艦隊司令官に就任した山口登少将は杉下中將から作戦の成功を厳命されていた。

山口は地中海へ派遣された第一特務艦隊の駆逐艦艦長を経験した人物で、イギリスへの留学経験もあった。そのため、船団護衛に関しては日本でも数少ない理解者であった。

彼は今回の作戦のために、英国から資料を取り寄せ、さらに過去に連合艦隊が接触した中国潜水艦の行動パターンを参謀や艦長たちと共に研究していた。

彼がもつとも頭を悩ませたのが、敵潜水艦による群狼戦術であった。もし敵が4隻程度で襲撃する場合でも、現状の護衛艦数では足りない可能性があった。とにかくどこか一方でも穴が開くと、敵に攻撃のチャンスを与えてしまう。

そこでまず山口が考えたのが、輸送船を並列に並べることだった。それまでは航行の容易さから単縦陣を採っていたが、並行に走らせるならば、万が一敵の魚雷攻撃を受けても、被害を減らせる。

また航空機が飛んでいる時は敵の襲撃が少ないことに注目し、「天龍」と「峯風」級駆逐艦に水上機を搭載している。いずれも潜水艦搭載用の96式小型水上偵察機であったが、とにかく飛行機さえ飛ばせば敵を威圧できるし、何より急ごしらえであったから航空燃料や弾薬の搭載量が少ないので、小型機の方が便利であった。

水上機はいずれも撤去された魚雷発射管の位置に搭載された。ちなみにいずれも潜水艦搭載機を潜水艦隊から間借りする形を採った。

さらに護衛艦艇の動きにも工夫をこらした。それまでは輸送船の速度に合わせて直進させていたのを、それよりも高速で蛇行と円運動させることにした。これは燃料の消費量こそ増えるが、敵潜水艦を発見した場合逸早く現場へ向かえるようにとの処置であった。

日中戦争 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日中戦争 4

山口登少将率いる護衛艦隊に守られた輸送船4隻は、門司を出港すると玄界灘を抜けて東シナ海を一路西進した。そしてそこからが一番厄介な所であつた。

中国潜水艦の本拠地である青島は、戦争の早い段階で日本海軍航空隊が爆撃を行つて潜水艦基地を壊滅させたかに見えた。ところが、中国軍はそこにドイツが後に造るようなブンカーとまでは行かないまでも、爆撃に対して堅牢な基地を築き上げていた。

また日本側の陸路からの進撃に対しても中国軍守備隊は果敢に反撃を行い、日本側戦力が不十分だつたこともあり、青島は未だ中国軍の管理する所で、潜水艦基地も基地機能を保っていた。

このため中国海軍潜水艦は比較的容易に日本の中国に対する輸送路を攻撃することが出来た。ただし、中国側も日本海軍が上海付近で行っている海上封鎖には参っているらしく、稼動潜水艦の数は落ち込んでいた。それでも、「さんとす丸」以降も複数の艦船が攻撃を受け、その内の何隻かは沈没へと追い込まれていた。

玄界灘から東シナ海を西へ突つ切り上海等へ至る航路こそ、日本側にとつての鬼門であつた。

そこで山口少将は、軽巡と駆逐艦に積み込んだ小型水偵を積極的に活用した。それらの機体は手間が掛かることに、カタパルトではなくクレーンやデリックで海面に降ろされ、発進する方式だつた。だから乗員にとっては面倒くさいことこの上ない機体だつた。

それでも、水上機に小型爆弾1発を抱かせて上空に張り付かせれば、少なくとも昼中国海軍潜水艦が襲撃してくることはなかった。これは潜望鏡深度まで浮上することで艦影や潜望鏡を捉えられることを、潜水艦が怖れたからであった。水上からは見えなくても、空中からなら発見率は飛躍的に上がるからだ。

これによって山口部隊は昼間の敵からの襲撃からは逃れえた。しかしその代わり代償も払わされた。うねりの高い洋上での水上機運用であったために、収容困難のため破棄された水上機が2機も出た。

このことから、近海防衛艦隊司令部はより積極的に空母保有へと動き出すこととなる。

また昼間の潜水艦攻撃を封じた航空機も、この時代は夜に飛ぶのは困難だった。飛行艇程度の多座機だったらなんとかあったかもしれないが、小型水上機ではお手上げであった。

そのため山口は、夜間の見張りを多くするとともに低速での航行を生かして水中聴音器と探信儀を積極的に活用した。聴音器はともかく、探信儀を使うのは敵に位置を報せる可能性があった。それでも、山口は先に敵潜水艦を見つける可能性を大きくしようとしたのである。

この行動は後に賛否両論の意見を醸し出すこととなるが、この時の場合は吉とでた。出港2日目の夜半、護衛駆逐艦の1隻が敵潜水艦らしく推進器音を探知したのである。

さっそく山口は全艦船に警戒を促すとともに、敵がこれまで探ってきた群狼戦術を考慮して他の護衛艦にも潜水艦を探知した艦がないかを問い合わせた。

すると別の護衛駆逐艦からも、潜水艦らしき物を探知したという報告が帰ってきた。

山口はそれに対して、まず座乗の護衛巡洋艦「天龍」と2隻の「神風」級護衛駆逐艦を艦隊から分離した。そして残る船団と駆逐艦には、速力の出来る限りの増速による現海域からの離脱と対潜航行を行うよう命令した。

一方中国潜水艦たちからしてみれば、比較的早い段階で発見され、目標の輸送船団が大きく針路を変更したために、攻撃のやり直しを求められる事態となっていた。山口の策の第一段階は成功を収めたのである。ただし、未だ攻撃を諦めたわけではなく、一部の艦は新たな射点につこうと動いた。

しかし山口は、さらに探信音を打ち鳴らして中国潜水艦を威嚇した。自分の攻撃される可能性を高める行為ではあるが、その一方で中国潜水艦の戦意を砕こうと試みていた。この考えは図にあたり、未熟な中国人艦長に率いられた2隻は戦線を離脱してしまった。ちなみにこの時群狼戦術を仕掛けようとしたのは計3隻である。

残る1隻はドイツ人顧問が艦長を務めていた。このドイツ人オットー中佐は第一次大戦末期にUボートに乗り込んだ経験があるベテランであった。

彼は他の2隻が離脱するのを尻目に、なんとか輸送船団への再攻撃を試みようとした。敵駆逐艦が増速してこちらに向かってくる間は聴音器も探信儀も捕まえにくくなることを承知した上での策であった。

一方の山口も、機関兵にとってかなり迷惑なことであつたが、増速と減速を繰り返して敵潜水艦を捉えようとした。夜間では敵が水上に突き出す潜望鏡を発見するのは至難の業である。聴音器と探信儀を上手く使いこなす以外にないと彼は考えたのだ。

こうなると、潜水艦が輸送船団への射点へとつくか、駆逐艦の探知が早いかのレースとなつた。どちら共に息の詰まる対決である。

そして最終的にそのレースを制したのは、日本の護衛駆逐艦「春風」であつた。同艦のソナー兵が前方に微かではあるが、潜水艦の推進器音を探知したのである。

「春風」艦長の大河内少佐は直ちに爆雷による攻撃開始を命令した。同艦に搭載されている爆雷は定数では60個であつたが、実際は艦長側が念を入れて68個積ませていた。そして1回の攻撃で投射機から2個、投下軌条から6個近い爆雷を投下出来た。

「攻撃始め!!」

命令が発令されるとともに、爆雷班の将兵たちが一斉に爆雷を真つ暗な海中へと叩き込んだ。投下されたそれらは、調停されていた30～50mの深度まで潜ると、水圧によって一斉に起爆した。

深夜の東シナ海に何本もの水柱が立ち上つた。その光景をみた乗員たちは、敵潜水艦の撃沈を期待するが、下手な鉄砲数撃ちや当たる式の兵器である爆雷は爆発の見かけこそ派手だが、命中率は極めて低い。場合によっては敵のいない水中に叩き込んでいる時のほうがむしろ多いくらいだ。

「戦果確認!!」

見張りの兵士たちは、敵潜水艦を撃沈した痕跡がないか目を皿にして海上を見た。潜水艦が撃沈されれば、艦の破片や燃料の重油、乗員の死体などが浮かび上がってくる。

だが結局それらしい痕跡は、周りが闇ということもあり発見できなかった。

その後「春風」はさらに数個の爆雷を付近水中に投下し、さらに「天龍」ともう1隻の駆逐艦も威嚇目的で爆雷を投下した。だが結局、確実の戦果と呼べるものを挙げることは出来なかった。ただし敵潜水艦の推進器音が消失したため、山口は深追いは禁物として輸送船団への合流を命じた。

その後輸送船団は、敵潜水艦の襲撃を受けることなく、無事上海の港に到着し、陸軍部隊への補給物資を陸揚げすることに成功した。

ちなみに、実際の所の戦果はオートー乗り組みの潜水艦「鯨7号」に若干の損害を与えたのみだった。しかしながら同艦はその後駆逐艦の行動により攻撃を中止せざるを得ず、ひとまず「春風」らの行動は無駄とならなかった。

そして復路も山口の艦隊は輸送船7隻を護衛したが、この時は中国潜水艦と遭遇することなく、目的地の佐世保へと寄港している。

この作戦によって敵潜水艦制圧の難しさを改めて悟った山口は、早速報告書と共に意見具申書を書き上げて近海防衛艦隊司令部に提出している。

この意見書を元に、近海防衛艦隊は以下の指針をまとめた。

1より一層の対潜用航空部隊の忠実。 2 敵潜水艦への効果的な新兵器の開発。(前投式兵器の開発。) 3 水中聴音器の改良。 4 夜間見張り能力の強化。(電探の整備) 5 新型対潜艦艇の早期配備

これらの方針はさらに杉下中将の手から上申され、幾つかは早速実行に移されることとなる。しかしながら、一方でまたも問題が生ずることとなる。

日中戦争 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日中戦争 5

日中戦争は泥沼へと陥りつつあった。陸軍は近海防衛艦隊の護衛を受けて揚陸に成功した物資を背景に、南京の直ぐ側まで侵攻した。しかしそこまでだった。蒋介石軍もよく反撃し、特に米独ソから迎え入れた軍事顧問らの指導を受けた部隊は高い戦闘力を誇った。

日本側の進撃は思うように行かず、一行に終わる気配さえ見えず犠牲だけがダラダラと増えていくことに国民の不満は募り、さらに「君臨すれども統治せず」の原則に従って政治には基本的に干渉しない昭和天皇までもが、軍に対する苦言を漏らす始末であった。

この世界でも満州事変や2・26事件は発生してはいた。しかし第一次大戦時に陸海軍とも打撃を負ったせいとその膨張の勢いは鈍い。さらに第一次大戦の戦訓から国際世論からの目を気にする傾向にあった。

そのような理由もあって中国戦線においても無茶は出来ず、八方塞の状況に陥りつつあった。

海軍にしても、中国潜水艦や中国空軍の予想外の奮戦によって空母や戦艦、陸攻と言った主力兵器に被害が出ている。本来海軍の仮想敵はアメリカであり、中国での戦力損耗は望むものではない。むしろ嫌である。

さらに両軍ともに、そんな状況であるから議会や予算審議でも苦しい立場に追い込まれることとなった。正式な戦争でないこともあり、被害と併せて議員や国民からの突き上げも厳しくなる。

一方対峙する中国側も日本軍に対して善戦しているものの、蒋介石としては毛沢東率いる共産党と決着を付けるほうに専念したいと言うのが本音だった。確かに海軍を整備する等日本海軍に対抗する動きは見せていたが、それにしたって彼からしてみれば牽制程度の役割を期待していたに過ぎない。日本海軍に予想外の一泡を吹かせたのだから充分すぎる成果を挙げていると言えた。だから、これ以上被害が広がるのは本意ではなかった。

それに加えて、この時期中国軍に軍事顧問を送り込んでいた国の内ドイツとソ連は引き上げる以降を伝えていた。これは、ドイツはナチス党率いる政府がいよいよ本格的なヨーロッパ侵攻を想定していたから。ソ連はそれに対抗することと、日本軍に対抗する必要性が生じていたからだ。

残るアメリカだけが便りとなるが、基本的に他国の戦争には首を突っ込まないモンロー主義を貫いている同国にあつては、大統領の考えはともかくとして世論を気にしている限りは援助が増える可能性は低かった。

そう言う訳で、戦争が始まって一年半が経った昭和14年初頭には両軍とも戦争を止めたかった。これ以上続けても何の実入りもないからだ。

そして最終的に日本側に講和を決定させる主要因となったのが、モンゴルと満州国国境における日ソの武力衝突であった。この前年には朝鮮との国境地帯の張鼓峰で小競り合いが起きていたが、この時起きたノモンハン事件はそれ以上の規模の紛争となり、陸軍としては中国戦線に送った部隊を引き上げる必要に迫られた。

そう言う訳で、昭和14年6月に日本と中華民国の講和会議が開

かれた。今回の戦争では、日本側が中国大陸へと侵攻したという形になっていたが、その発端である盧溝橋事件の発砲については未だ不明であった。案の定日中とも相手国のせいにしたため、講和会議は初っ端から纏れてしまった。

そこで諸外国が仲介役と講和会議妨害役として暗躍した。この内仲介役は中国における共産党の躍進や、中国の安定化を願う独英仏の3国であった。

ドイツにしてみれば中国は食料供給国（ただし、翌年3月にはその態勢が崩れる）であり、日中戦争の長期化で共産党が漁夫の利をとる事態を懸念した。また、英仏は海外の租界排除を訴える蒋介石が、戦争に乗じて一気にそれを行わないか心配した。故に両国は日本側に有利な条件で講和が成立するよう工作した。

一方会議妨害派に立ったのは米ソで、米国はここで日本の国力を衰えさせ、さらに蒋介石への援助を通じて中国の自国市場化を行う上で戦争の継続を望んでいた。ソ連の場合は、日中戦争が続くことで、日本の満州や北方守備戦力が減ることを望んでいた。

後に暗黒戦争言われる各国の裏工作が始まった。日中双方の外交官や政府関係者に接触し、講和と戦争の継続を訴えた。しかしながら、心情的に日中とも講和に傾いているのであるから、有利になったのは講和斡旋国であった。

講和妨害派の中国への援助を増やすことで、中国側からの講和会議破綻を画策したが、独英仏はそれを上回る援助を提示して講和へと傾かせた。このせいでドイツはポーランドへの侵略を半年間延期したほどだ。もっともそのお陰で低性能な兵器を大分入れ替えられ、さらにはユダヤ人が国外脱出する時間が稼げたのだから皮肉といえ

る。

日本に対しても、自分たちの租界や植民地を守る意味から、中国に対して北京や上海への兵力駐在を継続出来るよう斡旋すると提示して、日本側からの講和推進を促した。

最終的に開戦からちょうど2年経った7月7日、南京において講和条約が調印された。この条約で中国側は盧溝橋事件発砲の真相解明と、日本側の進撃（侵略をこう言い換えた）行為による被害賠償を日本側に問わず、さらに北京や上海租界のために兵力を戦前と同じく駐屯して良いことを認めた。

一方日本側は盧溝橋事件後に独断専行した部隊の責任者の責任を追及し、中国国民に対して謝罪を表明。さらに以後国民党の共産党との内戦に対して支援を表明した。つまりは兵器の提供や軍事顧問の派遣であった。

昨日までの敵と戦えるのかと思えなくもないが、厳しい戦場においてはそんなこと言っていられない。現にこの年後半から日本軍より派遣された軍事顧問団は、中国軍と肩を並べて戦っている。人間利害が一致すれば、昨日の敵も今日の友であった。

ちなみに日本側では開戦時に中国派遣軍司令官や陸軍大臣、参謀総長であった人間の首が軒並み飛ぶこととなった。自軍が他国の領土を侵したと認定した以上、生贄が必要だったのだ。もっとも、これは対中強硬派や前線部隊にずるずる引きずられる中央の将官達を排除する意味では好都合だった。また当然だが国際法違反や陸軍刑法違反者も厳しく断罪された。

海軍でもそうした犯罪者や、中国軍の戦力を甘く見たゆえに被害

を拡大させた人間の首が飛んだ。

一方近海防衛艦隊は辛い通商路保護任務から解放されると共に、今回の戦訓を生かしての新しい軍備計画を促進した。（前話参照）

この内航空部隊の拡充については、今戦争における航空戦力の大活躍から他部隊とともに拡張され、新たに基地航空隊には新鋭の97式2号艦攻や96式艦戦、水上機部隊や飛行艇部隊には95式水偵や99式飛行艇も配備され、戦力・士気ともに大いに高まった。

また艦艇についても、二等駆逐艦改造艦を中心として旧式艦や小型艦の能力不足が顕著となったこともあり、新鋭海防艦の建造がなお一層促進されることとなった。

航空機と艦艇のみならず、水中聴音器の改良も促進され、後に1式聴音器と探信儀が開発されることとなる。

しかしながら、問題も発生した。特に新たに近海防衛艦隊司令長官に就いた山口少将が望んだ電波兵器については、未だ無理解な人間が多い故に開発が遅れた。所謂「闇夜の提灯論」が彼らの前に立ちはだかったのだ。この問題はヨーロッパでの戦争が始まり、バトル・オブ・ブリテンが起きるまで待たなければならなかった。

また対潜兵器の開発も、爆雷の改良は進んだが敵潜水艦を効率的に攻撃する兵器の開発は中々進まなかった。これについても1年後に英国より日本の対潜戦術と日中戦争の教訓を学ぶために派遣されたアイカシア海軍少佐が、前投兵器のアイデアを言うまで待たなければならなかった。

日中戦争 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ノモンハンの裏 1

昭和14年に発生したノモンハン事件は、事実上の戦争だった。モンゴルと満州国の国境線において繰り広げられたこの事件で、日ソ両軍は持ちえる限りの戦力を展開して戦った。

日本陸軍としては、第一次大戦以後進めてきた近代化を、中国戦線に続いて試す良い機会と言えた。特に中国戦線ではその運用を限定された戦車部隊や機械化部隊が、平原と言う戦場ゆえに最大限の力を発揮できると期待された。

一方ソ連からしてみれば、ヨーロッパでの戦争を前にしてアジアの大国である大日本帝国を牽制するとともに、革命以来多くの犠牲の上に建設してきた軍隊の力を試す機会といえた。

そしてこの戦闘には海軍も参加した。本来陸上であり、しかも関東軍の総本山である満州国に海軍が出張する必要等ないとも思えるが、この時期本格的な産出が始まった大慶油田の戦略的意味と、今後ソ連の満州侵攻の意図を挫く上で出兵計画が持ち上がり、実行へと移された。

この戦いは日中戦争以上に新兵器が多用された。陸軍は中国戦線での教訓から配備を急いだ97式戦闘機を全戦闘飛行隊に配置し、さらにはやり採用されたばかりの97式重爆や97式軽爆と言った新鋭機を惜しみなく投入した。また航空兵器のみならず、戦車も88式中戦車や94式軽戦車、96式軽戦車と言った陸軍の保有する全ての形式の戦車が投入された。

この内96式軽戦車については、中国戦線で起きた独ソ米戦車と

の戦闘の戦訓を得て47mm長砲身砲を装備した2型が数両投入されている。

海軍も96式艦戦や96式陸攻、97式艦攻と言った既存機のみならず、新鋭の99式艦爆やようやく先行量産が開始された11試艦上戦闘機を投入した。

戦闘が始まると、日本陸海軍はソ連軍に対して少しばかりではあったが優位に立った。敵側から見下ろされる位置に布陣せざるを得ず、さらに満を持して投入した戦車や大砲がソ連軍に性能的に拮抗、または劣っており、数については大きく引き離されてはいた。しかしながら、航空兵力について大きく優位に立っており、何よりパイロットの多くが休養を終えた中国戦線帰りというのもプラスに働いた。

ソ連軍も数の上で日本軍に対抗できる数の機体を揃えはしたが、性能的に劣っている機体が多く、さらには自信を持って投入した高速爆撃機SB3までもが相次いで撃墜される自体となった。

こうして航空優勢を確保した日本陸海軍航空隊は、地上で日本軍を圧倒するソ連軍陸上部隊に襲い掛かった。97式重爆や96式陸攻は戦線後方の飛行場へと爆撃を行い、また単発攻撃機群は前線への支援爆撃を続けた。中でも99式艦爆による急降下爆撃は、その精密さと深い降下角度からソ連兵の度肝を抜いた。

本来なら日本軍を圧倒できるはずの戦車や大砲が、こうした爆撃で相次いで失われソ連軍は陸上戦でも苦戦を強いられた。

しかしながら、日本側はこの優位を有効に活用できなかった。中国での戦争の後遺症から、十分な予備兵力がないために進撃のため

らなければならなかったからだ。

最終的にこのノモンハン事件は、実に1年近い長期戦となったが、日本側が陸攻によってシベリア鉄道を爆撃し、ソ連に対して本気で戦争を仕掛けるつもりのようにアピールしたことで、翌年3月にドイツがポーランドへと攻め込んだことで、日本側の優位な条件で停戦条約が結ばれることとなった。

そしてこのノモンハン事件の影に隠れる形で、日ソ両軍は軍事衝突を北の海で繰り広げた。思わぬノモンハンでの苦戦を知らされたソ連のスターリンは、日本を牽制するためにウラジオストクに本拠地を置くソ連太平洋艦隊に出撃を命じた。

スターリンとしてはもちろん日本と本格的な戦争を構えるつもりなどなかったが、いずれ衝突する可能性が高いだけに、ここでガツンと一撃を加えておきたかった。それに加えて、千島や樺太方面で軍を動かすことによって日本から何らかの譲歩を引きだせられるのなら、それこそ願ったり適ったりであった。

ドイツのヒトラーもそうだが、スターリンも軍事力を背景にした恫喝、すなわち砲艦外交が好きかはともかくとして、よくした。バルト3国やフィンランドがその良い例である。

もともとフィンランドについては、ノモンハン戦で大きく戦力を削がれていた時に同時進行したため、勝ちこそしたが戦死者実に20万人という大火傷を負ってしまった。このあたり、ほぼ無傷で進めたヒトラーとは対照的と言えるよう。

そんな感じで独裁者の指示の元進められた日本海とオホーツク海、さらに北太平洋でのソ連艦隊の行動は当然日本海軍を刺激せずには

置かなかった。この時期ソ連太平洋艦隊の水上戦力は戦艦、空母もない旧式巡洋艦1隻、巡洋艦3隻、大型駆逐艦5隻を保有しているに過ぎず、その主力は中小型駆逐艦と海防艦、掃海艇、機雷敷設艇、魚雷艇であり日本海軍の脅威とはなり得なかった。そのためこれら艦艇は単独もしくは2〜3隻で国境線付近に現れるに過ぎなかった。

またそれらを支援する空海軍航空隊の機体も、ノモンハンに主力が派遣されている関係上、やはり不活発な活動に終始した。

こうした水上・航空戦力の少なさについてはスターリンもよくわかっていた。しかしながら、彼が期待したのはそれらではなく、長年ドイツとの協力関係で作り上げた潜水艦隊であった。

この時点ウラジオストクやナホトカと言ったソ連の太平洋方面にある港へ配置されていた潜水艦は、全てのタイプ合わせて凡そ80隻に上っていた。

スターリンは日中戦争で中国海軍潜水艦に苦戦した日本海軍を見て、潜水艦隊を大きく増強していたのである。また少人数で扱えることや隠密性、さらにウラジオストクのような港でも小型なら建造可能という点も、ソ連にとっては魅力だった。

そう言う訳で、ソ連太平洋艦隊は保有する潜水艦の内稼動する艦艇のほとんどを千島・オホーツク・日本海へと出撃させ日本海軍艦艇を狙った。

この報告を受けた日本海軍上層部は大きなショックを受けると共に、日中戦争の悪夢を絶対に繰り返させないという強い意志を持って各部隊へソ連潜水艦狩りを命令した。

ちなみに、この半年ほど続くこととなる日ソ両海軍の死闘は両国国民のほとんど預かり知らぬ物となった。原因は双方ともに不正規な戦争状態であることをよく理解しており、下手な情報公開が即正規戦争に繋がる可能性を懸念したからである。だから例え知ったとしても、口に出さないことをよく心得ていた。

また日中戦争と違ってソ連潜水艦が日本の商船を狙わなかったことも、それにプラスした。流石にこれをしてしまうと全面戦争ばかりか、国際的非難を浴びかねなかった。現にこの期間中、日満航路の貨客船がソ連潜水艦の誤認によって魚雷を喰らい、大破する事件が発生するが、ソ連はすぐに関係者の処罰と謝罪、さらには慰謝料の支払いを発表している。

こうして行われた日ソ海戦の矢面に立ったのは、日本海を長年防衛してきた近海防衛艦隊であった。創設されて5年目、実戦も経験し海防艦をはじめとする新鋭艦艇も続々と竣工していた近海防衛艦隊は高い士気の元でこの戦いへと望んだ。

対馬・門司・舞鶴・新潟・大湊・清津・大湊・函館・大泊・択捉等の港に駐屯する近海防衛艦隊所属の巡視隊（海防艦や駆逐艦を最小単位1〜2隻で運用する部隊）はソ連潜水艦出撃の報を受けると、錨を揚げて出撃していった。

海戦初期、近海防衛艦隊司令部は名古屋（海軍の有力な水上部隊がないことを危惧した地元の有力者たちの強力なプッシュがあった）に設置されていたが、この時は新潟に臨時司令部を置き、司令官の山口中将もそっちに移動して陣頭指揮を執った。

ノモンハンの裏 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ノモンハンの裏 2

昭和14年12月、まさに文字通り冬の日本海とオホーツク海で近海防衛艦隊とソ連太平洋艦隊潜水艦部隊との死闘は幕を開いた。

ドイツやイタリアからの技術供与で建造されたソ連潜水艦は、ウラジオストクやナホトカより出撃すると、日本海を航行する日本海軍の艦艇に攻撃を開始した。

この戦闘で最初の犠牲となったのが、掃海艇7号であった。同艇は北千島の占守島近海でソ連海軍が仕掛けた可能性のある機雷除去を行っていた。近海防衛艦隊に所属している同艦であったが、この時掃海作業のため停止しており、さらに島近かったため聴音器も降ろしていなかった。そこへソ連潜水艦の襲撃を受けた。

ソ連海軍の潜水艦は魚雷を一挙に同時発射せず、1本1本を別々に発射するという少しばかり珍妙にして効率の悪い戦い方を採用していた。そのためこの時も掃海艇7号に命中した魚雷は1本だけであつた。しかし1000tもない小型艇にはそれで充分であり、同艇はなんとか島の岸に座礁して沈没を防いだが、結局損傷が酷く全損となつてしまった。

ソ連海軍は第一ラウンドで先制点を加えたわけだ。しかしながら、沈められた側の日本海軍はただやられるに甘んじるわけも無く、すぐにその報復を開始した。

まず択捉島と幌筈島配備の巡視隊に所属する海防艦4隻と護衛駆逐艦2隻が現場海域に急行した。さらに天候的には恵まれていないにも関わらず、占守島の片岡飛行場から94式艦爆2機と96式艦

攻2機がそれぞれ対潜爆弾を吊るして出撃している。

航空隊は現場が目と鼻の先ということもあり、掃海艇より救難信号が発せられた30分後には現場海域の捜索に入っていた。

そして15分後に1機がそれらしい黒い影を捉えた。まだ磁気探知機もソノ・ブイもないから便りになるのは搭乗員の視力だけで、宛になるとは言い切れなかったが、それでも彼らはわずかな可能性にかけて対潜爆弾を投下した。

これについては有効な打撃を与えられたかはわからなかった。しかしながら、彼らが攻撃した海中には確かにソ連潜水艦がいた。そしてその潜水艦の艦長には実戦経験がなく、訓練も不足していた。

そのためソ連潜水艦はエンジンを全開にしてその海域からの離脱を図った。しかしながら、それは逆に言えば機関が発する音を通常より大きくしていると言えた。そうになると、敵に見えやすくなるし、自艦の聴音器が音を聞き取りにくくなる。

そんな所へ、幌筈から出港した2隻の海防艦がやってきたのだから最悪のタイミングといえた。潜水艦が幾らがんばって走っても、水中では15ノットも出ない。しかもシユノーケルもなく、電池の能力が低いこの時代は2時間潜っていられるかだった。

「目標と思しき敵潜水艦の推進器音探知!!」

追跡していた海防艦の内の1隻「日間賀」の艦長時雨沢恵二大尉はただちに攻撃へと移った。

「対潜戦闘用意!!爆雷投射準備!!」

彼が率いる海防艦は旧式化した二等駆逐艦の代替用に建造された「占守」型に引き続いて建造された「澎湖」型であった。排水量980t、速力25ノット、武装は10cm単装高角砲3門、25mm連装機銃5基、爆雷80個という強力な護衛艦であった。10cm砲は後に「秋月」型に搭載される98式高角砲の試作型であった。

近海防衛艦隊では戦時の船団護衛以外でも、平時には国境警備や海難救助をその任務としている。そのためこれまで沿岸警備隊に類する組織がなかった日本において、近海防衛艦隊の任務は非常に地味ではあるが重要なものとなった。

ちなみにこの数年後、大きく成長した近海防衛艦隊の所属を巡って海軍省、通信省、内務省が激しい議論を交わすこととなり、結果近海防衛艦隊は海軍省下の海上保安庁へと再編されることとなる。

閑話休題。

「日間賀」は僚艦である「篠」とともに全速で遁走を図るソ連潜水艦に対して容赦ない爆雷攻撃を開始した。以前にも紹介したが、爆雷は見た目の派手さ割に敵に被害を与えることが難しい兵器である。そのため時雨沢と「篠」艦長の鷹見一大尉はとにかく多数の爆雷を付近一帯に叩き込んだ。

これに対してソ連潜水艦はなんとか脱出を図ったが、連続する爆雷の炸裂は乗員の肝を冷やし、さらに悪いことに電池が急速に消耗していたため速度を落とさざるを得なくなった。そこで艦長は一端停止してやり過ぎそうとした。

しかしながらその動きは逆に徒となった。聴音器はそれで騙せて

も、探信儀は騙せないからだ。当然のごとく2隻の探信儀にソ連潜水艦は捕捉され、さらなる爆雷攻撃を受けることとなった。

そして遂に1発が機関室に火災を発生させ、さらに電池の何個かを架台から落してしまい、浸水によって有毒ガスを発生させた。もうこうなると潜行の継続等不可能である。やむなくソ連潜水艦は浮上を余儀なくされた。

浮上したソ連潜水艦に対して、2隻は主砲による砲撃を準備していたが、浮上して直ぐ乗員が脱出する姿を見てそれは不要だと直ぐに悟った。

「救助用意！！」

潜水艦の乗員たちが海に飛び込む姿を確認した時雨沢は直ぐに力ツターを下ろして救助を開始した。冬のオホーツク海では早くしないと死んでしまうからだ。もちろん、救助するほうも高い波浪の中であるから危険であるが、そんなことに構ってはいられない。

2隻は搭載のカッターを降ろすだけではなく、舷側には縄梯子を垂らし、さらに竹ざお等を使って泳いでいるソ連兵を救助した。

その間にソ連潜水艦は一度爆発を起こすと船体を2つに割り、ブクブクと泡を出してオホーツク海へと沈んでいった。どうやら火災が魚雷か弾薬に引火してしまったようだった。

こうして2隻の海防艦は、見事撃沈された掃海艇の仇を討ったのであった。2隻は合計30名あまりのソ連兵士を救助すると、幌筵へと引き返した。

この千島東方における戦闘は、日本海軍近海防衛艦隊とソ連海軍太平洋艦隊潜水艦部隊との短期間だが、激しい死闘の序章に過ぎなかった。

近海防衛艦隊は性能的にはパツとしないが、神出鬼没の攻撃を繰り返すソ連潜水艦隊に大いに手を焼くこととなった。民間船舶や本土が攻撃を受けるようなことそなかったが、連合艦隊所属の巡洋艦「摩耶」が大湊近海で被雷するなど、最終的に撃沈された艦艇は連合艦隊、近海防衛艦隊合わせて駆逐艦5、海防艦2、その他の小艦艇4に登った。

海防艦より駆逐艦の損害が大きかったのは、駆逐艦の多くが対潜装備で劣る旧式艦であったからだ。また撃破された艦艇も10隻以上に登った。

それに対してソ連海軍もかなりの損害を負っていた。水上艦の損失こそ、日本海軍の潜水艦がウラジオ沖で撃沈した駆逐艦とフリゲートがそれぞれ1隻ずつであったが、潜水艦はなんと30隻あまりを撃沈され、5隻が帰還後破棄という大損害を負っていた。

もはやここまで来ると本当の戦争に近いが、結局のところこの戦いも昭和15年3月にドイツ軍のポーランド侵攻に合わせてノモンハン事件が一応の決着を見た時に終了した。もちろん、あくまで国境周辺での武力衝突に過ぎない形で双方は処理している。

この戦闘で、日本海軍は中国海軍に引き続いて対潜水艦戦闘の貴重な経験を学ぶことが出来た。一方ソ連海軍も大火傷を負ったが、自軍の潜水艦戦備の遅れや、改めて日本海軍の実力の高さを認識したのであった。

ノモンハンの裏 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ノモンハンの裏 3

日ソの軍事衝突はそれこそ唐突に終わることとなった。原因はヨーロッパでついに戦火が勃発したからである。昭和15年3月、ナチス・ドイツがポーランドへ侵攻、それに対して英仏はポーランドに味方してドイツに宣戦布告。さらにソ連がドイツと密約を結んでポーランドへと雪崩れ込んだ。

もはやアジアでの軍事紛争どころではなくなったソ連は、仕方が無く満蒙国境を満州（日本）側が唱えていた位置で固定することで合意し、休戦協定が結ばれた。

ノモンハン事件の終結は、その裏で行われていた近海防衛艦隊とソ連潜水艦隊との死闘が終わることも意味し、双方共にかかりの被害を負いながらも、取り敢えず全面戦争に発展することだけは防げた。

近海防衛艦隊では日中戦争に続いて、貴重な対潜戦闘の戦訓を積むことができたのは本当に幸運なことであった。

この戦闘から日本海軍では、近海防衛艦隊の規模拡張と海防艦を始めとする艦艇の増強が、より急ピッチで進められることとなった。これまでは本土の日本海側や北千島方面の巡視隊が増強されていたが、相次ぐ潜水艦の脅威を見せられたこと、また巡視隊を置くことは国民からの受けも良いことから計画が拡大された。

ちなみに国民の受けがよいと言うのは、巡視隊だと小型艦ばかりであることからこれまでは海軍艦艇が姿を見せることさえなかった漁港にも配備されることとなり、さらに救難任務を行うことから連

合艦隊などより親しみを持たれたことに起因する。海軍省も、海防艦であれば軍機も少ないことから、1年1回程度体験航海や一般公開を行って、海軍の存在をアピールした。

結果、それまで報告号や愛国号という名目で航空機や戦車が募金により購入されることがあったが、この時期には村や町、県と言った大きな単位で海防艦建造や巡視隊配備の予算を補填する動きまで出てきた。

また巡視隊拡大の動きはかなり早いペースで進んだ。それは計画の中心である護衛駆逐艦や海防艦がいずれも1〜2年という短期間で建造可能な小型艦であり、予算もそう大して食わない。何より小規模な港でも建造可能と来ているから、日本だけでなく台湾や朝鮮、遼東半島等の造船所でも建造が推進された。

これによって連合艦隊が進めていた建造計画を阻害することなく、近海防衛艦隊の拡張を行えた。またこれらの計画の中には、満州海軍やタイ向けの輸出艦艇の建造計画も含まれていた。

対する連合艦隊はこの時期日中戦争の戦訓を鑑みて、建造計画の大幅な見直しをしていた。それまでの大艦巨砲主義は鳴りを潜めて、大きく刷新されていた。

まず大艦巨砲型の戦艦は航空機や潜水艦の性能向上から価値が下がっているため新規建造は「大和」級2隻で打ち止めとなり、代わりに高速護衛艦として使える「奥羽」級巡洋戦艦6隻と、「大鳳」級装甲空母2隻、「翔鶴」級高速空母2隻の建造が決まった。

貧乏国日本としては随分と大きな計画であるが、これには近海防衛艦隊が一役買っていた。実は近海防衛艦隊用にこれまで建造され

てきた艦艇では電気溶接の技術が実験目的で多用された。海防艦や駆逐艦と言った小型艦ばかりであったが、その経験は戦艦、空母にも如何なく生かされ、それぞれ建造期間、費用をそれまでの艦艇よりも圧縮することができた。

もちろん、こうした新鋭艦艇の配備は旧式艦の退役を促進することとなる。予定では「金剛」級戦艦3隻と「山城」型の「山城」、と「扶桑」型の「扶桑」が老朽化と陳腐化を理由に退役する予定であった。

空母に関しても軽空母の「鳳翔」が練習空母は格下げとなり、軽空母「龍嬢」は近海防衛艦隊に移管されることとなった。ようやく予てから求めていた空母を、たった1隻ではあるが近海防衛艦隊は手に入れた。同艦は対潜戦闘における空母の活用を研究する上で、無視できない様々なデータや経験を近海防衛艦隊に提供することとなる。

戦艦、空母以外にも重巡では「最上」級の改良型であり、対空戦闘能力を引き上げた「伊吹」級4隻の建造が計画されており、軽巡も「阿賀野」級と「大淀」級の建造が開始されて一部は完成間近であった。

これに伴い近海防衛艦隊では、完全に型落ちとなった「天龍」級護衛軽巡洋艦の退役が決まり、代わりに「球磨」級2隻と「夕張」が改装の上での配備が決まった。予算が増えたとは言え、護衛巡洋艦を新規で造ってくれるほど、日本に余裕はなかった。

駆逐艦については、高速の「島風」級の建造が計画されていたが、量産性能が乏しいことから建造中止となり、「秋月」型と「夕雲」型の建造が進められることとなった。金秋防衛艦隊の方は、旧式化

した二等駆逐艦は海防艦へと代替となり、一等駆逐艦の方は特型の初期型が改装されて配備されたのを除けば、全て1200t級の「松」型護衛駆逐艦に代替されることとなった。

航空戦力については、新たに開発された96式対潜哨戒機が配備された。これは96式陸攻の改造機で、対潜戦闘用に特化した機体であった。ただし居住性能が劣悪であることから、繋ぎの機体として見られており、2年後には渡辺鉄工所製の「東海」対潜哨戒機が開発されている。

しかしながら、こうした戦力の大幅な増強にも関わらず近海防衛艦隊は苦しい状況にまたも置かれることとなった。

第二次世界大戦が始まると、ドイツは瞬く間にポーランドを占領した。中国への軍事援助のため半年間宣戦布告を延期したドイツであったが、その間に新型戦車や新型航空機の配備を促進させており、さらに海軍もUボートや水上艦艇を増強させていた。

ポーランドも戦車や航空機を幾らか更新していたが、本気であるドイツとは差がつきすぎていた。本気でやったドイツの前に局所的な勝利こそ得られたが、結局国を守ることは出来ず、ポーランドは滅亡した。

それに対して、フランスとイギリスは有効な策を打てなかった。特にフランスは、軍の更新が半年遅れの宣戦布告となったこの時になってもほとんど進んでいなかった。アメリカ製の援助機体こそ数

を揃えられていたが、そんな物あくまでその場しのぎであって根本的な解決にはつながらない。

結局フランスもお約束どおり、ドイツに蹂躪される運命にあった。多少奮戦できたが、半年遅れのメリットを思いっきり活用したドイツの前に、そのメリットを1割使えたかどうかのフランスに神様は味方などしない。

そして残るイギリスはというと、半年と言う時間を使って本土防空用のスピットファイア戦闘機を幾らか増やすことが出来たが、結局それが限界であった。

しかもイギリスにとって悪いことに、ドイツ海軍はUボートを半年間でさらに増やしていた。その数合計80隻（外洋活動可能な隻数）。

そのため開戦初っ端からイギリス商船団は叩かれまくることとなった。戦艦や空母で圧倒するロイヤル・ネイビーも相手が海に潜る潜水艦では動きが限定される。もちろん、前大戦の教訓から色々対策を打ったのであるが、それはドイツ海軍も同じことであった。

ドイツ海軍は日中戦争での実戦経験を踏まえて新戦術を多用して、英国を苦しめた。特に日中戦争で経験を積んだ群狼戦術は、たちまち効果を発揮した。英国へ向かう輸送船は独航、船団に関わらず攻撃を受け次々と沈められた。また艦隊までもがこの戦術によって大きな被害を受けた。特に空母「アークロイヤル」を戦わずして撃沈されたのは痛手で、本国艦隊の士気はがた落ちした。

そうした潜水艦の跳梁はドイツ水上艦隊にも有利に働き、数で劣るドイツ艦隊のゲリラ戦を助けることとなる。

英国は焦った。このままではドイツに敗れてしまうと。そこで彼らは対潜戦闘を経験した日本海軍に救援を申し入れた。そればかりでなく、日英同盟を再度締結しての派兵までを頼んできたのであった。

ノモンハンの裏 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次なる戦いへ 1

英国からの再度の同盟締結と反枢軸国としての参戦を日本が打診されたのは、開戦から半年経過した昭和15年9月のことであった。この時点でヒトラーはポーランドをソ連と共に全滅させ、さらにオランダやノルウェーにも触手を伸ばしていた。

英国やフランスはそれらを手をこまねいてみていたわけではなかった。各地に自軍を派遣して、ドイツの攻勢を止めようと必死こいて戦った。しかしながら、ドイツ海軍が貴重な半年間で増強したUボートや水上艦隊は英国海軍やフランス海軍を圧倒せずとも、翻弄した。特に島国英国は第一次大戦と同様通商路を破壊され大きな痛手を負っていた。

このままでは第一次大戦以上の悪夢を見てしまうかもしれないと考えた英国は、極東の大日本帝国に助けを請うた。日本はつい半年前まで格下とはいえ中国やソ連の潜水艦と連続して戦い、英国が20年ばかり遠ざかっていた対潜水艦戦闘のノウハウを蓄えていた。

まず英国はそのノウハウを提供するよう日本側に要請したが、これにかんしては日中戦争講和の斡旋という恩もあり、余程の機密となりえる条項以外、惜しみなく英国に引き渡された。また英国から派遣された将校・技術士官と日本側軍人たちの交流も精力的に行われ、多くの意見が交換された。この際、前投兵器のアイデアが生まれたことは、日英の対潜技術向上に大いに役立った。

しかしながら、英国としてはそれ以上に日本海軍と陸軍の自軍側としての参戦を望んだ。何せ連合艦隊は世界第3位の規模を誇り、もしヨーロッパの海に馳せ参じれば小うるさいドイツ海軍艦隊など

一蹴出来る。少なくとも地中海へ来てくれれば、生意気なイタリア海軍艦隊を撃滅してくれるだろう。

また陸軍も中ソとの戦いで実戦経験充分であり、その保有兵器も自動車化に遅れが目立つ以外は戦車、大砲、銃など全て優秀な兵器を誇っていた。これは第一次世界大戦での戦訓を生かした結果と言えるよう、特に航空機と戦車の進歩は著しい。

この魅力的な戦力を仲間に加えたいと思うのは、苦境の英国としては当然の考えだった。特に有力な同盟国であるフランス軍が予想以上に貧弱であったからだ。もう1つのアメリカは中立を貫いているので、参戦はよっぽどのがないと有り得ない。

だから新たな有力な同盟国として、日本は英国の目に映っていた。

しかしながら、一方の日本からしてみれば英国からの同盟提案はともかく、ヨーロッパへの派兵はしなくなかった。半年前まで戦争（紛争）が続いていたため議会や政府は、新たな戦いを望んではいなかった。また第一次世界大戦でヨーロッパへ派兵して大きな収穫と共に打撃を負ったことも大きかった。

あの時と同じく、再び英国にそそのかされて戦争へ突き進むのか？という気持ちは当然日本人の多くから出た。

もちろん、外交戦術については世界一の能力をもつ英国はそんなこととづくに予想済みであった。彼らはそれ相応の餌を用意していた。

まず自国の植民地や保護国であり、大量の良質な石油を産出する中東地域における石油採掘権の日本企業への無償譲渡を提案してき

た。

これは日本にとって大きなメリットのある提案だった。日本の石油は自国内のわずかな量と満州の油田から出る分を除けば全て外国産だった。満州の油田は量こそ多いが、航空機燃料には向かい重質油であるため、良質な石油がでる中東の油田をわけてもらえるのは嬉しい以外の何物でもない。

またその他にも、インドやマレー半島と言った植民地にあるゴムや錫と言った戦略物資の採取権や採掘権の譲渡まで提示されていた。さらに新型兵器、特に日本では遅れがちだった電波兵器や液冷エンジンの技術の無償譲渡もオマケとして提示された。出血大サービス（特にリーダーに関しては）と言える条件だった。

しかしながら、この時期は植民地という体制に大きな疑問が持たれ始めていた時期でもあり、さらに日本側の猜疑心も大きく、この提案を「はい、わかりました。」と日本政府は飲むことが出来なかった。

せめてドイツの膨張が日本の不利益になることが証明されるか、直接侵攻してくるなら話は別だろうが、友好国と言うだけで再度の同盟締結と参戦と言うのは幾らなんでも説得力不足であった。

英国と対峙するドイツはドイツで日本側の取り込みに動いていた。ドイツは中国潜水艦やソ連軍と戦った日本軍の実力をそれなりに評価していた。

そのためドイツも様々な条件を提示して、同盟国と言わないまでも友好国になつてくれることを望んだ。しかしながら、こちら側はイギリスほど上手く行かなかった。

まずドイツが中国に対して相当な肩入れを行っていたことが日本の心象を悪くしていた。何より、ナチス自身が有色人種を迫害する傾向にあるのだ。

一応普通レベルの付き合いはするが、軍事的な付き合いは深くしないと云うのが日本側の既定路線だった。

そして間もなく、ドイツと日本の中は悪化することとなる。まずロンドン航路を走っていた日本郵船の客船「照国丸」がロンドン出港間もなく、ドイツ潜水艦の攻撃を喰らうという事件が起きた。これはUボートの艦長が「照国丸」を英国船と見誤った結果だった。幸い命中魚雷は1本であり、さらに船員の冷静な対処によって船は沈んでしまったが、乗員・乗客全員が脱出・生還した。

ドイツ政府はただちに陳謝したが、この事件は当然のごとく日本の対独感情を悪化させた。

さらにフランスがドイツの軍門に下った1940年12月、フランスの植民地である仏印にタイが侵攻した。タイ王国はフランスの強引なやり方で領土の一部を失ったことを忘れておらず、本国が負けたこの時、それを取り返すべく動いたのだ。

しかしながら、戦争は翌月になって意外な展開を見せた。フランスは本国から派遣した巡洋艦「コルベール」、「ラモット・ピケ」を活用してタイ海軍を翻弄した。さらになんと、秘密裏にヨーロッパより回航されていたドイツ仮装巡洋艦「コメット」や複数のUボートが仏印軍に加勢していた。

この独仏連合艦隊とタイ艦隊との間で、戦闘が発生。折りしもタ

イ政府から調停役として頼まれていた日本海軍艦隊はその海戦に偶発的に遭遇することとなった。

この時海戦場近海にいたのは、臨時で戦隊を組んでいた連合艦隊所属の巡洋艦「木曾」と近海防衛艦隊高雄基地所属の海防艦2隻であった。

この内海防艦1隻がフランス艦隊の砲撃で大破した。原因はフランス側が海防艦をタイ海軍のスループと見間違えた結果だったが、やられたらやり返すの鉄則の下、日本艦隊は伝家の宝刀である酸素魚雷も使って独仏連合艦隊に反撃し、その結果ドイツ仮装巡洋艦「コメット」が轟沈、その他にフランス海軍艦艇2隻が撃沈されるというマジな戦いとなってしまった。

この結果今度はドイツ国民（ついでにフランス国民）の日本に対する感情が悪化してしまった。特にフランスは日本をタイに味方したとして批判し、ドイツもそれに同調した。

さらにこの直後、在リトアニア領事の杉原千畝領事が6000人のユダヤ人をヨーロッパより脱出させるといふ事態が起きた。また満州では特務機関の樋口少将がドイツのユダヤ政策を批判する講演を行ったため、両国の関係は最悪にまで落ち行った。

こうして一時は近付きかけた両国の関係はほぼ破綻した。ただし、戦争にまではいたらなかったが。

まもなく昭和16年4月にヒトラーはそれまで温めていた対ソ開戦を棚上げして、突如としてその軍を中東へと向けた。さらにソ連もそれに同調して、中央アジアから中東方面へと進撃した。

この少し前バトル・オブ・ブリテンで敗北こそしたが、最終的に英国の工業に大打撃を与えたヒトラーは、ソ連に代わって同様に大量の資源を持つ北アフリカと中東、さらにアジア方面へと触手を伸ばすことに決定したのであった。

そしてこの余波は日本にまで及ぶこととなる。

次なる戦いへ 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次なる戦いへ 2

仏印における日本の行動に共同で反感を持ったのか、フランスは以後ドイツと協調し始めた。特に義勇艦隊として出撃した海軍の地中海艦隊はドイツ軍やイタリア軍に協力して地中海で暴れまわった。

そして1941年4月にはドイツの中東侵攻に併せる形でヴィシー・フランス政府が正式に枢軸国として参戦した。これはフランスで高まっていた対英・対日感情の悪化と言う、ドイツ国民が持ち始めていた共通感情を逆手にとったこと、さらにヒトラーがそれまでの占領政策の大幅な見直しをフランスに確約した結果であった。

これを受けてフランスは海軍のみならず、陸空軍も本格的に参戦した。ソ連へと攻め込まなかったことで余力充分なドイツ軍は、大きな味方を得た形となった。

独仏伊連合軍は地中海における制海・制空権を収めるとそれこそあつと言う間にエジプトを陥落させ、スエズ運河を確保。英国にとられていた伊植民地エチオピアを取り返し、孤立していたマダガスカルへの道を開いた。

マダガスカルが完全に枢軸国の手へと落ちたのは1941年12月のことであつた。これによって英国は本国から喜望峰、インドへと向かう航路に楔を打ち込まれる形となった。

さらに有望な油田地帯である中東地域との交通も完全とまでは行かないまでも、大きく制限を受けることとなった。

さらにドイツが中東へと触手を伸ばす動きを見せると、スターリ

ンのソ連もカスピ海方面から中東地域へ進出する動きを見せた。

もはや英国は風前の灯だった。幸い本国こそ陥落してないが、これはヒトラーが敢えて英国上陸作戦を回避しているからであった。中東やインドからの交通をマヒさせ、物資さえ絶てば英国は自滅するという戦略からだった。

もつとも、実際の所英国人はジョンブル魂を発揮して粘っていた。たとえ中東とアジアからの物資を絶たれても、アメリカやカナダ、オーストラリアから物資が運ばればなんとかなると考えていた。

海軍の艦隊も地中海艦隊を失っていたが、本国艦隊は無事であった。ドイツ海軍が行ったライン演習作戦で巡洋戦艦「フッド」を失い、「プリンス・オブ・ウェールズ」、「ロドネー」大破という被害を受けたが、ドイツ海軍の象徴「ビスマルク」を半年間ドックへ送り込んでいる。

いまだイギリスの戦意は旺盛だった。しかしながら、実際の所戦況が苦しいことに変わりはない。それに加えて、英国として我慢ならないのは中東やアジア地域に共産主義ソ連がドイツの進撃に便乗して進撃してきたことだった。

英国首相チャーチルにとって、確かにヒトラー率いるナチスは厄介な敵であった。しかしながら、ナチスさえいなければドイツは同じ資本主義であるからまだ良いと考えていた。

しかしながら、共産主義で王政も資本主義も否定しているソ連はそれ以上に厄介だと言うのが彼の持論だった。もしソ連が連合国として存在していれば見方も少しは変わったかもしれないが、いまだにソ連はドイツと蜜月状態であった。

しかも忌々しいことに、英国にとって頼りにするはずの米国がソ連に肩入れしていることだった。これはソ連が米国内に潜ませているコミンテルンの力が大きい。彼らはたくみにルーズヴェルトを煽ってソ連への援助を引き出していた。

スターリンとしては、この大戦後の敵は世界最大の資本主義国家アメリカ合衆国と考えていた。そのためその戦略は英独のヨーロッパ2強国を共倒れさせ、その間に中東とアジアの一部を勢力圏に加えて力を蓄えることであつた。また出来ればアジアの強国日本も倒さないまでも衰弱させておきたいので、米国と戦争状態になるようにけしかけていた。

もつとも、いくらニューディール政策の行き詰まりから戦争を望むルーズヴェルト政権にしても、日本へ戦争を仕掛けるだけの口実がなかった。ノモンハン事件やそれに前後した開戦、日中戦争、仏印での紛争等、いずれも非難声明こそ出したが、それ以上の強攻策はイギリスからの強い圧力で出来なかった。またこの時期日本がそれまでの膨張主義を停滞させていることと、満州への経済的門戸解放を行つたのも大きかった。

それに加えて、アメリカの世論は微妙な所だった。もともと海外の戦争に見向きもしない国民性であるから、その大部分は例え世界大戦であつても自分たちが攻撃を受けない限り戦争等もつての他と思つていた。

そうした一方で、ナチスからの迫害を受けているユダヤ人はドイツへの戦争参入を強く望んでいた。これは数的には極少数だが、その影響力は非常に大きい。

ルーズヴェルトは、この戦争に対してどう向き合うか大いに悩む所だった。謀略をけしかけるイギリスとソ連、さらに戦争を望まない国民と望むユダヤ資本。一体どれに耳を貸すべきなのかと。

アメリカと太平洋を挟んで同様に世界大戦に注視しているのが日本であった。この時期日本の政権は穏健派にして協調外交を行う幣原喜重郎が首相であった。

しかし、その彼にしても膨張を続ける独ソは最早協調出来る存在ではなかった。国内では当初こそ、日中戦争とノモンハン事件と続いた戦争から戦争の勃発を望まない声が高まっていたが、次第に独ソに対する脅威論が大きくなっていった。

もつとも、だからと言って日本としても戦争をするだけの理由に欠けていた。直接攻撃を受けたわけではないし、日本の主権を脅かされる事態も起きていない。

その状況が大きく変転したのがマダガスカル島の陥落であった。同島が枢軸の手に落ちたことで、独仏伊艦艇が次々とインド洋へ出沒し始めた。それどころか、一部の艦艇は英国の監視網をすり抜けて、ニューカレドニアにまで進出する始末であった。

これは太平洋への枢軸の進出を予感させ、日米両国の警戒心をアップさせた。この時点で両国は直接の参戦を行わないものの、英国へ対する支援を表明しており、米国は駆逐艦60隻を貸与していた、日本も海防艦や護衛駆逐艦30隻をアジア方面の英国艦隊へ売却していた。

そして年が明けて1942年2月、産油地帯のイラン・イラクがソ連の手に落ちた。またドイツ軍もアラビア半島をほぼ制圧した。

またこの2カ月後にはセイロン島に本拠地を置く英国東洋艦隊が独仏連合艦隊の前に敗れるという衝撃の事態が起きた。

独仏連合艦隊はマルタ島で拿捕した空母「イラストリアス」、仏空母「ベアルン」の航空戦力で軽空母「ハーミス」のみの英艦隊を圧倒したのであった。

ここまで来ると、セイロン島やインドどころかシンガポールにまでドイツ軍が来そうな勢いであった。ソ連軍の侵攻こそ止まったが、ドイツがインドへ触手を伸ばすのは時間の問題だった。ヒトラーはインドの運動家ボースを懐柔して、インド独立にかこつけて進撃する気満々だった。

ことここに至り、日本はようやく重い腰を上げることとなった。ドイツにはこれ以上の侵略行為を停止するよう求めると共に、艦隊の一部を南洋や台湾へと前進させた。

そして1942年6月5日、インドからシンガポールへ向かっていた日本船籍の貨物船が相次いで撃沈されると日本の世論はついに爆発した。1週間後の6月12日に日本は対独宣戦布告を行った。

一方アメリカは少し遅れて8月7日に、やはり大西洋で起きた巡洋艦撃沈を理由にして対独宣戦布告を決断した。

なお、この2つの事件に関しては英国の窮状が限界に達していた時期であったこともあり、後に英国による謀略ではないかと言われることとなる。

日本は直ちに中東への出兵に備えた。もちろんその中には近海防衛艦隊所属の艦艇群もあった。彼らは臨時編成の海上護衛総隊に組

み込まれたのであった。

次なる戦いへ 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 1

1942年4月、唐突に第二次世界大戦に参入した日本であったが、この時点においては対独参戦したのみであったので、直接国境を接するソ連とは緊張しつつも平穏であった。

そのため、戦争状態に入っ たものの日本本土とその周辺は、実際の所至って穏やかであった。

しかし、独伊を始めとする枢軸軍の魔の手は直ぐそこにまで迫っていた。ドイツ軍は英東洋艦隊を撃破すると、そのままセイロン島を攻略する動きを見せた。これは非常にマズイ事態であった。

万が一セイロン島をドイツ側が占領すると、そこを基地としてUボートを始めとするドイツ海軍が一気に南シナ海方面へ攻勢を掛けてくる可能性があるからだ。そうになると、日本の物資輸送は完全とは言わないまでも脅威にさらされるし、また現在は孤立している仏印への連絡ルートを開かれてしまうかもしれない。

仏印はフランスの対英宣戦布告のために孤立こそしていたが、いまだフランスの占領下にあった。これは英国が軍を進めるだけの余裕がなかったからだ。英軍では中東や中央アジア方面への防衛作戦のためにアジア方面の軍から戦力を引き抜かれ、さらにインド兵がドイツの宣伝に感化されて離反する例が相次いでいた。

だからもし、英国が敵のみの状態であり、独伊仏の3国が本気を出せば、インドより先にセイロン島とシンガポール・マレー半島を電撃的に落せたかもしれない。

しかしながら、生憎と独伊仏は陸軍国家であるから、マダガスカルを攻略して、英東洋艦隊を撃破したところで体力切れとなった。いくらソ連に攻めなかったとはいえ、もともと船の数に限りがあるのだから当然と言えば当然の帰結であった。

そのため独仏伊では急ピッチで海軍力の強化に望んでいた。特に水上艦隊においては、英地中海艦隊より拿捕した艦艇を修理し、新造艦も間もなくイタリアの「アキラ」級航空母艦の1番艦「アキラ」が竣工間近であったし、ドイツでも改「グラーフ・ツェッペリン」級の「リリエントール」の建造が着々と進んでいた。

もちろん潜水艦も在来型Uボートや潜水艦の建造を行うと共に、新たにワルター機関を使用した新型潜水艦の建造も進められていた。

ただし、こうした艦艇が竣工し艦隊へ配備されるまでにはまだ時間があった。そのタイミングでの日米両海軍国の参戦は、まさに英国にとって何よりも得がたい物であった。

ドイツとの戦端が開くと、とりあえず日本はタイと協力して目と鼻の先にある仏印インドシナ攻略にかかった。かつて独仏連合海軍との衝突がおきた因縁の地である。

一方2ヶ月遅れで対独宣戦布告したアメリカは、タヒチやニューカレドニアと言った太平洋上に浮かぶフランス領の島々を次々と攻略している。

両箇所とも既に補給を立たれた地点であったが、それでも守備隊は頑強に抵抗している。仏印ではわずかな数の陸空軍が、短期間ではあるが日本軍とタイ軍相手に熾烈な戦闘を繰り広げている。

またニューカレドニアには、少数ではあるが潜水艦と特設巡洋艦が停泊しており、それらが米艦隊相手に反撃を試み、全滅しながらも見事戦艦「アリゾナ」を撃沈している。

ちなみに仏印に関しては、中国軍も本来なら攻めても良かったのであるが、共産党対峙に忙しい同軍は出撃の時期を逸してしまい、蒋介石は地団太を踏んで悔しがらなかった。

さて、仏印を短期間を攻略した日本軍であったが、実際の所仏印を取った所で得るものはない。しかしながら、自由フランス政府にアジアへ派遣する兵力はない。取り敢えず戦争終了まで日本が暫定統治することとなった。ただし、同国では以前よりホーチミンなど独立を志向する人間があり、彼らは当然日本側にも独立を要求した。

かつて日露戦争直後は仏印からの留学生受け入れを断るなど失望の色を見せた日本であったが、実際植民地からの独立と言うのはこの頃急激に熱を持った問題であり無視は出来なかった。現に英国領のエジプトはナチス・ドイツの後押しを受けて独立している。

そこで日本は自由フランス政府に対して、今後の処遇を問うたが、もちろん既得権益を失いたくないフランスの返答はノーであった。

そのため、この問題に関して日本政府は板挟みとなる。ただし、日本の世論としてはドイツの手先であるフランスからの独立を手助けするべきという声がその後高まり、日仏関係に溝を生むこととなる。

それはさておき、とにかく仏印を攻略した日本海軍は、中東を制圧しその後さらに東へと志向するドイツ軍を止めるべく、英国政府

の了解を得て艦隊の一部をシンガポールに前進させ、さらに本土の陸軍部隊では遣印軍の編成を急いだ。

1942年8月にシンガポールへ派遣されたのは、角田中将指揮する航空母艦「赤城」、「天城」と重巡洋艦4隻を主軸とする新編成の第3艦隊であった。第3艦隊は10月初旬にはセイロン島への前進を予定していた。

一方もう1つの部隊がシンガポールへと前進していた。近海防衛艦隊より派遣された新編成の護衛艦隊である。また対潜航空隊1個飛行隊が、マレー半島の英軍より貸与された飛行場へと前進している。

近海防衛艦隊は、戦時には船団護衛や通商路保護任務を行う。今回の派遣も、第3艦隊への補給物資を積む輸送船の護衛や、インド・ビルマ方面から荷を運ぶ日本輸送船の護衛、さらにはベンガル湾における英国輸送船の護衛だった。この時期英東洋艦隊は瀕死の状態にあり、インド沿岸の対潜戦闘も不可能な状況だった。

近海防衛艦隊は本来本土や植民地周辺の沿岸警備任務を行っている。そのため、勢力圏外への派遣は難しいように思える。しかしながら、実際の所はそうではない。

日本の植民地にはミクロネシアを始めとする南洋諸島が存在する。これら島々はそれぞれそれなりの人口を擁し、多くの漁船や貨物船が航行している。そのため平時からそれらの防衛を考える必要もあるから、勢い数も多くなる。例えば、台湾・マリアナ間の航路の台湾側を担当する台東基地に所属している艦艇は、護衛駆逐艦4隻、海防艦16隻、駆潜艇12隻と非常に強力だった。

そしてまた、この戦争は長期戦になる可能性が高いと見た日本海軍では、早速海防艦のマスプロに入っている。

ちなみに、近海防衛艦隊より派遣された部隊は新たに編成された海上護衛艦隊の指揮下に置かれている。その編成は護衛巡洋艦1隻、護衛空母2隻、護衛駆逐艦4隻、海防艦18隻、港湾防衛用の駆潜艇4隻であった。

護衛空母は軽空母「龍嬢」の運用結果を元に開発された艦艇で、商船規格の艦艇であった。平時においても、沿岸警備や救助作業に航空機は素晴らしい威力を発揮する。しかしながら、さすがに20機も30機も航空機を運用する必要などない。せいぜい10機から15機もあれば良い。戦時に船団護衛をするにしても、それくらいで充分と思われた。

そこで造られたのが、商船規格の艦体に簡単な格納庫と飛行甲板を張っただけの護衛空母「白鳥」級である。全長は160mで、排水量は8000tだ。搭載機は16機で、いずれも対潜哨戒用に格落ちした機体だ。しかしながら、英国からカタパルトも供与されているので、最新鋭機も扱える。

航空母艦として新造されたのは3隻のみだが、商船を徴用して急遽8隻の改造が開始されている。これらは準「白鳥」級となる予定だった。この級の特徴はアメリカの護衛空母と同じく、改装工事さえすれば簡単に商船へ戻せることだった。

護衛巡洋艦は連合艦隊より移籍されたこれまでのような5500t級ではなく、練習巡洋艦「鹿島」級を基に開発された「大阪」級、護衛駆逐艦は以前から建造がされている「松」級である

創設されて6年、本格的な海外遠征である。しかも敵は通商破壊の第一人者たるドイツだ。ソ連や中国との戦いが序盤戦であるとなれば、今度こそが本当の戦いの始まりであった。

第二次世界大戦 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 2

1942年9月、仏印方面での作戦を終わらせた日本海軍はインド洋における本格的な作戦を始動させた。その最初の攻撃目標（攻略目標ではない）はインド方面への独軍の最大拠点であるマダガスカル島海軍基地を撃破することであった。

この時点で、アジアへの進出を図る独仏伊連合軍は各方面へ部隊を進めて拠点を作っていた。紅海の入り口であるジブチやソコトラ島がその筆頭に挙げられ、いずれもUボートや空軍機の拠点となっていた。

また日本海軍がその最初の攻撃目標としたマダガスカル島は枢軸軍が占領して以降、水上艦隊の拠点となっていた。またナチス・ドイツが進めるユダヤ人迫害政策の流刑地という色合いも強められていた。

そしてそのマダガスカル島に駐留する艦隊は戦艦4、軽空母2、巡洋艦10、駆逐艦20と3国に所属するため連携にける点を除けば非常に強力であった。また基地に展開する航空機も足の短い機体が多いものの、3国合わせて300機あまりであった。

これに対して同島攻撃に向かった日本海軍の第3艦隊は新たに増援を含んでいたものの、巡洋戦艦2、空母6、巡洋艦6、駆逐艦16と艦数だけ見れば劣勢であった。しかしながら、航空機の数で見れば6隻の空母に積まれた総合計機数は390機近くに達しており互角であった。

また日本海軍は反復した航空攻撃が可能なように、後方に補給艦

隊を進出させていた。具体的には本土から随伴してきた護衛空母2、護衛巡洋艦1、護衛駆逐艦2、海防艦8の計13隻の護衛艦に守られた給油艦4、補給艦3であった。

補給艦隊の護衛艦隊は連合艦隊ではなく、新設の海上護衛艦隊の艦艇で編成されていた。これは同艦隊が速力の遅い艦艇で編成されていたことと、対潜戦闘のノウハウを持つ同艦隊が信頼されている結果だった。

なお護衛する対象よりも護衛艦が多いのは、ひとえに枢軸軍の高い実力と給油艦の持つ重要性の結果だった。日本海軍では平時に戦時の艦隊随伴給油艦として活動できるタンカーを船会社に持たせて戦時に徴用することで給油艦の不足を補おうと考えていた。

ところが、実際に戦争が始まると当初の予想を遥かに超えた遠い地での作戦行動を求められ、給油艦はすぐに不足することとなった。そこで急遽アメリカから中古のタンカーや給油艦を買い取って、新造船が出来るまでの繋ぎとしていた。

アメリカが敵対国から一転して、共通の敵と戦う半同盟国（同盟国と呼ぶ程関係は良くない）になったのは日本側にとって僥倖であった。同国の生産力は半端ではないからだ。

例えば、アメリカは後に第二次世界大戦の期間を通して実に2700隻近い戦時標準船であるリバータイー船を作っている。この数は日本が第二次世界大戦に参戦した時に保有していた大中小型全ての商船の数以上である。しかも、その性能も非常に高かった。

これだけではなく、護衛空母や護衛駆逐艦もマスプロしつつ正規空母や戦艦を多数建造している所が、アメリカの底力を如実に示し

ていた。

対する日本は本土・朝鮮・台湾・さらには満州国や関東州の造船所を合わせてもその半分に達せられれば良かった。しかもその質も同等に出来れば良い方で、実際の所は多くが粗製乱造に近かった。特に戦時標準船はそうであった。

こうした現実を、日本はアメリカから大量に購入した船舶や航空機、車両から学び取ったのである。

閑話休題。

さて、そうして発動されたマダガスカル島攻撃作戦であったが始まった途端からアクシデントに見舞われた。まずシンガポールを出港し、スンダ海峡を抜けた所でUボートによって補給艦隊が発見された。そのUボートはすぐさま対潜哨戒機によって発見され撃沈されたが、位置を報告されてしまった。

ただしこの時点では、枢軸軍側はこの部隊がセイロン島へ向かう輸送船団であると考えていた。そのためマダガスカル海軍司令部が発した命令では、Uボートによる群狼戦術による襲撃と、付近を航行中の仮装巡洋艦に対する警告であった。

ところが、その翌日になんと今度は補給艦隊の前方100kmを航行する機動部隊本体がドイツ仮装巡洋艦「トール」と接触する事態が起きた。この時はすぐに上空直援の零戦が機銃掃射で同艦の無線マストを破壊し、さらに巡洋艦2隻が砲雷撃を加えて撃沈したから無線を発せられることはなかった。

だがこうした事態の連発は、機動部隊司令官の小沢中将に自然と

不安を抱かせた。

そして翌日、いよいよマダガスカル島攻撃作戦がスタートした。6隻の空母は夜明け前から零戦22型、艦上爆撃機「彗星」、艦上攻撃機「天山」からなる合計184機の第一波攻撃隊を発艦させた。さらに30分遅れで約120機からなる第二派攻撃隊を発進させた。

その攻撃目標は、枢軸水上艦隊の拠点であるディエゴ・スワレス軍港とその付近にある飛行場であった。

攻撃隊は軍港手前150km地点で独リーダーに捕捉された。それに伴い、付近の飛行場からDō520、MC202、Me109E戦闘機が次々と離陸した。その合計は約60機である。

これら邀撃戦闘機と護衛の零戦隊との間で激しい空中戦が軍港上空で発生した。しかしながら、この勝負は圧倒的な日本側の勝利で終わった。まず数の上で日本側が勝っていた。さらに性能面でも枢軸軍機は零戦に太刀打ち出来なかった。

零戦22型はエンジンを「栄」から一回り大型で馬力が1.5倍の「金星」に乘せ換えていた。そのため既に型落ちが目立つ枢軸軍機を圧倒することが可能だった。もし枢軸軍側が零戦に勝とうと思えば、せめてMe109のGタイプかMC205を持つてくる必要があった。

戦闘機隊の妨害を受けることなく、攻撃隊は停泊している枢軸艦艇群に襲い掛かった。既に何隻かは機関を始動させ緊急に出港に掛かっていたが、たちまちの内に捕捉された。

「全軍突撃せよ!!」

隊長機である村田少佐機から発進されたト連れの電信を受けて、「彗星」が急降下し、「天山」が雷撃高度へと降下した。

もちろん独仏伊艦艇は砲門を開いて応戦した。しかしながら、日本機の動きは彼らの想定外だった。

「早い!!」

枢軸軍艦艇のこれまでの敵であつた英海軍の機体は戦闘機を除いていずれも性能が低かつた。その速度に対する対空戦闘に慣れきっていた彼らは、最高速度が遙かに速い「彗星」や「天山」の動きについていけなかつた。

そして日本側はそれに構わず容赦ない攻撃を開始した。まずフランス空母「ベアルン」が500kg爆弾4発の直撃を受け吹き飛んだ。続いてイギリス空母「イラストリアス」を拿捕して改名した「マルク・グラーフ」が「天山」の投下した魚雷の直撃を受けて転覆した。

最優先目標の空母の攻撃が終わると、攻撃隊は戦艦と巡洋艦に攻撃を集中し、4隻の戦艦はいずれも大破着底に追い込まれ、6隻の巡洋艦も大なり小なりの損傷を負つた。

さらに付近にあつた飛行場も攻撃を受け、艦載機用と邀撃戦闘機用の飛行場が壊滅した。

第一波攻撃隊は大戦果を上げると母艦へと引き上げた。損害はたった10機のみであつた。対する枢軸軍側は惨憺たる被害だった。艦隊は壊滅し、航空機の被害も楽に100機を上回つた。

そこへ今度は第二派攻撃隊が襲い掛かったのだから、もはや目も当てられない状況となった。第一波攻撃隊で無事であった艦艇も軒並み被害を受け、さらに港湾施設も徹底的に破壊された。

こうして日本海軍機動部隊によるマダガスカル攻撃作戦は大成功を収め、枢軸艦隊は一時的にせよ壊滅した。

一方日本海軍側はすぐにはこの戦果を喜べなかった。何故なら補給艦隊がUボートとの熾烈な戦闘に入っていたからだ。

第二次世界大戦 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 3

角田中将率いる機動部隊の後方に位置する補給艦隊は、Uボートの襲撃を受けていた。Uボートは補給艦隊に対して日中戦争で学んだ群狼戦術を行おうとした。

しかし日中戦争とノモンハン事件前後のソ連海軍との戦いで対潜戦闘をみっちり行って来た日本海軍がそれを許すはずが無かった。

随伴する護衛空母からは入れ替わり立ち代りで艦上対潜哨戒機である「北海」が飛び立ち、新兵器の磁気探知機を駆使してUボートの頭上に爆雷を叩き込んだ。

「北海」は木製99式艦上爆撃機「明星」の改良機のことだ。元々日中戦争とノモンハン事件以降にパイロット数を増やす必要に迫られ、当然練習機も増やさなければならなくなったわけだが、練習機にアルミを使うのはもったいないということで、一部の機体の木製による試作が行われた。

口で言うのは容易いが、実際第一次大戦レベルの機体ならともかく遙かに高速で飛び、機体に負荷がかかるこの時代の機体を木製にするは並大抵のことではない。当初は戦闘練習機や双発練習機も木製が検討されたが、日本の場合この手の研究は充分ではなく、純粋な練習機である「白菊」は順調であったが、それ以外は一時期暗礁に乗り上げた。

99艦爆を木製化した「明星」も、完成こそしたが過重に加えて強度不足が発生した。

これだけであつたらそのまま蔵入りであつたが、これを助けたのが同盟国となつた英国で、同国から供与された木製航空機の製造技術（英国では木製戦闘機「モスキート」が開発されている）によつて、木製99艦爆の改良が行われた。

その結果重量は軽減され、新型接着剤によつて強度も増した。おかげで操縦性能と運動性能は向上し、速力など一部の点ではオリジナルの99艦爆よりも高くなつた。

しかしながら、最終的に重い爆弾（250kg以上）を抱えての急降下は危険と判断され、降下角度に制限が加えられた。それでも演習用爆弾（30～60kg）なら急降下可能なので、そのまま練習用艦爆とされた。

そしてこの機体は複座でペイロードにも余裕があるということで、近海防衛艦隊では護衛空母用の艦載対潜哨戒機として採用することに決定した。

なお同じく木製の練習機「白菊」も「西海」という名で基地用近距離対潜哨戒機（沿岸哨戒機）として採用されている。

そしてこれら機体に装備が始まっていたのが、日本独自の対潜電子兵器であるMAD（磁気探知機）であつた。同兵器は水中にいる敵潜水艦の磁気を探知して警報を鳴らす装備で、レーダーでは遅れている日本が米英を驚かせた珍しい電子兵器となつた。

この時点では配備が始まったばかりで数も少なく、初期故障に悩まされていたがそれでも作動さえすれば効果的面であつた。

結果3隻グループで攻撃を仕掛けたUボートも、1隻が「北海」

搭載の磁気探知機に発見され爆雷攻撃を受けた。この攻撃は、撃沈こそならなかったが艦隊への攻撃を頓挫せざるを得なかった。

また他に1隻が潜望鏡深度に達した所を発見され、やはり攻撃を中止した。しかし残る1隻はベテラン艦長の采配を持って対潜哨戒機の網を潜り抜け、艦艇の探知を巧みに避けて射点にまで達した。

同艦からはタンカー目掛けて4本の魚雷が発射された。この魚雷の内1本がタンカー「あらびあ丸」の船首に命中した。

「あらびあ丸」はこれによって船首を大破し、最大船速発揮不可能となった。幸運と言えたのはすでに数回の給油で艦内の重油が減っており、引火を避けられたことと船首を深く沈めたが沈没には至らなかったことである。

もちろんこの報復はただちに随伴の護衛艦艇と、爆雷を残していた対潜哨戒機によって行われ、そのUボートは凄まじいまでの爆雷攻撃を受けた。

それでも同艦は無事に同海域を離脱し、見事やられっ放しだった枢軸海軍の面目を取り戻している。

もつとも、最終的に独海軍がこの時上げた戦果はなかった。その後も数回Uボートが接触して攻撃を試みたが、ただでさえUボートの配備数が少ないインド洋において、補給艦隊に行ったような群狼戦術を行うのは至難の業で、いずれも1隻ずつが散発的な攻撃を行うに止まり、戦果は巡洋艦「四万十」に魚雷1本が命中して小破したのみであった。

その後角田中将率いる機動艦隊はマダガスカル島への反復攻撃を

実施した。特に航空基地に対しては猛烈な攻撃を加えた。またソコトラ島やジブチに対する空襲も実施された。

同艦隊が複数回の攻撃を行えたのは、後方に補給艦隊を従えて弾薬と燃料の補給を受けられたことと、帰路についてはセイロン島のトリンコマリーでの寄港が英国との間で取り決められていたからだ。

同艦隊はそれこそインド洋に発生するサイクロンのごとく暴れ周り、最終的に撃沈破した艦船は40隻近くに上り、さらに撃破した航空機も実に400機近くに達した。

対する日本艦隊の被害は航空機40機と、艦船が空母「翔鶴」大破、「加賀」小破、巡洋艦1、駆逐艦1、タンカー1損傷であり、艦船の撃沈が無かった点を考えれば一先ずの勝利であった。

「翔鶴」の大破はトリンコマリー入港直前にドイツ軍が撒いた機雷に触れたもので、そのショックで燃料が漏れ出して引火してしまい艦後部がほぼ全焼した。おかげで同艦はこの後3ヶ月近くドック入りを余儀なくされた。「加賀」の場合は敵機の空襲による至近弾による破片が原因だった。

これに伴い「翔鶴」は一端日本本土へと回航され、代わりに「蒼龍」が日本から派遣されている。また近海防衛艦隊も一部の部隊を増派するとともに、シンガポールからセイロン島へと前進させている。

こうした犠牲を払ったものの、マダガスカルを始めとする枢軸海軍のインド洋方面進出の拠点はいずれも大打撃を受け、最低でも2ヶ月は使い物にならないと判断された。また艦隊を始めとする艦船さらには航空機の損害も回復までに時間が掛かると判断された。

ただしこれについては、些か過小評価であつた。何故ならインドと中東への野望むき出しの枢軸各国はこれらの損害の復旧を全力で行い、1ヵ月後には全開ではないがマダガスカルの基地機能は復旧している。

艦隊も英国地中海艦隊より拿捕した艦艇や、独仏伊海軍より新たに引き抜いた艦艇を再編成して派遣している。当然航空機も日本の長距離飛行可能な機体に対抗してドロップタンクを搭載可能にした新型機を重点的に配備している。

またこの海戦は高速機動艦隊の有用性を世界にまざまざと見せつけ、この2ヵ月後には米海軍が北アフリカへの上陸作戦の陽同作戦で大成功を収めている。ただし、本命の上陸作戦が散々に結果に終わったことで、評価は今一となるが。敵方の枢軸海軍も、独仏伊で急遽商船改造の空母数隻の建造が促進されている。これらの国では大型の豪華客船が係留されていたので、直ちにそれらを流用できた。

そしてそれまで米英海軍から疑念の目で見られていた日本海軍の対潜技術は、独Uボートを圧倒とはいかないまでも、互角に戦えるだけの力を持っていることを両国に証明する戦いともなった。

この海戦の結果を受けて磁気探知機の量産と航空搭載の促進が決定され、艦載機のみならず基地航空隊にも急速に普及した。そして同装置は米英海軍にも売却（対価として米海軍はレーダーを、英海軍はヘッジホックを日本海軍に供与）され、両海軍の対潜攻撃技術を大幅に引き上げている。

一方のドイツ海軍も、日本海軍にUボートをたて続けに撃沈されたことが余程ショックだったらしく、新型のワルター機関搭載Uボ

―トの建造を促進させている。

連合国海軍と枢軸海軍による海の攻防は、より熾烈さを増しつつあった。

第二次世界大戦 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 4

マダガスカル島の基地機能を一時的に奪い、なおかつ同地に駐留していた独仏伊連合艦隊を壊滅に追い込んだ日本海軍は、艦隊の再編成を行いつつ、英国の求めに応じて開戦3ヶ月目にしてインド・中東方面への戦力派遣を開始した。

陸軍ではインド方面に飛行場や軍港守備に1個師団、さらに中東方面に2個師団を派遣部隊として新設して送り込んだ。これらはいずれも第一次世界大戦・日中戦争・ノモンハン事件と言った極最近の戦闘を元に開発した新式装備で固めた陸軍の最精鋭であった。

戦車も75mm長砲身砲に、75mm厚の装甲を誇る2式中戦車と、96式戦車の改良型（75mm野砲＋装甲50mm厚）である零式中戦車、さらに96式中戦車の車体に75mm長砲身砲を載せた1式自走砲と言ったドイツの4号戦車程度になら勝てる戦車を集中配備した。

その他の乗用車やトラックも、満州やアメリカから輸入したトラックやジープが全ての部隊に行き渡り、この時点では帝国陸軍唯一の完全機械化部隊であった。

兵隊の装備も一部の部隊にはアメリカから輸入された短機関銃や半自動小銃が配備されていた。また給食装備や医療装備もこれまでに無いほどに忠実にしていた。

しかしながら、これら部隊も敵と戦ってこそその真価を発揮する。まかり間違っても海上で沈められて装備は海没、兵は着たきりすずめ状態になってはならない。帝国陸軍は日中戦争時の第七師団の悲

劇を忘れてはいなかった。

そう言うわけで、陸軍は今回輸送船団の護衛を行う近海防衛艦隊と海上護衛艦隊に並々ならぬ期待を抱いていた。

今回陸軍部隊をインド洋まで輸送する輸送船は民間から徴用した大型で高速の優秀船のみならず、陸軍が海軍と共同開発した強襲揚陸艦や戦車輸送艦も含まれていた。

強襲揚陸艦は艦体内に兵員を速やかに上陸させる大発を収納可能な格納庫を設けた艦で、日中戦争でも上海付近での上陸戦に役立っている。その時点では1隻のみだったが、その後災害時の住民避難や、遠隔地における治安維持部隊派遣に使用できることから3隻が量産された。

いずれも広島県の宇品軍港にある陸軍船舶部隊の指揮下にあり、竣工してからは演習で移動する部隊の輸送や、災害が多発す台風や豪雪期には救援のために編成された派遣部隊の輸送に使われたりもした。

なおその強襲揚陸艦「神州丸」の光景として、飛行甲板を設けた「あきつ丸」型も計画されたが、こちらは近海防衛艦隊が誕生したことと、海軍が上陸支援に空母の投入を提案したため中止となった。

ちなみにその上陸支援空母となったのが、海軍が日本郵船より買い取った「浅間丸」型客船を改装して建造した「大鷹」型である。同クラスは艦隊用空母となった「隼鷹」型と同じく、客船へ戻すことを考慮せず徹底的な改装が加えられた。

また戦車輸送艦は、直接浜に乗り上げる後の世で言うLSTタイ

ブで、当初は1000t程度で、96式中戦車の輸送を想定したが、その後戦車が大型化したため排水量を1500tまで拡大している。こちらでも平時における運用も考慮されている。やはり災害時の運用が期待されたが、それ以上に道路事情が悪かったこの時代は遠隔地への輸送任務、離島への輸送任務、災害派遣任務に重宝された。

なお平時における運用を考慮したのは災害対策のみならず、大蔵省対策でもあった。

戦車輸送艦の方は陸軍名「SS艇」で、固有名詞は無く全て番号制だった。またこの艦は海軍でも陸戦隊の派遣や離島への補給任務用に「2型輸送艦」として建造が行われている。こちらも固有名詞ではなく、全て番号で呼ばれた。

さらに付け加えると、護衛駆逐艦「松」型の設計を参考に、艦体後部にスロープを設けて上陸用舟艇や特殊潜航艇を搭載可能とした「1型輸送艦」も建造されている。こちらは強行輸送任務に適役であつたが、結局その様な艦艇が必要とならなかったため、この戦争では2隻が建造され補助任務に投入されるに留まった。

さて、そうした優秀な輸送船と新型輸送艦合わせて30隻あまりを用いての輸送作戦「竹」作戦が発動された。同部隊は英国領インドのカラチへ向けて、宇品軍港を出発した。

この時期独ソ両軍は既にイラン・イラクを占領し、ドイツ軍はフランス・イタリア軍、さらには一部の同盟軍（スペイン義勇軍等）と共に一気にインドへ雪崩れ込みまんとしていた。

日本陸軍印度派遣部隊はそのドイツ軍と対峙するべくインド亜大陸西側の要衝に上陸する予定だった。なお、一時期はホルムズ海峡

を抜けてイラク方面への強行上陸も考えられたが海軍と英国の戦力が不足していたため、却下された。

船団は宇品を出港すると馬公、シンガポールを経由してインド洋へと突入した。シンガポールからは同地に派遣されていた海上護衛艦隊が護衛の任務を行った。

30隻の船団を守るために派遣されたのは、本土から増派された戦力を含めて護衛空母2隻、護衛巡洋艦1隻、護衛駆逐艦4隻、海防艦12隻。さらに連合艦隊から派遣されてきた駆逐艦4隻もそれに加わった。

輸送船30隻、護衛艦23隻、合計53隻の船団であった。護衛対象に対して護衛艦が随分と多いのは、この作戦に陸海軍が如何に心血を注いだのか如実に示すものであった。

同船団はスンダ海峡を抜けると、一気に最短コースで最初の寄港地セイロン島のコロンボを目指した。

もちろん、こんなおいしくかつ重要な目標を独伊仏海軍が見逃すはずが無かった。水上艦隊はしばらく使い物にならなくなってしまうが、Uボートは一步下がった伊領ソマリアの港や、場合によっては洋上での補給を継続して戦闘を続行していた。

独仏伊枢軸軍がマダガスカル方面へ進出した当初、インド洋方面へ展開するUボートは10隻程度で、その分を仮装巡洋艦で埋めていた。3国合わせて実に20隻あまりの仮装巡洋艦が連合国や中立国の船に化けて活動していた。

ところが仮装巡洋艦は日本機動艦隊との戦いや、インド洋方面へ

出撃した伊号潜水艦に次々と撃沈されてしまった。またUボートも5隻が短期間の内に喪われた。

そこでドイツ海軍司令部は、仏伊海軍にも協力を要請してUボート8隻を地中海より派遣するとともに、さらに伊海軍から5隻、仏海軍から4隻の合計17隻の潜水艦を増派して総配備数を当初の2倍に近い20隻あまりに増やした。

これら潜水艦は新たに「モンスーン」戦隊と名づけられて、マダガスカル島に置かれた（一時エチオピアに後退）司令部の指揮の元インド洋や、一部はオーストラリア沿岸、シナ海にまで進出して作戦を行った。

だがこの時ばかりは、稼動する全ての潜水艦が日本船団攻撃に出撃している。

もっとも、日本海軍とてそんなことは予想済みであった。まず戦闘は近海防衛艦隊所属の基地航空隊との間でスタートした。

セイロン島には旧式化した96式陸攻を改造した96式対潜哨戒機や、99式飛行艇を中心とする対潜飛行隊が進出していた。これらの機体は英国空海軍機とともに、枢軸空軍機の活動を気にすることなくインド洋を所狭しと飛び回った。

そして船団がシンガポールを出港した2日後、99式飛行艇の1機が磁気探知機によって潜水艦1隻を捕捉して攻撃を加えた。この潜水艦はフランス艦であったが、なんとか巧みに爆雷攻撃を避けようとした。しかしながら、その後応援の飛行艇による攻撃で潜行するのに致命的な損傷を負い、浮上を余技なくされた。そこへ、さらに増援でやってきた96式対潜哨戒機の集中攻撃を受けて撃沈され

た。

こうして先制点は日本側のものとなり、これを合図に船団と枢軸潜水艦隊との熾烈なバトルが開始されたのであった。

第二次世界大戦 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 5

セイロン島に入った日本陸軍印度派遣軍を乗せた輸送船団は、同地で一端燃料や消耗品の補給、さらに乗員や乗船兵士の休養を行った。

日本の兵員輸送船の質は、日中戦争期までは最悪としか言えないレベルであった。兵員輸送船の多くが徴用した貨物船の改造船であったため、兵が乗せられる場所は灯も通気設備もまともでない船倉で、しかも船の数自体が少ないのでベッド代わりに蚕棚という木製の2段式の箱を置いただけであった。しかもそこに少なくとも2000人、多ければ4000人の大人数がすし詰めとなる。

この場合、兵士は暑く暗い、それこそ足の踏み場も無い場所に長時間閉じ込められることとなる、しかも、寝る時も個人スペースの区分けがないため、はつきり言って24時間プライベートな時間はほとんど無い。さらに食事も配膳係りが配る物を各々が持った食器で食べるという方式であるため、あまり豪華な物は食べられない。

これが客船になると、貨物船よりはマシな設備となるが、やはりすし詰めプライベート無しという劣悪な環境に変わりは無かった。

こうした環境は、当然衛生面では不潔な事態を生み出し、さらに兵士個人の体力や気力を奪う。また万が一攻撃を受けて船が沈む時も、兵員が素早く脱出出来ないというリスクも抱えていた。これが日中戦争において第七師団に大きな犠牲を強いた原因だった。

しかしながら、これは輸送船の数が戦時になつたら根本的に足りないという日本の国力の限界から来る問題なのでどうしようもない。

そもそも日本の国力だけで外征すること事態大きな間違いであるのだ。

ちなみに、これが英米の兵員輸送船となると大きく事情が異なってくる。英米の兵員輸送船の場合、まず兵を船倉にすし詰めなどにはしない。確かに収容人数は多いが、それでも日本程ではない。英米の場合は、兵員を輸送する輸送船にはまずスチール製の2〜3段式ベッドが設けられる。担架かハンモックと同等の広さしかないベッドであるが、それでも個人の空間は確保される。

食事についても、英米の兵員輸送船の場合配膳係が一人一人を周ることなどせず、食堂で作られた食事をトレイで受け取り、そのままそこで食事する方式である。しかもその食事も大人数分作ることと、船上で作ることを差っ引いてもステーキなど充分なレベルが保たれていた。

こうした船上における待遇の違いは、国力の差を如実に物語っているが、それでも兵の危険とか士気への影響を考えるといつまでも劣悪な環境で兵士を運ぶことは望ましくなかった。第一同盟関係となった英国から「あなた方の国は兵士に対する配慮が足りない」と批判を受けていた。

そこで日本陸軍では兵士の輸送方法を改善することにした。まずそれまでの蚕棚を置く方式をやめ、英米に習ったスチール式ベッドか、もしくは海軍から譲渡を受けたハンモックを釣る方式に切り替えた。

そしてそれまでの輸送船に簡単な改修を行う方式も改め、一部を専用船を造って運ぶようにした。もちろんこれだけでは足りないの

で、民間船の徴用は相変わらずであったが、これも英国から指導を

受けて、それまでの雑多な船の使い回しから、専用船を指定して改造を加えるようにした。

これによって兵員を1隻で運べる人数は大幅に減ったが、兵士は個人空間とこれまでに比べて遥かに快適な空間を手に入れ、士気は大幅に高まった。特に食事も、さすがに肉を頻繁に出すことは出来なかったが、それまでの配膳式から食堂での食事に切り替わったため、余裕を持った食事が可能となった。

この方式が最初に実践されたのが仏印への侵攻作戦であったが、非常に好評であり兵士たちの士気を盛り上げた。そして今回のインド派遣作戦でもその効果は発揮されていた。

さて、その日本輸送船団はセイロン島での補給と休養を2日間ほどで終えると、そのままインド亜大陸に沿ってアラビア海を北上した。大陸沿いのルートを航行するのは、航行距離を抑え、なおかつUボートの襲撃機会を奪うためだ。

対するUボートはこのおいしい獲物を狙って虎視眈々と待ち受けていた。彼らにしてみれば印度に増援を派遣されることは好ましくないし、第一先日のマダガスカル空襲の敵討ちの色合いも濃かった。

船団は高速船ばかりで編成したので、この時は巡航速度14ノットで走っていた。もちろん対潜水艦運動である乙の字航行を不定期かつパターンを変えて行い、また昼夜問わずに対潜哨戒機を飛ばしていた。

今回船団に随伴した護衛空母「蒼鳥」と「赤鳥」には、それぞれ数少ない夜間の離発着が可能なパイロットを乗せていた。機体も夜間飛行可能な様に改修されていた。

これまでであつたら、夜間の哨戒飛行など自殺行為以外の何物でもなかった。まず夜間上下がわからなくなる可能性さえある海上飛行は危険が大きい。また例え飛んだとしても敵を発見できる可能性が皆無だった。

しかしこの頃には、機体にMADが搭載されたため夜間でも水中にいる敵潜水艦の探知が可能となり、さらに航空機や空母にも夜間でも運用可能なようにライトや各種計器を搭載していた。なにより、対潜哨戒機なら2人乗りである点が夜間飛行に味方した。

一方対するUボートもこの時期にはレーダーの搭載やシュノーケルの搭載で隠密性を向上させていた。また群狼戦術も連絡技術を上らせてより精緻さを増さしていた。

1942年10月時点で、第二次世界大戦は急速に科学戦へと移行していた。

船団とUボートの直接対決は出港翌日から始まった。まず、3隻のフランス海軍潜水艦が船団に襲い掛かった。しかしながら、これは早期に対潜哨戒機と護衛艦に発見され、双方被害無しのドローゲームに終わった。

続いてUボート4隻が得意の群狼戦術で、しかも夜間襲撃に出た。この攻撃で船団側は護衛駆逐艦「菖蒲」が艦首切断という大被害を負い、最寄りの港に待避した。（後全損として破棄）

ただしUボート側も哨戒機に突如として爆雷を叩き込まれ、1隻が損傷。それ以上の攻撃を中止し、肝心の輸送船には攻撃を加えられなかった。

続いてその日の明け方、今度はイタリア海軍潜水艦が単独での襲撃を行ってきた。しかも大胆にも機関を止めて水中でジーと待つて船団内へと進入したのだ。そのイタリア潜水艦「マルコーニ」は、戦車輸送中の2型輸送艦に魚雷2本を命中させて、見事轟沈へと追いつ込んだ。初めての日本側船団の犠牲である。

もつとも護衛艦と対潜哨戒機による報復も即座に実行され、同艦はからくも脱出したが、結局帰還後全損破棄となっている。

この日の戦闘で、日本側は潜水艦1隻に撃沈同等の損傷を与え、1隻に損傷を負わせたが、輸送艦1隻と駆逐艦1隻を喪い、それとともに戦車6両を始め兵員200名あまりを喪ってしまった。敗北である。

護衛艦隊指揮官であった西条少将は、より徹底した対潜哨戒を命じた。

しかしながら、その後しばらく襲撃は一切無く、船団はいよいよ目的地のカラチに接近した。ところが、ここでUボートの襲撃を受けた。

この時の相手は4隻で、やはり待ち伏せしていた。

日本側はこれ以上1隻も喪わないという気概を持って戦闘に入った。これが最後とばかりに稼動する全ての対潜哨戒機を発進させ、護衛艦も遠慮容赦なく爆雷を叩き込んだ。

対するUボートも負けじと船団への攻撃を行った。この時Uボートの一部には最新兵器の音響魚雷が搭載されており、それで攻撃を行った。

結果、最終的にUボートは4隻中3隻を喪い、ほぼ壊滅。一方の船団は音響魚雷を受けた駆逐艦1隻、海防艦2隻が大破し、さらに通常魚雷の攻撃で護衛巡洋艦も中破したが、輸送船と輸送艦への損害はゼロで抑え、作戦目的を完遂した。

戦闘終了数時間後、若干の損害は出したものの船団はカラチへと入港し、運んできた陸軍部隊を揚陸した。

第二次世界大戦 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 6

印度亜大陸西側のカラチに上陸した日本陸軍印度派遣軍はその後西進して、東進してきたドイツ軍を中心とする枢軸軍と戦火を交えることとなる。

この戦闘が起きるのはもう少し先のことであるが、一先ず日本は印度へ陸上部隊を送り届けることが出来た。

しかしながら、陸戦は陸上部隊だけで成り立つものではない。近代戦であるならその上空を守る航空戦力は不可欠である。また遠く外地へ遠征している部隊であるなら、その戦闘力と兵士の士気を保つために弾薬・食料などの定期的な補給が欠かせない。

これらもまた、海上輸送以外の輸送手段がない。だから海上護衛艦隊と連合艦隊の一部は、そうした輸送船団や輸送艦隊を守るために、以後もアラビア海やインド洋でUボートや枢軸潜水艦との死闘を繰り返す必要があった。

また英国からの要請により、インドと喜望峰の間を結ぶ交通線の護衛任務にも日本海軍が戦力を派遣することとなった。これは死に体の英国では、もはやアジア方面へ回す戦力などなくなっていたからだ。

これに伴い、日本海軍では急遽さらなる海上護衛戦力が必要となった。ここで役に立ったのが、戦前にノモンハン戦や日中戦争を通して蓄積した護衛艦の大量建造技術と、戦闘経験であった。このお陰で半年間に日本は本土や植民地の造船所で実に80隻近い各種護衛艦をマスプロ出来た。さらに戦闘経験を元に作られたマニュアル

は、兵士的大量育成に役立てられた。

一方日本に遅れること3ヶ月で第二次世界大戦に参戦した米国は、その主戦力を大西洋や地中海方面へ向けた。この時点で英海軍は地中海から完全に叩き出され、地中海の入り口にある良港のジブラルタルも火事場泥棒的に参戦したスペインに盗られてしまった。

そこでアメリカ軍は、まずはジブラルタルの奪回を計画しつつ、開戦後は専ら大西洋での船団護衛に従事した。米国は五大湖でモスボールしていた4本煙突が特徴の平甲板型駆逐艦を現役に復帰させると、さっそく海上護衛に投入している。

しかしながら、実戦経験がないことからこれらに守られているにも関わらず開戦直後から船舶に被害が多発した。しかもその多くがタンカーであつたため、アメリカ本国では一時ガソリンが配給制度になつたくらいだった。

また大西洋艦隊の戦艦と空母にもUボートの被害が出始めた。特に空母「レンジャー」と戦艦「テキサス」の喪失は、米海軍上層部にショックを与えた。

そのため米海軍は直ちに対策を立案、講じている。まずUボートの動きを封じるべく対潜航空隊を整備し、さらに暗号解読部隊も新設し、Uボートを積極的に発見し狩りだす態勢を整えた。

また輸送船団の護衛戦力としても、1000t程度で低速の護衛駆逐艦バトロール・フリゲートやそれよりもさらに小さいPFの建造も開始された。

これらは初期段階こそ工員や造船所側が不慣れであつたために建造スピードが遅かったが、戦時体制へ大きく移行した昭和18年半

ばごろには最短3ヶ月で建造を完了し、1日1隻のペースで竣工させた。

なお日本海軍は、急速な護衛戦力拡大に対処するため、アメリカから護衛駆逐艦6隻、フリゲート36隻、護衛空母2隻を、さらに「カタリナ」飛行艇やB25など対潜用航空機も多数買い込んでいる。

アメリカのすごい所は、平時の戦力こそ大したことはないが、戦時になると短期間の内に戦力を揃えてしまうことだ。しかもその量も半端ではない。

戦争の相手がヨーロッパ枢軸国のみとなったため、海軍の必要性は大幅に薄れてしまったが、それでも米海軍は旧式戦艦の代替として最新鋭の「アイオワ」、「モンタナ」級戦艦につづいて46cm砲装備の「フロリダ」級の建造に着手し、なおかつ「エセックス」級空母や「ミッドウェイ」級空母の建造にも取り掛かっていた。

対する日本海軍は、海上護衛隊と近海防衛艦隊の艦艇こそなんとか整備したが、連合艦隊の方は戦艦1隻、巡洋戦艦2隻、正規空母4隻が建造中であつたが、アメリカが建造している艦艇数に比べれば点と地ほどの差があつた。

さて、その日本海軍は英国から借りたセイロン島のコロンボ軍港やシンガポールのセレーター軍港、ペナン軍港やカルカタ軍港を拠点に、インド洋とアラビア海の船団護衛に全力を尽くしていた。また先ほども書いたとおり、一部の部隊は遠く喜望峰まで遠征していた。

一方、そうした護衛戦力以外の部隊も続々とこの方面に進出した。

水上艦隊としては城島中将に率いられた空母「飛龍」を中核とする、正規空母2、軽空母4、巡洋戦艦2からなる新編成の第7艦隊がセイロン島へと前進し、再度のアラビア海における作戦に備えていた。

また潜水艦隊の一部も増派され、紅海封鎖作戦に投入された。日本海軍の潜水艦は大型で攻撃力が大だが、騒音問題を解決できていなかったため、最初の頃こそ枢軸国側の反撃態勢が整っていなかったので大暴れできたが、その後は損害が多発した。これを契機に日本側では、潜水空母「伊400」型や既存タイプの潜水艦の建造を中止し、静粛性に優れた水中高速潜水艦の「伊200」型と「呂150」を集中建造する方針に切り替えている。

一方海軍に続いて陸軍もセイロン島防空や、地上部隊直協用に航空隊をこの方面に投入している。その中核は、ノモンハン戦の経験から開発された液冷エンジン装備の2式中戦闘機「飛燕」や地上襲撃機の2式襲撃機「剣」、高速の3式爆撃機「飛龍」であった。

この内「飛燕」は海軍でも14試局地戦闘機の代替機として「海燕」として正式採用されている機体で、また「剣」は海軍の艦上爆撃機「彗星」の改修版で、爆弾倉に地上銃撃用の機関砲を搭載可能な様に改良されていた。

これら陸軍航空隊の機体は第一次大戦以降日本側が力をいれた航空技術の発展を欧米に誇示する物ばかりで、特に「剣」は未だ固定脚の「スツーカー」を使用するドイツ軍に衝撃を与えている。

もつともこれら航空機も十分な燃料と補給機材がなければただの鉄くずである。日本側は全力を持ってそれらを運ぶ輸送船団の安全確保に努める必要があった。

一方枢軸国海軍は、アメリカの参戦でUボートの多くを大西洋方面に向ける必要が生じたことから、この方面の主力はフランス海軍やイタリア海軍となった。

しかし両海軍とも独海軍に比べて質量共に劣っており、日本海軍は楽な戦いを行うことが出来た。

もともと、油断大敵で時々大火傷する事態も起きた。特にイタリア海軍の潜航艇や魚雷艇には手を焼かされることとなった。

集団では弱い、個人的に英雄になることを好むイタリアでは単独もしくは少人数で操れる兵器の方が戦果を上げることが多い。それはインド洋でも同じであった。

この方面に投入された人間魚雷や魚雷艇は、日本海軍の隙を突く形となった。昭和18年3月から4月にかけてその被害は頂点に達した。幸い戦艦や空母、重要物資輸送中の船舶に被害は出なかったが、2ヶ月間の内に巡洋艦と護衛巡洋艦合わせて3隻、護衛駆逐艦2隻、海防艦1隻、商船・輸送艦4隻が撃沈されて、その2倍の艦船が被害を受けた。

この事態を受けて、日本海軍は再度アラビア海沿岸の敵拠点を叩く攻勢作戦を計画した。

対する枢軸国海軍も、一度は壊滅した艦隊を再建し、インド方面艦隊としてアデン湾に前進させていた。その陣容はイタリア空母「アキラ」、「スバルビエロ」、フランス空母「ジョフレ」、戦艦4隻、巡洋艦10隻からなる以前よりも強力な艦隊であった。

またそれを支援する基地航空隊も、航続力を強化したFW戦闘機

や最新鋭のJⅡ爆撃機だった。

アラビア海に再び鉄と炎の嵐が吹き荒れようとしていた。

第二次世界大戦 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

このシリーズでは、一部史実をもとにしている所があります。

第二次世界大戦 7

インド洋における2度目の大海戦は、日本海軍の偵察潜水艦が、枢軸インド洋艦隊がジブチ軍港を出港し、一路東進したという情報を発信したことから始まった。

この情報を受けたセイロン島の日本海軍インド洋派遣部隊総司令部では、この艦隊の目的は航空機による補給線への攻撃、もしくは揚陸港の破壊と判断して、ただちに第7艦隊を出撃させている。

空母「飛龍」を旗艦として、正規空母2、軽空母4からなる第7艦隊は、前回枢軸艦隊を壊滅させた第3艦隊より空母の数こそ勝るものの、搭載機では若干少なかった。これは軽空母の搭載機が48機、30機と少なかったからだ。これら軽空母は「飛鷹」級と「瑞鳳」級で、前者は客船改造、後者は給油艦改造の改造空母だった。だから性能的には正規空母より見劣りする。

それでも、搭載機は最新鋭の「零戦改」、「彗星」、「天山」であり、艦艇も艦載の高射指揮装置や電探も一部が新型となり、対空戦力が強化されていた。だから総合的な戦力（機動艦隊としての能力）では第3艦隊を上回っていた。

「零戦改」は改良に限界が来ていた零戦に、それまでの1000馬力の「栄」に代えて1500馬力の「金星」エンジンを搭載したタイプで、航続力と旋回性能が落ちたものの最高速度と攻撃力、急降下性能、防御力を大幅にアップさせた機体だった。

「天山」はようやく完成した97式艦攻の後継機で、100kmも優速な上に1t爆弾や1t魚雷が搭載可能で、97艦攻をあらゆる

面で上回る性能を誇っていた。一部の機体には、機上電探も搭載され高い索敵能力も持ち合わせていた。

これらの機体はいずれも高速、重防御（あくまで日本的視点で）、高い攻撃力を持つ新世代機であった。その分機体重量やサイズもアップしている。

日本海軍では幸いにも、英国からカタパルトの技術を購入できたため、これらの機体を軽空母でも運用することが出来た。

対する枢軸インド洋艦隊は最新鋭の空母に加えて、竣工したばかりの「エトナ」級防空巡洋艦を加えている。「エトナ」級はタイヨリイタリアに発注されていた「タクシン」級軽巡をイタリア海軍が接收し、改造した艦である。対空砲や対空機銃をそれまでのイタリア巡洋艦より強化している。

イタリア海軍の艦艇はフランス海軍を仮想敵としており、さらに地中海での運用を前提としたため高速ではあるが、航続力が短く航洋性能も低かった。なにより防御力が弱いという致命的な弱点があった。

そうした運用方針を抜きにしても、イタリア軍は国がファシスト政権下に移行した以降も軍の近代化が大幅に遅れていた。特に空軍と陸軍は、旧来の考え方に縛られた上層部と貧弱な工業力のために、開戦直前までとても戦えるような状況ではなかった。

ドイツがポーランドとの戦争を始め、ムツソリーニがドイツと共に戦うことを考慮し始め、軍の内部を調べさせた時になって、ようやくその事実が発覚した。もちろん、彼は軍の幹部連中を呼びつけて怒りを露にした。

「君たちは一体何をやっていたのだ!？」

時に1940年4月のことであつた。ムッソリーニが尻を叩いたことで、ようやく軍の大幅な近代化が行われ始めた。ムッソリーニしてみれば、エチオピアとの戦争で起きたことを思い出したのである。

この数年前、イタリアはアフリカでも数少ない独立国であるエチオピアに侵攻、占領した。しかしながらイタリア軍は旧式兵器しか持たない前近代的なエチオピア軍に苦戦し、最終的に禁断の毒ガスまで使っている。

これは兵士の質が悪く、総司令官の作戦指揮によるミスも大きかったが、やはり敵を圧倒できる兵器がない（この時期イタリア製の兵器、特に戦車の性能は日本製以下だった）と言うもの大きかったであろう。

もつともいくら統領が怒つたところで、イタリアの場合はドイツと違ってその上に王様がいるため、どうしてもカリスマに欠ける。だから命令を出しても進捗スピードが遅い。

イタリアにとって幸いだつたのは、第二次世界大戦の開戦が当初ドイツの考えていたものより半年遅れとなつたことで、これによりイタリア軍もドイツ軍と同じく、規模としては遥かに小さかったが近代化を推し進められた。特にドイツのベンツ社から輸入した液冷エンジンを基にライセンス生産したアルファロメオエンジン搭載のMC202戦闘機の生産が可能となつたのは僥倖だつた。

そして第二次大戦が始まるとイタリアはしばらく戦争に介入しな

かったが、ドイツがフランスを屈服させる寸前に、勝ち馬に乗る形で枢軸側として参戦した。そしてその時は、ようやく数が揃い始めた新兵器を集中投入した。おかげで相変わらず兵の士気は低かったが、なんとかボロ負けというような事態にならず、新兵器の能力も充分と判断できた。

その後、ドイツと共に条約を結んだソ連から石油や鉄鉱石が送り込まれているお陰で、イタリア軍はそれなりに活発な行動を行い、枢軸国の主要国としての印象を諸外国に与えていた。

集団行動が不得意だの、ヘタリアだの言われているイタリア人であるが、ちゃんと補給さえあればやるとことぐらいはやるのだ。

そんなイタリア軍の中で、海軍は戦前から比較的強力であった。特に戦艦の数と性能はフランスやイギリス地中海艦隊に見劣りしなかった。しかしながら、先ほど書いた問題に加えて、空母は保有していなかった。一応ワシントン条約の際も、空母の保有枠はあったのであるが、当時のイタリアではそんな物不要とされていた。

しかし第二次世界大戦が始まると、イギリス海軍の航空母艦が地中海で猛威を振るった。特にイタリア海軍の誇る戦艦や巡洋艦、さらには補給物資を運ぶ輸送船を次々とその機動性を生かして攻撃した。

幸いだったのは、その攻撃力の一部をフランス海軍が吸引してくれたので、イタリア海軍には致命的な打撃が出なかったことだ。

それでも、大西洋と地中海の戦いを通して空母の威力は枢軸海軍の知る所となり、ドイツでは「グラフ・ツェッペリン」と商船改造の補助空母の建造が急がれた。またフランスでは唯一の空母であ

る「ベアルン」に続いて、建造途中状態であった「ジヨフレ」の完成が急がれた。

一方イタリア海軍はというと、元々空母の建造どころか設計経験すらなく、一からの新造を行っている余裕はなかった。そこでドイツを真似て商船改造空母で行くことにした。

幸いにもイタリアは戦前ヨーロッパとアメリカ間に就航させていた大型客船が、使い道が無い状態で、内陸部の港に係留されていた。これらはサイズも大きく、速力も速かった。空母に改装するのに打ってつけの船だった。

さつそくイタリア海軍はそれらを徴用して空母へと改装した。その設計などにはドイツから提供された技術が生かされた。

結果生まれたのが「アキラ」と「スバルビエロ」で、どちらも最高速力は30ノットを誇り、航空機も50機近くが搭載可能であった。商船構造であるため防御力に難点が残る以外は、満足いく性能と言える。

その搭載機は艦載用として採用されたRe2001艦戦に、ドイツから輸入した艦載用「スツーカー」急降下爆撃機、そしてフランス製のラテコエール299艦攻だった。

艦戦こそ最新鋭だが、艦爆と艦攻は旧式機の改良型であるため、性能的には日本機に及ばないが、それでも無いよりマシだ。

ちなみにフランス空母は艦戦と艦攻のみを搭載し、艦戦はドイツから輸入したFw190の艦載タイプであった。

これら合わせて140機が枢軸インド洋艦隊の総合計戦力だった。日本艦隊より少ないとは言え、対地攻撃や輸送船団襲撃だけなら充分すぎる数であった。

第二次世界大戦 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 8

枢軸インド洋艦隊が標的としたのが、印度亜大陸西側の揚陸港であるカラチであった。このカラチから揚陸された日本陸軍部隊とその補給物資が、インドとイラン国境で戦う日本軍を支えていた。

上陸した日本軍と前進してきたドイツ軍との戦闘は、昭和18年4月時点で既に数回に渡ってイラン国内から印度国境に掛けて発生していた。

ドイツ軍側は少数ではあったが、既に5号戦車であるタイガーを投入しており、長砲身75mm砲搭載、最大装甲厚85mmの3式中戦車でも手強い相手であった。そのため戦車戦で日本側が勝利を収めるのは難しかった。

しかしながら、日本側には比較的航続距離の長い航空機が多数配備されたため、これらの機体が繰り返し敵地上軍を攻撃した。特に海軍の「彗星」との供用機である「剣」は、500kg爆弾か、30mm機関砲を搭載可能だったので、その高速と共に威力を発揮した。

一方中央アジアから南下を図ったソ連軍は、印度に進出した日本軍を刺激したくないからか、進撃速度は大幅に鈍っていた。

さて、枢軸インド洋艦隊が襲い掛かったカラチには日本から派遣された高射砲部隊や陸海軍飛行隊が配置され、さらにレーダー基地も設けられていた。しかしながら、配備されていたレーダーが比較的旧式なものであったこと、偵察機によって枢軸機動艦隊の接近が確認されていなかったこと。さらにこの時点で空襲などなかったこ

とから、日本側が敵機接近を探知したのは空襲開始5分前であった。

直ちに防空戦闘機が飛び立ち、対空砲に兵士が配置されたが時既に遅く、伊仏軍機60機は攻撃を開始していた。

伊仏軍機第一波はセオリーどおり、まず飛行場と対空砲陣地に襲い掛かった。隙を突かれた形となったため、日本側は実に対空砲陣地の6割にダメージを受け、さらに地上にあった各種機体50機と飛び上がった戦闘機6機を失った。対する伊仏軍機の損害はたったの7機で、一方的展開となった。

そしてこの攻撃から20分後には、第二派攻撃隊50機が在泊中の艦船目掛けて攻撃を開始した。このときカラチ港には大型貨物船3隻、中型貨物船2隻、小型貨物船4隻、輸送艦5隻、タンカー1隻、と言った輸送船舶だけで12隻がいた。

伊仏軍機はこれらに対して上手い獲物を見つけた猛獣のごとく襲い掛かった。しかしながら、輸送船側もただやられるに任せてはいなかった。日露戦争と第一次世界大戦の教訓から戦時の武装を想定して造られた日本船は対空戦闘を開始した。

この時期、陸軍に徴用された輸送船には陸軍の船舶工兵隊が乗り組んで対空砲や対空機銃、野砲などの操作を行っていた。また海軍の徴用船にも同様に派遣されて来た兵士が乗り組んで設置された対空砲等の操作にあたった。しかしながら、陸海軍の砲弾薬の在庫はお世辞にも多くなく、時には鹵獲兵器などを載せる時もあった。

そのため、商船会社では独自に砲弾薬を購入していた。既に国内のメーカーは余裕がなくなっていたが、海外のメーカー（特にアメリカ）から購入する方法が採られた。

主に購入されたのは両用砲である5インチ、3インチ砲や40mm機銃、20mm機銃、12.7mm機銃を言った類であり、戦場へ派遣される船やUボートが出没するインド洋航路の船に、許可を受けて搭載された。

もちろん、艦艇の搭載するような本格的な射撃指揮装置などなく、せいぜいが計算尺に毛が生えた程度の簡易指揮装置しか積んでいなかった。操作する船員の腕も良くはない。それでも多数の火砲を搭載することは相手への威嚇と船員の士気を高める上で大いに有効だった。

カラチ港に停泊していた船の内、「佐倉丸」にはなんと5インチ砲2門の他に3インチ砲2門、40mm連装機銃2基、20mm単装機銃8基、12.7mm単装機銃6基が搭載され、同時期の駆逐艦並みの重武装だった。

一番小型の「長運丸」でさえ、3インチ砲2門、40mm単装機銃2基、20mm単装機銃4基で武装していた。

また商船以外にも、護衛艦艇など10隻がカラチ港に在泊していたので、これらも当然戦闘に参加している。

カラチ港に在泊、もしくは近海を航行中だった艦船は一斉に対空砲火の砲門を開き、余裕のある船は回避操船に入った。

伊仏軍機は予想外の反撃に驚くと共に、始めての動く標的への実戦攻撃だったために狙いを外す機が続出した。しかし、やはり商船ではどんなに武装して回避運動をとっても限度というものがある。被弾した船舶は当然ながら発生した。

輸送船「鬼怒川丸」の爆弾3発被弾により大破炎上を最大の被害として、中破2隻、小破3隻という被害が出た。それでも50機の飛行機相手にこれだけの被害で済んだのは奇跡に近かった。「鬼怒川丸」も一時は破棄が予想されたものの、乗員たちの努力でなんとか後方への回航に成功している。

しかしながら、この2回に渡る攻撃でカラチの基地施設と港湾施設に被害が発生し、揚陸効率が大幅に落ちてしまったことは、日本側にとって痛いことであつた。

もちろん、日本側は直ちに報復に打って出ている。カラチ以外にある印度亜大陸西岸の哨戒機基地や飛行場から飛行艇や偵察機を飛ばして枢軸機動艦隊を捜す。また既に出撃して北上していた第7艦隊も偵察機を発進させ、枢軸機動艦隊を捜し求めた。

一方追われる側となつた枢軸機動艦隊は、実力で大きな差がある日本艦隊との戦闘を避けるため、その高速力に物を言わせて遁走した。そのためこの日は日没もあつて、日本側には発見されなかつた。

翌日、ようやく日本艦隊はジブチへ向けて一直線に逃げる枢軸機動艦隊の針路予測の結果飛ばした偵察機からの報告で枢軸機動艦隊を捉えた。既に敵地であるソコトラ島に接近していることと、こちらの最高速度が敵に著しく劣ることもあり、攻撃のチャンスは1回切であつた。

城島中将はただちに6隻の空母から全力出撃である150機を発艦させた。

この攻撃隊は、枢軸機動艦隊手前120km地点でレーダーに探

知された。伊仏空母からは直ちに戦闘機50機が出撃し、迎撃を行う。

機動艦隊手前の海域で、日本海軍が誇る零戦と伊海軍のRe2001戦闘機、仏海軍Fw190戦闘機との大空中戦が展開された。数的には日本海軍が若干勝っており、さらにパイロットもベテランぞろいだった。

一方伊仏空母のパイロットは練度不足のパイロットが混じっていたため、最終的に零戦に圧倒された。敵戦闘機の網を潜り抜けた80機近い攻撃機は枢軸機動艦隊に襲い掛かった。

枢軸機動艦隊の方では戦艦から駆逐艦に至るまで一斉に対空砲火を開き、さらには回避運動に入った。

4隻の高速戦艦と3隻の空母を中心とする輪陣形の中心目指して日本機は突進した。高速の「彗星」と超低空飛行の「天山」は敵の対空砲火を惑わしたが、それでも伊仏軍将兵は果敢に戦った。

結果沈没艦は仏海軍の大型駆逐艦1とイタリア海軍の軽巡1隻のみで済んだ。しかしながら3隻の空母は甲板に被弾するか魚雷を受けて傾斜するかで航空機の運用は不可能となり、戦闘能力は完全に喪失した。また損傷艦も10隻に上った。

対する日本側の損害は戦闘機を含めて20機と、全体的に見れば微々たるものであった。その一方で被弾機も多数発生し、枢軸艦艇の対空砲火が強化されている事実を認識せねばならなかった。

日本側としてはもう一押し出来れば敵空母撃沈も出来たのだが、城島中將はそれ以上の攻撃を諦めざるを得なかった。

この海戦で日本側の印度方面の物資揚陸は若干の支障を来したが、それも2週間程度のこと、枢軸機動艦隊の攻撃は徹底差を欠いた。それでもその実力が以前に比べて遥かに上達していることは、日本海軍には脅威として捉えられた。

第二次世界大戦 8（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 9

昭和18年6月、米軍はついに大規模な作戦を開始した。竣工したばかりの「エセックス」級空母や「サウスダコタ」級戦艦など、最新鋭艦を多数含む艦隊に守られた輸送船団、さらにそれに乗り込む米英連合6万1千名の兵士たちによる、北アフリカ上陸作戦、「トーチ」であった。またこれと並行してジブラルタル奪回作戦も行われた。

日本軍が印度方面で開戦直後から枢軸軍と本格的な戦いを繰り返したのに対して、米軍は太平洋上やカリブ海に浮かぶヴィシー・フランス政権下の島々を確保するのに邁進した。

それによって、枢軸軍が太平洋へ進出する可能性はほとんど0となり、アメリカは背中を気にすることなく（もともと日本がいるから無防備に出来るわけではない）、大西洋での戦いに専念できるようになった。

しかしこちらの戦いは、開戦直後からもう攻撃を加えてくるUボートに苦戦した。英日に習って、船団方式の導入や船団警備用の艦隊を急ぎ整備したおかげで、バカスカ一方的に撃沈される事態だけは止まったが、その後もUボートに悩まされた。

Uボートのおかげでアメリカは空母「レンジャー」、「ロングアイランド」、旧式ながら戦艦「テキサス」、「ニューヨーク」を始めとする艦艇も沈められた。

艦艇自体は既に旧式や2線級の艦ばかりで、直接の被害は大したものではなかった。しかしながら、それに乗っていた熟練乗員の損

失や、さらにやられっ放しという事実は決して見過ごせる問題ではなかった。

長年ルーズベルトが参戦したいと思っていた第二次世界大戦は、彼の予測を上回る規模での被害をアメリカに強いることとなった。特にイギリスへ派遣した爆撃機部隊は甚大な被害を負った。

この時期、フランスがヴィシー政権としてドイツの同盟国となっていたことがアメリカにとって大きな問題であった。ヒトラーは味方で戦う限りなら、フランス人にも兵器の生産を許していた。そのため、フランス空軍はようやく配備なった最新鋭のV G 33戦闘機を迎撃戦闘に投入した。

皮肉なことに、ドイツに敗北するまではフランスの兵器生産体系は滅茶苦茶であった。しかしながら、ドイツの同盟国となるとヴィシー政権はドイツの助言の下各種兵器生産体制の大幅な刷新を行い、結果それまで乱雑に生産されていた兵器類は扱いやすい程度に統合された。

こうしたフランスの新鋭機群はフランスに駐留するドイツ空軍部隊の戦闘機と共に、B 17、B 25、P 38と言ったアメリカ軍機を迎え撃った。

そのドイツ空軍もMe 109に代わって戦闘機の主力となりつつあるFw 190のD型やHe 280ジェット戦闘機を配備しており、連合国空軍部隊に対して大幅に優位に立っていた。さらにドイツ空軍は既にMe 262ジェット戦闘機やHe 219夜間戦闘機の生産にも着手しており、ヨーロッパの空は堅固に守られていた。

そのため出撃するアメリカ軍機が如何に頑丈と名高いといえど、

損害が続発するのは必定であつた。

アメリカでは高性能のB29爆撃機やP51・47戦闘機の開発を急ぐと共に、さらにジェット戦闘機の開発も急がれた。

こうした苦戦はアメリカ国民の士気を著しく落す結果となり、ルーズベルト政権は確実な戦果を求められた。その結果行われたのが「トーチ」作戦であつた。本来ならジブラルタル攻略を先行させるべき所を同時に行った所に、アメリカの焦りがあつた。

一方それを主力となつて迎撃したのは最近枢軸軍に参戦したスペイン軍とフランス軍であつた。

スペイン軍はついこの間起きたばかりの内戦で国内は大きく興廃していたが、ようやく再建の道筋がついていた。さらに軍備もドイツの手助けによって大きく増強されていた。特に空軍はMe109やHe111のライセンス生産を進めるとともに、Fw190の購入も行っていた。

また海軍も「カナリア」級重巡に加えて、ドイツから売却されたUボートや駆逐艦を配備して戦力を強化していた。

フランス軍も空母こそ少なかったが新鋭艦を多数要していた。特にようやく完成した「リシュリユー」級3番艦の「ガスコーニュ」はその象徴であつた。

さらにドイツ軍とイタリア軍もそれぞれ少数ずつではあるがUボートを派遣して迎撃に加わっている。

英米側は枢軸軍を騙そうとあらゆる手段を講じた。ダブルスパイ

の活用、囃船団の編成や欺瞞通信の発進である。

しかしながら、この時期ドイツ側は既にダブルスパイの存在に気づき、さらに暗号も敵軍に入手されて苦戦を強いられた第一次大戦の反省から頻繁に改正し、暗号機器自体も改良を繰り返していた。

そのため枢軸軍は騙されることなく、英米連合軍を迎撃することとなった。まず迎撃対象となったのが、ジブラルタルに接近してきたジブラルタル攻略軍であった。英米軍の作戦ではジブラルタルを早期に攻略し、北アフリカ上陸軍への補給路を造る予定であった。

ジブラルタル攻略部隊は、旧式戦艦6隻、護衛空母6隻に守られた輸送船23隻と、海兵隊1万2千名であった。

しかしこの部隊には、スペイン軍を中心とする空軍部隊が大挙して襲い掛かった。さらにジブラルタルの飛行場からはドイツ空軍機が出撃してきた。

もちろん、アメリカ軍側も上陸に先立って空襲を実施した。しかしながら、北アフリカ上陸が主目的であったためにそれは1回キリで終わり、十分な成果を出せなかった。

そして枢軸軍のお返しは強烈だった。スペイン空軍120機に加えて、一端後方に待避して戻ってきたドイツ空軍機150機が上陸艦隊に襲い掛かったのである。しかもドイツ側は最新鋭兵器の誘導爆弾「フリッツX」まで投入した。

アメリカ軍側も護衛空母搭載の120機のF4Fで迎撃したが、枢軸空軍機に圧倒されてしまい大損害を出した。艦隊も戦艦「アイダホ」が轟沈し、護衛空母2隻が撃沈されるという大被害を負った。

海兵隊も上陸前に1000名が戦死するか戦闘不能になった。

それでも遮二無二上陸し、アメリカ軍はなんとか橋頭堡を設置することに成功した。しかしそこまでであった。

断続的に空襲を繰り返す枢軸空軍機に加えて、傷ついた艦隊には待つていましたとばかりにスペインとフランスの潜水艦が襲い掛かった。この結果さらに戦艦「ミシシピ」を失い、海兵隊の損害も鰻登りとなった。

それでも連合軍ではジブラルタルをなんとかしても確保したい一心から、続いて増援部隊として英連邦軍を投入し、なんとか確保だけは出来た。しかし基地機能は再建できず、とにかく枢軸軍に再び使わせないことだけに専念せざるを得なかった。

ジブラルタル奪回にこそ成功したが、その基地としての価値を連合軍が手に入れるまでには長く、辛い戦いを続ける必要があった。

一方北アフリカ上陸部隊の方は、英米併せて戦艦8隻、正規空母6隻、軽空母2隻、護衛空母8隻に守られ、絶対に失敗はしないと見られていた。

しかしながらそれはあまりにも浅はかな予測であった。確かに3年前のような弱小なフランス植民地軍相手であったなら、英米軍は圧倒的な勝利を掴めたであろうが、生憎と現在は全く状況が違っていた。

フランス植民地軍は兵器の更新を終えていたし、さらにここにもドイツからの派遣軍が駐留していた。ドイツ軍はリビアで最近になって湧き出した石油をなんとかしても守る必要があったからだ。

それはフランス軍も同じであった。フランス海軍はただちに主力艦隊を派遣してこの迎撃に当たった。もちろん、彼らだけでは逆にフルボッコにされる可能性が高かったが、植民地軍に加えてドイツ・イタリア両軍がそれを支援していた。

英米連合軍は苦しい戦いに入ろうとしていた。

第二次世界大戦 9（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

細かい提案などありましたらメッセージでお願いします。

第二次世界大戦 10

北アフリカ上陸作戦、すなわち「トーチ」作戦は、まず米機動部隊による空襲から始まった。米英軍が要する空母艦載機の総数は560機。さらに護衛空母の艦載機が150機近くあった。これはアルジェリアとチュニジアに展開する枢軸軍機の総数を併せた以上の数だった。

対する枢軸軍側も当然だが迎撃行動に出た。Do520、MS406と言ったフランス軍戦闘機や、進駐していたドイツ空軍やイタリア空軍の戦闘機も迎撃に発進している。

米軍側戦闘機は、その国力に物を言わせて短期間に更新を終えたF6F「ヘルキャット」戦闘機であった。性能的に見れば、Me109やFw190に少し劣るかほぼ同等、イタリアやフランス空軍機に混じる旧式機相手なら充分に圧倒できる性能だった。

しかしながら、ドイツは言うに及ばず、フランス・イタリア軍パイロットもアメリカ軍パイロットにはない強みを持っていた。それはかつて北アフリカから中東にかけてロイヤル・エアフォースとの間で繰り広げた過酷な戦いにおいて蓄積した実戦経験である。

対する米軍は確かに古参パイロットも混じっていたが、実戦経験のあるパイロットはほとんどいなかった。第一アメリカ海軍自体、この作戦が第二次世界大戦における初めての本格的で大規模な戦闘であった。

米軍がその数に物を言わせて行った空襲はそれなりの効果を上げた。しかしながら、米軍側も枢軸軍機や対空砲火も熾烈で、実に出

撃機の3分の1が失われるか損傷するという大損害を受けてしまった。

この大損害に、米機動艦隊司令長官を任されたフレッチャー中將は迷った。航空攻撃を継続するべきか、それとも一時的に中止するべきか。もつとも、中止という選択肢は採り難かった。何せ今回の作戦はアメリカ国民も期待しているし、イギリスへの政治的パフォーマンスの意味も大きかったからだ。結局フレッチャーは第二次派攻撃隊を出撃させている。

一方、対する枢軸連合空軍も反撃に出た。空襲の間避退していた爆撃機を呼び戻し、爆装させて出撃させたのである。ただし、機首としては旧式機が多く、護衛戦闘機も不足していたが。それでも数は少ないが最新鋭のドルニエやユンカース爆撃機は、やはり最新鋭の「フリッツX」を抱いていたのでその効果を期待されていた。またフランス空軍機も最新鋭のポテやブロッシュ爆撃機、ラテコエール雷撃機を中心に攻撃している。

そしてこの枢軸空軍による攻撃は、米英軍の度肝を抜く事態となった。米英軍にとって、それまでの航空攻撃というのは急降下爆撃か雷撃と言った、艦艇に接近しての肉薄攻撃であった。フランス軍はこの方法で攻撃を行ったが、米英軍の熾烈な対空砲火で多数の損失を被った。

ところが、ドイツ軍が用いた「フリッツX」は比較的離れた場所から投下され、誘導される兵器である。そのため艦艇に搭載された対空火器の効果が限定される。幸いにもこの時は直援戦闘機を多数上げていたので、投下前に多くの機体を撃墜破出来た。

それでも完全に防ぎきることなどできず、4発が発射され3発が

艦艇に命中した。この内2発が空母「ヨークタウン」に命中し、格納庫に飛び込んだ1発によって同艦は大爆発を起こし、1時間後に沈没した。アメリカ軍初の艦艇喪失である。加えて軽巡洋艦「アトランタ」が前部対空砲塔全滅により大破という損害を被った。

またフランス軍による通常攻撃もそれなりの戦果を記録し、戦艦「ワシントン」を中破させ戦線離脱に追い込み、その他に重巡「サンフランシスコ」と駆逐艦2隻を撃沈した。

この攻撃による被害は全体的に見れば微々たるものであったが、対空砲火が用を為さず、さらに「ヨークタウン」沈没という予想外の被害を見たフレッチャー中将は、第二次攻撃隊を収容した所で、護衛空母を除く空母を一時的に後退させる命令を下した。

上陸を前にしてのこの行動はもちろん海兵隊や英軍から反発を受けた。しかしながら、艦載機と空母の被害も既に大きく成りつつあり、さらに一時的に安全圏へ避退するだけで航空支援は継続するとして、フレッチャーは上陸支援艦隊を率いる司令官らを説き伏せた。

そして彼は空母とその護衛艦を一時的に枢軸空軍爆撃機の行動圏外へと離脱させた。しかしこれが後に悲劇を招いた。

丁度その頃、フランス海軍の艦隊は米艦隊との決戦を目指して西進していた。最新鋭戦艦「ガスコニユ」を旗艦にツーロンを出港した部隊で、戦艦4、軽空母2、重巡5、軽巡3、駆逐艦25隻から成る有力な打撃艦隊であった。司令官は本国艦隊司令長官のデスタン中将だ。

米英連合艦隊に比べると、空母が少ないというハンデこそあったが、砲撃力だけ見れば充分に対抗できる実力を有していた。

フランスはドイツに降伏した直後、北はドイツ占領地域、南はヴィシー・フランス政府管理地域に分割されていたが、その後枢軸国側に立って参戦することで、ドイツ軍とイタリア軍の駐留という代償を払ったものの、占領地域の返還がなされて軍備の再建も許可された。特に海軍力と空軍力は、ドイツの後押しもあって急速に進められた。

空母は今の所中型の「ジヨフレ」（現在アラビア海へ派遣中）と商船改造の3隻、さらに建造中の「ペインヴェ」のみであるが、戦艦は38cm砲を8門持つ「リシュリユー」級が竣工したもの3隻、建造中のもの1隻がある。また重巡・軽巡・駆逐艦・潜水艦も新鋭艦の建造が急ピッチで進められていた。

こうしたこともあってか、フランス海軍の士気は旺盛だった。

フランス人からしてみればナチスのことは気に入らないが、もともイギリス人だって気に入らない相手であり、一時的に手を組んだに過ぎない。そして現在ヨーロッパの覇権をドイツが取りつつあるので、今度はドイツと組んでいるだけである。

ドイツ他の枢軸軍がこうして勢いを未だ持っていてられるのも、ソ連と同盟関係を維持しているのと、中東や北アフリカにある資源を握ったからに他ならない。

この輸送ルートを守る上で、連合軍に再び地中海へ上陸されることは大変厄介なことであった。またフランスからしてみれば、既に海外植民地の一部を失っている現状で、これ以上奪い取られることは国民感情的にも、枢軸国内における地位を守る上でもマズイ。

そのためデスタン中将率いるフランス本国艦隊は、なんとしても連合軍の上陸を阻止、もしくは上陸させてもその維持が不可能なほどの損害を与える必要があった。

もつとも、幾ら戦艦を何隻持っていたところで、制空権を取らなければ海戦に勝てないことは、これまでの戦いが証明していた。デスタン中将も良く心得ていた。

そこで彼は、空軍部隊が敵空母部隊もしくは艦載飛行隊に大打撃を与えて機動部隊の動きを封じるその瞬間を待っていた。また出撃しているUボートや伊仏潜水艦による攻撃の効果にも期待していた。それらによって、米英機動艦隊の動きを封じれば、少数の直援機しか持たないフランス海軍もアルジェリア沖に突進できる。

そしてついに米軍による北アフリカへの空襲開始の方が入る。彼は艦隊を一時的にシチリア方面に待避させて敵偵察機をごまかし、突入の機会を窺った。

この日の空襲で、アルジェリアとチュニジアにある飛行場の幾つかは損害を被ったが、敵攻撃隊にも被害を与えたことも確認された。また上陸予定地点に対する空襲は散発的で、あるという報告もたらされた。

米英軍の予定では、本来なら午前中の空襲で制空権を奪取し、午後から上陸地点へ空襲と艦砲射撃を加える予定であった。ところが、枢軸空軍の思いもよらぬ奮戦は、そのスケジュールを完全に狂わせていた。そしてそれはフランス海軍に味方した。

第二次世界大戦 10（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

昨日架空戦記作家の中里融司先生がお亡くなりになったそうです。自分も先生の作品を何本も読み、昨年のIFCONでは元気な姿をお見かけしただけにショックです。御冥福をお祈りします。

第二次世界大戦 11

開戦以来、独海軍のUボートは英国をはじめとする各国の輸送船や軍艦を多数撃沈してきたが、さすがに第一次大戦の教訓があったおかげで1年もすると英国側の対潜能力も向上した。

一方ドイツも、やはり第一次大戦終盤に進歩した対潜技術でUボートが大打撃を被ったことを忘れておらず、Uボートの能力向上に全力を傾けた。特に新型の魚雷やエレクトリック・ボートの開発が急がれた。

そうした新技術開発を並行して、既存の潜水艦の能力強化も当然が行われた。シュノーケルの開発や、レーダーの装備、エニグマ暗号装置の改良、電池の改良など、地味だが少しでも性能を上げる努力が行われた。また他国同様ドイツでも大きな欠落があった魚雷の起爆用ピストルの改良も、早い時期に行われた。

また戦術面でも、第一次大戦では結局取り入れられなかった群狼戦術が採用され、連合国輸送船団に打撃を与えている。

こうした艦の改良や新戦術は同盟国にも技術供与され、実施された。ドイツの同盟国となったフランス、また以前から同盟国であるイタリアもドイツほどではないが多数の潜水艦を保有しており、これらは地中海の制海権を奪取するのに役立てられた。

この時代、潜水艦の技術レベルはこの国も大して変わらなかった。日本のように防音技術が遅れていたようなことこそあったものの、基本的な性能はこの国も五十歩百歩であった。

そのため、基本的に艦の改良や新戦法の採用はフランスやイタリアでも行えた。それらを得た両海軍潜水艦は、英国地中海艦隊と北アフリカ戦線へ物資を運ぶ輸送船団に大打撃を与えた。特にソ連から石油が手に入り、艦艇の行動制限が緩和されたイタリア潜水艦はUボート同様の活躍を成し遂げた。

1942年から43年の1年間で、在来型潜水艦が活躍できた最後の年代だった。これ以降は米国が大量に揃えた護衛空母と護衛駆逐艦の前に、在来艦の性能ではとても立ち向かえなくなってしまう。

そのためドイツ海軍は43年後半からエレクトリック・ボートを見切り投入するとともに、新型の音響魚雷やFAT魚雷を投入して対抗していくこととなる。

そして今回のトーチ作戦による迎撃は、在来型潜水艦にとってハイルイトとなった。フランス海軍とイタリア海軍、少数だがドイツ海軍も混じった潜水艦隊は、味方空軍機の構成が終わった所で、一斉に攻撃に入った。

各艦は2〜3隻の集団となって、米英連合軍の輸送船団に襲い掛かった。

この戦闘は熾烈な物となった。米英輸送船団は潜水艦の攻撃に備えて多数の駆逐艦、コルベット、フリゲート、対潜トローラーを引き連れていたからである。しかも新兵器のヘッジホッグやスキッドを備えていた。

たちまち海上には多数の水柱が立ち上り、付近の海面は爆雷の爆発音に包まれた。

そんな状況下でも、フランスやイタリアの潜水艦艦長たちは勇敢に魚雷攻撃を敢行した。その結果肝心の兵員輸送船こそ2隻しか沈められなかったが、上陸船団を守っていた護衛空母3隻を搭載機ごと撃沈し、さらに2隻を大破させた。その他に駆逐艦4隻、護衛艦5隻を撃沈している。

もちろん枢軸群の潜水艦側も大きな代償を支払わされた。実に9隻が撃沈され、3隻が帰還後廃棄させられた。またその他の潜水艦も多数が損傷した。

また一部の潜水艦は離脱中だったフレッチャー中將の機動艦隊に襲い掛かった。こちらの戦果は空母「ワスプ」を3発の魚雷を仕留めて撃沈し、さらに戦艦1中破、駆逐艦1撃沈であった。

こちらも米海軍の猛反撃に遭い、潜水艦1隻が失われている。もっとも、空母1隻とその艦載機60機近くを海の底へと送り込んだのであるから、大戦果には変わりない。

この潜水艦による攻撃は薄暮攻撃となり、比較的短時間で終わった。しかしその損害は米英側にとってはとても無視できるものではなかった。特に致命的であったのが輸送船団を守る護衛空母が多数失われたことで、船団の上空援護がほとんどなくなってしまったことである。

ことここに至り、フレッチャー中將は作戦の中止を命令せざるを得なくなった。この命令を出したのは前記の潜水艦による被害もあるが、同時に行われたジブラルタル上陸作戦の苦戦や、フランス艦隊の急速接近もあった。

この時上陸部隊はまだ上陸をはじめておらず、船上で待機中だった

た。このため、いつでも撤退できる態勢にあった。

上陸予定だった兵士たちは不満であったが、フランスの戦艦が接近している以上ここに止まっている理由はなく、船団は先に離脱していた機動部隊を追う形で全速での遁走を開始した。

この撤退により、兵員輸送船はその護衛艦と共に現場海域を無事離脱できた。これは兵員輸送船の多くが高速客船の改装船であったことで、一部の船は30ノット以上、その他の船でも20ノット近い高速での移動が可能だったからだ。

逆に低速で20ノットも出ない護衛空母や旧式戦艦は不運だった。これらの艦艇は足が遅いことに加えて、救助作業を行い損傷艦を守っていたため最後尾にいた部隊がフランス艦隊に捕まってしまった。

この時フランス艦隊に立ち向かったのは戦艦「ネヴァダ」、「ペンシルヴェニア」、「オクラホマ」の3隻で、いずれも近代化改装を終えていたものの、主砲は36cm砲であり38cm砲艦のフランス艦隊に性能的に劣っていた。さらに数も3対4と劣勢だった。また付き従う艦艇も重巡2、軽巡1、駆逐艦5しかいなかった。

こうなると、もうどうしようもならない。米艦隊はフランス艦隊より勝るリーダーでもって勇敢な戦いをしたが、艦の性能で劣り数でも劣っている状況で勝つことなど出来るはずがなかった。

結果はフランス海軍の巡洋艦1隻、駆逐艦3隻を道連れに1艦残らずの全滅となってしまった。戦隊司令官のライト少将も旗艦「ペンシルヴェニア」と運命を共にして戦死した。

さらに米海軍の悲劇はこれだけに終わらなかった。ライト少将の

艦隊が捨て身で逃がそうとした損傷艦もフランス海軍の高速戦隊に追いつかれてしまい、護衛空母2隻と駆逐艦2隻が失われた。

同部隊も勇敢に行動し、特に護衛空母の「ガード」は残存する高角砲と機銃で反撃を行い、さらに数少ない駆逐艦も魚雷を投射して駆逐艦1隻を撃沈している。

だがそうした戦果も、全滅してしまつては何の意味もないことであつた。

結局、米英連合軍が画策した北アフリカ上陸作戦は枢軸海空軍の猛烈な反撃の前に大失敗で終わった。なんとかジブラルタルこそ確保したが、それも確保しただけで基地として再建できる目処は立たなかつた。

アメリカ力はドイツを始めとする枢軸国の恐ろしさを改めて認識させられることとなつた。ただし、アメリカ海軍にとって幸運だったのは確かに艦艇と航空機を多数失つたが、艦艇の損失自体は旧式艦艇や現在大量建造している艦艇で穴埋め可能な範囲で、また航空機もパイロットを多数養成しているので、3ヶ月程度で航空隊の再建が可能であつたことだ。

もつとも、世論を宥めるのには相当な苦勞を要することではあつたが。

対する枢軸国側は多数の空母や艦艇を動員したアメリカの国力に恐怖した。今回の戦いに勝利し、各国の国民は沸き返つたものの航空機や潜水艦の損害は非常に大きな物であり、枢軸各国に大きな衝撃を与えた。

このためドイツでは今海戦で大きな効果があつた誘導兵器の開発を促進させるとともに、新型機の開発がより促進された。また伊仏でも同様に新型機の開発と、新型艦艇の建造が進められた。特に空母の大威力をまたも目の当たりにした両国は、空母と艦載航空隊の整備を急ぐこととなる。

第二次世界大戦 11（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

第二次世界大戦 12（前書き）

ようやくこちらにも復帰です。以前ほどは書けませんが、よろしく
お願いします。

第二次世界大戦 12

北アフリカ上陸作戦の失敗は、アメリカの世論に大きなショックを与えたが、また世界中にも大きな衝撃を与えた。同盟国である日本やイギリスはその圧倒的な物量で被害は被つても、作戦自体は成功させるだろうと予想していたからだ。

しかしながら、独伊仏の連合軍は見事アメリカ軍に大打撃を与えて撃退している。さらにその撃退の際に新兵器を多数投入したことも連合軍には大きな衝撃であつた。

枢軸軍のこの強さの元凶は何であるのかは、明白であつた。それは枢軸軍が中東の豊富な石油を押さえたことと、ソ連との同盟関係の維持であつた。

この内ソ連との同盟関係は、当初ヒトラー總統のソ連嫌いから独ソ開戦が起きるのではという予測が為されていたが、結局の所ヒトラーはナポレオンの二の舞を踏まないよう慎重になつたらしく、未だにソ連とは友好関係を保っていた。

これにより枢軸軍は鉄や食料などをソ連から豊富に供給されていた。またドイツやイタリアからは見返りとしてソ連に艦艇や航空機が供与されていた。

このドイツやイタリアから供与された艦艇の一部は、ドイツ占領下のスエズ運河を通じてアジア方面と回航されている。結果ソ連太平洋艦隊は少しずつではあるが水上艦隊戦力を整備しつつあつた。また航空機もドイツからの直輸入や、技術供与によって高性能な機体をロールアウトしていた。

これらソ連軍の新戦備が活躍するのはもう少し先のことである。

一方、大西洋における戦いはまたも激しくなる兆候を見せていた。原因はドイツ海軍の投入した新兵器である。

開戦以来、英国を始めとする大西洋で活動する連合国商船はUボートと独艦隊に苦汁をなめて来たが、ようやく護衛艦や対潜哨戒機の数も整い、さらにアメリカの参戦のおかげで不足気味だった商船も、損失を生産の方が上回るようになった。

ところが、それも束の間。Uボートは潜行しながらでも限定的に吸気可能なシュノーケル装置を配備して潜行時間を以前よりも長くし、さらに新型の音響魚雷やFAT魚雷を配備してきた。

FAT魚雷とは一定の距離を走るとジグザグ航行を行う魚雷で、これまでの魚雷と違って一度かわしてもまた戻ってくるという特徴があった。もちろん、音響魚雷のような相手を追いかけていくほどの精密さはない。それでも、これまでの一度かわしたらそれでお終いとはならないのだから、攻撃される側にとっては厄介なことこの上ない。

さらにレーダーや逆探の技術も大きく前進したので、航空機や艦艇が近付くと潜ってしまい撃沈出来る率が下がってしまった。

日本海軍の戦場は喜望峰より東側であったので、幸い潜水艦の多くはどちらかという旧式で、さらに新兵器の配備も大西洋方面より遅れがちだった。そのため、米英より電子兵器の生産技術で劣る日本海軍も、対等な戦いが出来た。

しかし米英海軍はそうは行かず、再びUボートの跳梁に頭を悩ませることとなった。特にジブラルタルへ向かう輸送船団の被害は痛かった。

北アフリカ上陸作戦は失敗したものの、米軍は何とか地中海の入り口であるジブラルタルを占領した。しかしあくまで占領しただけで、基地としてはほとんど機能していなかった。常にスペイン軍の空襲にさらされ、戦力を増強しようにもUボートの攻撃で思うように行かない。

仕方がないので、米海軍では輸送船による大規模な輸送はあきらめ、平甲板駆逐艦改装の高速輸送艦によるネズミ輸送で細々と物資を運びこんだ。この輸送部隊は枢軸側からロンドン急行だのニューヨーク急行と嘲笑された。

当然ながら、ちつぽけな駆逐艦クラスの輸送艦であるから運べる物資にも限度がある。特に基地建設に必要な不可欠な重機の搬入は遅々として進まなかった。時折搬入できた機械も、枢軸空軍の執拗な空襲で破壊されたり、燃料不足で動けなくなったりする事態が頻発した。

これでは、ジブラルタルを奪回した意味など無いに等しかった。むしろ余計な補給先を増やしただけである。しかしながら、アメリカ政府はとにかくヨーロッパに橋頭堡を建てたことを盛んに宣伝して、国民の士気上げに努めた。

思わぬ戦況に焦るルーズベルト大統領率いるアメリカ政府は、最新鋭超重爆撃機B29や原子爆弾、新型のジェット戦闘機の開発を急がせると共に、既存の兵器によるUボートやドイツ軍が用いる新兵器への対抗策を急いだ。

この内米英が逸早く開発したのが、音響魚雷対策の「フィクサー」と呼ばれる妨害兵器である。この頃の音響魚雷は後のような細かい音の聞き分けが出来ず、あくまで大きな音に付いて行くだけであった。そのため、水中に大きな音を出してやればこれを船と間違えてしまう。

また日本で開発された新兵器も使えるならば積極的に採用された。電子兵器の生産技術で劣る日本であるが、それはあくまで量産技術の話だ。この時代の日本は優秀な飛行機や戦車、軍艦、そして電子兵器を設計し、開発するだけの技術があった。

ところが、それを大量生産するべき基礎工業力が大きく欠けていた。そのため試作品は高性能だが、量産品となると一気に性能が落ちるという事態があった。例えば飛行機のエンジンの場合、当初はパッキンの生産技術が未成熟なので油漏れが日常的に起きた。

電子兵器もそうで、無線機は雑音交じりで使い物にならない。レーダーや逆探用のコードも、試作品ではちゃんとした厚いゴムに覆われたものだったが、量産品ではゴムの輸入先の仏印が枢軸占領下であった時は、なんと和紙で覆うという策に出た。こんな物ではとてもではないが戦場では使えない。もちろん、これは直ぐに仏印が連合国側に落ち、さらにイギリスが同盟国として豊富なゴムを送ってくれたので短期間で済んだ。

日本側にとって連合国の一員となったことは、遅れていた基礎工業力を一気にアップさせるのに役立った。それまで欧米製の旧式工業機器と低い量産能力しか備えていなかった日本の工業界は、一気にアメリカから新型の工業機器を買い取り、生産技術を導入することで大戦後半には大幅な進歩を遂げていた。

これが後に工業立国日本の原型となるわけだが、それは今回の話とはあまり関係ない。

そんな日本で開発された画期的な新兵器の中に、MADと呼ばれる磁気探知装置があった。これは海中に潜む潜水艦を磁気によつて探知する装置で、日本独自のアイデアによるものであった。

インド洋で実戦投入されて効果が確認されると、さつそくアメリカとイギリスから購入要請が来た。日本はアメリカからは航空技術、イギリスからは電子・航空技術を供与される見返りとしてMADを輸出した。

その日本であるが、印度方面からイラン方面へと地上軍を進めたのは前述したが、一方で多数の潜水艦を派遣してペルシャ湾の海上封鎖も行っていた。

日本海軍の伊号潜は当初艦隊決戦の補助戦力として開発されたが、それが無理と分かった昭和15年ごろから通称破壊戦への投入と、それに併せた戦備の整備が計画された。

これが最新型の「伊15」型を始めとする乙型潜水艦で、イギリスの技術指導の下防音対策を施した最新鋭艦であった。

日本海軍潜水艦にはドイツのような音響魚雷こそまだなかったが、その代わり長射程で高速、大威力の酸素魚雷が配備されていた。また射撃指揮装置も多少大きめであったがアメリカ軍の物と遜色ない新型が配備されていた。

これら潜水艦は、ベンガル湾沿岸より紅海を経由してヨーロッパ

へと向かうタンカーや貨物船を狙い撃ちにした。

標的の数がそれほど多いわけではなかったので、戦果自体は微々たる物であったが、枢軸軍に大きなプレッシャーを掛けたのは確かであった。

そしてインド洋の戦いでは、日本側の新たな戦力も投入されていた。

第二次世界大戦 12（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第二次世界大戦 13

昭和18年6月、印度方面から中東へと向かった日本陸軍部隊は、じりじりとはあるが印度方面と進撃していたドイツ軍を押し戻していた。これは日本側が海軍の総力を上げて行った海上補給作戦が功を奏したことで、空軍力が敵よりも勝っていたからだ。

この時期の日本陸軍の主力戦闘機は川崎が開発した和製スピットファイアと呼ばれた「飛燕」だった。「飛燕」はライセンス生産したマリンエンジンを搭載し、高い急降下性能と防御力、攻撃力、そして何よりもドイツ軍機より長い航続力を持っていたため、ドイツやイタリア空軍機を圧倒した。

また同方面には海軍航空隊も進出していた。この中でも海軍の対潜哨戒機「東海」は低速ながら、長い航続力と磁気探知機に電探、爆雷を搭載して枢軸海軍潜水艦を攻撃していた。

枢軸空軍機や艦艇にとって予想外だったのは日本軍機の足の長さで、枢軸軍機では到底進出出来ない海域や水域に現れて攻撃や対潜哨戒を行った。

日本海軍の対潜哨戒飛行隊は、専用機の「東海」のみならず旧式化した陸攻や艦攻、さらに水上機や飛行艇もまで投入されていた。その基地数も膨大で、セイロン島やモルディブ諸島、さらに印度亜大陸西岸各地に設けられていた。

印度亜大陸の部隊の場合は潜水艦対策のみならず、敵が秘密裏に魚雷艇などを沿岸部に送り込んでいないかも偵察した。実際以前起きた海戦ではイタリア海軍が秘密裏に魚雷艇を送り込んでいたし、

この時期も1、2という少数であるが、スパイ商船や潜水艦を使って送り込まれた魚雷艇が活動していた。

こうした魚雷艇対策に、日本側の機体には機体下部に斜め銃を搭載するようになった。この斜め銃に関しては、当時セイロン島に進出していた海軍航空隊副司令の小園中佐が発案したとされている。

ちなみに、この斜め銃は地上攻撃にも効果があるとされて陸軍でも用いられている。また海軍でも魚雷艇対策の他に、航空機の脅威に対抗するため対空兵装を大幅に強化したUボート攻撃でも威力を発揮した。さらにドイツ軍が4発のHe 277重爆撃機を投入して以降は、それによる夜間爆撃迎撃に使用されている。

また斜め銃は同時期に、イギリスの夜間爆撃迎撃にも用いられ始めたため、一時期両軍ともがそのアイディアを盗用されたと真剣に疑ったが、これは単なる偶然であったようだ。

さて、じりじりと日本軍が中東へと進撃することはヒトラーやムッソリーニの危機感を当然のごとく煽った。まあ印度への進撃が止まってしまったのは止むを得ないでしょう。しかしながら、せっかく占領した中東の油田を奪回されることは、枢軸国にとって大きな打撃となる。

そのため、日本軍が印度国境を越え、中東へと進むたびに枢軸軍の兵力は大きくなっていった。もちろん、日本側もそれに対抗する形で兵力を増員したわけだが、必然的に補給物資も多くなる。

だから動員される船舶も増えるわけで、セイロン島から印度・イラン方面にいる前線部隊へと補給物資を運ぶ船舶数はかなり増えた。

これを通商破壊に長けているドイツが狙わないわけがなく、また日本海軍側もそれくらいのはしつかりと見抜いていた。

開戦以来、日本海軍の対潜作戦は大成功と言えた。喪失する船舶数をゼロに抑えることは流石に出来なかったが、その数は許容範囲（つまり補充が利く範囲）に納まっていた。

しかし補給線が延びることは護衛する距離が長くなり、攻撃する側には襲撃出来る地域を広くし、逆に護衛する側には負担を大きくさせる。

日本にとって幸いなことに、米英が同盟国であるため補給物資には困っていなかった。それどころか、両国の優れた技術が入ってくるため、日本本土は空前の戦争景気に沸いていた。

しかし、それは戦争が少なくとも自国経済に打撃を与えない範囲でこそ言えることであり、この後もその状態が続くとは限らない。特に船舶の喪失は日本経済の根幹である輸出入を壊滅させる可能性があるため、なんとしても最小限に抑える必要があった。

また日本としてはソ連の動向も気になった。一時期中央アジア方面から南進する動きを見せたソ連だが、現在その動きは止まっていた。イギリスのみならいざ知らず、日本やアメリカと事を構えるのは得策ではないと考えたらしい。

しかしながら、ソ連は着々と力を蓄えているのが確認されている。これまで旧式と呼ばれていた空軍は新型戦闘機の開発と配備を促進していたし、陸軍では優秀なT34戦車への更新が行われていた。また海軍も、ドイツやイタリアから艦艇を輸入しつつバルト海や黒海の造船所で新鋭艦艇を建造しつつあり、その一部は極東に回航さ

れていた。

イギリスやアメリカは、ソ連がドイツと同調してヨーロッパの戦争に介入しないか警戒していたが、日本としてはソ連が満州や樺太方面から侵攻して来ないか心配していた。もしそれが有り得るとしたら、ドイツに対して不利な戦況に置かれる時と日本側では読んでいた。

ちなみに米英が同盟となったため、満州国の地位が問題となった。そのため中国国民党政府などを交えて何度か議論を持たれ、結局中国本土の平定がなった時点で帰属を決める総選挙を行うものとするということと決着した。この選挙が行われるのは実に12年後の1955年となる。

だからこの時点で満州国は、以前と同じく日本側の傀儡国家であった。しかしながら、多数の米英企業が進出しており、日本側としても何もしないわけにはいかなかったらしく、以前にも増して現地人の政府や軍への登用を進めることでお茶を濁した。

また米英からの軍事顧問の採用やアメリカ製兵器の採用も行われ、満州国軍はソ連軍対策に短期間で近代的な装備へと一新された。

さて、印度・中東方面へと話を戻す。日本側の長大な補給線に目を付けた枢軸軍であったが、潜水艦による攻撃は日本側の高い対潜レベルのため大規模な戦果を上げるには至らなかった。かと言って水上艦隊は二度も大敗北を決しているため、今後投入しても勝ち目は薄いと考えられていた。

そのためドイツ海軍では印度方面への新兵器投入を積極的に進めることが決定された。それまで主に大西洋のみで使われていた音響

魚雷やFAT魚雷をインド洋やアラビア海にも投入し始めた。1943年8月のことである。

この効果は靦面で、日本側の護衛艦艇や商船に損害が出始めた。たった1週間で損害は2倍近くに跳ね上がった。

もちろん、この事態は日本海軍を大いに怖れさせた。このままでは護衛艦や商船の被害が許容範囲を超えてしまう。

そのため大至急大西洋から資料が取り寄せられて、新兵器対策が行われると共に、積極的な潜水艦狩りが行われるようになった。具体的には護衛空母や護衛駆逐艦、海防艦の大量投入で対潜狩り戦隊を作り、こちらから潜水艦を狩る方法である。

この作戦は9月の下旬から始まり、基地航空隊との連携で大きな効果を上げた。それどころか、護衛艦や商船の被害は以前の水準以下にまで下がった。

ところが、11月になると今度はドイツ空軍が航続距離を長くした戦闘機や爆撃機を配備して船団への攻撃を活発化した。こうなるともうイタチゴッコである。

そこで日本海軍は、敵の大元を叩く作戦に出ることにした。具体的には機動部隊によるペルシャ湾方面への進出と、それによって中東にある敵空海軍基地を撃滅する作戦である。

日本海軍は護衛戦力の拡充に努めてきたが、機動艦隊も戦力強化を図っていた。旧式となった大型空母「赤城」「天城」を退役させる代償に、新鋭の装甲空母「大鳳」「白鳳」が配備され、また米国から購入した「エセックス」級空母の「鳳翔」「瑞翔」も配備を終

えていた。

これに加えて、最新鋭攻撃機の「流星改」や新鋭艦船「烈風」も配備されており、内実共に一新していた。

アラビア海にまたも鉄と炎の嵐が吹こうとしていた。

第二次世界大戦 13（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

日本の海運事情

再びインド洋で日独海軍の熱い戦いが始まるうとしていたが、その前に第二次大戦前後の日本の商船事情について話したい。

話は遡ること10年近く前、昭和初期のことである。当時の日本はその後の時代と同じく、商船が国家戦略の大きな要であった。それらで運ばれてくる石油を始めとする様々な資源、そしてそれらが海外へと送り出す加工製品（その多くは繊維などの軽工業）なくしては、日本という国家自体成り立たなかった。

しかしながら、その頃の日本の商船事情と言うのは決して良い物ではなかった。何故なら当時の日本の各商船会社の中心船舶は、いずれもアメリカやイギリスの商船に比べて老朽化した旧式船ばかりであったからだ。

これらの船は明治や大正期に建造された船も多く、必然的に様々な面で陳腐化や老朽化が進んでいた。特に船足の遅さは大きな影響を与えた。誰だって荷物を運ぶなら速い船を選ぶからだ。

当時の日本の海運業界は、第一次大戦後の造船不況から脱することが出来ず、新規の建造を渋る傾向にあった。その後中国大陸での散発的な紛争や、満州事変が起きたものとても戦争景気をもたらすようなものではなく、海運業界の状況は一行に改善する気配がなかった。

そこで昭和7年になって、日本政府が動くことと成った。当時の世界はアメリカ発の世界恐慌に苦しんでおり、政府の介入による公共政策が望まれていた時代である。日本もそれを行ったわけだ。

日本政府が行った政策は『船舶改善助成施設』というもので、老朽化した旧式船を解体して、新しく高性能船を作る場合は補助金を出すと言う、所謂スクラップ・アンド・ビルトだ。

各商船会社は早速これに飛びついて、老朽船と新型船の代替を進めた。しかしながら、この施設で造られた船は間もなく日中戦争が起きると兵員や物資を輸送する船として次々に徴用された。これは軍との間で、助成施設を受けた船は優先的に徴用されると言う暗黙の同意が存在したからだ。

しかしこの日中戦争では、日本側の予想を裏切って中国海軍潜水艦が大活躍して、中国大陸と日本の間を結ぶ日本の輸送船や艦艇を次々に撃沈した。

幸いと言えるのは、この中国海軍の攻撃は当の中国海軍潜水艦の数が限定的なこともあって、喪失商船の数はそこまで多くなく、さらに資源を運ぶ船に対する損害はほとんどでなかったことだ。だから日本を根本から揺るがす事態とはならなかった。

しかしながら、商船会社から見れば日本の命運云々を抜きにしても堪ったものではなかった。何せ数は少なくとも折角造った商船が、まともに荷を運ばない内に撃沈されたのである。これでは大損としか言いようがない。さらに日本経済にとっても悪影響以外の何物でもない。

商船の喪失によって陸海軍（特に海軍の連合艦隊）が大きなショックを受けたように、海運業界にとってもこれは大きなショックであった。

そのため、日本政府はその後第5次までの「船舶改善助成施設」に加えて、より施策の対象を拡大した「優秀船舶助成施設」を行って商船の代替建造を続行させた。

これによって大型でしかも高速、さらに船内の設備も忠実した貨物船や客船、さらにはタンカーが多数建造された。

ちなみに10年近く続けられたこの施策、単なる経済刺激策という訳ではない。特に「優秀船舶助成施設」の場合は、陸海軍が設計や建造に深く関わっている。

これは今後起きるであろう戦争（対米か対ソかは不確定だったが）において、海軍が保有する艦艇だけではとても戦力として間に合わず、日露戦争や第一次大戦と同じく優秀な商船を特設艦船として、戦闘艦艇に仕立て上げる魂胆があったからだ。

そのためこの「優秀船舶助成施設」で造られた船の中には、やはり高速で大型の客船や、やはり商船としては不相応な高速性能を持つタンカーや貨物船がかなりの数混じっていた。

これらは戦時には、空母や特設巡洋艦、艦隊給油艦として使用されることを前提に建造されていた。実際客船の場合は、上部構造物の仕切りなどが改装すると航空機用エレベーターがはまる様に設計されていたりした。

日本の商船改造空母は、当初艦隊決戦にも使える本格的な改造が計画されていた。ところがこの場合だと商船会社からの買い上げとなり、例え喪失しなくても莫大な予算が必要となる。さらに航空機の進化によって、小型空母では満足に航空機が運用出来ない。さらに商船としては高速だが、軍艦としては低速の中途半端な速度しか

出せないため、この計画は最終的に没となり、アメリカ式の簡易改造に留めている。

また陸軍でも、この「優秀船舶助成施設」を使って強襲揚陸艦や上陸艇の建造を行っている。ただし、これは別に戦時になつたら徴用して員数を合わせるといふ海軍の考えとは全く違い、単に陸軍では保持できない（つまりは運用する人間がいらない）ために、民間に作らせたのである。

これらは外見こそ商船の体裁を取っていたが、内実は上記したとおり軍隊専門の輸送船であつた。（実際には災害救助でも威力を発揮した。）ただしその運用は陸軍から委託を受けた商船会社が行っていたから、商船と言えなくもなかつた。

これらの陸軍船舶はその後の第二次世界大戦において、正式に陸軍に買い上げられて陸軍船舶部隊の所属となっている。

とにかく、こうした施策のおかげで一回は躓いたかに見えた船舶の更新は再び促進され、開戦直前の1941年12月時点では、日本の海運業界は優秀船を中心にして750万総噸の船舶を保有するに至っていた。

船舶の建造と並行する形で、台湾や朝鮮、満州と言つた日本の勢力圏内の港湾や造船施設も整備された。当然これらの施設も、軍事転用を前提にしていた。

しかし第二次世界大戦は予想外なことに、日本の敵はドイツとなつた。確かにドイツ海軍は商船にとって手強い敵であつたが、日本が直面した戦線はインド洋方面の一部のみであつたため、商船やそれを守る海上護衛総隊の被害は、幸いにも許容範囲で済むこととな

った。

さらに例え損失が出て、同盟国となったアメリカから大規模な商船や護衛艦艇の買い付けが可能となった。そのためアメリカから多数のリバティー船が購入されている。

アメリカの戦時標準船であるリバティー船は、日本で試験的に造られた戦時標準船よりも総合的に優秀であった。特に高い量産性と当初は5年と言われながらその後一部の船は数十年も使われた頑丈さは特筆に価する。

アメリカの恐るべき所は、このリバティー船をじつに3000隻近く量産したことだ。この数は大戦後半、エレクトリック・ボート等の新兵器を多用して再び威力を盛り返したUボートによる損失を埋めるには充分であった。もちろん多数の軍艦や護衛艦艇を造ってこの数字である。日本の海軍や海運業者の人間が、「いくらアメリカでもこんなに造れるはずがない！」と言わしめたほどだ。

しかしながらこれは紛れもない事実で、戦後逆に船が過剰になる事態となっている。何せ当時大量の商船を喪失していたイギリスさえ1000隻近い戦時標準船を建造しているのである。当然と言えば当然だった。

おかげで日本の海運業界は戦時標準船の建造はわずか100隻程度に留め、その後も戦前と同じ手の込んだ船舶を建造し続けられた。

戦後の研究家の所見では、日本がもしドイツではなくアメリカと戦火を交えていたら確実に破滅の道を突き進んだと言われる由縁である。

とにかく、こんな感じで第二次世界大戦において、日本の商船業界はアメリカやイギリスが同盟国となったおかげで、大分楽が出来たわけである。

日本の海運事情（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

この世界では史実より日本がマシな状況にあるので、開戦時の船舶保有量が60万tあまり多いです。また書いていない漁船などの徴用も必要最低限の範囲で行っていませんから、特設監視艇のようなものありません。

戦線拡大 1（前書き）

超久しぶりの更新です。

戦線拡大 1

イラン方面における枢軸国軍を撃滅するべく、帝国海軍の機動艦隊が再びアラビア海へと向かった。艦隊は途中シンガポールとセイロンに寄港し、艦の点検や乗員の休養を行なった。

昭和18年11月のことである。この機動艦隊は松田千秋中将率いる新編成の第7艦隊で、正規空母「鳳翔」「瑞翔」と「蒼龍」「飛龍」の4空母を主軸とする日本海軍自慢の高速機動艦隊であった。「鳳翔」と「瑞翔」はアメリカから購入した「エセックス」級航空母艦で、100機近い艦載機を搭載することが出来る期待の新鋭艦であった。

日本海軍では新鋭の「大鳳」級の建造を進めてはいたが、海外の造船所を総動員してもこの戦争に間に合いそうなのは3〜4隻が限度であった。これでは老朽化していた「赤城」級の代替分を造るのが精一杯であった。

そこで、大きな工業力を誇るアメリカに注文したわけである。本来だったら最新鋭空母を売り渡すなど言語道断であるが、アメリカとしても海軍の兵員増強がすぐに出来る状況ではなく、さらに「エセックス」級の後継である「ゲティスバーグ」級空母の建造も進んでいたのです、売却に同意したのであった。

また護衛する艦艇も改「大淀」級軽巡である「石狩」級、改「秋月」級駆逐艦と言った最新鋭艦艇で固められていた。いずれも最新の電子機器、対空・対潜兵器を備えている期待の艦艇であった。

加えて艦載機も最新の2000馬力級エンジンである「誉」を装備した「烈風」、「流星改」、「彩雲」が装備された。

これに対して、マダガスカル方面で活動していた枢軸連合艦隊は出てくる兆候を一切見せなかった。以前の手痛い打撃が未だに堪えているようであった。

第7艦隊はセイロンでの補給と修理を終えると、そのまま北上してペルシャ湾へと向かって行った。同艦隊は陸軍航空隊と協力し、イラン方面のドイツ軍前線基地を壊滅させる任務を負っていた。

一方、地道に商船を守るためにシーレーン警備を行なう近海防衛艦隊の派遣艦隊はと言うと、この時期になって大きな厄介ごとを抱えるようになった。それがセイロンから喜望峰へと至るルートの警護であった。

さて、読者の皆様は良くわかっているだろうがこの時代のイギリスは世界中に植民地や租借地を持った植民地王国である。つまり、植民地に色々と依存しているわけだ。それは戦時下になっても変わらない訳で、アジアからインド洋と大西洋を経由して英本国へ向かうルートも非常に重要であった。

日中戦争で豊富な経験を積んだ日本の近海防衛艦隊であるが、名前にあるとおり本来の任務は本土並びに植民地や委任統治地域の警備が主任務である。

そのため慌てて戦力強化を図ったものの、その警備範囲を拡大できるのはせいぜい現在日本軍が外征軍を出しているシンガポール、セイロン、ボンベイ、イラン沿岸地域が限度であった。

ところが、それを御破算にしたのが6月に行なわれた英米軍を中心とした連合軍の北アフリカ上陸作戦、「トーチ作戦」の失敗であった。この戦いは諸外国に枢軸国の精強さを見せつけ、当然のことながら諸外国にインパクトを与えた。

これにより、ソ連や連合国陣営についていないその他の中立国の動きが枢軸よりなものとなり始めた。各国とも超大国アメリカとこれを構えるのを恐れているのか、すぐ参戦とは行かなかったが、明らかに枢軸に肩入れする動きを見せ始めた。

そしてそこで問題となったのが、南米諸国の動きである。ABC三国の内Bのブラジルは自国の客船がドイツに沈められたことと、戦前からアメリカとの強い結びつきがあったので既に連合国陣営に参戦していたが、Aのアルゼンチンは枢軸よりの中立国であった。またCのチリも中立であった。

アルゼンチンとチリに対しては、再三アメリカをはじめとする連合国が連合陣営としての参戦を促していたが、パワーバランスが微妙であったためどちらの陣営に付くか躊躇していた。もちろん、枢軸陣営も自分たちの陣営に取り込むのに躍起であった。

これらの国々が万が一枢軸陣営に立つて参戦した場合非常に都合が悪い。これら2国は独自の海軍を保有しており、戦艦や巡洋艦・潜水艦も保有している。さらに、その沿岸部を独海軍に提供されれば、Uボートの行動範囲が大きく広がってしまう。

ようやく新兵器の投入や護衛艦艇の忠実でUボートを抑え気味だと言つのに、その苦勞が水の泡、それどころかそれ以上に性質の悪い事態である。南大西洋で縦横無尽に暴れられたら堪ったものではない。

もしかしたらホーン岬を越えて太平洋方面へと出張ってくるかもしれない。そうになると、アメリカや日本にとっても非常に厄介である。

しかしながら、アルゼンチンとチリは日増しに枢軸側に賛同する動きを見せていた。「トーチ」作戦の失敗もさることながら、この時期ドイツ軍が再び通商破壊作戦で猛威を振るい始めていたのであった。

開戦当初、通商破壊作戦で猛威を振るった仮装巡洋艦や初期型Uボートについては既に連合軍側の封じ込めによって、それらの脅威は既になくなっていった。また新たな脅威となる高速Uボートが登場するのは44年2月のことである。

だからこの時期はUボートの脅威が一時的に減じた空白期と言える時期であった。しかし、ドイツ空軍と海軍水上艦隊がその空白を埋めることとなる。

ドイツ空軍はノルウェーやフランスの基地から長距離爆撃機He 277を飛ばし、それらに誘導弾を積んで輸送船団への攻撃を敢行した。この誘導弾は初歩的な熱探知装備を持つ物で、命中精度は無線誘導弾よりも低かったものの、爆撃機が戦闘機の攻撃を受ける前に投下し、そのまま逃げても敵に損害を与えうる兵器であった。

この新型誘導弾により、短期間で10万tあまりの商船と10隻の護衛艦艇が沈められてしまった。対するドイツ空軍の喪失は逃げ遅れて撃墜された3機のみという完勝であった。

もちろん、ドイツ宣伝省は自国の科学技術の勝利としてこの戦果

を大々的に発表した。

またバルト海に引きこもり気味であったドイツ本国艦隊も時折アイスランド方面へとゲリラ出撃を行い、アイスランドへ向かう船団などを叩いた。時には艦載機を持ってアイスランドの米軍基地を攻撃した。

この頃のドイツ本国艦隊は、旗艦である40cm砲8門を持つ「フリードリヒ・デアグロッセ」をはじめとして戦艦4、巡洋戦艦2、航空母艦3隻というそれなりに有力な艦隊に成長していた。

これに対してスカパフローを根拠地とする英本国艦隊も出撃したが、結局ドイツ艦隊を撃破できずに終わった。それどころか、出撃した戦艦「ロドネイ」と「ネルソン」が逆にドイツ軍によって沈められるという有り得ない失態を起こしている。

ドイツ艦隊を追っている内にドイツ空軍に捕捉され、御自慢の誘導弾攻撃を受けてしまったのである。空母と行動を共にせず、戦闘機の援護が付いていなかったのが原因である。

ドイツ水上艦隊を弱兵力と舐め切って、しっかりとした機動艦隊を組まなかったツケを払わされたのである。

そして何より、この相次ぐ連合軍側の敗報は南米諸国の枢軸への傾注をより進める事態となった。チリはまだなんとかなりそうであったが、アルゼンチンがドイツと戦う決意を決めるのは時間の問題であった。

そのため、英国海軍は南大西洋方面での商船警備を強化し、さらにフォークランド諸島へも戦力を抽出した。

当然ながらそのしわ寄せはどこかへと来るわけで、インド洋や太平洋方面の英海軍力が抽出させたのであった。

英国はその穴埋めを日本海軍に依頼したのであった。

本来ならそこまでやってやる義理はないのであるが、英国が危ない状況に陥っているのは日本側も知っていた。この時期ドイツはイタリア・フランスと協力して再び英本土爆撃機を開始し、同国の重爆撃機基地や飛行機工場・造船所へじわりじわりと被害を与えつつあったのだ。

アメリカ海軍も幾らかの戦力を支援のために派遣すると発表したので、しぶしぶ日本海軍は近海防衛艦隊の1個巡視隊をこの方面へと投入したのであった。

新鋭の「松」型駆逐艦「雛菊」と大型海防艦2隻、護衛空母1隻、フリゲート中型海防艦4隻が第一陣として、セイロン・ケープタウン間の船団護衛へと入ったのである。

戦線拡大 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 2

昭和18年11月に陸海軍合同で開始されたイラン方面への攻勢作戦は、ホルムズ海峡で敵の機雷に触れ、さらに潜水艦の襲撃を受けた空母「蒼龍」他艦艇数隻の喪失と、航空機100機あまりの喪失を代償に、同方面の枢軸空軍基地に大損害を与え、陸軍部隊は大きく前進することに成功した。

一方、近海防衛艦隊が新たに行なうこととなった喜望峰方面への護衛作戦は、開始早々大きな損害を被ることとなった。

第一回目の任務は、セイロン島からインド産の製品を積んだ船団を喜望峰まで護衛するというものであった。同船団は貨物船を中心とする16隻あまりで、これを近海防衛艦隊の駆逐艦1隻、大型海防艦2隻、中型海防艦4隻、護衛空母「白鷹」が護衛する。

護衛艦隊指揮官は近海防衛艦隊で駆逐艦艦長や巡視隊長を務めてきた老練の北里幸助大佐だった。旗艦は「松」型駆逐艦の「雛菊」である。

ちなみに、大型海防艦という長距離船団護衛、ならびに悪天候下の搜索作業を想定して建造された艦で、大きさとしては「松」型に準じていた。ただし魚雷発射管はなく、対潜・対空装備に特化していた。対する中型海防艦と言うのは、従来型の1000t未満の海防艦のことである。

さらに500t未満の極地用海防艦も計画されたが、こちらは後に海防艇となったため、小型海防艦と言う名称は使われずに終わった。

同部隊は11月12日にセイロン島のコロンボ軍港を出向し、10ノットのスピードで西進した。

この時期、セイロン島近海とセイロン島から東側の海域は基地から発進する対潜哨戒機、魚雷艇や駆潜艇の活躍によりUボートの活動は低調であった。

しかしながら、そこより西側は枢軸軍がマダガスカル島を抑えている関係上Uボートや長距離爆撃機の活動が活発であった。この内Uボートは未だに懸念すべき材料であった。

インド洋方面では、未だ最新式の音響魚雷やFat魚雷がつかわれた形跡がなかったものの、ドイツ海軍がいつ投入してもおかしくない状況であった。

近海防衛艦隊ではこの点を懸念していたのだが、その悪い予測は当たってしまったのであった。

出港3日目の夜、船団の左側を走っていた大型海防艦の「パラオ」が敵潜水艦らしき通信を傍受した。敵潜水艦が船団を探知し、仲間を呼び寄せている兆候であった。

これを受けて北里大佐は直ちに全護衛艦と船舶に警戒を促すと共に、戦闘配置を下令した。さらに護衛空母の「白鷹」から対潜哨戒機の発進を命じた。

「白鷹」は護衛戦闘機と対潜哨戒機を合わせて18機搭載しており、機種は戦闘機が零戦で対潜哨戒機が夜間飛行も可能な練習機改造の「白菊」であった。

同機は発進すると直ちに磁気探知機を使って、敵潜水艦の搜索を始めた。すると、30分後に最初の反応があり、爆雷を投下した。

この時の戦果は夜間であったこともあり、判然としなかった。油や破片が浮いてもわからないからだ。

その直後、船団右側を走っていた貨物船の1隻が船尾に被雷した。護衛艦と対潜哨戒機の注意が左舷側に向けられた隙を衝かれた形となった。

貨物船は間もなく沈没し、付近の艦船が救助作業を開始した。

北里少将は敵軍が群狼戦術を仕掛けてくると判断し、「白鷹」からさらに3機の対潜哨戒機を発進させ、さらに護衛艦に対して積極的な搜索を命じた。

結果さらに1隻の潜水艦が対潜哨戒機によって探知され、爆雷による攻撃を受けて撃沈された。これはドイツ側も把握したので確実であった。

しかし、その5分後にさらに貨物船2隻が被雷した。しかもまたしても船尾に。明らかに音響追尾魚雷によるものであった。

この時、護衛艦隊は音響追尾魚雷用兵器である「フィクサー」をまだ装備していなかったため、対策の採りようがなかった。

そのため護衛艦が付近海面への警戒を強め、敵電波探知から2時間後によやく1隻をソナーで探知し、爆雷とヘッジホッグ攻撃を加えて撃沈した。

ところが、その努力をあざ笑うかのような事態が起きた。空母「白鷹」の被雷である。同艦は左舷側に2本の魚雷（これは命中箇所からして通常魚雷）を受けて大破、激しく炎上して2時間後に沈没した。

「白鷹」の撃沈で満足したのか、潜水艦はその後攻撃してこなかった。

最終的に、船団はなんとか喜望峰に到達した。このまま貨物船やタンカーはさらに大西洋へと入り、北上することとなる。一方、日本の護衛艦隊はここでイギリスの護衛艦隊にバトンタッチする。

最終的な被害は護衛空母「白鷹」喪失、商船3隻喪失、乗員と船員の死者300名を出した。加えて、「白鷹」に搭載されていた艦載機は1機残らず海に沈んでしまった。

対するUボートの被害は、たったの2隻。その他に、1隻が爆雷攻撃で損傷していた。これを撃破として数えても、被害はたったの3隻。人員の損害は100名に行くか行かないか程度である。

何より、当たり前のことだが3隻の商船が積んでいた数千tに及ぶ物資はすべて海の底へと沈んでしまった。たかが3隻、されどこの3隻の積荷は決して軽視できる問題ではない。

船団を守れなかったばかりか、護衛空母「白鷹」を失った北里大佐は罷免も覚悟したが、幸いにも今回は敵が新型魚雷を使ったことなので不可抗力とされた。

ただし、近海防衛艦隊を始めとするアラビア海方面で活動する部

隊のショックは大きかった。この時点で、この方面の部隊には音響追尾魚雷に有効な「フィクサー」が1基もなかったからである。

ちなみに「フィクサー」の原理は極々単純で、船尾から海中に音を流す装置を引っ張るだけのものである。

後の時代には、1艦1艦のスクリー音をインプットする所までに音響魚雷（ホーミング魚雷）は改良されるが、初期のものは単に音を追っかけるだけの物だった。

そのため、別に音を出せば容易に回避できる代物だった。ドイツ海軍が必死こいて開発した（当初は発射した潜水艦のスクリー音に向かってくるので大変だった）割には、その対策はシンプルだった。

しかしながら、その装置がなければやはり危険なことに変わりはなく、近海防衛艦隊はそれまで音響魚雷に打つ手なしという、苦しい立場に追い込まれた。

ちなみに、この方面に「フィクサー」が投入されたのは昭和19年1月で、この2ヵ月後のことであった。その2ヶ月の間に、実に駆逐艦1、大小海防艦3、商船7隻（日本籍のみ）4万2000t総トンを失うと言う大損害を追ってしまった。さらに撃破された艦艇もほぼ同数発生した。

それに対して、この期間に失われたUボート（伊仏艦含む）はたったの6隻。

日露戦争以来の教訓の下、シーレーンを守ることに専従してきた近海防衛艦隊の完敗であった。

その後フィクサーが配備されたことと、長距離哨戒可能な基地航空機や飛行艇が配備されたおかげで、一時的にこの方面でのUボート被害は減った。

しかしながら、今度はドイツ空軍の新型兵器である誘導弾がマダガスカル方面にも配備され、そちらによる被害も出始めた。

近海防衛艦隊は新たに駆逐艦に各種海防艦、護衛空母「黒鷹」、
「赤鷹」を送り込み、さらにそれらに翼の折りたたみ機構を改良した「烈風」を載せた。

こうしてドイツ側が新兵器を繰り出せば、日本側も対策を施すと言いつタチゴツコが続けられた。

この状況を打破するためには、少なくともアラビア海の制海権を取り戻す必要があった。そのためには、敵潜水艦と空軍の活動拠点となっているマダガスカルを攻略する必要があった。

しかし、この時期マダガスカルには枢軸軍各軍の将兵8万に加え、空軍機も600機近くが配備されており、とても日本の力では攻略不可能であった。

年が明けて昭和19年2月を迎えると、戦況は再び混沌とし出した。ドイツ海軍が新型Uボートであるエレクトリック・ボートを投入したため、下火になったかと思つたUボート被害が激増しはじめたのである。

この時までにはUボートの穴を埋めるべく大西洋で暴れまわったドイツ水上艦隊は、英海軍の必死の防戦によって巡洋戦艦「シャルン

ホルスト」を喪失するなどの犠牲を出していたが、見事その任務を果たしたのであった。

ドイツ海軍は水上艦隊をドイツ本土へと戻すと、新たに竣工した改「ビスマルク」級の「モルトケ」級（40cm砲搭載艦）を配備し、戦力拡充に努めた。

これらの戦力を大元から破壊する戦略爆撃も、ドイツ空軍が優秀なTa152、Fw190D、Me262、He217を急速配備したため、思うように戦果を上げられず、それどころかB24やB17の性能不足が露呈する格好となり、米軍はB29の配備を急いだ。

戦線拡大 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 3

昭和19年2月、ドイツ海軍は北大西洋方面においてこれまでにない高性能な潜水艦を投入した。それが新型のXX?型である。

この時代、潜水艦は可潜艦とも呼ばれていた。これは「潜水」とこそ名前が付いてはいるが、実際には潜水出来る時間が極端に限られていたからだ。また潜水した場合の最高速力も10ノット程度というお粗末な性能しか備えていなかった。

これは水中では排気システムの関係上主動力たるディーゼルエンジンを起動させることが出来ず、電池のみしか使えないことに由来する。これを抜本的に解決するには、水中で莫大な酸素を人工的に作り出すか、酸素のいらないシステムを開発するしかない。戦後採用された原子力エンジンは、こうした問題を解決する一つの方法であった。

それでも、海の中に姿を隠すことと対潜兵器の性能が不十分であったがために、第一次大戦時から第二次大戦中盤まで大きな戦果を上げてこられた。しかしながら、いつまでも敵がその跳梁を許す筈がなく、周知の通り連合軍側も優秀なレーダー・ソナー・ヘッジホッグ・磁気探知機・対潜哨戒機を開発して、潜水艦の発見率と攻撃能力を大幅に向上させた。

つまり、第二次大戦も半ばを過ぎた昭和18年ごろには潜水艦の攻撃力や隠密性は大幅にダウンしていた。そのため、Uボートの戦果もアメリカと日本が参戦して以降、輪をかけて下降線を辿り始めた。

もつとも、それで黙っているほどドイツ人は柔ではない。科学とは日進月歩であり、戦争は敵がいて何ぼである。敵が対抗策を講じるなら、こちらはさらにその裏を掻いて一步先に行く、少なくともそれを目指すのが道理である。

ドイツ海軍も前大戦で最終的にUボートの戦果が乏しくなったことを忘れてはいなかった。その屈辱を何倍にしてお返しするのが今大戦であった。だから、連合軍がUボート対策を早々と打つであろう事ぐらい予測できていた。

そのため、大戦が勃発するとUボートの技術者たちは既存艦の改良を行なって性能を限界にまで引き上げつつ、革新的な性能を持つ潜水艦の開発を急いだ。

ドイツ軍の新兵器開発の中には、明らかに成功の見込みのないものや用兵側の無定見さ故に開発が遅れたものが存在した。極めつけはどうみても、科学者の道楽や指導層の自己満足的な物まであった。こうした物の多くは当然ながら実現性が低く、例え実現したとしても対費用効果が全く成り立たない物であった。

そうした一方で、堅実な考えを持つ人や未来を見据えつつも常識の範囲内の思考を持つ人も当然ながらいるわけで、幸いなことにこの世界のヒトラー総統はそうした人々に理解を示す人（つまりはある程度の現実主義者）であった。

そのため、先に挙げた火葬兵器のような代物の多くは机上のペーパープランで終わるか、実験的な開発に留められた。その中でA6ロケットをはじめとして、細々と研究を続けながら10年後において開花した物もなくはなかったが、大方は先に記したように作らなくて良かったと言うのが妥当であった。

こうした無駄な兵器の開発が削られた分、堅実もしくは実現性が高く用兵から望まれている兵器の開発が促進された。その典型的な例が昭和18年後半から実戦配備された高性能なジェット爆撃機、長距離爆撃機、海軍の水上艦船、陸軍の突撃砲であった。

新型のUボートもその中の一つと言えた。ただし、XX1型は厳密にはそこまで革新的な潜水艦とはいえない。

当時のドイツ海軍ではさすがに原子力機関は無理であったが、ヴァルター教授の唱えた理論である過酸化水素を使用した、非大気使用システムを乗せた潜水艦を開発中であつたからだ。

ただし、この所謂ヴァルター機関は確かに化学反応を用いることで機関に送り込む酸素を多く生産出来、潜航時間を長く出来るメリットがあつた。しかし、その分の機関容積が余分に必要になる。また過酸化水素という、強い酸性の液体を使うのも腐食などの安全性の問題が出る。

加えて革新的な技術を取り込むと言うことは、新たに兵を熟練させる必要があるなど、直ぐに新兵器が必要と言う戦時下においては少しばかり無理のあるものだった。

もちろん使えないことはないので開発は続行され、後に実戦配備もされるのだが、それは本当に戦争の終わり間際のこと、ドイツ海軍潜水艦の有終の美を飾るだけに終わった。

ではXX1型はどういう点ですごかつたのかと言えば、それはこれまででない優秀な点を基本を発展させたのにも関わらず持っていた点だ。

まず機関はこれまでと同じディーゼルプラス電池と言うオーソドックスな組み合わせだ。ただし、電池の容量がこれまでのUボートの実に3倍となったのが特徴である。当然ながら電池に蓄えられる電気の量が増えるのだから、潜航時間も増えることとなるし水中における出力も高くなる。

また船体の製作には大胆なブロック工法を導入し、在来型潜水艦よりさらに工数を抑え、生産性を向上させている。ドイツにとって幸いなことに、米英軍の爆撃機をこの時期は強力な迎撃戦闘機で抑え込んでいたので、このシステムを有効に活用出来た。

船体自体も、ヴェルター艦用に設計されていたものを流用している。実は電池を3倍に出来たのは、巨大な容積を必要とするヴェルター艦の特徴を生かした結果であった。さらにこの船体は後の時代の潜水艦に共通する水中抵抗を抑えた設計で、水中での速力16ノットを達成している。

おまけにこの流麗な船体は、被発見率を大きく下げるのにも貢献しているのだから恐れ入る。戦後米海軍が試したテストでは、米海軍の主力である「パラオ」級潜水艦が8ノットで出すレベルの音を、このXX1型は16ノットで出していた。つまり、2倍の速力で同程度の音しか出さない。

もっとも、確かにヴェルター艦に比べればオーソドックスな設計であったが、やはり船体構造を始めとして全く新機軸を採用していないわけではなかった。1年とか半年と言った長期間は必要ないにしろ、最低でも2〜3ヶ月間は乗員を熟練させる必要があった。

この期間こそ、ドイツ水上艦隊が巡洋戦艦「シャルンホルスト」

を犠牲にしながらも稼いだ期間であった。この間にこの新型Uボート第一期分12隻は大西洋やインド洋に比べて遥かに静かなバルト海で習熟訓練を行うことが出来た。

この世界ではドイツがソ連に参戦しておらず、ドイツ軍は東の敵を恐れることなく、連合軍との戦争を続けていた。

ちなみにそのソ連であるが、どさくさに紛れての中アジア方面からの侵攻が失敗に終わって以降は、表向き中立の立場を維持していた。

だがそれはソ連の野望が消えたことを意味しない。実はソ連はこの間も枢軸国（特にドイツ・イタリア）との関係を持っており、ヨーロッパへの不介入と食料や石油の輸出を行ないつつ軍事技術を取り入れていた。

この内陸上並びに航空技術のそれは著しい物があつた。特に傾斜装甲と強力な主砲を採用したT34戦車やカチューシャ・ロケットなど、逆にドイツが欲しがつた程だ。航空機もI16以降は凡作や駄作が続いていたが、Yak3戦闘機や？L2地上襲撃機などやはり欧米先進国並みの新型機を開発していた。

海軍についても、技術面では特に見るべき点はなかったが、ドイツやイタリアから技術や艦艇の購入を積極的に行い、さらにドイツやイタリアが諸外国で捕獲した艦艇まで買い込んでいた。もちろんこれらは即戦力になるとともに、ソ連の新型艦開発に役立てられた。

そのため、1944年初頭時点においてソ連海軍は3年ほど前とは見違えるまでに増強されていた。特に、ウラジオストック配備の太平洋艦隊は、新鋭巡洋戦艦「キエフ」を旗艦として大幅な増強を

なされていた。

ソ連も南米諸国と同じく、連合国が不利になった場合は枢軸国として宣戦布告する腹積もりであった。特に、軍事力の増強がなった1944年頃はその意思が顕著に表れていた。そのため、日本（厳密には満州国）との国境線付近の軍隊を増派しつつあった。

このソ連の参戦をXX1型の竣工は勢いづけることとなった。

1944年2月、XX1型の1隻である「U2511」は、バルト海からフランス沿岸基地を経由して中部大西洋方面に出撃した。

出撃1週間後、同艦はイギリスへ向かう輸送船団を発見し、その静粛性と高機動力を持つての襲撃戦を行い、護衛駆逐艦1隻とタンカー1隻、貨物2隻をそれこそあつという間に撃沈してしまった。そして狼狽する敵残存護衛艦を尻目に、まんまとその海域を離脱した。

同船団には護衛空母がいたものの、潜航時間が長く潜航深度も深い「U2511」を撃沈できなかった。これまでのUボートと同じ性能と考えて哨戒にあたったことが仇となった。

また護衛艦艇も、当初は1隻のみの襲撃とは思わず周囲に散って搜索したのが、結果的に逃がす遠因となった。

しかも「U2511」の伝説は、その後もう1回襲撃を行い護衛空母「ブロック・アイランド」、駆逐艦1隻、商船3隻を沈めたことである。同艦は初陣にて撃沈9隻、合わせて4万5千tあまりを撃沈したのである。

これは久しぶりの大快拳であり、艦長のシュネー大尉は帰還後昇進と勲章授与と言う名誉を授かっている。

そしてこれ以後、再度のドイツUボートの快進撃が始まることになる。

戦線拡大 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 4

1944年2月、ドイツ海軍が投入した新型UボートのXX1型は再び連合軍を恐慌状態に陥れた。これまでの潜水艦に比べて水中において発する音が遥かに静かであり、動きも素早く潜航時間も長い。

すなわち、これまで潜水艦を狩っていた護衛艦や対潜哨戒機からすれば捕まえにくく、見つけても撃沈し難い船ということとなる。もちろん、Uボートにすれば以前の艦より攻撃し易くなったと言うわけである。

XX1型は「U2511」が単艦で護衛空母「ブロック・アイランド」を始めとする多数の艦船を沈めたのを皮切りに、各地で暴れ始めた。

わずか12隻の投入でしかなかったにも関わらず、1回目の出撃だけで撃沈は各種艦船26隻に上り、さらに撃破された艦船はその倍となった。対するXX1型は連合軍側に見れば未知の敵であったこともあり、2隻が軽い損傷を受けたのみであった。

つまり、XX1型の初陣は完全なワンサイドゲームに終始したわけ、当然ながらゲッベルス長官のドイツ宣伝省はラジオで声高にこの戦果を宣伝した。もちろん、XX1型の詳しいことには触れず、単に「画期的な新型潜水艦」とだけ報じた。

ドイツ国民、それに海軍兵士やUボートの関係者はこのニュースに狂喜乱舞したのであった。特にUボートの乗組員は、連合軍側が対抗策を造り上げた旧式Uボートから乗り換えられることに胸を膨

らませた。

一方、連合軍はこの新型Uボートに頭を悩ませることとなった。何せ静粛性や運動性がこれまでの概念からかけ離れているのだ。そのため、これまでの戦備や戦術の多くが役に立たなくなる可能性が出てきた。

特に低速な漁船改造の対潜トロールをはじめとする小型護衛艦艇やそれらに比べて大きく量産されている護衛駆逐艦、加えて商船改造の護衛空母も危なかった。これらの艦艇は速力が10ノット前半から20ノット前半程度しか出せない。これでは新型Uボートを逃すばかりか、逆に狩られてしまう。

また静粛性能が向上したと言うことは、聴音機もより精度の高い物が求められる。当然レーダーや磁気探知機もそうである。

対潜運動や対潜攻撃術も新型のUボートのスピードを想定した新しいものを作り、訓練を急がなければならない。でなければ、再び大西洋はUボートの天下となってしまう。

この件に関しては日本も同じであった。日本の護衛駆逐艦は取り敢えず30ノットは出るので良かった。しかしワンランク下の海防艦や駆潜艇などは、連合軍の同種艦と同じく速力が遅い（18〜24ノット程度）という弱点を抱えていたからだ。ただし日本にとって幸運なことは、主戦場であるインド洋にこの新型がやってくるまでに、まだ時間がありそうだということであった。

ただし、この新型Uボート配備までの時間的余裕は結局日本側にとってメリットがあるのかわからないものであった。なぜならついに枢軸よりの姿勢を見せていた南米のアルゼンチンが3月に、続い

て4月にはソ連が連合国に宣戦を布告した。

この両国の宣戦布告は、明らかに新型Uボートの活躍で再びドイツ側に戦局が傾き始めたことに触発されたことであつた。もちろん、連合国にとっては頭の痛すぎる問題であつた。

アルゼンチンの宣戦布告は南米にドイツ海軍の拠点が出来ることを意味し、これでUボートは南大西洋、アラビア海、インド洋、さらにホーン岬を回つて太平洋方面への活動を拡大できる。

そうすると連合軍側が哨戒すべき範囲は極端に広くなり、各国はこれまでに以上に対しボート戦力を投入する必要に迫られることとなつた。

またアルゼンチンにドイツの空軍や陸軍が進出すれば、連合国側についているブラジルとの衝突も有り得るし、今後の戦局によっては中立のチリが枢軸側についてしまうかもしれない。

そして日本にとって厄介だったのは、南米の宣戦布告ではなくソ連の宣戦布告であつた。何せソ連は日本のお隣であるから。

案の定と言おうか、ソ連軍は宣戦を布告すると早速樺太や千島、満州方面で作戦行動に移つた。この日のために戦力を大幅に増強してきた太平洋艦隊と極東ソ連軍が一斉に動き始めた。

ちなみにソ連太平洋艦隊は、日本軍による空襲を警戒して既にウラジオストクから出港し、北にあるペトロハヴロフスク・カムチャツキーに移動していた。

さすがに海軍力、特に水上艦隊戦力では増強したとはいえ巡洋戦

艦1隻、重巡洋艦4隻程度の太平洋艦隊ごときでは、日本の誇る連合艦隊には対抗できないことくらいソ連軍もわかっていた。

それに対して、極東ソ連軍の方は満を持して進軍を開始した。一応ヨーロッパと中央アジア戦線が主戦線であるため、ソ連軍の誇るT34やKV1と言った戦車は部隊の半分ほどしか充足しておらず、残り半分は旧式となったT26やBT7型戦車であった。

それでも、ソ連軍上層部は勝利を確信していた。かつてノモンハンの戦いで登場した日本軍の戦車は、極一部を除いて旧式な車両か小型の車両ばかりであった。こうした車両相手ならソ連側の旧式車両でも勝てる。

日本側は一応ドイツ軍と戦える戦車を開発していると言う情報も入手していたが、それらは全て中東へ行っており満州には旧式な車両しか残っていないというのがソ連側の情勢判断だった。

確かに、前線近くの駐屯地の戦車ならばそうであった。しかしながら、実際のところはそうではなかった。実は国境から大分下がった基地には中東でドイツ戦車と戦っている長砲身の75mm砲と正装甲圧75mmの装甲版を装備した3式中戦車が配備されていた。また同戦車の車体に100mm砲を固定砲として装備した4式砲戦車も少数ながら存在した。

ただし、これらの戦車はいずれも少数もしくは部隊の半分程度の充足率で、主力の戦車は口径の小さい75mm砲を搭載した1式中戦車やアメリカから輸入したM3「グランド」中戦車、M3「スチューアート」軽戦車であった。

これらは日本の満州帝国駐留軍に格上げされた関東軍のみならず、

満州帝国陸軍にも大量配備されていた。

創設以来傀儡国家と言われ続けた満州国であったが、米英が圧力をかけてきた関係もあり、依然として日本の影響下にあるもののかつてよりは自治出来る範囲が大きくなっている。

日本としてはいずれ満州を併合する腹積もりだったようだが、結局それは早い段階で費えてしまった。日本側の同化政策的な植民地政策は物質的な貢献は別として、人々の輦轡を買いやすかったからだ。そのため、国を造り上げた直後から反乱が頻発していた。

アメリカやイギリスの干渉で高圧的な支配を取りやめた結果、ようやくそれも収まった。加えて日中戦争後の戦争景気のお陰で日本からの移民者が予定より少なくなったことや、大慶油田やアメリカ・イギリス資本の進出によって、満州国が空前の好景気に沸いていたのも国が安定した一因だった。

この時期の満州は奉天などの都市近郊における重工業化が急速に進み、特に自動車生産では早々と日本を追い越して輸出するくらいであった。戦車の生産も日本側のレベルにほぼ追いついていた。だからこそ、日本陸軍の近代化は成功したのである。

また満州国は固有の満州族に入植した日本人・朝鮮人・蒙古人、亡命してきた白系ロシア人にユダヤ人、進出してきた企業と共にやってきた米英系の人々、内戦を恐れて逃げてきた漢族など人種の埒埒状態となっていた。

こうした人々で編成された満州国軍は、言語問題など多種多様な問題を抱えていたが、装備についてはアメリカなどから輸入することとで忠実にしており、またかつてと違って将兵の満州国に対する愛着

が格段に増していた。すなわち、士気はかつてより遥かに高くなっていた。

その満州国軍が主力となって、満州国では極東ソ連軍との戦闘に入った。

国境線付近の要塞はソ連軍の抜かれることが前提だったため、早々と抵抗を諦めて撤退している。かつてはソ連軍の足止めにも有効とされた要塞も、ヨーロッパや中近東の戦訓によってその価値は減じていた。

その代わり満州側は空軍による徹底した攻撃を掛けた。日本製の3式戦闘機「疾風」を木製化した「火鳥」戦闘機や、アメリカから輸入した戦闘爆撃機P39「空蛇」、同じくアメリカ製のA20「破壊」爆撃機などがソ連軍に反復攻撃を仕掛け、また前線に部隊を運ぶ満鉄線の列車を守った。

ソ連空軍も出てきたが、戦闘機はLaGGなど1世代前の機体ばかりであり、I12「シュトルモビク」襲撃機も後部銃座が無い初期型が多く投入されたため損害が続発した。何より、航続距離が短かったため十分なエアカバーを出来なかった。長距離出撃可能な爆撃機も戦闘機の援護がないため大損害を負った。

ソ連軍は当初こそ快進撃であったが、その後空襲が始まると停滞してしまった。そうこうしている内に、満鉄を使って運ばれた戦車部隊や線路上から砲撃可能な装甲列車が反撃を開始した。

こうして満州における戦闘は一気に激化した。ただし、圧倒的に損害が多かったのは満州国軍を舐めきっていたソ連軍であった。しかしながら、ソ連側も圧倒的な物量（特に兵士）を持って抵抗し、

戦闘はすぐに長期戦の様相を呈した。

一方、ソ連と日本の戦いは海でも行なわれていた。

戦線拡大 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

先日深夜に再放送していた宇宙戦艦ヤマトの劇場版を見て、久しぶりに熱くなりました。

戦線拡大 5

満州や樺太では日本軍並びに満州国軍が善戦し、押し返すまでには至っていないかったがなんとかソ連軍の進撃を止め、膠着状態へと持ち込んだ。

もつとも、膠着状態に持ち込んだとは言え軍民合わせて大きな損害は出ているし、物量に勝るソ連軍が数だのみで今後も進撃を続けてくる可能性もあるので油断は禁物であった。

一方、海でも戦闘が始まっていた。ソ連太平洋艦隊の水上艦部隊は、早々と日本海軍に適わないことを悟って、早々と北にあるペトロハヴロフスク・カムチャツキーへと逃げ込んでおり、自然と戦いは小艦艇や潜水艦が中心となった。

ちなみにソ連太平洋艦隊旗艦となっている巡洋戦艦「キエフ」は「クロンシュタット」級の1隻で全長238m、排水量32870t、速力32ノット、30.5cm3連装砲3基の性能を持っていた。

スターリンはさらに巨大で強力な「ソビエツカヤ・ソユーズ」級の建造計画を進めていたが、ソ連の造船技術では巨大な艦体や主砲の40cm砲の製造が出来なかったため（ドイツも流石に技術援助を断った）、止む無く一回り小さな「クロンシュタット」級を複数隻建造して旧式艦の代替と戦力強化を図ったのであった。

「クロンシュタット」級は黒海やバルト海などの造船所で6隻が建造されており、その内の4隻がバルト海艦隊、1隻が黒海艦隊、そしてもう1隻が太平洋艦隊に配備されていた。

「キエフ」は1943年6月にヨーロッパ・ロシアからかつてのバルチック艦隊と同じく地球を半周して極東にやってきたのであった。

しかしながら旧式の「長門」級にすら勝てない性能であるため、日本艦隊との戦闘は自殺行為も当然であった。そのため「キエフ」他水上艦隊は戦う前から逃げるしかなかった。

変わりに主役となったのが、5年前のノモンハン事件の時と同じく潜水艦であった。

かつてソ連太平洋艦隊潜水艦艦隊は日本の近海防衛艦隊との戦闘で一方的な敗北を決してしまった。日中戦争における中国潜水艦との戦いの教訓を生かした日本の近海防衛艦隊相手では、荷が重すぎたのだ。

あれから5年、ソ連潜水艦隊は再びウラジオストクやナホトカの港で甦っていた。同地の造船所やヨーロッパ・ロシアから回航されたものも含め、損失を埋めると共に大幅に増強されていた、艦自体も前回の敗北を元に、設計を見直した新型艦ばかりであった。

「今度こそヤポンスキーに一泡吹かせてやる！」

という乗員たちの意気込みの元、ソ連潜水艦隊は出撃して行った。

ソ連潜水艦は開戦前から日本側への攻撃を準備しており、主にオホーツク海・千島列島近海・日本海・津軽海峡出入り口付近に待機し、開戦と共に攻撃を開始した。

日本側はソ連側の宣戦が近いことを既に察知していたため、日本

本土にある対潜航空隊部隊や各部隊に警報を発令していた。

しかしながら、それでも海中から不意の攻撃をしてくるソ連潜水艦は厄介な存在で、開戦1週間の間に駆逐艦1隻を含む3隻の艦艇が大破、商船8隻が撃沈、6隻が撃破された。

撃沈された商船の内1隻は青函連絡船の「第一津軽丸」で、魚雷ではなく津軽海峡入り口に巻かれて浮遊していた機雷を触雷したのであった。これにより乗員乗客500名の命と、積みまわっていた貨車・客車30両あまりが失われた。

また同じく国鉄が運行する連絡船で、関釜航路の主役であった「金剛丸」が玄界灘で魚雷1本を受けて中破している。こちらは船自体が大型であったこと、船長が直ぐに防水隔壁を閉鎖したことで、なんとか沈没は免れている。

他にも樺太航路の連絡船や近海を走る多数の商船や漁船などが被害を受けなくても、襲撃を受けたことを報告している。

こうした被害は本土に近かったこともあり、当然ながら国民にも早いうちに伝わった。もちろん、それによって国民が海軍を糾弾する姿勢を取ったのは当然であった。

しかしながら、海軍側もただ黙って見ていたわけではなかった。直ぐに反撃を開始している。特に日本海側の基地に展開する航空隊や巡視隊はただちに出击している。

開戦6時間後、まず南樺太豊原の基地を出撃した「東海」対潜攻撃機が宗谷海峡上空を哨戒中に磁気探知機でソ連潜水艦を捕捉、爆雷攻撃を加えこれに損傷を与えた。このソ連潜水艦はその後発進し

てきた後続の攻撃機の爆雷攻撃で止めを刺された。

さらにそれから開戦1週間の間に、日本海を中心として実に8隻のソ連潜水艦が撃沈され、さらに7隻が帰還を余儀なくされるほどの損傷を受けていた。

つまりたった1週間でソ連潜水艦は15隻の潜水艦を撃沈破されてしまったことになり、この損害は異常であつた。

ソ連軍としては、満を持して潜水艦を投入しそれなりの戦果は上げた。しかしながら損害のペースは前回の戦いよりも悪い結果となつていた。

ソ連海軍の指揮官たちは首を捻つた。

「これは一体どういうことだ？どうして我が軍の最新鋭艦がこうも沈められるんだ？」

どうしてこのようになったかと言えば、それはソ連側の甘い予測にあつたと言える。

確かにソ連海軍は自国で建造した最新鋭の潜水艦を多数建造して配備していた。しかしながら、その彼らの言う最新鋭のレベルは潜水艦先進国であるドイツや日本、アメリカのそれに比べれば一步劣つていると言わざるを得なかつた。

ソ連はドイツと未だ友好関係を保っており、様々な技術や物資の交換を行なっている。しかし、ドイツのヒトラーもソ連のスターリンも互いに潜在的な敵と看做しており、現在はいくまで必要があるため握手しているに過ぎない。お互い逆の手にはそれぞれナイフか

拳銃を持ちながら笑っているようなものだ。

そう言うわけで、独ソともお互いの最新兵器に関する技術交換はほとんど無きに等しい。一応ドイツは食料や資源の対価として軍艦や航空機、その他の軍事技術の輸出をソ連に行なったが、いずれも1世代古いものであった。

そのため、ソ連側が欲しがった戦艦や潜水艦の技術も「シャルンホルスト」級巡洋戦艦や初期型Uボートのそれに留まっていた。

そうした技術に加えて、ソ連側技術者が知恵を絞って作ったのが現在の主力艦であった。ところが、いくらソ連の技術者が努力しても経験不足や予算不足、技術者自体の数が不足しているのではどうにもならない。

それに対して日本海軍側はインド洋やアラビア海で枢軸軍潜水艦と激闘を広げてきた。そのため、装備もそれに合わせて最新式の物を装備している。加えて、この時期の日本軍は一部を除けばアメリカ式の短期間で前線配置を交代して本土か後方基地へ下がるローテーションを実施していた。つまり本土にいるパイロットや搭乗員の中には実戦経験者が多数いたのである。

これでははつきり言ってお話にならない。当初こそ奇襲で戦果を上げたソ連潜水艦も、その後は反撃態勢を整えた日本海軍側に狩られるだけとなってしまった。

あまりの損害に耐えかねたソ連太平洋艦隊は、わずか2週間で潜水艦隊による作戦を中止せざるを得ず、作戦は完全な失敗に終わった。

すると今度は日本海軍側が本格的な反撃に移った。各地の近海防衛艦隊のみならず、連合艦隊や潜水艦隊が一斉に出撃してソ連軍艦船に襲い掛かった。

枢軸軍潜水艦の陰に隠れて久しい日本潜水艦であるが、長射程大破壊力の酸素魚雷と長大な航続力をもつその性能は連合軍内においても一目置かれていた。この時期には騒音問題もほぼ解決し、さらにドイツのXXI型と同じく水中高速潜水艦である「伊200」型も竣工しつつあった。

潜水艦隊はペトロハヴロフスク・カムチャツキー沖にも出動し、同地に隠れたソ連太平洋艦隊水上艦隊を牽制するとともに、パトリル任務で出てきた大型駆逐艦2隻を撃沈している。

もちろん宗谷海峡や樺太近海、沿海州近海にも出撃して作戦を実施しソ連側の商船や艦艇を多数葬り去っている。ソ連側の対潜装備がお粗末だったため、日本潜水艦はそれこそ好き勝手に暴れ回った。

また近海防衛艦隊や連合艦隊の水上艦艇も華やかな大規模海戦こそ起きなかったが、小規模な海戦を幾度も行なっている。

ソ連側は潜水艦による作戦を行なうと共にコルベットや敷設艇、魚雷艇などを用いて機雷敷設を頻繁に行なっていた。帝政ロシア以来のお得意の戦術であった。

ソ連海軍の艦艇は巡洋艦に至るまで機雷敷設能力を備えており、機雷戦術においては大きな自負心があったようだ。しかしながら、その機雷自体は科学力の遅れからアメリカ軍やイギリス軍、ドイツ軍のそれに比べて劣っていた。それでも、数を撒けばそれなりに降下がる。

このソ連軍の機雷敷設部隊と、日本側の艦艇とが幾度も沿海州沿岸や千島沿岸で戦闘を繰り広げた。

ソ連軍艦隊は航空機の活躍できない夜や霧の日に現れると、そつと機雷を撒いて立ち去っていく作戦に出た。対して日本側もそれにあわせる形で出動して迎撃を行なった。

この水上戦闘も日本側に軍配が上がった。ソ連側も必死に戦ったのだが、リーダー技術と技量で勝る日本側に勝てるはずがなかった。一部の指揮官がすばらしい指揮を執って善戦したが、それも大勢を覆すに至らなかった。

日本側に救助されたある艦長などは。

「何がなんだかわからない内に自分の艦が沈められていた。」

と話した。

また攻撃した側の1人である近海防衛艦隊の片山真大佐は後にこう語った。

「ソ連軍艦艇を沈めるのは本当に簡単でした。それほどまでに敵との格差は歴然としていました。あれは戦闘と言うよりなぶり殺しですね。」

最終的に、ソ連軍は駆逐艦5隻、フリゲート8隻、コルベット6隻、敷設艇11隻、掃海艇4隻と魚雷艇10隻あまりを失い大敗を喫した。対する日本側の被害は運悪く機雷を踏んだ護衛駆逐艦1隻と掃海艇1隻のみであった。

こうして海の上の戦いでも、日本側優位に進んだのであった。

戦線拡大 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 6（前書き）

明けましておめでとございます。今年もよろしくおねがいします。

戦線拡大 6

極東方面へのソ連軍の進撃は、日本と満州国の反撃の前に止まった。しかしながら、ソ連軍が攻勢に挑んだのは決して極東だけではなかった。かつてドイツ軍の侵攻のドサクサに紛れて奪い取ろうとした中央アジア方面からの進撃路を再び使って攻勢を開始した。

これは非常にマズイことであつた。日本軍にとっては中東方面に派遣している部隊が背後を衝かれる可能性が高かつた。また英国にとってはインドや中東方面の利権をさらに持つてかれないとも限らない事態であつた。

しかしながら、このソ連軍の南下に対して両軍はすぐに対処できる術をあまりもってはいなかつた。日本軍は中東方面のドイツ軍相手の戦いで手一杯で、とてもソ連軍に抗する余裕などない。加えて本土の部隊も極東方面のソ連軍に対するのに精一杯であつた。仮に戦力に余裕があつたとしても、運ぶのに数週間掛かる。

一方イギリス軍はアフリカ方面などに地上戦力を大きく割いており、インド方面はインド軍に任せる以外に手の打ちようがなかつた。

この時のインド軍の善戦が、後にインド独立をさらに加速させることとなる。ちなみにインドに関しての有用性は戦前インドの対英輸出が輸入を超過し、さらに第二次大戦初期の段階で巨額の対英債権が発生した時点で大きく失われていた。だから遅かれ早かれ自治領になつた可能性はある。もっとも、それらは別の話だ。

とにかく、そう言うわけで両軍ともに、すぐに遠距離へ出撃できる航空部隊での攻撃を行うしか手がなかつた。ただし、日本にとって

もイギリスにとっても幸運だったのは、同盟にアメリカが加わっていたことだった。民主主義陣営の兵器工場と名乗るだけあって、その生産力は凄まじい。なにせ自国で消耗した兵器のみならず、他国で消耗した分までを補える兵器を生産出来るのだ。

これによって日英ともに相当数の兵器を補うことが出来た。特に航空機は大助かりであった。イギリスの場合はヨーロッパへの爆撃で使用する爆撃機を米国製のB24やB17で補完していた。一方日本はB25やP38と言った陸軍用機を輸入して、対地攻撃能力を大きく向上させていた。もちろん、まとまった数を揃えられた。

こうしたアメリカ製の機体は頑丈なことに加えて、整備性が非常に高い。そのため、多少酷使しても出撃を繰り返すことが出来た。中東方面に派遣されている部隊には、こうした機体が多数配備されていた。現地では対地攻撃を行うことが多かったためだ。また補給を行う面でも都合が良かったこともある。

そう言うわけで、中央アジア方面から侵攻してきたソ連軍は日英軍の空襲を受けることとなった。その機種は雑多で、日本の場合3式戦闘機「疾風」や3式双戦「稲妻」(P38)、2式中爆「雷竜」、2式双発襲撃機「屠竜」、2式軽爆「剣」(陸軍用「彗星」)などを使用していた。

日本軍の空襲はソ連側にとって厄介な問題となった。ソ連軍の機体というのは典型的なヨーロッパ型の機体であった。つまり、短い航続力しか持っていないのだ。

ヨーロッパにおける航空戦とは比較的狭い範囲で行われるのが当たり前である。それぞれの国が国境を接しているのだから当然と言える。また海を挟んだ英国にしても大陸との障壁となるドーバー海

峡でもつとも狭い所は50kmしかないのだ。

このためヨーロッパの戦闘機と言うのは軒並み1000km以下の航続力で、しかも増槽を付けるといふ発想も中々生まれなかった。

ヨーロッパ式戦闘機の性能で大きな躓きを起こしたのがドイツだった。それが1940年9月前後に行われた「バトル・オブ・ブリテン」だ。ドイツ側の戦闘機Me109はその航続力の短さが足かせとなり、爆撃機の護衛を十分に行えなかった。これが致命的な爆撃機の大損害に繋がった。

もちろんドイツ空軍の敗因はその他にも多々ある。特に双発戦闘機Me110への過度への機体や、上層部の戦略に対する無理解などが祟った。

ただし、ドイツ空軍はこれに懲りてその後ロールアウトした戦闘機には、少なくとも落下増槽を付けて航続力の延伸を図っている。これによって中東や北アフリカ戦線を乗り切ることが出来た。

こうしたヨーロッパ式戦闘機に対して、日本やアメリカの戦闘機は設計概念が大きく違う。特に日本海軍の場合は空母や太平洋に散らばる島々から遠く敵の拠点や敵艦隊を、海を越えて攻撃する必要性があるためその航続力は増槽なしでも2000km前後、有りの場合だと3000km近い航続力が求められた。

こうしたことから、日本のパイロットはヨーロッパの戦闘機を「あんな物は飛行機じゃなくてバツタだ。」と馬鹿にした。飛んでもすぐに着陸しなければならぬ飛行機をバツタに例えたのである。

日本にもヨーロッパの戦闘機のような航続力の短い戦闘機もなく

はなかったが、それらは所謂局地戦闘機に分類される機体だ。つまり基地や要地の防空に特化した機体であり、本来攻撃任務には使わない。

陸軍の場合は、旧式の96式戦闘機までは大陸での運用が前提だったため航続力の短い機体が多かったが、ノモンハン戦における海軍機の活躍や、本土から移動する際長距離空輸の必要性があることから、ある程度の航続力が持たされ、落下増槽もちゃんと装備されている。

またアメリカ軍の場合も一部の機体は航続力が小さいが、外洋での運用を前提にした海軍機や長距離護衛任務を想定された陸軍機の多くは長い航続力や落下増槽を持たされていた。

こうした機体ばかりの日本軍に対して、ソ連軍の機体は先ほども書いたとおりヨーロッパ式の航続力が短い機体しかなかった。

一応ソ連では自国の航空機産業を振興させるとともに、同盟関係にあるドイツから技術や戦訓を提供されていた。しかしドイツのヒトラー総統はソ連を潜在的な敵と見ていたのであるから、そうしたデータは全て2流や遅れたものばかりであった。

そのため、ソ連空軍の誰もが長距離航空機の採用の必要性を実感していなかった。例えいたしても、そうした人間はごく少数派であるから、意見は黙殺された。

その結果、ソ連軍は日本軍の空襲に悩まされることとなった。日本軍機はソ連軍が予期していなかった遠方の基地からも空襲を仕掛け、しかも長時間上空に留まって銃爆撃を行っていた。

それに対してソ連軍機は、部隊の近くに飛行場があるなら良かったのであるが、そのような基地は日本軍によって先制空襲を受けてしまい、さらに遠方の基地から出撃すれば碌に護衛さえ出来ない有様であった。

敵機の跳梁を抑える手段として最も手っ取り早いのが、その基地を空襲することである。さすがにソ連軍機と言えど、爆撃機に関しては長距離飛行が可能であった。

しかしながら、爆撃機が戦闘機に勝てないのは世の常だ。敵の迎撃機に襲われたら終わりである。そのため爆撃機にとって護衛戦闘機は必須アイテムである。

だが先ほども書いたとおり、ソ連軍には長距離飛行可能な戦闘機はない。そのため昼間爆撃など夢のまた夢であった。出て行っても敵戦闘機の餌食になるしかない。

そこでソ連軍は夜間爆撃を試みた。この時代夜間も飛べる戦闘機はまだ数少なかったから当然の選択である。

この戦術は当初こそ多少なり日本側に被害を与えた。しかしながらそれも長くは続かなかった。何故ならすぐに日本側は対策を立てたからだ。

日本軍は以前から中東方面でドイツ軍と戦闘を繰り広げていた。そのためドイツ空軍との戦いでお互いに夜間爆撃戦術を導入して既に交戦していた。そのため夜間戦闘機は既に存在していた。

この夜間戦闘機は主に中東方面のドイツ軍の爆撃を受ける基地に重点配備されていた。しかしながら、ソ連軍が夜間戦術を使用する

ようになると、早速さらに量産されて前線へと配備された。特にソ連軍の夜間爆撃を正面から受けた樺太・千島地域と、中央アジア方面の基地はその重点配備先であった。

配備された夜間戦闘機は「屠竜」の夜間戦闘機型であった。この機体は襲撃機「屠竜」との機体共用機であるが、夜間戦闘機版には爆装や後部機銃の搭載がなく、代わりに英国製の空中電探や海軍開発の斜め銃を装備していた。

斜め銃は中東方面へ展開した海軍航空隊司令官の小園中佐が発案したものである。ただし海軍には適当な双発機がなかったため（当初彼は99式偵察の使用を考えたが、数が少なく転用できなかった）、やむなく同じ基地に展開していた陸軍航空隊の「屠竜」襲撃機を借りたという話がある。

この時期日本陸海軍の機体の共用が相次ぎ、こうして兵器を融通しあうのは別段珍しいことではなくなりつつあった。

こうして採用された夜間戦闘機は、当初こそレーダー無しで搭乗員の目のみがいりであったが、その後英国や米国から空中索敵電探が供与され、その性能を大きく向上させた。ただし、ドイツ軍との戦いでは敵が使用する電波妨害装置や電探妨害装置チャフとの戦いでもあり、日本軍が初めて遭遇した本格的電子戦であった。

また機体の性能でもドイツ軍がMe110やHe219を投入したのに対して、日本側もキ102「雷竜」、キ96「鋭竜」を投入して対抗した。

そんな日本の夜間戦闘機隊にとって、まともな空中電探や妨害装置も付けず、護衛戦闘機無しのソ連軍夜間爆撃機など単なる力モ

でしかなく、ソ連軍の夜間爆撃も1ヶ月で挫折した。

しかしながら、ソ連は凄まじく巨大な国である。だから数だけはいくさんある。そのため、日本軍は落としても落としてもやってくるソ連軍機と戦わなければならなかった。

こうなると日本やアメリカから前線へ機体や搭乗員、補給物資を如何に運ぶかが大きな鍵となった。

戦線拡大 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

この作品では、日本側の航空機や戦車の開発速度がWW1の影響で史実より早くなっています。そのため、96式戦闘機と言うのは史実の97式戦闘機とお考えください。

戦線拡大 7

アメリカ合衆国は戦前から民主主義国の武器工場を自称していたが、これは何も誇張や誇大宣伝ではない、それほどまでに、アメリカという国の工業力と国力は凄まじかったのだ。しかも、その凄まじさは戦争の時にになると発揮される。

例えば、第一次大戦を例にとるとアメリカは4本煙突が特徴の平甲板型駆逐艦をなんと256隻も量産している。もつとも、それらが完成した時には既に第一次大戦は終わり、多くの艦がモスボールされて保管されるという当事者からしてみれば笑えない事態も起きたが。まあ、その後第二次世界大戦まで大切に保管し、イギリス海軍に直に供与出来たのがせめてもの救いと言えようか。

幸いなことに、第二次世界大戦においてはアメリカはそのように造った兵器が間に合わず、役立たずとなりあまつしまう様な事態には陥らなかった。もちろん、終戦となれば兵器があまるのは当然だが、少なくとも平甲板駆逐艦の二の舞は起きなかった。何せ、終戦に至るまでドイツ軍とソ連軍は日英米の連合国を苦しめたのだから。

さて、第二次世界大戦が起きてアメリカが連合国陣営として参戦すると、同国は早速戦時体制への転換を図り武器の量産を大車輪で行った。この戦時体制への移行は中々骨の折れることだが、アメリカの場合一度団結すれば後はドンドン突っ走っていく。そして開戦から1年もすれば戦時体制は完成する。

開戦から1年と言う期間は長いようで短い。下手をすれば、戦争の決着がついてしまいかもしれない。現にポーランドやフランスは

1年どころかわずかな期間であつけなく降伏へと追い込まれてしまった。

しかしアメリカの場合は、1年程度で屈服させられるようなヤワな国ではない。何より、地政学的に見て敵国であるドイツとは大西洋と言う名の天然の障壁が横たわっており、仮に大西洋方面の戦力が全滅したり物資輸送路が壊滅しても、太平洋方面から回せばなんとかなる。もともと、実際そこまで悪化すれば国民は黙っていないだろうが、少なくとも簡単に倒せる国ではない。

ドイツ海軍もアメリカ大陸沿岸にUボートを派遣し、何回か攻撃を行いはした。それによつてタンカーが多数撃沈され、一時期石油を配給制にせざるを得ないところまで行きはしたものの、あくまでそれは民間の生活に関してで、軍需に致命傷を与えることは出来なかった。

戦時体制が出来上がるまでは、アメリカと言えど予備戦力が少ないから戦力が消耗しても容易に回復できないが、1年経てばその状況は打破された。まず建造期間が短い駆逐艦・護衛駆逐艦・フリゲート・護衛空母と言つた艦艇が続々と完成した。

これらの艦艇は正に量産と言ふ言葉が相応しい勢いで建造された。特に護衛空母は1週間に1隻、駆逐艦に至つてはそれよりも短いペースで建造された。とにかく一つの種類の艦艇を数百隻単位で、しかも他の艦船の建造に影響を与えることなく進めるのだから恐れ入る。

またこうした小型艦艇以外の戦艦や空母、巡洋艦も多数建造されている。特に100機搭載可能な新鋭の「エセックス」級空母は空母の数が不足した日英にそれぞれ2隻ずつ売却されながら、自国用

にも17隻建造している。さらに後継の150機近い搭載数を誇る「ゲデイスバーク」級空母4隻の建造も行っている。

戦艦も同様にトーチ作戦やニューカレドニア攻略作戦、さらには大西洋でのUボートによる襲撃で数隻の旧式戦艦を失ったものの、それを補う形で「アイオワ」級6隻と「モンタナ」級4隻の建造が行われていた。

これに対して日本は、植民地や満州国の造船所をフルに活用したところで、「大鳳」級4隻、「雲龍」級4隻の空母と「大和」級戦艦4隻を建造するのが精一杯であった。これではまるっきりお話にならない。

さて、そんなアメリカは日英に気前良く多くの兵器を売却していた。艦船に関しては先ほども触れたが「エセックス」級正規空母を皮切りに、多数の護衛空母や駆逐艦、護衛駆逐艦などを両国に売却した。また日英で設計された艦艇を委託建造した事例もある。しかもそれらは戦時にありがちな粗製乱造の面が薄く、使い勝手や耐久性が良かった。

もちろん、艦船のみならず軍用車両や軍用機も多数売却していた。これらも艦艇と同じく使い勝手が良く耐久性に優れており、戦場では喜ばれた。

こうした輸出兵器は、アメリカ国内で製造されると太平洋岸が大西洋岸に集められ、指定された港で日英両国に引き渡された。日本の場合太平洋側、英国の場合大西洋側で受け渡されると思われるだろうが、実際にはそうではない。

例えば、イギリスの場合太平洋にオーストラリアやニュージラ

ンドと言った連邦諸国があり、これらの国々からもヨーロッパに出兵していた。だから、豪新と言った国々から新たにヨーロッパに出兵する場合、その兵士に持たせる兵器を直接アメリカから両国に送る必要があった。特にオーストラリアはここ最近では遠い宗主国イギリスではなく、近い大国アメリカとの結びつきを深め、兵器面でもそうであった。

「イギリス向け」と書かれた箱に入った兵器がサンフランシスコやシアトルで船に寄せられ、そのまま太平洋を南下してオーストラリアやニュージーランドへ向かう光景は決して珍しいものではなかった。

逆に、「日本向け」と書かれた兵器が太平洋側ではなく大西洋側の港で船積みされることも多かった。これは、兵器の生産地が大西洋側にあつたからと言う理由もなくはなかったが、別の理由もちやんと存在した。

例えば、イランやイラク方面で戦っている日本の派遣軍の場合、砂漠でも長持ちするアメリカ製兵器を多数使用していた。特にジープやトラックは兵隊たちから大人気であつた。その他に同地の航空隊では、アメリカ製のP38「ライトニング」やB25「ミッチェル」を日本名に改名の上使用していた。

これらの兵器は、配置前こそ慣熟訓練のために一旦日本本土に運ばれていたが、その後の補充分は直接アメリカ本土から最前線へと運ばれるようになった。だからアメリカで製造された時点で日の丸を機体に描き込んで戦地へ発想することも珍しくなくなった。

この中東方面に派遣された日本陸軍にアメリカから兵器を送る場合、まず大西洋側の港で貨物船に載せる。そして出港すると南アフ

リカ方面へと向かう英国の商船団とともに南下、ケープタウンからは日本の近海防衛艦隊から派遣された巡視隊によってセイロン島やインド亜大陸西岸の港へと向かった。

しかしながら、昭和19年後半に入っても大西洋は以前Uボートの巢であった。特にドイツが最新型のXX1型を投入したことに加えて、あらたにアルゼンチンがドイツ側に立つて宣戦布告したことは、この日本輸送船にとってマイナスに働いた。

潜水艦の性能向上により攻撃を受ける可能性は高くなり、さらにアルゼンチンがドイツ側についてUボートの基地となったことは、南大西洋のアフリカ沿岸におけるUボートや仮装巡洋艦の行動を活発化させることにつながった。

そして昭和19年8月以降は、ソ連参戦とドイツ海軍の盛り返しによる北大西洋における戦況悪化により米英護衛艦艇の南大西洋方面への派遣数が目に見えて減少した。その分のしわ寄せは当然ながら日本海軍が被ることとなった。

日本の近海防衛艦隊派遣部隊は昭和18年度までは、せいぜい一部の艦艇がケープタウン―インド洋間の護衛任務に派遣されているだけであった。ところが昭和19年10月になると、なんとアメリカ本土からインド洋までロングランする任務を強いられようになった。

もっとも、日本側もアメリカやイギリスの艦艇が北大西洋海域において新型Uボートに、いいようにやられているという情報を派遣武官から入手していたので、文句は言わなかった。

こんな状況であるから、かなり変わった経歴の艦艇も出てきた。

例えばアメリカのニューヨークにある造船所で建造されたフリゲートが日本側に供与されたのであるが、この艦の乗員はアメリカに派遣されて訓練を受けていたので直に乗り込むと、そのままインド方面への護衛任務に投入された。そして初陣で撃沈されると言う悲劇に見舞われた。

つまり、日本海軍籍に編入されながら日本本土に来ることなく戦没する船が出たのだ。これはある意味、戦争が本当に世界規模であったことを端的に示している例と言えるだろう。

それはともかくとして、こうして日本側が船団護衛を行う範囲は急激な広がりを見せた。それとともに、周辺にも大きな変化が見られた。

まず、日本艦船のアメリカ寄港が増えたことから補給面での問題が発生した。第一次大戦時の地中海派遣部隊も同様の苦しみを味わったが、主食の米や調味料の味噌や醤油が手に入らず、乗員は食の苦しみを味わうこととなった。日本人にとって米欠乏と味噌欠乏は由々しき問題であった。

ただし、小麦粉や砂糖はあり得ないほど潤沢に手に入ったので、パンやパスタと言った西洋風料理を乗員が口にする機会が激増した。これまでは連合艦隊の上級幹部くらいしか馴染みのなかったフランス料理を、近海防衛艦隊の水兵が口にするという面白い現象まで起きた。またチョコレートやケーキ、アイスクリームやコーラと言った欧米の嗜好品が供される機会も当然ながら増えた。

こうした食文化は、乗員の異動や戦後艦艇が日本に帰還したことにより日本本土にも大きな影響をもたらすこととなる。特に、日本海軍内ではこれまでに以上に西洋式料理の作り方が全国の部隊に広が

り、「洋食を毎日食いたいなら先ず海軍に入れ！」と言つ言葉まで生まれたくらいだ。実際に日本が戦後全体的に豊かになる昭和30年代まで、日本で洋食を毎日のように食べられる職業は、洋食屋を除けば海運業か海軍ぐらいなものであつた。

また、こうした食文化以外にも日本の水兵や船員が現地のアメリカ人と接して様々な文化を伝えあつて、戦後の日米交流に一役買った。中には現地に恋人を作つて、戦争が終わつた途端アメリカに移住して結婚する人間や、アメリカ人の嫁さんを日本に連れてくる者もいた。

よくも悪くも、世界規模での戦争は異文化を伝達したのであつた。しかしながら、そうした良い面がある半面で膨大な犠牲を伴うのが戦争の現実であつた。日本海軍は苦しい通商路保護の戦闘を続けねばならなかつた。

戦線拡大 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 8

昭和19年下半年から日本海軍はインド洋・アラビア海のみならず、南大西洋や中部太平洋を走る船団の護衛を行う必要に迫られた。当然ながらその範囲は広大である。これまで派遣した巡視隊程度ではどうにもならない。そのため帝国海軍は近海防衛艦隊のみならず、連合艦隊からも一部の艦艇を派遣している。もちろん、陸上基地航空隊も増援が派遣された。

日本海軍にとって幸いだったのは、北から攻めてきたソ連海軍を早々と壊滅に追い込み、さらに陸軍や満州や樺太で善戦していることであった。これにより、北を憂うことなく艦艇を増派出来た。

近海防衛艦隊の派遣艦艇は、相変わらず「松」型護衛駆逐艦や海防艦、そしてアメリカ製のフリゲートや護衛駆逐艦であったが、連合艦隊の艦艇は最新鋭の改「夕雲」型と「秋月」型駆逐艦が投入された。

改「夕雲」型は日中戦争やノモンハン事件の戦訓を生かして建造された新型駆逐艦で、両用砲兼用の12.7cm砲6門と61cm魚雷発射管8門、爆雷60発を装備した対艦・対潜駆逐艦である。後期生産分からは、両用砲を性能の高いアメリカ製に換装した艦もある。

「秋月」級は日本海軍初の新規建造された対空用艦艇である。魚雷を撤廃した艦体に10cm連装高角砲8門と対空ロケット砲2基、40mm連装機関砲6基に、25mm連装機関銃を6基、爆雷60発を積んだ対空・対潜駆逐艦である。

両級ともに艦隊決戦を念頭に置いた設計のため速力も速く、潜水艦を相手にするだけなら過剰な戦力である。しかしながら護衛艦艇が不足している状況であり、また相手がドイツ海軍であるため艦隊決戦もほとんど起こりえないと思われたので、投入が決定された。

またこれら駆逐艦の旗艦として、改「阿賀野」級軽巡が4隻投入されている。「阿賀野」級は当初水雷戦隊の旗艦任務に特化した設計であったが、日中戦争やノモンハン事件の戦訓を生かして、主砲口径を当初より大きくし、さらに高角砲の増設と次発魚雷装填装置の廃止、対潜装備の強化を行っている。

改「阿賀野」級は「阿賀野」級の拡大発展版で、「阿賀野」級では主砲が自動装填装置付きの15,5cm連装3基であったものが、連装4基に強化されている。また高角砲も8cm連装4基8門から連装6基12門と強化された。

もともと、実際にはそれらでも米軍の「クリーブランド」級やイギリスの「サザンプトン」級に比して火力不足であることが、その後アメリカやイギリスの交流で判明している。このため、帝国海軍では新たに「大淀」級の拡大改良型で15,5cm3連装砲4基搭載の「十勝」級を建造している。

また航空機の脅威に対処するため、改「阿賀野」級と共同艦体で雷装を撤廃して10cm連装対空砲6基搭載した対空巡洋艦の「綾瀬」級も建造されている。これはコストと建造期間を抑えるための措置であった。

これら軽巡洋艦は昭和16年ごろから竣工が始まり、未だ残っていた5500t級の旧式軽巡を置き換えた。ちなみにそれら旧式軽巡は改装を実施した上で玉突き式に近海防衛艦隊へ移籍したり、海

外へ売却されている。

また対潜作戦用として高速軽空母の「瑞鳳」と「翔鳳」も同時に派遣されている。日本海軍は予てからの計画に従い、特務艦や水上機母艦を空母へ改装している。これらは搭載機が30機程度（アメリカ製の機体なら40機程度）ではあるが、新型の油圧カタパルトや電探を搭載しており、搭載機も対潜哨戒機としては新型の「北海」が搭載されていた。

「北海」はアメリカから購入したTBF「アベンジャー」雷撃機の改良機で、対潜用に特化した機体である。具体的にはそのペイロードを生かして磁気探知機やレーダーを搭載している。そのため、膨らんだ胴体が特徴的であった。

ちなみに、日本海軍では同機を雷撃機として使う機は全くなかった。既に「流星改」が就役していたのに加えて、日本製の航空魚雷を積みなかったからだ。

余談ではあるが、アメリカ海軍は万能機と言える「流星改」やドイツ空軍が少数運用したFW190の多用途機を見て、「スカイライダー」の開発を急がせたとされている。

なお、船団護衛が主任務であるから戦艦や重巡洋艦と言った砲撃力はあるが、燃料をバカ食いする艦艇の類は出撃していない。そんな種類の艦艇を連れて行ってもあまり役には立たないからだ。

こうした連合艦隊所属艦は順次本土やトラック島の軍港を出撃し、シンガポール・セイロン島経由でアラビア海へと入っている。

この方面には、未だ最新型のXX1型の配備はなされていないかつ

た。しかししながら、同級が北海や北大西洋方面に配備された影響で、それまでその方面にいた旧型艦がこの方面へ新たに派遣されていた。

旧型と言っても音響魚雷やシュノーケル、最新式のレーダーや逆探を装備しているので手ごわい相手である。しかもドイツ海軍はアルゼンチンに新たな基地を設け、Uボートの行動範囲を拡大するとともに1回当たりの出撃期間を短くしていた。こうすることで、乗員の士気や戦闘力を上げていた。

ドイツ海軍潜水艦も脅威であったが、マダガスカル島を中心に活動する仏伊の潜水艦も厄介であった。いずれも旧式艦が中心であるせいか以前ほどの勢いは無かったが、ドイツからの技術供与の元で改装を施し、音響魚雷を装備している艦もあった。

またイタリア海軍潜水艦は伝統的に小型潜水艇を搭載することがある。この小型潜水艇は日本海軍が計画した甲標的などとは違い、水中スクーターに毛の生えたようなものもあるが、地中海では港に停泊していた英戦艦2隻を撃沈するという武功を建てている。

集団での戦闘には弱いが、個人的に武功を建てる機会が巡ってくると命を掛けて戦うのがイタリア人と言う風評をよくあらわすような兵器であった。もっとも、イタリア人の名誉のために言えばそれは大きな間違いで、ちゃんと部隊単位で奮戦した事例もある。

それはともかくとして、イタリアとフランスもドイツが勝ち戦を続けているということもあって、それなりに余裕があった。やはり物資があるというのは、精神的にも余裕を与えるものだ。特に戦争中は。

イタリアにとってみれば、石油さえあれば戦える。どこぞの世界の1943年に連合国に寝返ったイタリア海軍が不甲斐ない戦いしか出来なかったのは、備蓄していた重油の量が限られていたからだ。

イタリア本国では石油は出ないし、後に有望な油田地帯として有名になるリビア油田はまだ発見されていなかった。そして海外からの石油の輸入も困難になった状況で戦争を行ったことが、イタリアにとっての大きな間違いであった。

しかしながら、この世界のイタリアの場合は中東の油田とソ連からの石油輸入のおかげで、燃料に事欠いてはいない。燃料どころか、鉄やアルミといった戦略物資もなんとかあった。

こうした豊富な物資があるおかげで、イタリア海軍は大戦に突入してから戦艦2隻、空母2隻、巡洋艦8隻、駆逐艦20隻を新たに竣工させていた。潜水艦はさらに多く34隻である。

枢軸海軍の潜水艦が根拠地としていたのが仏領マダガスカル島で、ディエゴ・スワレスの軍港には修理用のブンカー（厚いコンクリートで造られた潜水艦用格納庫）まで造られていた。また、同島が日本海軍機動部隊に襲撃を受けたことから、少し下がった航海の出口であるジブチやソマリアなどにも補給基地が設置されていた。

以前はここを出撃した枢軸海軍潜水艦は、アラビア海やベンガル湾、さらに一部が南大西洋に出撃して再びマダガスカルに戻る方法を探っていた。このため日本海軍や英海軍は、暗号解読や商船襲撃情報などからの予測の上でこの出戻りのドイツ潜水艦を襲撃するための潜水艦を派遣していた。

しかしながら、新たにアルゼンチンが敵になったことや後方の拠

点が整備されたことで、マダガスカルを出撃した潜水艦がそのまま戻らないという事例が増えた。

さらに、枢軸各国の空軍も対潜哨戒を厳しく行うようになった。日本やイギリスが基地航空隊を対潜哨戒に投入したのを、ドイツやイタリア空軍も実践するようになった。

このおかげで、日英海軍潜水艦によるUボートやドイツ艦船の基地近海での襲撃は極端に制限された。

こうした諸々の事情が重なり、日本海軍はこれまで担当してきた海域においても、船団護衛の負担が以前にもまして増えた。

そうした状況下で連合艦隊から艦艇が分派されたことは、守られる商船側にとっても、守る近海防衛艦隊派遣艦隊や基地航空隊にとってもありがたいことであった。

昭和19年10月25日、連合艦隊派遣部隊に守られた最初の護送船団がセイロン島を出航、ケープタウンを経由して英本土へと向かった。

戦線拡大 8（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 9

連合艦隊からの艦艇派遣は、喜ばれると共に不安を誘うものであった。確かに、連合艦隊の艦艇の性能は近海防衛艦隊のそれよりも優れている。当然である、潜水艦や商船相手に襲ってくる航空機より遙かに強力な敵との対戦を前程に設計されているのだから。

しかしながら、では商船護衛にそれらが期待されていたのかと聞かれれば、答えは否である。例えば、ある近海防衛艦隊所属の海防艦艦長は、仲間にこう語っている。

「連合艦隊の連中は敵艦隊との戦闘は頭にあるが、低速でノロノロ走る船団を守る器用さは持ち合わせているとは思えん。」

この連合艦隊所属艦艇に対する不信は、何も今始まったものではない。日中戦争以来の物であった。事実日中戦争において連合艦隊は中国潜水艦に手痛い目に遭わされ、護衛対象にも大きな損害を出してしまっていた。だからこそ、船団護衛を専門に扱う近海防衛艦隊が整備されて来たと言える。

一応連合艦隊でも、船団護衛時に関してのマニュアルは存在している。しかしながら、そうした事に割かれる教育や訓練の時間は長くない。そして実際に、連合艦隊がそうした事に参加するのは日中戦争以来の出来事であった。

「連合艦隊の巡洋艦や大型駆逐艦よりも、近海防衛艦隊の小型駆逐艦や海防艦が近くにいてくれた方が遙かに安心できる。」

とある貨客船の船長は語っている。それ程までに、連合艦隊とい

う名のブランド名はこと船団護衛では不人気、と言うかそれ以前に信頼がなかった。

ではその信頼ゼロの連合艦隊が船団護衛をやった結果はどうなったのか？昭和19年11月、連合艦隊から派遣された軽巡と駆逐艦が守る護送船団がセイロン島を出航、最初の中継地であるケープタウンへと向かった。

セイロン島を出港した直後は、基地から発進した陸上対潜哨戒機や対潜用飛行艇などのエアカバーを受けられた。また、今回の作戦には連合艦隊が派遣した自前の空母も加えられていた。軽空母の「龍鳳」である。

「龍鳳」は潜水母艦として建造された「大鯨」を改装した艦で、30機の航空機を搭載できた。しかしながら、最高速力が26ノットと遅いのがネックとなっていた。カタパルトの投入により新型航空機の運用自体は可能となっているが、やはり速力の遅さは艦隊運動の妨げとなるので問題であった。そのため、今回の作戦に投入された。

搭載する航空機は現在空地分離体制となっているので、容易に機動艦隊用の航空部隊から護衛艦隊用の航空隊へ切り替えられた。

今回の護送船団は、護衛する艦艇に配慮して、船団速力が巡航速度14ノットと比較的高速の船が集められていた。通常船団を組む場合、構成する商船の性能はマチマチである。高速の船もいれば、低速の船もいる。それでも、安全を考慮してごちゃ混ぜにして、集まった船で船団を作る。

だから、今回のような性能的に優秀な船ばかりを集めるのは並大

抵のことではなく、恐らく船団を構成した関係者に多大な苦労を強いたに違いない。

しかしながら、護衛する連合艦隊側艦艇の乗員にしてみれば、その苦労のありがたみはあまり感じられる物ではなかった。むしろ、彼らにしてみればそれでも苛立ちを感じる物であった。当然である。通常高速の艦隊の場合、20ノット前後の速度で巡航するからだ。商船の感覚では高速でも、軍艦の感覚の場合鈍足なのだ。

わざわざ歩みの鈍い者に合わせて進まなければならないのは、誰だって苦痛に感じることであろう。それでも、日中戦争などでの汚名を雪ぐ意味もあり、少なくとも乗員たちはこれは義務だからと、その不快感を押し殺していた。

ただ理性でなんとか押さえつけているにしても、やはり士気の面で盛り上がりには欠けるのは、今後敵と戦う上での大きな問題であった。

この問題は、何も乗員の気分のみに作用する問題ではない。物理的な問題も起こす。実は艦船が一番燃料を消費しない速度と言うのが巡航速度であるのだが、逆に言えばそれより速くても遅くても燃料を無駄に消費する。

だから、今回のように通常の巡航速度より無理に遅く走ってもやはり燃料を多く喰ってしまう。

商船を護衛する際、ワザワザ専用の艦艇を設計するのは数を揃えたり、敵である潜水艦や航空機に対処できる程度の船で良いという考え方もあるが、商船の速度や運動性能に合わせてられる船を揃えると言う意味合いも兼ねている。ただ単に、数合わせて艦艇を護衛に付ければ良いというわけではない。

もつとも、護衛の数が足りないのだから背に腹を代えられないということもある。そうになると、多少の燃料や運用上の不都合に目を瞑ってでも船団の安全を考慮するべきという考え方もあるのだ。

出港翌日、船団はUボートをはじめとする枢軸軍潜水艦多発地域へと突入した。セイロン島とアフリカ沿岸からの基地航空隊の支援が届かなくなる海域が危険海域であった。

早速「龍鳳」から対潜用の「北海」が発進して、船団周囲をグルグル回って敵潜水艦の出現に備えた。また巡洋艦からは、やはり対潜用の装備を施された零水偵が飛び立ち警戒に当たる。

この時期、水上偵察機は既に本来の偵察任務に使われなくなっていた。鈍足の水上機では敵戦闘機から逃げ切るなど不可能になっていたからだ。夜間や薄暮の偵察に使われることもあったが、空母が伴う機会が多くなったので、それさえも減っていた。

そのため、主に対潜警戒任務や連絡任務に使われていた。ただし、やはり水上機の宿命である収容方法が面倒くさいと言う欠点だけではどうにもならない。そのため、最近ではアメリカで開発されたヘリコプターや日本でも生産が行われているオート・ジャイロを大型化した上で搭載する方法が模索されていた。

空からの目が光る一方で艦艇の電探やソナー、さらには見張りの兵士の目が総動員され、敵潜水艦が現れた場合に備えられた。

夜が明けて陽が昇り、さらにその陽が空高くに昇ってお昼を過ぎ、段々今度は沈み始めて夕方となる。何事も起きないまま1日が過ぎていく。兵士たちはその間気を張り詰めつつ、交代で警戒にあたっ

た。それは大きな苦痛であつた。

そう、船団護衛で何が苦痛かと言えば、いづどこからやって来かわからない敵に対処しなければならぬ。これが艦隊や基地航空隊相手の戦いなら、少なくとも敵がいるのがわかるし、どこら辺で発見できる、もしくは発見されると言うことを予測できる。

しかし、相手が目に見えない海中の潜水艦ではどこから攻撃を行ってくるかわからない。

連合艦隊の乗員も対潜戦闘の訓練は受けているし、艦隊が進む際は対潜警戒を行う。だから、このような仕事の経験が皆無かと聞かれれば否である。しかし今回は通常より鈍足で走らねばならず、さらに守る対象も戦艦や空母ではなく商船である。遣り甲斐が感じられないことはないだろうが、それでも通常とは違う艦橋に違和感を感じてしまう。

こうなると、士気は落ち込み乗員のやる気も殺がれてくる。護衛艦隊司令官の千川清少将は、出撃前に船団護衛の意義などを演説していたが、その効果も出港翌日の夜には切れ掛かっていた。

Uボートの襲撃が起きたのはそんな時であつた。

「敵性電波補足！近海に敵潜水艦がいる模様！」

護衛艦隊所属の駆逐艦の1隻が、Uボートから発進されたと思われる電波を捉えた。

「対潜戦闘用意！！」

直ちにその命令が全艦に伝えられる。さらに護衛対象の商船にも発光信号で敵潜水艦捕捉の情報が通達される。

各艦では乗員たちがヘルメットと救命胴衣を着けて走り、また音響魚雷の発射に備えて艦尾からフィクサーが海中に投入された。爆雷やヘッジホッグもいつでも発射できるようにされた。

船団と護衛艦隊全体に緊張が走り、敵潜水艦の襲撃に備えられた。護衛艦隊の乗員たちは何時でもかかって来いとばかりに戦意を漲らせていた。ところが、ここからが本当の勝負だった。

その後1時間経つても、魚雷どころか敵潜水艦の影さえ探知できず、時間だけが空しく過ぎていった。実はこれ、Uボート側の作戦であつた。

よく対潜作戦は我慢比べと言われるが、それは戦闘が長丁場になることもあり得るからだ。護衛艦にしてみれば、何せ相手は姿の見えない潜水艦なのだ。容易に撃沈できる相手ではない。発見さえ難しい。

対して潜水艦側にしてみれば、一歩間違えば敵に発見されて襲撃に失敗するだけではなく、何時間も爆雷の嵐に見舞われる。そのため用心深く相手を追跡し、最適の一瞬を見極めて渾身の一撃を見舞う。

最適の一瞬、それは敵が油断し警戒をほんの少しでも緩くする時だ。だからワザと攻撃を掛けないことで、相手の疲労を誘う、これも戦術の一つだった。

もし船団護衛専門の人間だったら、潜水艦がこれ位のことを行う

のは読める。だから適度に休みを取ったり、逆に敵の油断を突くために、策を練ったりジツと我慢したりする。こうした点は狙撃兵同士の戦いに似ている。

だから、本来ならここで敵潜水艦はこちらの疲労を誘っているのだと予測できたはずだ。しかし、船団護衛に不慣れな千川少将ら連合艦隊の人間はこの初歩的な罠に見事引っかかり、兵に余計な疲労を強いてしまった。

そして明け方、ついにその隙を突かれてしまった。突如護衛駆逐艦の1隻が轟音と共に爆発を起こした。

戦線拡大 9（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

突如として駆逐艦の1隻が大爆発を起こした。夜間であり、さらに長時間の対潜警戒を続けて、気が多少緩んできた所での事態であったため、混乱が起きた。

「何事だ!？」

護衛艦隊司令官の千川少将は、旗艦である軽巡「千種」の艦橋から、その光景を目の当たりにした。

「船団右舷の駆逐艦「秋雲」が爆発しました!おそらくUボートの魚雷と思われます。」

「各艦に厳重なる警戒を命令!敵魚雷に注意!対音響魚雷戦用意!」

ところが、千川少将はここで大きなミスを犯してしまっていた。警戒命令を艦隊内のみ連絡させ、船団を構成する商船にし忘れたのである。すぐに千川少将もそれに気づき、慌てて商船にも信号を送るよう命令したが、その最中に敵の第二撃が行われた。

「駆逐艦「山雲」が敵魚雷らしきもの発見!回避行動に入りました。」

続けざまに行われる敵の攻撃に、千川は他の艦にも回避を命じた。

「各艦も順次回避運動に入れ!」

ところが、またしても商船に対する通達が遅れた。しかも高速の

連合艦隊用艦艇は、機関出力を大幅に上げて回避運動に入ったため、護衛艦隊が船団を置いていく格好となってしまった。

それでも、今回の船団を構成している船の船長の多くがUボートによる襲撃の経験があった。また、性能の違いから船団による回避運動の難しさなどを心得ている人間も多かった。

そうしたベテラン船長たちは、護衛艦と船団が乖離し始めるのを見るや、独自に連絡を取り合い、警戒態勢へと入った。

「付近の船との動きに注意しろ！それから海面もしっかりと見張れ！魚雷がいつ来るかわからんぞ！」

ある船長は、船員たちを叱咤激励して敵潜水艦に抗しようとした。こうした船では、船長に対する厚い信頼の下船員たちは悪化する状況の中でも、高い士気を維持していた。

一方、彼らを放り出す形となった護衛艦隊では、ようやく敵潜水艦に対する攻撃を開始した。駆逐艦の1隻がソナーやアズディックを使い、敵潜水艦らしき音や影を探知すると、ただちにヘッジホッグや爆雷をお見舞いした。

また彼らは敵潜水艦が音響魚雷を使用した時を考え、妨害音波を発信するフィクサーの曳航を開始していた。さらに持ち前の高速を生かして、敵潜水艦への素早い攻撃を実行した。

この結果、不用意に船団と距離を詰めてしまったUボート1隻がヘッジホッグと爆雷の集中攻撃を受けて撃沈された。この潜水艦にとって不幸だったのは、第二撃目の魚雷を装填中に攻撃を受けてしまったことであつた。もし二撃目を発射できていたら、少なくとも

攪乱は出来た筈であった。

もったも、ではこの潜水艦の犠牲が無駄かと言えばそう言うわけでもなかった。この潜水艦の攻撃により、護衛艦隊と船団の距離が離れてしまった。千川もようやく事態に気づき、駆逐艦の半分に戻るよう指示した。

しかしこれがまた大変であった。戻るといつても夜間であるため、下手をすると衝突してしまう。さらに船団の側も陣形が乱れてしまっていたので、こちらもまた下手な動きをすると衝突を誘いかねなかった。

こうして護衛艦隊と船団ともに、大きく動きの選択肢を奪われている隙を、Uボートの艦長は見逃さなかった。

「ヤーパンめ！仲間の仇討ちだ！」

目標となったのは、経験不足であるため船団から遅れてしまった貨物船であった。その船は船齢の浅い戦時標準船であり、船長も経験の浅い人間であった。そのため、ベテランほど敏捷な動きを出来ず、船団からも遅れてしまっていた。

そして、そこにUボートから発射された魚雷を2本食らった。

ドゴンー！！

再び海上に閃光と爆音が轟く。そして被雷した貨物船はあつと言う間に浸水し、傾斜してしまう。もちろん、もはや助かる見込みなどなく、乗組員は慌てて救命ボートに乗り込むか海に飛び込み、脱出した。

こうして、貨物船は多くの貴重な物資をその腹に抱えたまま海底深く沈んでいった。

「な、なんたることだ。」

同盟国の貨物船がなす術もなく海底に引き込まれていく姿に、千川は切齒扼腕する。

「ええい！早く潜水艦を片付けんか！」

怒りに任せて千川はそう怒鳴ったが、ここで彼は大きな思い違いをしていた。彼の任務は船団を無事に目的地まで連れて行くことであつて、潜水艦の撃沈ではない。潜水艦の撃沈はあくまで目的のための手段なのだ。それがいつのまにか目的にすり替わってしまった。

しかし、元々敵艦を戦うことをモットーにしてきた連合艦隊の将兵たちにとって、そのことを疑問にする者などほとんどいなかった。敵を倒せば攻撃してくる相手はいなくなる。攻撃こそ最大の防御であつた。この命令により、一旦は船団に戻ろうとした駆逐艦も、潜水艦の掃討戦に向かった。

もつとも、そのために商船は一時的に丸裸となつてしまつていたが。空母や戦艦と違い、さらに鈍足な商船が巡洋艦や駆逐艦の運動に付いていける筈がなかった。

ただし、例外もいた。駆逐艦「夕雲」は艦長が商船学校出身者であつたため、潜水艦の追跡命令を無視して一端護衛艦隊の陣形から離脱し、船団との合同を図った。命令違反覚悟で、船団を守る方を

優先したわけだ。

一方護衛艦隊の主力は、ヘッジホッグや爆雷を海中に投射して潜水艦を燻りだそうとした。もちろん、ソナーや音波探信を行うため、時々攻撃を止めて様子をみたりもした。

対するUボートの艦長たちは利口だった。敵の動きから、相手が高速の巡洋艦と駆逐艦だとわかると勝ち目がないと判断し、一目散に遁走を図ったのである。

日本の艦隊駆逐艦は、爆雷の搭載数では護衛駆逐艦に劣るものの、この時期にはヘッジホッグや最新式のソナーと言った一応対潜装備一式は搭載していた。さらに35ノット以上のスピードで洋上を疾駆するので、Uボートにしてみれば誠に戦にくい相手であった。

結局、護衛艦隊主力の撃沈記録は1隻に留まった。その代わりに、金星を挙げたのはただ1隻離脱した駆逐艦「夕雲」であった。

「夕雲」は船団至近に戻ると、船団側から見て左舷側に占位しようとした。これは船団からみて右舷側で護衛艦隊主力が対潜水艦戦を行っており、そのため敵潜水艦が右舷側からは接近しにくいと判断したためだった。

そしてこの判断は図に当たった。実はこの時、船団を襲撃したUボートは計5隻で、内3隻が右舷側からの襲撃を試み、この内の1隻が「秋雲」を撃破していた。残る2隻は右舷側の攻撃中を狙って左舷側に移動し、襲撃を試みようとした。

これは日本側の護衛艦艇が多く、右舷からの襲撃だけでは接近が困難であるとUボートの先任指揮官が考えたからだ。

結果は見事、船団から落伍した貨物船1隻の撃沈であった。ただし、Uボートにとっても予想外であったのは、それ以外の商船は意外と早く立ち直り、回避運動を行ったことであった。そのため攻撃の機会を一時的に逃がしてしまった。

そして再度の攻撃のために、攻撃位置に付いた時に「夕雲」の探信義に探知された。

「夕雲」は船団に敵潜水艦の予想位置を発光信号で報せると、早速牽制攻撃に掛かった。この時点で「夕雲」はヘッジホッグと爆雷の残弾に余裕を持っていた。

対して驚いたのはUボートの艦長であった。攻撃に入ろうとした絶好のタイミングで駆逐艦が向きを変え、しかも高速で向かってきたのである。さらに悪いことに、彼らが魚雷発射管に装填していたのは通常魚雷であった。音響魚雷はこの状況で使えないと判断していたからだ。

船団への攻撃は無理だと判断したUボートは、魚雷を全部発射すると一旦離脱を図った。しかし「夕雲」は適当に撃たれた魚雷を回避した。しかも、回避後1隻を絶好の射点に収めた。

「撃て!!」

漆黒の闇に包まれた海中目掛けて、ヘッジホッグと爆雷が叩き込まれた。そしてヘッジホッグの1発が敵潜水艦を捉えた。

ドグワーン！ドーン！グワーン！

ヘッジホッグは1発が爆発すると残りも誘爆する仕組みになっている。そのため、連続爆発が起きた。凄まじい水柱が海上にも出現した。もちろん、至近で爆発を受けたUボートが助かる道理はなく、同艦はバラバラになって沈んだ。

「夕雲」は撃沈こそ確認しなかったが、敵潜水艦の音響が消失したため追跡を打ち切り船団へと戻った。

こうして夜の戦いは終わった、護衛艦隊は敵潜水艦を2隻撃沈（護衛艦隊は確実な戦果を確認していない）したものの、駆逐艦1隻と貨物船1隻を失った。失った艦船数こそ同じであるが、総合的に見れば負けである。

その後船団と護衛艦隊は順調に進み、なんとかケープタウンに入港することが出来た。しかしこの戦いは、改めて連合艦隊が未だに艦隊決戦主義の呪縛から完全に抜け切っていないことを内外に印象付ける戦いとなってしまった。

「夕雲」のような例外もあったが、それは艦長が比較的商船に対しての理解があったという偶然に過ぎず、帝国海軍は何らかの工夫を凝らさねばならなかった。

戦線拡大 10 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

戦線拡大 11

連合艦隊艦艇による船団護衛失敗は、日本海軍にとって大きな問題であった。それは連合艦隊の貴重な艦艇を喪ったこともさることながら、自国や同盟国の商船に被害を与えてしまったことである。ことに、同盟国商船の被害は無視できる物ではなかった。

連合艦隊は日本海軍の象徴である。実質的には、近海防衛艦隊の方が働いていると言えるのだが、国内外に対する宣伝では、以前大きなウェイトを占めた存在で、日本海軍の看板を背負っていると言える。

だから、連合艦隊の失敗は即日本海軍全体、引いては日本にとつての大きなイメージダウンになると考えなければならない。実際、今回の問題を海軍軍令部のみならず外務省なども注視した位である。

そして結果は、諸外国からの「遺憾」と言う文書の送付であった。

商船が被害を受けたのも大きかったが、何より連合艦隊の艦艇が潜水艦を追いかけるのに夢中となり、船団を放り出したのが大きな問題とされた。日本海軍は商船を本気で守る気がないと言われたも同然である。

さらに不味かったのは、連合艦隊の乗員が寄港先のケープタウンのバーで「どうしてそこまでして輸送船なんかを守ってやらなきゃならないんだ！」と言う発言を、目ざとくアメリカやイギリスの記者に聞きつけられ、すっぱ抜かれてしまったことである。

第一次大戦や日中戦争の戦訓を通して、海上護衛に力を入れて近

海防衛艦隊と言う組織まで作った日本海軍であるが、商船護衛に対する意識に関しては、まだまだ問題を抱えていたと言えよう。

近海防衛艦隊の乗員ならば、任官時から船団護衛をの意義やそれに即した戦法などを一から叩き込まれる。加えて戦時の場合は乗員の多くに高等商船学校出身者や逓信省の船員養成所出身者が多数含まれる。だから、商船乗員の気持ちを守るし、商船を守ろうと言う気持ちも大きい。

それに対して、連合艦隊の場合一応船団護衛の意義や戦法を習うには習うが、そんなものは片手間として習うに過ぎない。彼らにとつての本命は敵の戦艦・空母をはじめとする軍艦を沈めることであり、艦隊決戦である。当然頭ではわかってても、本音としては船団護衛にいまいちやる気が起きないとなってしまう。また、商船学校出身者の割合は相当に低く、自然乗員も艦隊決戦を頭に叩き込まれた純粋な海軍軍人ばかりであるから、余計意識などの面で差が出てしまう。

その点が今回露呈したのみならず、同盟国のメディアに知られてしまったのだから、さあ大変である。連合艦隊司令部には国内外から怨嗟の声が殺到してしまった。もちろん、内閣や関係各省庁、さらには身内の軍令部や海軍省にまで文句を言われる始末だった。

このままでは日露戦争と日中戦争時の悪夢が繰り返されかねない（既に繰り返されていると言っても良いが）。そのため、連合艦隊司令部は早速千川少将率いる派遣艦隊に、早急なる改善と次回作戦を絶対に成功させるよう激励文を打った。

こうして、ようやく意識的にも本腰を入れ始めた連合艦隊司令部であったが、実際に現場で働いている者からしてみれば、早々簡単

に出来る物ではない。

「上は現場のことを全くわかっていない!!」

これまで船団護衛に対する意義をしつかりと教育せず、訓練も形ばかりの物しかやらせなかつたくせに、具体的な命令も出さず、ただ改善命令と激励だけをしてくる連合艦隊司令部に、千川ら派遣艦隊幹部らは憤りを感じられずにはいられなかった。

第一次世界大戦への参加や、日中戦争の戦訓からある程度の合理性や柔軟性を持ち合わせるように成ったとは言え、まだまだ帝国陸海軍内部における部下への丸投げ、現場への押し付け気質が残っていた。しかも、連合艦隊司令部のように日本本土にある組織ほど、その傾向が強かった。

しかしいくら文句を言っても始まらないし、実際ケープタウンやセイロンでの連合艦隊将兵への風当たりは強く、港のパブや酒屋では「グランド・フリート（連合艦隊）お断り」という看板まで出されている始末だった。このような屈辱は、日露戦争中の第二艦隊司令官上村中将が受けて以来の物と言って良い。

その汚名を雪ぐには、とにかく行動で示すしかない。すなわち、今度の護衛任務を何が何でも成功させることである。

そこで千川らが取った行動は、恥を覚悟で近海防衛艦隊司令部や艦長たちを回つて。マニュアルを借りたり、これまでの戦訓を聞いたりすることであった。近海防衛艦隊の人間からしたら、「何を今更」とでも言いたいことだが、これ以上商船に被害が出て欲しくない気持ちは人一倍強いし、頭まで下げられて応えないわけにはいかない。

こうして連合艦隊は、貴重なマニュアル類と戦訓を手に入れることが出来た。

ただし、これは逆に言えば連合艦隊が近海防衛艦隊のマニュアルや戦訓をこれまで放置（と言うか無視）していたことを表す事でもあった。そして実際に被害を受け、諸外国からの反発を受けて、ようやく改善へと動くと言う、何とも情けないことでもあった。

そうした事情はともかくとして、千川らは早速それらを読み込んで研究を行った。ところが、調べていくとそれらを完全に生かすのは不可能とわかった。理由は艦艇の性能の違いが大きく関わっている。

以前も紹介したが、連合艦隊の第一線艦艇と近海防衛艦隊で使う護衛駆逐艦や海防艦は、設計段階の時点で、想定される使用用途が既に大きく違う。

連合艦隊の艦艇は高速で動く艦隊に配属されるのが前提だから、最高速力や巡航速力は高めだ。30ノット以上のスピードで走り回り、敵艦隊へと突撃する。加えて武装や防御力も敵との戦闘を第一に考えて設計されているから、積めるだけ積むという形をとる。

これに対して、近海防衛艦隊の艦艇は船団護衛や近海における救難を第一として設計している。そうなると高速はいらないし、むしろ低速で長い時間・長い距離での運転が可能なような設計となる。武装や防御力も潜水艦や航空機、自分と同レベルの艦艇が相手となるためあまり重視されない。艦種によっては商船と同じ構造にしている位だ。

こんな水と油の設計思想に基づいて設計された艦艇を場違いな任務に投入するのは、本来間違っている。しかしながら、艦の数に限りがある以上どうしようもない。そうした正しい戦術を採れるのは、アメリカのような金持ち国家だけである。日本のような貧乏国家に贅沢は言っていられない。

連合艦隊の艦艇は、出来うる限りの範囲でやらなければならなかった。

そこで取り敢えず千川少将が採った策は、まず駆逐艦や軽巡の魚雷発射管の一部を降ろした。敵の水上艦が出てくる可能性がゼロに近い以上、大型の魚雷など積んでも無駄である。むしろ可燃物を積み込む分危険極まりない。

この時点では、潜水艦追跡用の音響魚雷の開発はまだあまり進んでおらず、はつきり言って魚雷が対潜水艦兵器とはなり得なかった。

魚雷を降ろすと、各艦は代償としてヘッジホッグや爆雷、そして機銃の搭載数を大幅に増やした。特にヘッジホッグと魚雷はそれまでの倍近く搭載し、長時間の対潜戦闘に耐えうるようにした。

さらに航空母艦とその艦載機についても、夜間でも運用可能に出来るよう夜間の発着艦訓練を行った。夜は航空機の動きがない故に敵に隙を与えてしまう。それを少しでも埋めるためであった。

またそうした武装面以外でも工夫を凝らした。まず巡洋艦や駆逐艦のスピードが速すぎる点に付いては、イギリス海軍の戦訓を参考に、周囲でグルグルと回る方法を探る。一見すると、スピードを落として並進した従来の方が合理的に見えるが、実際の所はこちらの方が高速状態を保てるから、敵により素早く攻撃できる。

また船団出撃前の会議を寄り念入りに行うことで、情報の共有化を行うように通達した。船団を構成する各船の情報を護衛艦の各艦長が把握することで、少しでも円滑に護衛を行えるようにする。また、船団の艦長たちとの交流を持つことで、それぞれに一体感を持つと言ふ意味合いもあった。

こうして地道に準備を進めたが、実際の所時間はあまりなかった。何せ船団は無数に航行しているのだ。幸いにも米英やブラジルなどの護衛艦隊と近海防衛艦隊とのタイムスケジュールの調整によって、2週間ほどの時間を得たが、訓練や改装の時間を考えるとあまりにも短かった。

そのため千川ら連合艦隊の将兵は、その分を座学や兵技演習を行うことで埋めようと必死になって取り組まなければならなかった。彼らは自らの汚名を雪ぐため、それこそ月火水木金金の毎日を過ごした。

こんな付け焼刃的な訓練と改装しか行えなかったが、それでもやらないよりは遥かにマシであった。

そして2週間後、連合艦隊派遣艦隊は前回とは逆のケープタウン発セイロン行きの船団を護衛することとなった。この船団にはインドで戦う日本陸海軍向けの支援物資が満載されており、その意義は大きな物であった。

千川少将は船団を構成する各船の情報を把握するとともに、さらに艦長や船長を交えての合同会議を行い、双方の情報交換と交流を図った。

こうして、やれるだけのことをやった連合艦隊派遣艦隊は、再び
Uボートが跳梁跋扈する海域へと輸送船団を護衛して出撃した。

戦線拡大 11（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日本の戦没商船について調べるなら、神戸の戦没した船と海員の資料館が便利です。

雪辱 上

昭和19年11月下旬、日本海軍連合艦隊艦艇による2回目の船団護衛が実施された。船団司令官は前回と同じく千川清少将で、旗艦も改「阿賀野」級の「千種」であった。空母も「龍鳳」が参加した。ただし、前回と違って戦闘で失われた駆逐艦2隻の補充が未だ無く、急遽近海防衛艦隊所属の護衛駆逐艦2隻を編入した。

護衛するのは各種貨物船18隻と貨客船6隻、タンカー3隻である。連合国側各国に所属する船が入り混じっており、万が一再び撃沈されるような事態が生じたら、今度こそ日本海軍連合艦隊の威信を地に落ちる可能性大だった。

船団はケープタウンを出航し、前回とほぼ同じ航路でセイロン島のコロンボ港へと向かった。もちろん、その航海中にマダガスカル島やジブチ・エチオピア方面から出撃した枢軸海軍潜水艦と交戦する可能性大だった。

前回の戦訓に鑑み、急ごしらえながら護衛艦隊は様々な改正を行っていた。特に、艦隊陣形は護衛の駆逐艦が単純に輸送船と並行して前進するのを止めて、船団の周りでグルグル回る英海軍や近海防衛艦隊が採用している方式を採った。

早朝に出撃した船団は、船団速力11ノットで東進した。船団航行の場合、最も遅いスピードの船に合わせて走らねばならない。現在の所、日本政府は各船会社に対して海外航路には巡航速度12ノット以上の高速新鋭船を投入するようにしていた。

これによって近海航路の船は低速小型船が多くなってしまったが、

船団航行のリスクを抑えようとした結果である。

船舶改善助成施設や、アメリカからのリバティー船購入で大分減ったものの、未だ明治から大正期に建造された老朽船を日本の船会社はかなり保有していた。例えば、日露戦争でバルチック艦隊を発見した汽船「信濃丸」は昨年（作中では1943年）まで健在だった。さすがに船齢40年となり引退し、長崎で記念船となったが、こうした船舶がまだまだがんばっていたのである。

第一次大戦前後、海外との輸出入増加を見越して、当時の造船所ではストック・ボートと呼ばれる船舶をかなり建造した。これは船会社からの発注なしに、造船所が船を建造し、それを船会社が後から買い取った船のことである。そのため、全く別の複数の会社（例えば日本郵船と大阪商船と日本海汽船）に同型船が多数あるという状況であった。

もちろん、これらの船は第一次大戦前後に建造されたから軒並み蒸気式レシプロ機関である。そのため速度が遅いし加速は悪い、大量の火夫が必要でおまけに真っ黒な煙を朦々と吐き出すと言う、潜水艦がうろつく海域では絶対に使いたくない類の船だった。沈めて下さいと言っているようなものである。

こんな船をUボートのいる海域に出させるわけにも行かず、国は商船会社に対してディーゼル船をはじめとする高速で船齢の若い船を海外航路に投入するよう要請した。

このおかげで、日本船籍の商船で大西洋やインド洋に派遣された船舶のほとんどは新鋭の高速船となり、まさに「マルシップ」の象徴となった。しかしながら、国内や近海航路にはまだまだ蒸気レシプロ式船も多数残っていた。

日本の場合経済的な理由から1930年代に入っても蒸気レシプロ式の貨物船を建造していた。こうした蒸気船が完全に淘汰されるのは、日本が戦後経済成長を遂げる昭和40年代に入ってからである。

話は逸れたが、とにかくそう言うわけで日本船には高速新型船が多数いたということだ。またアメリカも戦前に船舶の積極的なスクラップビルトを行っていたので、リバティー船のようにスピードこそ遅いが、その他の性能では優秀な船が揃っていた。

またイギリスの場合はかなり特異な例が存在する。

戦前、欧州各国はヨーロッパ各地から新大陸アメリカとの間の航路で熾烈な競争を続けていた。あの有名な「タイタニック」に象徴されるように、この航路はドル箱路線であった。特に三等船客は彼らにとって金なる木であった。

あまり知られてはいないが、収益率で見ると一等船客よりも三等船客の方が遥かにコストパフォーマンスが良い。まあ、格安運賃とは言え狭い空間に大量の人間を押し込み、安い食料を提供する程度で済むのだから当然と言えば当然であるが。

船会社にとって、一等客用の設備はあくまで見栄と宣伝用であった。そしてもう一つの見栄として売り出されたのがスピードであった。

当時船会社の間で話題になったのが、ブルー・リボンの争奪である。これは大西洋を横断する船で一番速い船に冠せられた称号である。別に国やどこかの団体が正式に認定するわけではないが、この

称号を持つことは船会社にとって何よりも名誉あることであつた。

「タイタニック」号が冰山と衝突して沈没した原因の1つに、スピードを上げるために冰山の警告を無視したという話がある。そのことが、当時船会社にとってスピード記録を持つことがどれ程大きなことであつたかを示している。

そして第二次大戦直前も航空機が発達前であつたため、むしろ船の性能や建造技術の向上によってこの競争は熾烈さを増した。ドイツの「ブレーメン」、フランスの「ノルマンディー」、イタリアの「ローマ」など欧州主要各国がそれぞれの国の威信を掛けて豪華客船を建造して大西洋横断航路に投入した。そしてブルー・リボンを奪つては奪い返された。

これらの客船は、需要の関係から日本の豪華客船に比べて遥かに巨大であつた。全長が300m近い船もあり、日本最大の「樫原丸」級（全長225m）とは比較にならないレベルの船であつた。

しかしながら、これら豪華客船の内日独伊船は徴用の上空母へと改装されてしまい、しかも軒並み戦没してしまった。フランスの「ノルマンディー」に至つてはニューヨークで改装工事中に火災が発生、消火用の水が船内に溜まつたのが原因で横転し、そのまま喪失となつてしまった。

一方連合国側の英国はと言えば、さすがにかつて「タイタニック」や「オリンピック」と言つた船を持つた国だけあり、この時代も多数の豪華客船を保有していた。

その代表格は「クイーン・メリー」であつた。「クイーン・メリー」は最高速度が30ノットであり、しかもその速度で巡航可能と

言う、一種の化け物じみた性能を保有していた。そしてイギリスはこのような大型客船を空母へ改装する必要などなかった。

イギリスはこれら大型客船を兵員輸送船へと改装した。これらの船は、1回で1万近い兵士を輸送可能であった。そして何より凄いのは、その高速巡航力であった。これによって「クイーン・メリー」は船団に入る必要など無く、むしろ高速性能を押し殺してしまい、無駄であった。そのため戦争の前半期間中、制空権を確保されている海域では基本的に独航で航行した。

その後音響魚雷や高速Uボートが登場するとさすがに護衛を受けたりもしたが、すくなくとも船団に入ることはなかった。

閑話休題。

さて、ケープタウンを出港した護衛艦隊と輸送艦隊はUボートに警戒しつつ進んだ。もっとも、早朝出港したので、日の入りまでは空母「龍鳳」艦載機、さらにはケープタウンの基地航空隊などによって護衛され、潜水艦の接近を阻むことが出来た。

しかしながら、昼の内からUボートより発信されたと思しき敵電波を探知したので、護衛艦隊と船団の人間は夜間に襲撃してくることを予測した。

しかし、千川少将は大いに自信を持っていた。1週間と言う短い時間とは言え、彼らは近海防衛艦隊やイギリス艦隊から教えを請い、その戦訓を全艦に徹底させていた。また船団各船との関係を親身に、いざと言う時の連携を円滑に行えるようにもしていた。何より、前回のような無様な真似は出来ないと言う事実が彼らの闘志を燃え上がらせていた。

「今度こそ守りきる！」

千川ら護衛艦隊の面々は強くそう誓っていた。

そして日が落ち、海上を闇が包み込んだ。「龍鳳」からは昼間より数は少なくなったが、夜間哨戒の「北海」が発進し、船団付近の警戒にあたる。また各艦・各船のレーダーとソナーも敵襲に備えた。見張り員も増やされ、Uボートからの魚雷攻撃に備えた。

緊張した時間が続く。

日付が変更されるころ、ついに動きがあつた。対潜哨戒中の「北海」哨戒機が磁気探知機に反応を捉えたのである。すかさず対潜爆雷を投下して攻撃した。

続いて海上に照明弾が投下される。すると雷跡が発見された。

「全船予定通りに回避運動に入れ。並びに船団全周への警戒を厳にせよ！！駆逐艦「青波」は「北海」の誘導の元現場海域へ急行せよ！！」

前回とは違い、退避も攻撃行動も予め決められた手順で行われる。そのため無用な混乱は起きず、各艦船はスムーズに退避と攻撃態勢に移った。また「龍鳳」からは追加の「北海」が発進した。夜間であるため限られた機数だが、それでも出さないより遙かに良い。

「さあ、来てみる灰色狼め！前回のようには行かんぞ！！」

各艦の爆雷とヘッジホッグに兵員が付き、いつでも発射できるよう

に準備される。護衛艦隊側の戦闘準備はなつた。

雪辱 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

雪辱 中

インド洋方面におけるUボートの活躍は、現在に至るも活発である。日本陸軍の派遣部隊や英軍の反撃によつて、徐々に独伊枢軸軍は中東方面から後退しつつあるが、インド洋方面においては未だマダガスカル島や紅海の入河口であるジブチやエチオピアを中心として潜水艦が活発に活動中であつた。

独伊海軍潜水艦の主力は大西洋や地中海に展開しており、インド洋方面の部隊はどちらかと言うと2線級部隊と言つてよい。そのため、最新式の次世代型潜水艦のXX1型はお披露目程度の数しか配備されておらず、主力は相変わらずの在来型である。

もつとも、だからと言つて在来型のUボートが恐ろしくない相手かと言えはそうではない。在来型の潜水艦と言えど改良を繰り返しており、シュノーケルや新型ソナー、レーダーに新型魚雷を装備している。それらをドイツより供与された仏伊海軍の潜水艦も同様である。

これらの改良によつて、Uボートは例え在来型艦と言えど未だ強力な戦力であつた。しかも竣工した時期が古い分、乗組員もベテランが揃つていた。

開戦以来、ドイツ海軍では空母や戦艦と言つた水上艦の拡充にも力を入れていたが、潜水艦の増強にも熱心であつた。潜水艦学校の生徒数が大幅に増強されると共に、Uボート自体も開戦時はわずか57隻であつたのが、この時点では500隻近い数にまで増えていた。

潜水艦隊司令官のデーニッツは、開戦時最低でも300隻は欲しいといったが、その2倍の数に迫る勢いであった。

これで連合軍側が、補充が追いつかない位の損失をドイツ側に与えていたら、戦況ももう少し楽になっていたのであるが、事はそう上手くは行かなかった。

確かに、連合軍が戦力を増やした直後や新兵器を投入した直後などは、一時的にUボートに与える損害は増えた。しかしながら、ドイツ海軍もすぐに対策を打って来るため損害は直に少なくなり、決定打とはなり得なかった。

例えばドイツ海軍の最大の秘密であるエニグマ式暗号装置。イギリス海軍はこの装置の奪取を試み、成功させたこともあった。しかしながら、ドイツ側はドイツやフランス、さらには占領地各国の学者や、本来は滅ぼす相手であるユダヤ人の学者までを総動員してエニグマ式暗号装置の改良を繰り返し、未だイギリス海軍は完全に解読し切れていなかった。つまり、その競争において勝利を収められなかった。

レーダーやソナーなどの電子技術においても、連合国側はアメリカの参加により一時期優位に立てる所まで行っただが、ドイツ側も負けじと全力で開発を行い、未だ決定的な優位を得ていなかった。そんなわけで、開戦以来Uボートはそこその数を喪失しているものの、致命的なほどの数ではなかった。そしてインド洋方面においても、状況は同じであった。

インド洋方面において、Uボートをはじめとする枢軸海軍潜水艦は、日英艦隊の奮戦によりそれなりの数を喪失している。しかしな

がら、やはりこちらでも致命的な数ではなかった。水上艦隊こそ壊滅的な打撃を受けたが、潜水艦の方はそこまで酷い損害ではなかった。

潜水艦の場合、1艦に乗り込む乗員数は少ないと40名程度、多くても100名を超えることなどない。つまり1隻を撃沈しても、駆逐艦の半分以下の人的損害としかならない。

潜水艦の建造単価はタンクなどの構造が複雑になるので空母や戦艦に比べても高いのであるが、人命という究極のコストパフォーマンスの観点から見れば、かなりおいしい兵器であった。

話がすこしばかりずれたが、Uボートをはじめとする枢軸潜水艦隊は質量共に未だ十分な戦力を持っており、経験豊富であった。そんな連中と戦って損害を受けたのだから、初めての護衛を行った連合艦隊艦艇が完全な仕事を行うこと事態無理があった。

そんな千川少将率いる連合艦隊より派遣された護衛艦隊の乗員たちは、今度こそ任務を完遂すると張り切っていた。

「今度こそ失敗は許されない。」

千川ら艦隊乗員の誰もが、そう心に誓っていた。

前回任務に失敗したのも大きかったが、それ以上に周りからの白い視線の方が彼らには痛かった。あのような屈辱は二度と御免と言う空気が艦隊を支配していた。

「体当たりしてでも輸送船を死守せよ！」

出撃前の訓示で、千川はその様に訓示していた。

一方彼らに勝負を挑む枢軸潜水艦隊と言えば、前回の勝利に酔わず比較的冷静に待ち受けていた。

「前は上手く行ったが、ヤーパンの艦は高性能だし空母も付いている。それに前回と同じ徹を踏む程愚かでもないだろう。何と言っても連中はトーゴーの子孫だからな。」

ある老練なUボート艦長はそう言って部下の気を引き締めた。

連合艦隊派遣部隊とUボート戦隊との第二ラウンドは、船団出港2日目夜から始まった。ケープタウンを出港してしばらくの間は、昼夜に関わらず陸上からの哨戒機による援護が望めたが、陸地から遠くはなれたことでそれも不可能となる。後は護衛艦隊のみが頼りだ。

もつとも、護衛艦隊は前回の戦訓をふんだんに取り入れてUボートを待ち受けていた。随伴する空母「龍鳳」からは、少数ではあるが夜間哨戒機を出しており、また旗艦である軽巡「千種」も搭載している2機の「瑞雲」水上偵察機に航空爆雷を搭載し、交代で発艦させていた。

「瑞雲」は急降下爆撃もできる優れた水上機で、やはり磁探と電探を搭載しており、有効な対潜哨戒を行うことの出来る機体であった。

たった数機のエア・カバーであるが、磁探ならびに電探搭載の航空機が船団から少しばかり離れた外周部を飛び回るだけでも威力は大きい。

「畜生！今日のヤパナーは哨戒機を上げている。」

浮上していたあるUボートでは、艦長が舌打ちしていた。そのUボートは逆探で哨戒機が発する電波を傍受するとすかさず潜航したのだが、これは結果的に艦の保全は出来るが攻撃の機会を逸しやすくしてしまう。

この時代の潜水艦は、所謂「可潜艦」と呼ばれるレベルの代物だ。潜水能力は低く、水中での最高速度はせいぜい10ノットだ。しかも、そんな高速で走らせるとあつと言う間に電池を消耗してしまう。

そのため、潜水艦が船団や艦隊を襲撃する際に多用するのが、敵艦から若干離れた位置で浮上し、水上を全速航行して先回りして襲撃する方法だ。水上であれば20ノット以上のスピードで航行可能であるし、エンジンを使ってバッテリーをフル充電出来る。

もちろん、浮上することは敵からの襲撃を容易にしてしまう。しかし航空機の活動が制限される夜なら、活動しやすくなる。それだけ襲われる確立が落ちるからだ。

しかし今日の日本艦隊は、少数とは言え船団付近に航空機を飛ばして警戒していた。こうなると浮上しては攻撃して下さいと言っている様なものだ。

「どうやら今日のヤーパーンは前回の戦闘をしっかりと反省したらしいな。」

ケープタウンに潜んでいるスパイや、無線傍受などからUボートの艦長は、今日の護衛部隊が前回叩きのめした日本艦隊であると知っていた。それだけに、彼らが早々と対抗策を打ってきたことに驚くと共に、関心していた。

こうしてこのUボートはこの夜に関しては襲撃の機会を完全に逸した。

この日船団に接近したUボートは計4隻であったが、いずれも対潜哨戒機の活動を探知すると、接近することに慎重となった。2隻が勇敢にも接近を図ったが、1隻は追いつけずに振り切られ、もう1隻は浮上して接近したのを探知され、撃沈こそされなかったが爆雷を受けて、攻撃には失敗した。

最終的に、1日目の夜は連合艦隊の方に分が上がった。船団は攻撃を受けることさえなく、朝を迎えた。

「よしよし。1日目は乗り切ったな。しかし。」

輸送船・護衛艦双方に被害が無かったことに、千川は安堵しつつも、素直には喜べなかった。なぜなら、実は対潜哨戒機の内1機が不時着水してしまい、パイロットのペアが重傷を負ってしまったからだ。やはり1週間程度の付け焼刃な訓練では無理があったようだ。

これによって貴重な夜間飛行可能なペアが減ってしまい、必然的にそれは夜間哨戒に穴が開くことを意味していた。

また「千種」より発艦させた水上機に関しても、夜間の貴重な工ア・カバーを提供したものの、回収の際は「千種」を止めねばならなかったため、面倒この上ない。さらに水上機であるが故に帰還後1機がエンジン・機体共に不調であることが判明し、修理に時間を掛けそうであった。

直接水に触れる水上機は、潮風や潮水の影響を受けやすいのだ。また軽巡用のような艦艇の整備施設で出来る整備の範囲も限定されたものでしかなかった。

「今日の夜は昨夜のようにには行かん。」

対潜哨戒網に大きな穴が開いてしまったことを知った千川は、そう言わずにはいらなかった。

船団と艦隊はインド洋を一路東に向かって驀進する。昼間は「龍鳳」の搭載機がフル稼働し、また各艦の見張り員も双眼鏡で付近の海上に目を凝らした。

1回Uボートが接近してきたものの、これは早期に対潜哨戒中の哨戒機に発見されて撃退された。

そして船団は二日目の夜を迎えた。

雪辱 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

雪辱 下（前書き）

今回は普段より少し短めです。

雪辱 下

戦いは第2ラウンドへと突入した。昨日夜の戦いでは味方の被害無しでUボートの襲撃を乗り切った船団と護衛艦隊であったが、2日目の今日是对潜哨戒機の数が減ってしまったので、哨戒網に穴が開き、必ずUボートがその穴から攻撃してくるものと考えられた。

護衛艦隊司令官である千川少将は、配下の駆逐艦部隊にその哨戒網の穴に対する警戒を厳重に行うと共に、積極的な防衛行動を行うように命じた。積極的な防衛行動とは、音響装備をフル稼働して敵潜水艦の位置を先に捕捉し、牽制することである。

第二次世界大戦開戦前、連合艦隊内部では当時の新兵器電探に対する「闇夜の提灯論」が出ていた。これは電探が電波を発する兵器であることから、こちらの位置を暴露してしまい、戦場では役に立たない兵器であるという考え方だ。

ただし、これは大きな誤りである。そもそも電波は周波数や波長と言う形で違いがあり、電探の場合もその電波を拾うには専用の逆短が必要となる。つまりは、当時の日本海軍高級士官の電波に対する理解はその程度であったと言う事だ。

しかしながら、電探に関しては幸いにも霧中航行時や地上基地設置型であれば有効であるという事で陸上型、ならびに艦上型ともに研究は続行され、さらに開戦後はアメリカやイギリスの技術輸入で大幅に進歩した。

一方、ソナーに関しても同様の問題が出た。それがピンの無闇な

発信は味方の位置を暴露するので、極力控えた方が良いと言う考え方だ。

ソナーには主に2種類あり、一つは相手のスクリー音などを直接探知して聞く聴音型パッシブ・ソナーであり、もう一つは音波を発してその反射から敵の位置を探るアクティブ・ソナーである。上記の問題の対象となったのは後者のソナーだ。

ただし、音波を発進しなければ敵の位置を探知できないのであるから、音波を発信するなど言うのははつきり言って本末転倒な問題と言ってよい。現に現場の水測員などからはすぐにクレームが付き、さらにその事を大真面目にアメリカ軍やイギリス軍の軍人の前で話して、呆れられたという事態まで起きた。

そのため、この時期にはいずれの頓珍漢な問題はほぼ払拭され、電探にしろソナーにしろ積極的に使用されていた。

護衛艦隊の駆逐艦も、Uボートの襲撃に備えて電探を作動（電探は主に浮上した敵潜水艦を探す）させ、さらに時折ピンを発信して、近くに敵の潜水艦がないか探した。また音響魚雷による攻撃に備えて、フィクサーの曳航を開始した。

護衛艦隊に加えて、昨日よりは数が減ったものの有効なエアバ―を提供する対潜哨戒機と水上機が出動し、磁気探知機による敵潜水艦探しを開始した。

対して、襲撃を目論んだUボートをはじめとする枢軸潜水艦隊は無音潜航や深深度潜航を行うことで敵の目をごまかし、接近を図った。

「今日の相手は戦い甲斐のある相手のようだ。」

老練なUボート艦長は、上空に対潜哨戒機を上げて、有効に護衛艦を使う敵艦隊を見てそう呟いた。

日付が変わる頃、戦いの火蓋が気つて落とされた。まず空母搭載の「北海」対潜哨戒機が磁気探知機で潜水艦らしき反応を探知、航空爆雷を投下した。この時攻撃を受けたUボートは沈没はしなかったが、航空機に探知されたことで慎重となり、攻撃の機会を逸した。

続いて30分後、駆逐艦の1隻が自艦右舷前方に微かではあるが、反応をアクティブ・ソナーに探知し、接近の上ヘッジホッグを投下した。この攻撃は空振りに終わり、撃ち込んだヘッジホッグは爆発することなく海に沈んだ。しかし、これによって護衛艦の警戒レベルは上昇した。

各艦の電探並びに水測兵はその目と耳を研ぎ澄まし、どんな些細な反応を見流さないように身構えた。また見張りの兵士も、それぞれを皿にして海面を見張った。

最初のヘッジホッグ発射から20分後、今度は別の駆逐艦が魚雷の推進器音を探知し、直後には雷跡を発見した。この攻撃は音響魚雷によって行われたため、魚雷は駆逐艦の引くフィクサーに反応し、護衛艦と輸送船に対する被害は出なかった。

付近の海上は深い闇に包まれていたが、海中と海上との壮絶なる死闘が続いた。

30分後、駆逐艦の1隻が再び潜水艦の反応を探知し、全速力でその海域に直行、ヘッジホッグと爆雷を海中へと叩き込んだ。この

時Uボートは積極的な反撃に転じ、駆逐艦に魚雷を発射しようとした。ところが、それが裏目に出て、先に探知された拳句ヘッジホッグの直撃を受けて撃沈されたのであった。

駆逐艦側はしっかりと撃沈を確認できなかったが、敵潜水艦の推進器音の消失を確認したので、取り敢えず安全は確保されたとして現場海域を離れ、船団の元へと戻った。

こうして最初の軍配は日本側に上がった。

しかしドイツ側もすぐに反撃に出た。探知を逃れ、商船への絶好の射点に付いた1隻が大型タンカー目掛けて魚雷2本を発射した。

この魚雷は1本が大型タンカーの右舷に命中し、同船の船足を落とした。しかしこの時タンカーは空荷であり、予備浮力も充分保ったため、沈没を免れた。残る1本の魚雷は、磁気信管が故障を起こして早爆してしまった。

もちろん、そのUボート艦長が地団太を踏んだのは言うまでもない。

「開発局の連中め!!」

命がけで射点に付いたにも関わらず、魚雷の故障で大量を逸する程悔しいことはない。さらに、攻撃後は射点を敵に探知されて、猛烈な反撃を喰らうことを意味する。現に、このUボートは間もなく対潜哨戒の水上機による爆雷攻撃、さらに駆逐艦によるヘッジホッグ攻撃を受けた。

しかしながら、幸いにも離脱に成功している。しかも、驚くべきことは浮上して確認してみると、艦橋後部にヘッジホッグの不発弾が刺さっていたのであった。

「不発弾に命を救われるとは、とんでもない皮肉だな。」

無事ジブチに帰還した艦長はその様に語っている。

その後も死闘は続いたが、日本側の護衛艦艇はこれまでのような深追いをさけ、徹底的に敵潜水艦の牽制攻撃に終始した。航空隊も危険な夜間発着艦を繰り返し、エア・カバーを提供し続けた。

それでも、灰色狼は慎重に襲撃の機会を狙い、攻撃を掛けた。その結果、被雷したのはなんと護衛艦隊旗艦である軽巡洋艦「千種」であった。

「千種」は1本の魚雷を被雷し、速力が一気に20ノットにまで落ちると共に、小規模な火災が発生した。

「火災消化急げ！応急対策班は浸水を止める！！」

座乗艦の被雷と言う事態に直面した千川司令官であったが、それでも努めて冷静に行動した。幸いなことに命中した魚雷が1本だけであったので、致命的な被害は避けられた。

この「千種」の被雷が護衛艦隊と輸送船団に対する最後の襲撃となった。その後のUボートの攻撃は、護衛艦と対潜哨戒機の活躍によって防がれた。攻撃によって船団の隊列は若干乱れたものの、沈没した艦船はゼロに抑えることが出来た。

千川は護衛艦隊の指揮を2番艦である駆逐艦に譲ると共に、「千種」と被雷して速力が落ちたタンカーを船団の最後尾に下げた。

速力が落ち、船団の一番後方につくことは危険な行為であるが、幸いにもその後Uボートの襲撃は無く、船団と護衛艦隊は1隻の落伍も無く、全艦船が朝日を拝むことが出来た。

「なんとか凌いだな。」

千川は旭日旗のような美しい朝日を眺めながら、呟いた。

この夜の戦闘で、船団と護衛艦隊はそれぞれ中破1隻を出したが1隻の損失も無かった。対するUボート部隊も沈没は1隻のみであった。しかしそうした戦術的な結果は別にして、日本艦隊は船団を欠けることなく送り届ける作戦目的を完遂した。

船団はその後セイロン島から飛んできた飛行艇や対潜哨戒機、さらには小型の駆潜艇の護衛などを受けて無事にコロンボ港へと入港している。

この護衛成功によって、帝国海軍連合艦隊は見事に前回の雪辱を晴らし、その面目を保ったのであった。

欧米系の新聞は、わずかな期間で戦訓を生かして前回の汚名を返上した連合艦隊派遣部隊を賞賛すると共に、劳いの言葉を送ったのであった。

なお、この時の戦訓を元に連合艦隊における船団護衛任務に関する訓練や講習の時間が増やされることとなり、連合艦隊より抽出された護衛艦隊は、以後インド洋や大西洋方面で近海防衛艦隊の護衛駆逐艦や海防艦と共に活躍することとなる。

雪辱 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

対ソ戦争終結

昭和19年が終わり、昭和20年へと変わった。第二次世界大戦も大きな転換点を迎えようとしていた。

ドイツは以前その強力な軍事力を持って抵抗していたが、そのドイツに引っ付いて火事場泥棒のごとく参戦したソ連軍は、当初こそその兵力に物を言わせて中央アジアと極東方面で進撃に出ていたが、いずれの戦線でも連合軍の激しい反撃を受けて、進撃は停滞した。それどころか、開戦からわずか8ヶ月と言う時間しか経ていないのに、一部では逆に押し込められる事態に陥っていた。

大日本帝国も、同盟国（傀儡国ではなくなりつつある）の満州国と共に千島・樺太・満州・北太平洋で大規模な反撃に出ていた。その結果侵攻してきたソ連軍を押し返すと共に、この方面で唯一とも言えた有力艦隊であったソ連太平洋艦隊を撃滅させていた。

ソ連海軍はその後、潜水艦や魚雷艇、仮装艦船や機雷戦艦艇で日本海軍に対抗したが、それらも徐々に消耗していき、それどころか空襲によって基地ごと爆砕される例もあり、この頃には赤い星を付けた艦船は、太平洋どこから日本海や北樺太方面からすら駆逐されていた。

日本がソ連に優位に立てたのは、ただ単に海軍力で大きく勝っていたからではない。単に戦力を比較すれば、ソ連軍の戦力は日満軍を大きく引き離していた。特に陸軍力と空軍力は凄まじい物があつた。

しかし、その質に大きな問題を抱えていた。当初ソ連軍上層部（

と言うよりモスクワのクレムリン）は中央アジアや中東方面の戦線を重視したらしく、新鋭機や新鋭戦車を軒並みそちらに投入した。しかしながそちらの方面は英軍や現地派遣された日本軍、さらにはインド軍や各地の反共ゲリラによって激しい反撃を受けた。

そして極東方面には、数だけは日本側の数倍の規模だが質的にはるかに劣る兵器を投入した。さすがに複葉戦闘機こそ投入していなかったが、戦闘機の4分の1近くはノモンハン事変にも登場したI16戦闘機であった。

その他の戦闘機もMiG1、MiG3、LaGG3、YaK1と言った実戦配備から3〜4年は経っている機体ばかりで、最新鋭のLa7やYaK3と言った機体は本当に極少数しか配備されていなかった。

爆撃機もノモンハン以来のSB3が多数配備されたままで、その他の機もDB2やIL4と言った機体ばかりで、高速爆撃機のPe2やTu2はやはりお披露目程度の数しか存在しなかった。

陸軍も戦車に関して言えば、半分近くがノモンハンでも使用されたBT7やT26で、総数の4分の1を占めたT34も一世代古い砲身が短く、口径も小さい76型であった。決して日本の使用する1式中戦車や3式中戦車、4式中戦車に絶対的なアドバンテージを持っていなかった。

日本戦車を凌駕できるT34/85やISU152は、やはりお披露目程度の数しか存在していなかった。これでは日本軍と満州国軍の戦車部隊に勝てるはずが無かった。

さらに言えば、膨大なそれら戦力を支えるための兵站用車両も不

足していた。トラックや乗用車の数はそれなりに揃えていたものの、とても全ての戦線を支えきれぬ物ではなかった。

対して日本や満州側には最新鋭戦闘機や爆撃機が多数あった。特に配備されて間もない陸軍の3式重爆撃機「峻山」（キ91）は満州や北海道の基地からソ連邦深く進撃して大打撃をソ連軍に与えた。また配備されて間もない4式軽爆撃機「刃」（「流星」の陸軍版）も「剣」（「彗星」の陸軍版）と共に活躍した。

海軍も内地から戦闘機隊や陸攻部隊を進出させ、場合によっては機動部隊の艦載機を陸上基地に進出させると言う手段まで採った。

そして、何より日満軍の反撃を支えたのはアメリカより購入された大量の兵器であった。例えばアメリカ本国では持て余していたP63「キングコブラ」は、4式対戦車攻撃機として採用され、車両攻撃や鉄道襲撃、さらにはソ連軍自慢の河川砲艇や魚雷艇の攻撃にも活躍した。

また同じくアメリカより輸入された魚雷艇（PTボート）は、満州国江防艦隊ならびに海軍アムール派遣部隊に配備され、やはりアムール河に出没するソ連砲艇と激闘を交えた。

戦車や装甲車に関しても、多数が輸入された。中には砲塔を外して、鹵獲したソ連製野砲を搭載した自走砲や対空機関銃を搭載した即席の対空戦車まで登場した。

何より日本にとってありがたかったのは、アメリカより送られた膨大な量の自動車やトラックであった。これらは日中戦争後から始まった陸軍の機械化の後押しをした。当時の日本の自動車生産力では、とてもではないが陸軍の機械化を成し遂げるだけの力がなかつ

たからだ。

その他に軍服用の生地や鉄道のレールなど、大量の物資がアメリカより購入された。これらも地味ながら日本の戦力増強に一役買った。

もっとも、購入とある通りこれらの対価はタダではない。戦後も日本は現金で払い続ける必要があるであろうし、その他様々な手段で処理する予定であった。例えば満州国への企業進出に際して、比較的有利な条件で可能にすることや、太平洋上の幾つかの基地の使用を許可すると言う物であった。

そうした面を差し引いても、アメリカからの支援は日本と満州国にとって必要な不可欠な存在となっていた。

さて、ソ連軍の進撃を跳ね返した日本軍と満州国軍は、そのまま今度はソ連領内へと逆侵攻を行った。まず手始めに6月、北樺太が南樺太より侵攻した日本軍によって占領され、日本はオハ油田を手に入れることとなった。北樺太はその後の停戦後の条約で、日本領へと編入されている。

また9月には連合艦隊主力部隊の援護の元、ウラジオストクに陸軍部隊と海兵部隊が上陸し、2週間に渡る激しい戦闘の末これを占領した。

翌月の10月、満州国への侵攻を完全に阻止した日本軍と満州国軍も反撃を開始した。関東軍と満州国陸軍の装甲列車部隊がソ連邦への進撃を開始した。

もちろんソ連軍は予め線路を破壊していたが、それは帝国陸軍と

満州国陸軍の鉄道連隊が手早く修理、復旧させた。ここでもアメリカから輸入された様々な建設機械が投入され、大活躍した。

その後季節は厳しい冬に入ったものの、元々ソ連との戦闘を考慮し、さらに八甲田山での悲劇的な遭難事故以降様々な防寒グッズを発明していた日本軍と満州国軍は進撃を続け、翌年の1月にはチタを占領し、シベリア鉄道を東西で分断した。これによって抵抗を続けていたハバロフスクは完全に孤立した。

この事態に、ソ連上層部は大いに慌てることとなった。特にスターリンは軍の高官を何人が粛清するほど怒り狂ったが、そもそも日本軍を舐め切って、ドイツの尻馬に乗って参戦を命令したのは彼であつた。

さらに言うならば、大粛清を行ってソ連をガタガタにしたのも彼であつた。このお陰でソ連軍は戦術・兵器開発・錬度などあらゆる面で遅れを取る事となつたし、国自体が様々な面で大幅な停滞を招いた。

そうした犠牲の上で行つた重工業化も、アメリカを追い越すには至らず、さらにノルマ製の生産では品質の確保など出来るはずがなかった。もっと言えば、参戦が2年近く遅れた分も兵器開発や配備に大きな影響を与えていた。

現在は同盟国となっているドイツから技術輸入を行うなどしていたが、元々疑心暗鬼で相手を見ている者同士で行うことなど、タカが知れている。これがアメリカやイギリスと手を組んでいればなんとかなつたかもしれないが、今更後の祭である。

この自体に、ついにソ連軍の一部士官がクーデターへと走つた。

彼らは神聖なるロシアの領土をむざむざと敵に渡した責任者をスターリンとして、救国のためには連合国と講和して再び中立へ戻るところこそ最善の手段と考えたのである。さらに付け加えれば、自分の責任を棚上げにして軍の高官や責任者を肅清し続ける彼や秘密警察長官のベリヤへの鬱憤が爆発したのも原因であつた。

このクーデターは実行直前に察知され、クーデター軍は大損害を出したもののついにクレムリンへと突入し、スターリンとベリヤの暗殺に成功する。

ただし、クーデター軍もほぼ全滅しソ連は一時事実上の無政府状態となつた。一歩間違えばドイツ軍が攻めてくる可能性もあったが、このドサクサに紛れて新たにニキータ・フルシチョフが書記長に就任し、軍の協力を得て国内の混乱を短期間で収めてみた。

さらに臨時首都となつたレーニン・グラードから発せられた停戦命令は、混乱の中でしつかりと受信され、東西両方面のソ連軍は素早く連合軍との停戦交渉へと入つた。

この結果昭和20年4月1日、ソ連邦と連合国各国は正式に停戦した。なお、戦時賠償などの講和条約が成立したのは、5カ月後の9月2日である。

ナチスドイツはこれを重大な背反行為としたが、もはやソ連邦には戦う気力もメリットもなかった。

こうして自国領の目と鼻の先での戦いを事実上の勝利で収めた日本軍は、ソ連軍の侵攻を受けた地域の復興を急ぐと共に、現地に展開していた兵力の一部を中東や大西洋方面へ転用し、対ドイツ戦争に再び傾注することとなつた。

対ソ戦争終結（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

特設艦船雑考

日本における戦争遂行において、商船に武装を施した所謂特設艦船の存在は無視できない物であった。史実の太平洋戦争においては、のべ1400隻近い数の商船や漁船が特設艦船として徴傭された。この数は正規艦艇（のべ1200隻）を上回り、帝国海軍は実働戦力の3分の2を特設艦船で賄っていた。そしてその多くが太平洋の海深く消えて行った。

これら特設艦船に負わされた役回りは実に様々であったが、特に帝国海軍で不足していた防備用艦艇や哨戒用艦艇として扱われた船舶の数は相当数に登った。

太平洋戦争開戦からしばらくの間、日本海軍は対潜護衛艦艇の不足に苦しむこととなったが、その時その穴を埋めたのは、特設砲艦や特設駆潜艇と言った特設艦艇であった。

また空母の不足を埋めるために商船を改造して造られた航空母艦も当初は特設航空母艦という扱いであった。

日本海軍は国力の関係上、平時に保有維持できる艦艇数が制限されており、また戦時においても艦艇の急造出来る範囲は限られた物であった。そのため、こうした特設艦船の活躍に期待せざるを得なかったのである。

既に日清・日露の両戦争において特設艦船は大々的に使用されており、特に前者においてはかの清国北洋水師を破った黄海海戦、後者においては日本の勝利を印象付けた日本海海戦において大活躍をしたことは、もはや説明するまでも無いことであった。

しかしながら、太平洋戦争を含む第二次世界大戦では生憎と特設艦船が活躍できる素地はあまり残されていなかった。この時代になると、軍艦と商船の性能差は歴然としており、例え商船としては優秀な性能、さらには優秀すぎる性能であっても、軍艦としては低性能でしかなかった。もちろん、正規の艦艇と特設艦艇が戦った場合、特設艦艇にとっては自殺行為以外の何物でもなかった。

実際、これは日本海軍だけではなく当時特設艦船を使用したイギリスにもいえることで、例えば輸送船団を護衛中だった英仮装巡洋艦「ジャービス・ベイ」は独巡洋戦艦「シャルンホルスト」と戦闘を行い、輸送船団の楯となった上で撃沈されている。

また日本海軍の仮装巡洋艦「報国丸」も、インド洋における通商破壊や補給任務などに活躍したが、最終的にイギリス海軍護衛艦の砲撃とそれによる魚雷への誘爆によって力尽き、撃沈されている。

ドイツ海軍の仮装巡洋艦が英巡洋艦と相打ちになった例もあるが、これは例外中の例外である。

特設艦艇が戦闘艦艇として役に立たなくなってしまったことに加えて、日本の特設艦船の悲劇と言えたのが十分な装備を持たなかったことにある。特に武装や対潜水艦装備は積んでいるかいainいかわからないレベルな程に、お粗末であった。

前者の多くは退役した旧式艦から取り払われた旧式砲や極僅かな小口径の機銃。そして後者は吊り下げ式の簡易ソナーと言った程度であった。もちろん、それらの装備でまともな戦闘など期待してはいけない。潜水艦と戦うのだって難しい。ある海軍少佐に言わせれば「太平洋に爆雷を投げ捨てているだけ」と言った状況で、まとも

な対潜戦闘など不可能であった。

特に悲惨であったのが、漁船を改造して造られた特設監視艇で、こちらは本土空襲へ向かう米機動部隊を発見するなどの武勲を建てたが、監視艇自体は遠洋航行可能なえ縄漁船などに小口径の機銃を一挺、場合によっては小銃のみという、ほとんど丸裸であった。当然敵と出会えば生還できる可能性は低く、敵発見が即死を意味した。

こうした貧弱な武装が犠牲の拡大を助長したのは間違いない。

ちなみに、こうした装備は同じく特設艦船を多用した英国と雲泥の差があったとされている。英国海軍の場合は日本海軍のものより遥かにマシな装備で戦争に挑んだと言うことだ。

さて、ではこのシリーズの日本海軍において特設艦船の役割はどうなつてのであろうか？

まず味方にアメリカが入っているので、艦艇の不足を心配する必要があまりない。そのため、特設巡洋艦や特設砲艦と言った艦種はそもそも必要が無い。またアメリカが敵ではないため、広大な太平洋を哨戒する艦艇の必要性も当然低下するため、特設監視艇も必要性が薄いため存在しない。

では全く特設艦艇が必要ないかといえば、そう言うわけでもない。例えば海軍専属のタンカーとして高速タンカーを特設油槽船として徴庸する必要がある。ただし、やはりこれも大規模な艦隊戦の起きる回数が低いので、やはり史実ほどの数は必要とされない。

また特設駆潜艇や特設掃海艇のように港湾警備に使用できる手ご

るな特設艦艇もあり、こちらでも史実より数は少ないものの、徴傭され主に内地の港湾警備に使用されている。

しかしながら、もつとも必要とされるのは特設運送船である。この艦種はどのような船かと言えば、何のことは無い、ただの輸送船である。単に海軍が徴傭して専用輸送船としたに過ぎない。やはり、餅は餅屋と言うことなのである。

だが、こうした海軍の管理下においた輸送船がなければ海外に展開する部隊に円滑な物資の輸送・補給が不可能となるのは、言うまでもない。

特設艦船、それは戦争を遂行する上で非常に重要な存在である。しかしながら、どんな兵器でも言える事だが、その使用目的や使用する時点での状態を的確に読み、運用できなければ悲劇が発生するのである。

特設艦船雑考（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 1

昭和20年5月、米英連合軍は再度の北アフリカ方面における一大上陸作戦に打って出た。第二次トーチ作戦である。

この時点で、既に枢軸軍の一大燃料供給地であったソ連は脱落し、さらに中東地域も日英軍による攻勢の連続で製油能力が低下し、地中海方面における枢軸海軍の行動は不活発になっていた。

さらにアメリカ海軍には最新鋭の超大型空母の「ゲデイスバーグ」級や同じく最新鋭戦艦の「アイオワ」級をはじめ、「バルティモア」級重巡洋艦、「クリーブランド」級並びに「アトランタ」級軽巡洋艦、そして「ギアリング」級駆逐艦などが艦隊に配備され、その戦闘力は飛躍的にアップしていた。

艦載機も最新鋭のF8F「ベアキャット」に加えて少数だが単座攻撃機の「スカイレーダー」が配備されており、こちらも戦闘力を大幅にアップさせていた。しかも第二次トーチ作戦の総艦載機数は1500機と、まさにアメリカの物量を見せ付ける数であった。

対して北アフリカ方面の枢軸軍の艦隊は仏伊艦が中心であり、Uボートをはじめとする潜水艦も在来艦が多く、しかも燃料が再び不足気味と来ていた。

航空戦力も中東方面に最新鋭機が引き抜かれている結果、戦闘機はMe109GやFw190D、イタリアのM205が最新型で前者のKやTa152、ジェット戦闘機などは配備されていなかった。唯一誘導弾を備えた対艦攻撃機だけが最新鋭であるが、その数も米英連合艦隊の艦載機に比べたら微々たるものだった。

一方トーチ作戦と並行する形で、日本海軍もインド洋方面における作戦を英軍と協同で展開する。それがマダガスカル島攻略作戦であった。

仏領マダガスカル島は、アフリカ大陸東のアラビア海上に浮かぶ島であるが、枢軸軍はここを拠点として艦隊や潜水艦、航空機を進出させ連合軍側の輸送路を攻撃していた。

島自体が巨大であり、また守備も厳重であることからこれまでの攻略計画は幾度も立案されると同時に廃案となっていた。

しかしソ連との戦争が終わり、戦力に余力が出来ると同時に物量国家アメリカの力によってさらなる増強が可能となり、さらに枢軸軍自体が弱体化の傾向を見せている今こそ、攻略の好機であった。

日本海軍は早速インド洋方面に派遣していた艦隊の編成を見直し、マダガスカル島攻略艦隊の編成に着手した。その主力となるのは、当然空母であり最新鋭の「大鳳」級装甲空母にアメリカから購入した「鳳翔」級正規空母、そして既存の「翔鶴」級正規空母や日本版大量生産型の「雲龍」級空母など正規空母8隻、軽空母3隻からなる新第3艦隊を編成した。これに護衛艦として戦艦6、巡洋艦16、駆逐艦36隻が随伴する。司令官は原忠一中将である。

またマウントバッテン大將率いる英東洋艦隊も少ない戦力を遣り繰りして再編成され、戦艦「ヴァンガード」を旗艦として空母「インプラカブル」と「インディファティカブル」、護衛空母3、巡洋艦6、駆逐艦12隻の戦力をもって、共同作戦を行うこととなった。

一方、敵潜水艦や航空戦力などによる上陸兵力への攻撃も当然予

想された。それまで海上護衛を担当してきた近海防衛艦隊の派遣部隊も、海防艦や護衛駆逐艦の一部を分派すると共に、本土からの増援を受けて、上陸部隊を輸送する輸送船団の護衛を行うこととした。

このために動員された兵力は護衛空母3隻、護衛駆逐艦8隻、海防艦24隻、これに加えて上陸支援などを行う特設艦艇の内4隻ほどが対潜戦闘能力を備えていた。さらに、イギリス軍も護衛空母1、護衛駆逐艦、コルベット、スループ、フリゲート、特設艦艇など護衛艦艇19隻を出して船団を護衛することとなった。

対する枢軸軍の方とは言えば、この時点であつてのインド洋艦隊は既に解体されてヨーロッパ方面へ戻っており、マダガスカルにいる水上艦艇は港湾防備や船団護衛用艦艇に限られていた。

また航空部隊にしても、独伊空軍は激戦となつている中東戦線やドイツ本国周辺の防空戦闘などに戦力を大幅に引き抜かれており、加えて本来の所有者であるヴィシー・フランス軍は配備している機体が少ない上にいずれの機体も旧式化しており戦力として数えられないと言つ状況であつた。

陸上兵力についても、独伊仏軍合わせてその戦力は5個師団10万人であり、フランスの植民地軍などのような二線級部隊もかなり混ざつていた。装備も中東やヨーロッパ方面軍のそれに比べれば旧式な物が多かった。

これまで連合軍による上陸の兆しが全く無かつた上に、本国から海路を使って輸送しなければならない関係上、どうしても戦力強化が後回しにされていた結果だった。

ただし、枢軸上層部（この場合ドイツ上層部だが）もこのマダガスカルの戦略的重要性は重々承知しており、連合軍がマダガスカル方面への侵攻を企図しているを見ると見るや、出来る限りの補給や新兵器の配備を行おうとはした。

しかし、そうは問屋が卸さないとはかりに襲い掛かったのが日英の潜水艦艦隊であつた。日本海軍は水中高速性を重視した「伊200」型に加えて、相手の護衛戦力が希薄であることもあつて在来型の旧式潜水艦までも投入し、マダガスカルに向かう伊仏輸送船団に襲い掛かつていた。

英国海軍も最新鋭とは行かないでも、ケープタウンを拠点として20隻あまりの潜水艦をこの作戦に投入し、日本海軍潜水艦と共にドイツ軍の補給戦を締め上げていた。

この攻撃のお陰で、航空戦力の切り札として配備予定だつたMe 262戦闘機60機の内40機が海没し、さらに修理用部品の多くが失われるという大打撃を枢軸軍に負わせていた。

他国の通商破壊を行うことは大得意の枢軸海軍ではあつたが、自国の商船を守ることに關しては、やはり陸軍国であるせい、そこまで上手とは言えなかつた。特に独英仏いずれの海軍にも言えたのが、護衛艦として使える適当な艦艇を持っていなかつたことに加えて、その整備能力が著しく遅れていることだつた。

例えばドイツ海軍の場合、そもそも水上艦艇の製造能力がそこまで高くない。そんな状況で「グラーフ・ツェッペリン」級空母や「フリードリヒ・デア・グロッセ」級戦艦の建造を行ったものだから、必然的にそれ以下の重巡や軽巡、駆逐艦の整備は遅れがちで、それさえも艦隊決戦用戦力だつた。

真に護衛艦として使える大きさにある艦艇はT1級水雷艇やF1級護衛艦であったが、これらはいずれも護衛艦としての適性を欠くか設計上に欠落を抱えていた。

バルト海であれば、Sボート（魚雷艇）やMボート（機雷敷設艇）などでも充分であったが、生憎とインド洋方面では、沿岸部はともかく洋上でそれらの戦力を有効に使うのは不可能に近かった。

対潜飛行部隊についても、ドイツの場合は空軍と海軍の仲が極めて悪く、水上機と飛行艇、さらに艦載機とその練習用機の運用までは海軍に移管されたが、日本海軍のように陸上から対艦攻撃が出来る機体もしくは対潜哨戒機は持ち合わせておらず、その能力は限定されていた。

またイタリア海軍に至っては艦艇を運用する上での前提条件が狭い地中海やアドリア海に限定されており、しかも低い造船能力をやはり強力な水上艦艇を中心に戦力を整備したため、護衛艦の整備は進まなかった。

フランス海軍に至っては、そもそもがヴィシー・フランス政府と言う傀儡政権（と完全に言えるわけではないが）であるのだから、自由な軍備の整備など進むはずが無く、それどころか艦艇を作っても独伊海軍に買い叩かれてしまったのだから、やはりこちらも護衛艦を造る余裕はなかった。

勝ち戦の時は、そうした面が気になりにくく、戦力強化の重要性を認識するのは難しい。そうしたツケは往々にして後で恐ろしい形で降りかかってくるのである。

そんなわけで、日英潜水艦はインド洋方面に限って言えばドイツ
Uボートもかくや言う活躍をした。もっとも、決して犠牲がなかつ
たわけではなく、浮上航行中をUボートに撃沈されたり、逆に撃沈
し返すなど、壮絶な潜水艦同士の戦いさえ起きていた。

終盤戦 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 2

連合軍によるマダガスカル島攻略作戦は、第二次北アフリカ上陸作戦とともに連合軍の総反攻の目玉であった。そのため、日英両海軍の主力艦隊が出撃すると共に、上陸する兵力も日英（豪と印を含む）軍プラス自由フランス軍合わせて6万近い大兵力であった。

装備する兵器もいずれも最新式で、また日本軍の場合は中東戦線や対ソ戦からの転戦組が多かった。その他の軍もドイツ軍への総反撃の先方を担うこともあって士気が非常に高かった。

ちなみに各軍の装備する兵器の内、アメリカ製の兵器が占めるウエイトが高い。もちろん、英軍や日本軍はそれぞれ自国での兵器開発能力を持っているから、それぞれ自国製の兵器も装備に含んでいる。

しかしながら、兵の持っている小銃をみるとほとんどの兵士がアメリカ製のM1を持ち、また戦車も英国製のファイア・フライや日本製の4式戦車（88mm砲装備戦車）なども混じっているが、数の上ではアメリカ製のM4シャーマン戦車が主力であった。

兵員輸送車両やトラックなどに至っては、全部隊の9割近くがアメリカ製のジープやトラック、もしくはそれをライセンス生産した車両であった。

さすがに民主主義国家の兵器工場を自称するだけはある。とてつもない生産力である。

加えて、英国製のファイア・フライ戦車は砲塔こそイギリス製だ

が、車体はシャーマン戦車のそれを流用している。また日本の4式戦車は純国産ではあるが、元々自動車生産能力の低いのがこの時代の日本である。そのためエンジンやトランス・ミッションなどの技術をアメリカから供与されており、そうした面から見ればやはりアメリカの存在が大きい。

まさにアメリカの軍産複合体の大勝利である。しかもそれは戦争の勝利ばかりではなく、アメリカと言う国の利益面でも大きい。同国にしてみれば、多少の血は流さざるを得ないが、それでも許容範囲内とも言える。

こうなると、日本をはじめとする他の国が損しているように見えるが、ここでどう犠牲に見合うだけの利益、しかも将来を見据えたそれを出せるかが外交手腕の見せ所なのである。

ただし、情けないことに外交の歴史が浅く経験も乏しい日本はここでも他国に劣った結果しか出せないのが現状と言えよう。それでも、全く結果を残せなかったと言えはそうではない。

例えばアメリカから大量に流入した技術は、日本が本格的に農業国から工業国へと発展する要因となったし、また海外への派兵はそれまで知名度が今一つ（特に中東やヨーロッパ）であった日本と言う国の存在感を示すこととなる。

話を戻す。そうしたアメリカ製兵器での統一は何もアメリカの利益を潤すだけではない。戦場においても色々な面でメリットがある。まず補給が非常に楽になる。同じく国の兵器で、しかも同一の物を使っているのだから、他の部隊同士でも部品などを融通して使用することが出来る。また出発前の準備段階において、連合して一括発注できると言うメリットも見逃せない。

加えて、アメリカからの補給であるなら補給路の距離が短くなる面やコストパフォーマンス的にも自国製兵器よりも安くつく場合もある。

もちろん、兵士の中には自国製兵器にプライドを持つ人間も当然いるし、アメリカを儲けさせるだけとして嫌がる人間もいる。特に今回はこの作戦にアメリカ軍が参加していない分、そうした感情は大きくなる。

しかし、それを抜きにしてもアメリカ製兵器で固めることによる上記のようなメリットの方が上回ったわけである。

こうしてマダガスカル島攻略に従事する連合軍は、制服や細々とした装備を除けば、その多くの装備をアメリカ製兵器で身を固めることとなった。

これら各部隊はセイロン島やインド各地の港に各方面から進出、集合の後輸送船や輸送艦に乗船して出撃している。ここでもアメリカ製のLST等の姿が目立つ。しかしながら、それ以上に存在感を放っている船がいるのも事実であった。

それは日本陸軍の揚陸母船であった。船体内に多数の上陸用舟艇を収用し、さらに殆どの船が上陸支援用の航空機を搭載している。後の強襲揚陸船の先駆けと言えるこの船に、各国軍の注目も集まる。各船にはそれぞれ1000名ずつの歩兵と12機ずつの航空機が搭載されている。

今回マダガスカル島上陸作戦で充当されるこの種の船舶は8隻であり、帝国陸軍の保有する同種船の3分の2を動員した大規模な物

であつた。

これら揚陸母船の歩兵戦力は、航空機の援護の下で、他の輸送船に乗船している兵士たちよりも逸早く海岸へと突入し、橋頭堡の確保や進撃路を開くことを担っている。もちろん、その装備は最新式の物で固められ、まさに精鋭である。

また彼らと同時にアメリカ海軍のLSTと同じ直接海岸に乗り上げ、戦車を揚陸する二等輸送艦が海岸に戦車や自走砲を送り込み、歩兵を支援する。加えて一部の二等輸は戦車の搭載数を減らして艦上にロケット砲等を搭載して上陸援護を行う予定であつた。

もつとも、それら陸上兵力も無事上陸できて何ぼの物である。海上で沈められれば、それこそ千単位で兵力が喪われ、文字通りの大惨事となってしまう。

だから今回上陸部隊を護衛する護衛艦隊には歴戦の近海防衛艦隊の艦艇や、イギリス・インド籍の護衛艦艇や護衛空母、さらには数は少ないがやはり大西洋やインド洋、太平洋で経験を積んできた自由フランス軍の艦艇も混ざっている。

自由フランス海軍は艦艇や造船所の殆どをドイツ軍やイタリア軍に押さえられてしまったので、主力となる艦艇の多くがアメリカやイギリス製である。しかもほとんどが護衛用艦艇である。それでも、彼らの士気は高かつた。

ちなみに今回の作戦に動員された護衛艦艇は、各軍各種艦艇合わせて60隻近い数となる。これに加えて上陸地点の掃海用艦艇や補給用艦艇も加わる。

その規模は同時進行の第二次トーチ作戦に比べれば小さいが、それでもこの方面では初めてとなる大規模なものであった。

先発する日英機動艦隊の後を追う形で航行する輸送船団の周囲を、護衛空母や護衛艦艇ががちりと固め、それこそ蟻の子一匹近づけない様な嚴重な警備網を敷くことで、ドイツ空海軍からの攻撃に備えていた。

その他にも、インド洋各方面へと散らばった日英潜水艦も活動しており、これらも間接的に上陸作戦を支援する予定であった。

マダガスカル島を巡る戦いは、艦隊が出撃した直後から始まった。定石通り、まず最初に艦隊に接触したのはUボートで、この艦が艦隊と輸送船団発見の報をマダガスカル島へ向けて打電した。

この報告を受けて、マダガスカルではただちに全部隊が臨戦態勢に入ると共に、早速敵艦隊への攻撃準備を進めた。

ただし、本来的艦隊攻撃の先方を担うべきドイツ空軍にとって、致命的と言えたのは長距離攻撃機は多数あったが、それを護衛できる戦闘機がほぼ皆無であったことだった。

ドイツ、イタリア、フランスの各国空軍の運用思想は、ヨーロッパの空軍で採られる物で、すなわち航続距離の短い戦闘機と爆撃機による自国防空と地上部隊支援用の戦術空軍としてのものでしかない。

第二次大戦開戦後は、相次ぐ勝利や戦線の広がりに対応して長距離飛行可能な戦闘機や戦略爆撃機も製造したりしたが、いずれも数は少なく、さらに長距離飛行可能な戦闘機と言っても、その基準と

なるべき航続力はヨーロッパのそれであり、本格的な長距離戦闘機の水準ではなかった。

そのため、空からの攻撃と言うオプシオンをマダガスカル島の枢軸空軍は取ることが出来なかった。

そこで、マダガスカルの枢軸軍総司令部が考えたのは、敵が近海に現われた所での陸海連携による全力迎撃であった。

確かに、有力な水上艦艇こそいなかったが、マダガスカルにはSボートをはじめとする魚雷艇部隊、さらにはUボートや潜航艇が配備されていた。これらが空軍の支援の下で出撃すれば一定の成果を収められそうではあった。

しかしながら、この作戦はすぐに破綻することとなった。

終盤戦 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 3

地中海で行われた第二次トーチ作戦は、大きな犠牲を出しながらも北アフリカに橋頭堡の確保を成功、英米をはじめとする3個師団の連合軍6万名あまりを上陸させた。

もちろん枢軸軍がこれを見逃す筈が無く、全力を持って迎撃した。しかし連合軍の膨大な物量、さらに北アフリカ方面の枢軸軍側戦力が充分ではないことが、結局上陸を許すこととなった。

それでも戦艦「アラバマ」、マサチューセッツ」、空母「バンカー・ヒル」と言った大小艦船60隻あまりを撃沈し、その2倍の数の艦艇に損傷を負わせるとともに、航空機の撃墜も300機以上と言う多数に上った。

しかしながら1000機近い艦載機を保有し、戦艦も10隻以上含んでいる世界最強機動艦隊を相手にしたのでは限界があった。最新型艦上戦闘機のF8Fや最新鋭艦上攻撃機のスカイレーダーも枢軸軍機を苦しめた。

連合軍が上陸後も、枢軸軍はドイツ製の戦車や装甲車を駆使して良く戦った。しかし連合軍側も最新鋭のM26重戦車やM18自走砲をもってこれに対抗した。イギリス軍も供与されたシャーマン戦車を改造したファイアフライ戦車や、最新型のセンチリオン戦車を投入した。

米英軍の兵器はドイツ製戦車に勝っているとはいい難かったが、数の面ではほぼ同等でしかも上陸部隊支援の護衛空母から航空支援を受けられる状況にあり、そうした面で優勢を保つことで戦いを有

利に進められた。

これに対して枢軸軍の艦隊、特に地中海を守る仏伊艦隊ははっきり言って何も出来なかった。戦艦数こそ両艦隊合わせればそれなりの数を用意できたが、空母はイタリアに3隻、フランスに2隻があるのみであつたので、とても米英連合艦隊の空母には太刀打ちできなかった。

これらの艦隊は出撃しても返り討ちに遭うだけなので、ツーロンやタラントと言った、空軍機の傘がある安全な軍港で待機せざるを得ず、今回の戦いでは事実上役立たずであつた。

その代わり、奮戦したのがUボートをはじめとする潜水艦や魚雷艇、さらにイタリア海軍謹製の間魚雷や体当たりボート、そして機雷であつた。

この内Uボートやイタリア潜水艦、さらにフランス海軍潜水艦は在来艦の比率が大きく、これらの艦では簡単に捕捉されてしまい、戦果は極僅かであつた。しかし、大西洋方面から回された3隻の新型Uボート、さらに局地迎撃用に配備された小型Uボートや潜航艇はそれなりの活躍を示した。

特に新型でワルター機関搭載型のUボートであるU3008は、音響魚雷と通常魚雷を使い分けて、護衛空母1隻と護衛艦3隻、輸送艦2隻を撃沈破し、自らは見事フランスのツーロンまでたどり着いている。

また潜航艇のうちの1隻は、上陸支援に参加していた自由フランス軍の護衛駆逐艦を真つ二つに撃沈している。

ただし、こうした活躍をもってしても劣勢は覆らなかった。魚雷艇や体当たりボート、人間魚雷も夜間に行動するなど、戦果の拡大を企図して動いたものの、結局最大の戦果は巡洋艦1隻大破であった。

そしてそうした攻撃を終了し帰還した魚雷艇や潜航艇は、一部こそ脱出に成功したが、その多くは後にアメリカ軍とイギリス軍が念入りに行った偵察で攻撃基地を割り出され、風漬しに爆撃を受けて基地ごと撃破されてしまった。せめてもの慰めは、乗員たちが早めに避難を行ったため、空襲による戦死者を最低限に抑えられたことぐらいであった。

その後米英を中心とする連合軍は、地の利を生かして反撃する枢軸軍の前に大きな苦戦を強いられるが、続々とピストン輸送される増援部隊、さらに上陸1週間後には現地飛行場に陸軍航空隊を進出させるなど、徐々に戦力を増強し、ジワジワと枢軸軍を圧迫していった。

一方、アフリカ大陸を挟んで反対側のインド洋でも、日英軍を主体とする連合軍とマダガスカル島を守る独仏伊枢軸軍との戦端が開かれていた。

枢軸軍は、遠距離にて敵艦隊を攻撃する方法がないため、仕方が無く当初は守りに徹して日英軍を損耗させつつ、その後沿岸部に接近した敵に積極的な攻撃を仕掛けることにしていた。

しかし、戦いは思わないところからスタートした。まずマダガスカル島に対して襲い掛かったのは艦載機でも、水上艦艇でも、潜水

艦でもなかった。なんと長距離爆撃機と長距離戦闘機による攻撃であった。

この攻撃は、枢軸軍にとって正に寝耳に水の事態であった。米軍の長距離爆撃機であるB24やB17、最新鋭のB29はいずれも欧州方面への爆撃に全てが投入されており、その損耗率の高さからこの方面にはあまり配備されていなかった。イギリスの誇るランカスターも同じである。

しかしながら、この時現われたのはその何れとも違う爆撃機であった。日本陸軍の誇る4式重爆「峻山」(キ91)であった。川崎飛行機が設計したこの機体は、アメリカからの技術供与などで完成した新型エンジンを搭載し、攻防性能も非常に優秀であった。頑強差を除けば、アメリカ製のB29以上の性能を発揮できた。

中島飛行機の「連山」が海軍向けに中型で抑えられたのに対して、この「峻山」は帝国陸軍が初めて手にした本格的な国産重爆撃機であった。川崎飛行機はこの爆撃機のために、わざわざ工場を新設したほどである。

そして護衛戦闘機もこれまた新鋭の三菱が開発した長距離戦闘機「旋風」(キ83)であった。米英からは「ジャパニーズ・モスキート」と呼ばれることとなるこの機体は、型式こそ「モスキート」と同じ双発二人乗り戦闘機である。しかしながら、機体は全金属製であり、性能も設計が後発の分優れていた。

日本側の優秀な機体設計に加えて、米英より供与された技術による排気タービンつきエンジンや電探、各種航法装置は目に見えない様々なプラス要素をこの機体に与えていた。

さすがに旋回性能は単発機に及ばないが、双発機独特の力任せの荒い空戦は可能であり、また重武装であるため、対爆撃機用高高度戦闘機としても使用可能であった。

この戦爆連合はフェリー飛行と開発されたばかりの空中給油の技術を用いてセイロン島から空路一直線で南アフリカの英空軍基地に展開、そこから出撃したのであった。

なお、余談ではあるが人種差別（同国はあくまで人種区別としている）の色が強いため、現地に進出した日本人パイロットは何かと苦労したようである。

それはさておき、マダガスカル島を襲ったのはそれら合わせて240機あまりの攻撃隊であった。しかも、両機種とも高度1万mでの作戦飛行が可能であるため、高高度よりの爆撃を行った。目標は南部各地に点在する飛行場であった。

この時枢軸軍は、空襲はインド洋側から始まると思い込んでおり、戦闘機を北中部へ移動させ、南部の飛行場に爆撃機や雷撃機を疎開させていた。もちろん、最低限の防空戦闘機は残していたが、いずれも高高度爆撃は想定しておらず、迎撃に上がった時には全てが手遅れであった。

彼らが「峻山」に取り付いたときには既に爆撃が始まっており、しかも枢軸軍の戦闘機は高高度性能に優れた「旋風」のお陰で「峻山」にはほとんど近づけなかった。

独本土では既に本格運用されている対空ミサイルがあれば話は別であっただろうが、そんな物は辺境のマダガスカルにあるはずがなかった。

こうして南部にある飛行場は爆撃されるに任せるしかなかった。240機を数箇所に分散させたため、さすがに全滅とまでは行かなかったが、この空襲で南部に避難させていた爆撃機や攻撃機の3割が完全喪失し、さらに2割が損傷を負うという、いきなり枢軸軍は大きなダメージを負ってしまった。

さらに、空襲は1回だけに終わらずその後数回にわたって反復された。また南アフリカ方面からの長距離偵察も幾度と無く行われ、これが枢軸軍の沿岸防衛に大きな影響を与えることとなった。

終盤戦 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 4

南アフリカから発進した「峻山」重爆と「旋風」戦闘機による予想外の攻撃によって、マダガスカル島の航空戦力は一気にその半分以上を完全損失するか、しばらく使い物にならない状態にされてしまった。しかも、敵艦隊攻撃に使うべき爆撃機や攻撃機が大きな打撃を受けたことは致命的であった。

それでも、防空用の戦闘機の被害は最小限であったから、迎撃戦闘をする分には問題なかった。

重爆による攻撃の翌日、ついに日英機動艦隊から発進した攻撃機による空襲が始まった。両艦隊から合わせて360機に上る大編隊がマダガスカル島北部から中部に掛けての航空基地や港湾に襲い掛かった。

マダガスカル島で最大の軍港となっているディエゴスワレスの港は、既に艦船のほとんどが避難済みであったので、残っているのはタグボート等の小艦艇だけであった。また枢軸海軍にとって最早宝石より貴重とも言えるUボートや魚雷艇は頑強なブンカーに入っており、航空攻撃で打撃を与えるのは不可能であった。

そのため攻撃隊はわずかな小艦船と港湾施設を徹底破壊すると共に、一部の機体は空中投下用の機雷を撒いて一旦引き揚げた。

一方飛行場に襲い掛かった機体は迎撃に上がった枢軸軍機と壮烈な空中戦へと突入した。独空軍の主力戦闘機はFw190Dで、これに少数のTa152と切り札たるジェット戦闘機のMe262が支援する形であった。

対して日本側の戦闘機は川西飛行機が開発した最新鋭の「陣風」とイギリス海軍の「コルセア」であった。

性能的にもパイロットの練度から見ても、何れも伯仲しており、さらにパイロットの腕も甲乙付け難い物であった。Me 262はジェット戦闘機として性能的にはレシプロ機を上回ってこそいたが、何分迎撃に出動できたのがたったの10機（そもそも20機しかなかった）では、お話にならなかった。

しかし、戦闘機の数としてはドイツ側が若干勝っていた。ただしドイツ軍機は攻撃機の相手もしなければならなかったため、戦闘にどうしても制約があった。

結果は日英攻撃隊に損害を与えはしたものの、迎撃には失敗しデイエゴスワレスの軍港と共に3ヶ所の飛行場が破壊された。さらに枢軸側の戦闘機にも大きな被害が出た。

対して、日英機動艦隊の攻撃隊にもそれなりの被害が出たが、こちらは後方に控える護衛空母からは多少の補充が可能であるため、全く補充が利かない枢軸空軍よりも多少有利であった。

枢軸側もただやられていたわけではない。南部の飛行場に退避させていた爆撃機や攻撃機、その護衛戦闘機含めて120機をを発進させるとともに、Uボートを出撃させて海空からの共同攻撃を試みた。

しかしながら、枢軸攻撃隊は「峻山」の爆撃によって被害を被っていたのに加えて、さらに護衛戦闘機の数が多くなかった。そのため、早々とレーダーで接近を探知されると、各空母より飛び立った

150機近い直掩戦闘機の迎撃を受けてしまい、輪陣形外縁部の駆逐艦1隻を沈め、巡洋艦1隻を中破させたのみで終わった。

そしてここで、枢軸空軍と海軍は致命的なミスを犯してしまう。本来なら上陸部隊を運ぶ輸送船団を集中攻撃する筈が、空軍の攻撃が前方に展開する機動部隊に吸収されてしまったのである。もつと足の長い戦闘機がいれば別であったが、増槽付きとは言え航続力の弱い不十分な数の戦闘機の護衛では、機動部隊のエア・カバーを突破することが出来なかった。

仮に出来たとしても、今度は輸送船団を護衛する護衛空母の戦闘機を相手にしなければならなかったであろうが。

そうして空軍との連携が絶望的になったものの、Uボートをはじめとする枢軸潜水艦は果敢な攻撃を開始した。だが彼らの目標である上陸部隊を運ぶ輸送船団には、多数の護衛艦が随伴し、さらに護衛空母から発進した対潜哨戒機も飛び回っていた。

枢軸潜水艦はそれらに探知されないように、静粛性を最大限に保ちながら、なんとか攻撃の機会を窺った。

しかしまずイタリア潜水艦の1隻が対潜哨戒機の磁気探知機に発見され、航空爆雷と連合軍の新兵器である対潜用音響探知魚雷の集中攻撃で撃破されてしまった。

さらに随伴している護衛駆逐艦や海防艦、コルベットの数もかなり多く、これらの警戒網によって攻撃前に3隻が捕捉され、1隻が撃破された。対して護衛艦側の被害は護衛駆逐艦が1隻大破しただけである。

それでも、歴戦のUボート2隻が何とか懷に飛び込んで戦車輸送艦1隻を撃沈し、大型輸送艦1隻を大破させた。だがこの2隻はその後対潜哨戒機と対潜艦艇による袋叩きに遭い、空しくインド洋の藻屑と消えてしまった。

そもそも、枢軸潜水艦はこれまでの日英護衛艦艇や潜水艦との激闘で数を大きく減らしており、今回出撃させられたのもたったの9隻に過ぎず、しかもその全ての在来型の旧式艦では大戦果など期待できるはずが無かった。

結局、最終的に9隻の潜水艦の内生きて戻れたのはエチオピアの軍港に損傷しながら避難したイタリア潜水艦と浮上降伏したフランス潜水艦1隻ずつで、残る7隻は全て沈められてしまった。

もちろん、彼らが挙げた戦果程度では連合軍の進撃を止めることなど出来るはずが無かった。

連合軍側の容赦ない攻撃はさらに続いた。

2日目の空襲では機動部隊に加えて、整備と休養を行った南アフリカからの爆撃隊も攻撃に加わり、マダガスカル島中部から南部に掛けての飛行場や軍事施設を叩きに叩いた。

この攻撃によって枢軸空軍の稼働機は戦闘機と攻撃機合わせても100機弱まで落ち込んでしまい、その多くも旧式機などであった。この瞬間、制空権は連合軍の物となってしまう、枢軸軍地上部隊、ならびにわずかに残っている水上部隊は常に敵航空機の攻撃に怯えながら行動する羽目に陥った。

この後連合軍はさらに翌日も空爆を加えた。この攻撃では飛行場

に加えて陸上部隊や砲台も空襲の対象となったが、枢軸側も度重なる空襲に対して警戒を強め、擬装を施すなどしていた。また強固なベトンに守られた砲台は航空攻撃では容易に破壊できるものではなく、被害は軽微に留まった。

さらにその翌日、すなわち戦闘開始4日目、いよいよ上陸部隊上陸の前哨戦となる戦艦部隊による艦砲射撃が開始された。日本側はこの作戦のために「大和」、「武蔵」に加えて高速巡洋戦艦の「奥羽」級4隻を用意していた。さらにイギリス側のKGV級戦艦である「ハウ」と「デューク・オブ・ヨーク」が戦列に加わり、10門の36cm砲を発射して加勢した。

「弾庫が空になるまで撃ちつくせ！補給はいくらでもある！」

戦艦部隊を率いる神重徳少将の力強い命令の元、18門の46cm砲と36門の36cm砲が上陸予定地点に向けて火を噴いた。

上陸地点となったのは北東部のトアマシナで、首都アンタナナリボへ続く街道が整備されていた。もちろん、枢軸側もここが上陸地点になることは百も承知であったので、沿岸部には強固なベトンで守られた重砲を用意していた。

しかし、航空爆撃に耐えられるそれらもさすがに46cmと言う大口径砲弾による攻撃は予想外であった。最大でも40cm砲に対する防御しかされていないそれらは、弾着観測機による正確な砲撃によって次々に破壊された。

ドイツ側の重砲も反撃を行うが、その殆どが30cm以下の砲であつたため戦艦に対しては威力不足であつた。

ただし、それでも彼らは奮闘し海岸に接近しすぎた英駆逐艦1隻を撃沈し、日本の軽巡「木曾」（2世で改「阿賀野」級）を大破させている。

さらに、最後の切り札たる小型潜航艇や魚雷艇による反撃も試みられた。特にドイツ海軍のSボート並びにイタリア魚雷艇は連合軍側の激しい銃砲撃の中を突進し、自由フランス籍の護衛駆逐艦1隻に輸送艦艇を大小5隻撃沈し、さらに7隻に損傷を与えた。

もつとも、それら魚雷艇は攻撃を成功させても避退中に上空援護の戦闘機に発見されると次々に攻撃を受けた。2機を撃破したものの、魚雷艇の非力な対空兵装ではそこまでが限界で、結局出撃した30隻あまりの魚雷艇で帰還したのはたった8隻に過ぎず、それらも2度と出撃出来なかった。

また同時に出撃した潜航艇も、輸送船団に接近しようとしたものは次々に発見されて撃沈もしくは撃退された。そのため、最終的な戦果は待ち伏せを行った艇が8隻の艦船に損傷を負わせるに留まった。

戦闘開始5日目、ついに連合軍の最初の部隊がマダガスカル島へと上陸を開始し、戦闘は陸上戦主体の物へと移行した。

終盤戦 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それから最近M i x iを始めました。Y A D A M O Nで山梨在住と探せば出ると思います。

終盤戦 5

マダガスカル島北東部に上陸した連合軍は、一路ディエゴ・スワレス港攻略に動いた。ここはマダガスカル最大の港であり、戦略上重要な場所である。

もつとも、それは枢軸軍にしても同じであつた。もしここが陥落すると、連合軍に海上からの補給拠点を構築されると共に、後方のジブチやエチオピアへの攻撃拠点と成り得るからだ。

そのため、このディエゴ・スワレス周辺にはマダガスカルにただ一つの装甲師団が配備されると共に、装備も集中的に良い物が与えられていた。

ただし、幾ら優れた戦車や装甲車が与えられていたとしても、制空権がなければ話にならない。戦車など陸上部隊にとって、対地攻撃を行う航空機は天敵なのである。いや、むしろ陸上部隊はうさぎで航空機は驚と言えなくもない。

その航空機の攻撃を避けるため、枢軸軍は夜陰に乗じて、もしくは日英機動艦隊から発進する航空機が来ない時間帯を見計らって移動することを余儀なくされた。

枢軸軍各部隊は対空戦車や対空火器を備えた各種車両も装備こそしてはいたが、そんな物では気休めにしかないのが実情である。

そうして独軍地上部隊が移動に手間取っている間に、日英軍は主力部隊を次々とディエゴ・スワレス近郊に上陸させた。以前も紹介したとおり、各部隊は最新式の戦車や装備を有し、自動車化されて

いる精鋭部隊であつた。

そして日英軍地上部隊と枢軸軍地上部隊の本格的会戦は上陸2日目に生起した。両軍の搜索部隊がそれぞれ敵部隊を捕捉したのである。ちなみに、搜索部隊の主力は枢軸軍がドイツ製のハーフトツラクで、連合軍はアメリカ製のM8や戦車部隊を退役した小型戦車もしくは装甲車を使用している。

まず先手を取つたのは枢軸軍側であつた。航空支援が見込めない彼らは、その分のハンデを素早い攻撃とお得意の機動力(マ島の枢軸軍も一部を除きほぼ機械化されていた)で補おうとしたのである。

航空支援を受けられないことが、彼らの思い切りを良くさせた。

一方の日英軍は、やはり敵地と言うこともあり、どうしても慎重にならざるを得なかった。それでも日本軍司令官の栗林中将とイギリス軍司令官のグリーンヒル中將は互いに会話できたため、本来共同戦線を作り難い両軍にしては連携が取れている方ではあつたのだが。

中東戦線では、両軍の司令官が会話出来ず通訳を挟まなければならなかったために、戦線を別個にするなど、円滑に連携できない場面が数多くあつたのだ。

それはともかくとして、この先制攻撃によつて連合軍は戦車20両を含む車両50両あまりと自走砲を含む砲10門あまりを喪失した。いきなりの手痛い打撃である。

まさに陸戦国家ドイツ(一応仏伊軍もいるがこの時の主力はドイツ軍)の強さをまざまざと見せ付けたと言える。

しかしながら、この攻撃も急を聞きつけて飛んできた日本海軍航

空隊が姿を現すと中止せざるを得なかった。それどころか彼ら是对空車両の援護の元、車上に設けられた応急の対空火器で反撃しつつ逃げ回るしかなかった。

来襲した「陣風」と「流星」はいずれも20機程度ずつとそこまですくはなかったが、各機8発ずつの対地ロケット弾や対地爆弾を搭載しており、さらに主翼にも大口径機銃を搭載しているのだから、地上の車両にとっては悪魔そのものであった。

この攻撃によって枢軸軍は3機撃墜の代償に戦車7両とその他の車両15両あまりを喪失した。さらに、折角得た攻撃の流れを止められてしまった。

そして空襲が終わった途端、今度は連合軍地上部隊による猛攻撃が開始された。空襲によって統制が乱れている瞬間を、日英両軍とも見逃さなかった。

日本の4式中戦車、イギリスの「センチリオン」戦車共に枢軸軍の戦車に引けをとらない攻撃を有している。それらの車両が襲い掛かったのだから、枢軸軍側も溜まらない。

それでも、素早く反撃の態勢を整えて果敢にも行動するのはさすがであった。空襲後の混乱と言う困難な状況下でありながら、損害を最小限に留めている。

しかしながら、一度その存在を暴露してしまうことは、敵の追跡を受けやすいことを意味する。案の定この数時間後には第二派の空襲を受けている。しかも、今度は倍の機数でより効果の高い対地用3号爆弾を搭載した部隊であった。

3号爆弾は本来空対空用爆弾と言うユニークな物であったが、結局自由落下方式では高速で相対する航空機に命中させるのが困難であったため、その後の主力は米英の技術供与や独軍の捕獲品を元に開発したロケット弾である27号改空対空噴進弾へと変更されている。

これに伴い、3号爆弾は信管やパラシュート追加などの改良を加えて飛行場や地上部隊相手の対地爆弾へと使用を変更している。

空対地ロケット弾の場合直撃しなければ効果が薄いが、この3号爆弾の場合内部の弾子が周囲に散らばるため広範囲に打撃を与えられる。さらに好都合なのは、ドイツ戦車の場合使用しているエンジンが発火性の高いガソリンエンジンであることだった。

そのため、ドイツ戦車は被弾した場合火災に陥る危険性がデイズェルエンジンを搭載しているソ連戦車や日本戦車に比べて高かった。

そのため、上空から弾子がエンジンルームや燃料タンク至近に飛び込んだ場合、言わずもがなであった。

またこの攻撃からは英軍機も加わった。英軍の主力はアメリカ製のF4U「コルセア」であったが、同機の最大の特徴は多量の爆装が可能であることだった。胴体下に1000ポンド爆弾を搭載し、なおかつ主翼下には8発ものロケット弾を搭載可能であった。

これだけの航空攻撃にさらされては溜まらない。少なくとも陸上戦闘を継続するなど不可能であった。枢軸軍はなんとか航空機に発見されない森の中等への退避を図ったが、結局この日の戦闘で装甲戦力の半分以上を喪失してしまい、事実上壊滅に近い打撃を受けた。

もつとも、連合軍側も枢軸軍の思わぬ先制攻撃やその後の粘り強い反撃によって、戦車を中心に思わぬ被害を出してしまい、結局2日間の攻勢停止を余儀なくされた。

しかし、既に補給が絶たれている枢軸軍と、補給線は長いものの繋がっている連合軍とでは、やはり枢軸軍が大幅に劣勢であることに間違いはなかった。勝利のために、枢軸軍は最低でも自軍の数倍の敵を撃破する必要があった。

連合軍の航空攻撃によって大打撃を負ってしまった枢軸軍であったが、それでも地の利を生かして反撃を続行した。と言つかせざる得なかった。彼らに撤退出来る場所は島内にしかなく、最後の1発まで戦い名誉ある降伏しか選択肢は残されていなかった。

もつとも、それも各軍によって温度差があるようで、独仏軍に比べてイタリア軍は早めに降伏する傾向があった。これはやる気充分な独軍、ならびに自国の植民地であるフランス軍に比べて、イタリア軍の場合はマダガスカルに対するに未練や国家への忠誠（イタリアの場合ファシスト党と共に国王がいるので複雑）が些か足りないようであった。

ただし、イタリア軍の名誉のために言っておけば、最後まで勇敢に戦った部隊もちゃんとあった。マダガスカル島守備隊は装備こそ最新の物は少なかったが、これまでの占領期間中に十分な補給を受けており、弾薬その他物資は豊富であった。そのため、精神的に余裕があった。

それでも、独仏軍に比べて早く降伏する傾向があったのは間違いなかった。

またフランス軍にしても、そもそもが植民地警備の部隊であるから、装備に旧式な物がかなり混ざっていた。しかしながら、この部隊はそのハンデを地の利と高い士気で補った。

なおこの戦場ではヴィシー・フランス軍と自由フランス軍同士の悲劇的な戦闘も起きている。

上陸4日後、ドイツ軍装甲師団の反撃によって大幅な足止めを喰らったものの、連合軍はついにそれを跳ね除けてディエゴ・スワレスの港へと到達、同地に立て籠もる海軍歩兵を中心とした守備隊と交戦に入った。

既に乗る船のない水上艦船、Uボート、Sボートや商船の乗組員までが動員された同部隊であったが、それでも最後まで勇敢に戦っている。同部隊は巧妙な遅滞戦術を駆使して連合軍に挑み、連合軍側を翻弄した。しかし、やはり装備の面で劣る同部隊の抵抗は長続きせず、結局戦闘開始3日目に海軍総司令部が白旗を掲げ、ここにディエゴ・スワレス軍港は陥落した。

この方面の戦闘で、枢軸軍は連合軍に自軍に倍する損害を与えたのであるが、最終的に北西部のマジungaもこの2日後に陥落し、枢軸軍は島の北部を完全に喪った。

そして残された中部、南部にしても南アフリカからの長距離爆撃や連合軍艦隊の艦砲射撃、ならびに艦載機の空襲によって空軍基地やレーダー基地はほぼ壊滅してしまった。陸上部隊こそ未だ7割近い戦力を温存していたが、既に制空権と制海権無き状況ではやれることは限られていた。

最終的にマダガスカル島は、部隊上陸から3カ月後に枢軸軍の組

組織的抵抗が終了し、自由フランス政府の領地となった。この際日英連合軍はディエゴ・スワレス港や数箇所の空軍基地の自由使用権を獲得している。

終盤戦 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 6

1945年5月。インド洋から枢軸軍を駆逐し、北アフリカに橋頭堡を確保した連合軍ではあったが、未だドイツ第三帝国の力は強大であった。

その完全なる屈服を狙った場合、連合軍側の被害は致命的な物になる可能性が高かった。そのため、イギリスのチャーチル首相は不承不承であったが、連合軍側の首脳はどの辺りで戦争を終わらせ、講和するかを真剣に話し合っていた。

一方のドイツも、ヒトラー総統はまだまだやる気充分であったが、多くの閣僚や軍人たちは連合軍側と同じく、適当な線での講和をすべきだと考え始めていた。

イギリスを除く全欧州を制圧し、イラン・イラク方面からは叩きだされたが、エジプトやリビアは未だ保持していた。とは言っても、このまま進んでも物量で制されるのは目に見えている。この辺りが潮時であると思うのは、当然であった。

しかし、一口に講和と言っても自国の面子や、戦後の勢力範囲、国民感情などが複雑に絡み合う案件だけに、パツと決まるものではない。

だから、戦いはまだまだ続くのであった。

連合軍はインド洋での戦いが終了したこともあり、大西洋での戦いに全力を傾注することとなる。これに伴い、日本海軍もセイロン島から前進し、マダガスカルやケープタウンまで機動艦隊を進めた。

米英としては、そのまま米東海岸もしくはアイスランドを拠点として、北大西洋での攻勢に参加して欲しい所であった。

しかし日本側としては、そんな大遠征することは補給の面でも苦しい。米英と共通企画の兵器が増えたとは言え、武器や装備品には日本オリジナルの物もある。さらに、兵士の士気維持の観点から、米の飯を確保する必要だつてある。

そうした物質的な問題に加えて、国民感情という精神的な問題もある。そもそも日本はこの戦争に、ドイツ潜水艦による商船襲撃を理由に参加している。現在はその時の怒りの熱もすっかり覚めてしまい、同盟国である英米への配慮から、律儀に戦っているに過ぎない。

そんな中途半端な状況で、海軍の機動艦隊を送り込んだ場合、大きな反感を持たれる可能性が高かった。

それでも、米英両軍にとって日本の強力な機動艦隊は垂涎の的であった。しかも、インド洋方面で十分な経験値を積んでおり、全ての面で期待できる戦力であった。

両者間で短くも激烈な交渉が行われた結果、燃料などの補給の確約や、日本本土からの補給物資輸送船団に対する格別の配慮、加えて諸々の諸条件（供与兵器量の割り増しや、その値の割引）を提示することで、ようやく海軍省も海軍軍令部も、そして肝心の連合艦隊も欧州への艦隊派遣を決定した。

一方、船団護衛任務を専門とする近海防衛艦隊の派遣部隊も、インド洋方面における脅威が減少したため、その戦力重点を南北大西

洋方面へとシフトした。

既に南北大西洋には多数の艦艇が配備され、船団護送任務に就いていた。

そうした活躍の一方で、この頃増加した独海軍のエレクトリックボートは、日本海軍にとっても頭の痛い問題であった。これまでの潜水艦に比べて水中での速度や運動性が大きく向上しており、なおかつ潜航可能時間も長くなっていた。

さらに、音波攪乱弾や新型音響魚雷（簡単な識別装置搭載）と言った相次ぐ新兵器の登場も、護衛側の被害を大きくする要因となっていた。

もちろん、護衛側も負けてはいない。最新型のソナーやレーダーを駆使し、さらにヘッジホッグと言った既存兵器の活用は元より、ようやく配備された水上艦発射用の対潜水艦魚雷などを使って対抗した。

また護衛空母やその搭載機、陸上基地からの対潜哨戒機の数も増強され、これら護衛艦を全力でサポートした。陸上基地航空隊の中には、遥々大西洋各地の基地へと遠征した日本海軍の航空隊まで含まれていた。

既にこの頃、大西洋航路で日の丸と旭日旗を掲げて航行する護衛駆逐艦やフリゲート、コルベットの姿は珍しい物ではなくなっていた。当然、各地の港を歩く帝国海軍の制服に身を包んだアジア人の姿も、その土地の人々にしてみれば、日常風景のなかに溶け込んでいた。

昭和20年の初頭、日本の護衛艦艇の主な担当航路はケープタウンから南米大陸、カリブ海を通じてアメリカ東海岸、もしくは南米からアフリカ西岸諸港であった。

しかし、インド洋方面から艦艇が新たに増援として配備されると、それまで不定期であったアメリカ東海岸からイギリス本土への航路にまで担当海域が拡大した。

これは単に日本側の護衛艦艇が増えただけではなく、同様にインド洋方面から転用されたイギリス海軍艦艇が加わったことと、Uボートの攻撃の主な狙いがイギリス本土やアイスランドへと向かう航路へとシフトしたからだった。

マダガスカルを失ったことで、独Uボートをはじめとする枢軸潜水艦は、その活動範囲を制限された結果、自分たちが活動しやすくなおかつ得物に不自由しない航路を選んで攻撃したのである。

またこの時期イギリスは、ドイツ空軍による都市や工業地帯への爆撃を再び受けていた。ドイツはとにかく、連合国側の主要国であるイギリスを屈服させることで、有利な条件での講和（イギリスを制圧できればさすがのヒトラーも満足すると踏んでいたようだ）を引き出そうとしていた。

一方で、連合国側も負けてはいない。イギリス本土には日米から派遣された戦闘機隊が配備されていた。アメリカ側は最強のレシプロ機と自負するP51に加えて、P61夜間戦闘機やようやく完成したばかりのP80ジェット戦闘機を配備し、独空軍のHe277爆撃機やTa152戦闘機、さらにMe262戦闘機に対抗していた。

こうなると日本も負けてはいられない。「陣風」や「疾風」に加えて、最新鋭の局地戦闘機「震電」やジェット戦闘機「火龍」、夜間戦闘機「電光」を投入していた。

イギリス自身も、これまでに改良に改良を重ねた「スピットファイア」戦闘機に加えて、「ミーティア」ジェット戦闘機を配備し、独空軍に対抗していた。

イギリス本土上空の空戦は、一進一退と言った所であったが、攻撃する側としてドイツは敵よりも多い戦力を揃えなければならないために、不利であった。

一方の連合国側も、戦闘の一部を日米軍に任せていると同時に、イギリス自身も戦力を維持するためにシーレーンを確保しておく必要があった。

必然的に、大西洋航路の防衛は以前にも増して重要であった。

さらに大西洋航路の維持には、もう一つ重要な意味があった。それがアイスランドへの補給である。この時期アイスランドは米国のB29、さらに後には日本の「峻山」爆撃機の発進拠点となり、第三帝国攻撃の切り札足りえる地であった。

このアイスランドに駐留する連合軍を維持する意味でも、大西洋航路の維持は必要不可欠なのであった。

もちろん、第三帝国側もそれを見抜いていたから、必然的に大西洋における戦いは熾烈を極めていくこととなる。

大西洋における戦いは、1945年に入ると以前とは違う様相を

呈しつゝあつた。それは戦場がシフトしたことや、新兵器の投入もあつたが、何より大きかつたのは開戦当初の戦いに似た情景が見られつゝあつたからだ。

まず、独軍側に長距離偵察機が再登場した。もちろん、旧式化して戦闘機のカモにしかないFw200ではなく、He277やAr234などの最新型の偵察バージョンであつた。これらは、護衛空母に搭載されたF4Fや零戦では対向不可能で、F6Fや「烈風」でも補足が困難であつた。

そうして偵察機が船団の位置を報告すると、Uボートが商船を襲撃する。ただし、高速のエレクトリックボートの優秀性能のおかげで、単独襲撃をする確立が増えた。

そのため、群狼戦術を行うと思ひ込んだ船団護衛艦を翻弄する場面もあつた。

さらに独軍側は暗号の改正を頻繁に行ふことで、連合軍側にUボート情報が探知されないよう努めた。この結果、1945年6月から一月ばかりの間は、Uボート優位に傾いた。

しかし、連合軍側も負けてはいなかつた。

終盤戦 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 7

1945年5月中旬、新たに北大西洋方面へとその戦力をシフトさせた日本海軍の近海防衛艦隊派遣部隊は、アイスランドや英国・米国東部・カナダなどを起点とする航路の護衛任務に就いた。

北大西洋方面の船団規模は、インド洋・太平洋・南部大西洋方面のそれとは桁違いに大きい。場合によっては、一つの船団に100隻を超える輸送船が加入する場合があった。

この船団を、連合軍は護衛空母や各種護衛艦、航空機、飛行船、場合によっては戦艦等の有力な艦艇まで投入して、護衛していた。

一方攻撃する側のドイツ海軍も、フランス沿岸のロリアンやラ・ロシエール、さらにはノルウェー沿岸部のフィヨルドやスピッツ・ベルゲンなどを拠点として攻勢を行っていた。その使用艦艇も、旧型のC型等からエレクトリック・ボートであるXX?型に切り替わりつつあり、さらに使用する音響魚雷も精度・性能共に飛躍的に進歩しつつあり、連合軍船団の脅威となっていた。

特に1945年5月から6月にかけては、新型音響魚雷の採用を行ったために戦果が拡大した。それまでの主力音響魚雷であったミソサザイ、その改良バージョンでは連合軍側のフィクサー（欺瞞装置）に釣られてしまったり、自分の騒音に騙されないため航行速力を大きく制限せねばならなかった。

しかし1945年1月頃から試験投入されたT11型魚雷においては、内部の電子機器の精度向上によって速力が35ノットまで引き上げられ、また複数の音響パターンに対応できるように、発射前

にセット可能となっていた。

この魚雷は、誘導装置の大型化によって炸薬量を減らさざる得ないこと、さらに価格が以前にも増して高価になると言う弱点を抱えていたが、命中率は大幅にアップした。

特に、それまでフィクサーによって音響魚雷は回避できると信じ込んでいた連合軍護衛艦艇の指揮官たちを、大いに驚かせ、そして悩ませることとなった。

またUボート艦長たちはあまり積極的ではなかったが、水中における対潜水艦戦にも時折使用し、特に北海ならびに北太平洋方面で活動する米英潜水艦をわずか2ヶ月で11隻も撃沈することとなった。これらの多くは、レジスタンスへの補給任務中に撃沈された物であった。

一方、連合軍も音響魚雷は配備していたものの、これは主に防備用であり、攻勢に使用する枢軸側に比べて使用できる場面が限られていた。加えて、ドイツ側の潜水艦はこれに対する対策を既に身につけており、連合軍側においては早急にドイツ側と同等、もしくは凌駕する誘導魚雷の開発に迫られていた。

戦争とはあらゆる面でのシーソーゲームである。それは技術にも当てはまるものであった。連合国はその中心である日米英の科学者たちが、その総力を上げて新兵器の研究開発を行っていた。

ただし、当たり前のことだがそれぞれの国家の事情や利益のため、公開に至らない、融通できない技術も多々あった。特にアメリカがリードしていた核兵器（ただし、核兵器は理論的には既に他の2カ国も完成段階にあり、アメリカが秘匿したのは主に製造状況だった。

しかし、これに関しても日英はそれぞれ独自のルートを駆使して、ある程度の部分は掴んでいた。)はその典型たる物であった。

一方で、艦船や航空機、電子機器等最前線で消耗される兵器に関する部分に関しては、それなりに融通が図られている部分であった。

日本は色々な部分で、人種偏見的な面から、比較的遅れているとこれまでは見られがちであった。しかしながら、第二次世界大戦がそうした面を大きく払拭した。

この世界における日本は第一次大戦への本格参戦や、その後の国力充実によって欧米に遅れを取る部分はあったが、際立って遅れていると言っわけではなかった。むしろ戦艦「大和」を建造した造船技術、零戦や「烈風」、「震電」を開発した航空技術、酸素魚雷を開発した水雷技術等々、欧米を上回っている部分も多々あった。

だから、日本海軍も見返りとして様々な兵器の供与を受けており、補給も米英軍と同等な物を受けられて、贅沢な戦争を行うことが出来ていた。

第一次大戦と同様、極東の島国はその存在感を増しつつあった。逆に言えば、それは色々と危険な仕事を任されると言うことでもあった。

北大西洋方面への船団護衛に、日本海軍が部隊単位で参加したのも、戦略レベルの事情もあったが、それと共にこの頃急速に高まっていた联合国商船乗組員や联合国国民の期待に答えての部分もあった。

1945年4月7日、帝国海軍はアイスランド・イーサフィヨル

ドに北大西洋派遣艦隊司令部を設置し、太平洋やインド洋、南大西洋から転戦してきた近海防衛艦隊や連合艦隊各部隊を指揮下において、連合国海軍と共に北大西洋の航路防衛に本格参入した。同司令部の司令長官には連合艦隊水雷戦隊司令官として活躍した木村昌福中将が、参謀長には近海防衛艦隊より派遣された神部健少将が着任した。

なお英国でも米国でもなく、わざわざアイスランドに司令部を置いたのは、アイスランドがこの時期北大西洋の重要な戦略上の拠点であり、またノルウェーの基地にて虎視眈々と出撃の機会を窺う、ドイツ水上艦隊の牽制に持つて来いの地理的条件によるものであった。

実際、アイスランドには連合艦隊より分派された機動艦隊と戦艦部隊が後に前進し、拠点となっている。

ただし、北大西洋派遣艦隊司令部やその指揮下にある各部隊内では、「アイスランドを拠点に定めたのは、温泉を楽しみたい木村中将の我侬があつたからだ」と実しやかに噂されていた。

そんな司令官の私情があつたかどうかはともかくとして、日本海軍がこの地を拠点に定めたのにはもう一つ理由があつた。それは、援フィンランド・援スウェーデン向け物資の出発拠点であつたからだ。

1939年の冬戦争によって、屈辱的な領土割譲を強いられたフィンランドは、ソ連に盗られた土地の奪還を狙っていた。しかしながら、北欧の小国にそんな国力がある筈が無く、同国はジーツと我慢することを強いられていた。

転機が訪れたのは1944年3月のことである。ソ連がドイツの尻馬に乗って連合国に対して宣戦を布告したのである。この際ソ連は、フィンランドに対しても宣戦布告して、占領地の拡大を図った。

しかし、ここでソ連が思いもなかった番狂わせが起きる。かつての冬戦争と同じく、フィンランドは頑強に抵抗した。さらに彼らが使っていた武器も問題であった。

何とフィンランドは、潤沢とは言わないまでも充分な量の枢軸及び連合両陣営製の武器で武装していたのである。戦闘機の主力はMe109、Do510、「スピット・ファイア」、2式戦闘機「飛燕」、P39等、戦車も4号戦車や3号突撃砲、M3戦車やバレンタイン戦車を保有していた。

どうしてこうなったかと言えば、これは枢軸ならびに連合両陣営がそれぞれ支援合戦を繰り広げた結果であった。

連合国としては、北欧に連合よりの国家を出現させておくことは、ドイツならびにソ連への大きな牽制となる。一方枢軸としては、潜在的敵国であるソ連への牽制と、フィンランドを敵国化しないことならびにフィンランドから物資を横流ししてもらったためであった。

実はフィンランド、中立国である立場を最大限利用して、連合国からコーヒー等ドイツが欲しがる一次産品を大量に買い付け、それをドイツに転売していた。もちろん、それ以外にもかなりギリギリな物品までドイツに横流しをしていた。

もちろん、連合国としては憤慨物であるが、取締りをきつくしてフィンランドの国力を著しく弱めたり、枢軸陣営に参加させたりするのは得策ではなかった。また北欧はスパイなど、情報の中継地と

しても有望であり、この方面を独ソどちらからの勢力圏下に置きた
くはなかった。連合国側に見れば、フィンランド経由でスパイ
や情報を流してもらっている関係上、あまり強くは出られなかった。

ドイツとしても、万が一フィンランドが連合国に参入したりする
事態だけは避けたかったし、またコーヒーなど、国内では代用品に
なっていた嗜好品を輸入出来るか出来ないかは、兵士の士気に著し
い影響を及ぼす案件であった。

そう言うわけで、フィンランドは両陣営が持つ不安やメリットを
最大限に生かした外交で、双方の兵器を買い漁り（実際には、中古
兵器ばかりなのでかなり廉価で買っていた）質的には冬戦争とは比
べ物にならない程の進化を遂げていた。

さらに、ソ連が正式に参戦してもドイツは「我が国はフィンラン
ドには宣戦布告しない」と宣言し、ソ連は単独でフィンランドと戦
う結果となった。

そしてこれによつて、連合国は本格的にフィンランドへ援助を行
える口実を得た。ただし、北海経由での物資輸送はソ連のみならず、
ドイツによる妨害の可能性も高かった。

そこで、連合国はフィンランドと秘密協定を結んで、ある作戦を
実行に移した。それがムルマンスク攻略作戦であった。この作戦は、
1944年8月に実施された。

終盤戦 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

終盤戦 8

1944年8月に実施されたムルマンスク攻略作戦は、実質的に連合国とフィンランドによる合同作戦であった。

ムルマンスクは北極圏に位置するソ連の港湾都市であり、ソ連北洋艦隊の拠点でもある。連合国はこの地を一時的に占領下に治めて、北海・バルト海・フィンランド湾を経由しなくてもフィンランドとの交易ルートを確保しようと目論んでいた。

北極圏と言う厳しい気候環境のもとでの作戦となったが、充当された米英機動艦隊の航空隊による空襲によって北洋艦隊の艦艇と、ムルマンスク周辺の飛行場、要塞が破壊されたのを皮切りに、連合軍は順調すぎるほどのスピードで攻略作戦を展開した。

ソ連軍も南方から増援を寄越そうと躍起になったが、ムルマンスクへの兵員輸送手段がわずかに鉄道1本しかなく、それさえもフィンランド軍によるゲリラ部隊と、連合軍航空隊の波状攻撃によって運航不能に追い込まれた。

鉄道以外の陸路による輸送も試みられたが、大量の戦力を輸送するには不向きなことこの上ないことに加えて、これすら戦闘と空襲によって途絶させられてしまった。

ソ連軍ムルマンスク守備隊は、抵抗を試みたものの物量に物を言わせて上陸してきた連合軍の前に、為す術も無く、わずか3日で白旗を揚げざるを得なかった。

ソ連としては、この方面から連合軍がカウンターパンチを仕掛け

るとは全く考えておらず、陸上戦備に関しては最新型のIS2型戦車どころか、現在主力となっているT34の初期型すらわずかしがなく、主力はBT7型やT26戦車と言う状況であった。守備兵力も、数こそ充分だったがその装備や質は2線級レベルでしかなかった。

ムルマンスクを本拠地とする北洋艦隊も、わずかな数の巡洋艦と新型駆逐艦を除けば、その多くが旧式の駆逐艦や潜水艦、魚雷艇などであった。これらの一部はよく奮戦し、連合軍の輸送船1隻、揚陸艦1隻を撃沈したが、最終的に撃沈されるか自沈するかして全滅した。

近郊の飛行場に配備されていた空軍の兵力も、お披露目程度のYak3やLav9を除けば、主力は旧式のMig3やI16と言った旧式機が中心で、とてもではないが最新鋭の米英艦載機には太刀打ち出来なかった。

こちらにも、一部のパイロットが敢闘したものの、米英軍のF6FやF4U戦闘機の前に叩き潰されてしまった。

この連合軍の攻勢だけでも、ソ連軍には酷なことなのであったが、さらにフィンランド軍も陸路国境を超えて侵入し、ムルマンスクは完全に包囲されることとなった。

ムルマンスクが陥落すると、連合軍は現地を維持するだけで、それ以上の侵攻は行わなかった。彼らはナポレオンになる気はさらさらなかったのだ。

ソ連軍は何度か奪回作戦を試みたものの、いずれも尽く失敗に終わった。

連合軍はアメリカ製の重機を惜しみなく投入すると、短期間でフィンランド本国との間の道路を開通させてしまった。さらに、やはりアメリカ製の大量のトラックを使い、多量の物資をフィンランドへと運び込んだ。

こうして、その後ソ連との休戦が成立するまで、連合軍はせっせとフィンランド軍に武器をはじめとする様々な物品を運び続けたのである。ソ連との戦争開始以前から、既に中立国経由で武器の提供などを受けていたフィンランドであったが、この後際限のない連合国側の支援によって、短期間の内に攻めてきたソ連軍を排除したのみならず、冬戦争で奪われた領土の奪回にも成功したのであった。

また、この援助物資の輸送によって、フィンランドは枢軸入りを思いとどまった。と、同時に枢軸と連合を両天秤にかけた外交を展開した。

その後ソ連と連合国が休戦し、ムルマンスクはソ連に返還されたものの、ムルマンスク経由でのフィンランドへの物資供給は、その後も続いていた。フィンランドとスウェーデン向けの援助は、ソ連との戦争が終わった後も、フィンランドに枢軸陣営参加を思いとどまらせる意味から重要な手段であったので。

もつとも、対するドイツ側に見れば、面白くない話であった。自分たちの鼻先で連合国が活動しているのだから、当たり前と言えは当たり前である。

「フィンランドが連合国と通商を行うのはダメ！」と言うわけではなかったが（何せドイツ自身がその分け前を手に行っていたため）、かと言ってフィンランドが万が一連合国入りしてもらうのも不都合

であつた。

そのため、ノルウェーに本拠地を置くドイツ艦隊と潜水艦隊、さらに空軍は連合国艦艇および、フィンランドならびにノルウェー船籍ではない商船への攻撃を盛んに行っていた。

この頃在ノルウェーのドイツ海軍戦力は、旧式となつた装甲艦や重巡、駆逐艦、フランス・オランダなどの鹵獲艦が中心であつたものの、改装空母の「エウロパ」を戦列に加えており、あなどれない相手であつた。

1945年2月には、フィンランド向け船団と護衛艦の部隊がクメッツ提督率いるドイツ艦隊に襲われ、大損害を出している。

米英軍は、この在ノルウェー独海軍艦隊の殲滅を幾度と無く図つたが、ドイツ艦隊は連合国側が攻撃の兆候を見せると、すぐに引き返してフィヨルドに籠り、対空砲や空軍機の傘の元で安全を確保してしまつていた。

このため、米英軍はわずかな戦果のために、大損害を被つていた。

こうした事情から、在ノルウェードイツ艦隊は1945年5月現在も、北大西洋に睨みを効かしていた。

そんな中で、日本海軍の護衛艦隊がムルマンスク航路への護衛も担当することとなつた。船団はアイスランドのレイキャビクに集合し、補給の後一路北へと進路をとつた。貨物船やタンカーなど12隻からなる、小規模船団（あくまで大西洋における船団の規模としては）で、護衛するのは帝国海軍の巡洋艦2隻、護衛巡洋艦1隻、駆逐艦4隻、護衛駆逐艦6隻、護衛空母2隻、海防艦10隻であつ

た。

商船に比して、護衛艦艇の数が物凄いが、これは船団がUボート、敵水上艦、ならびに敵空軍機の攻撃を受けるおそれがあったからだ。

艦隊司令官は護衛艦隊が近海防衛艦隊出身の、伊丹重蔵少将。連合艦隊艦艇が重巡「高雄」座乗の戦隊司令官高木勇一郎少将であった。なお出撃前の打ち合わせで、先任は伊丹少将となっており、敵水上艦艇との戦闘の時に限り、高木少将が指揮を執る変則的な指揮となった。

これは伊丹少将が対水上艦艇のキャリアが少なく、高木少将に任せただけであった。

艦隊と船団は、出港直後からUボートによる触接を受けたが、これはレイキャビクから飛んでくる対潜哨戒の爆撃機や、飛行艇によって退けられた。

この内飛行艇は、最新型の2式大艇改「閃空」であった。「閃空」は2式大艇をベースにしているものの、アメリカやイギリスの技術を取り入れた機体で、エンジン出力のアップや居住性能の改善、搭載武装の改良を施した機体であった。

この機の搭乗によって、船団は長距離に渡って基地航空隊の護衛を受けられることとなった。

飛行艇以外にも長距離爆撃機や飛行船なども護衛任務に参加しており、これらはドイツ空軍の航続圏外ではドイツUボートの大きな脅威となった。ただし、戦闘機に適わないのでノルウェーに駐留するドイツ空軍の第5航空艦隊の活動圏内には、当然ながら入れな

った。

もつとも、ドイツ空軍にはそもそも長距離爆撃機や長距離戦闘機の数自体、あまり多くは無かったのだが。

それはともかくとして、この日本艦隊と船団出港の報告は、Uボートとアイスランドに潜入中のスパイの手によって、早速ベルリンへと送られた。

この情報に接して、ドイツ海軍総司令部はクメッツ提督の、在ノルウェー艦隊に対して出撃命令を命じた。さっそく北ノルウェーのアルテンフィヨルドから艦隊が出撃した。

ただし、機関故障や補給の関係から出撃できたのは装甲艦の「リユッツォー」、「アドミラル・グラフ・シュペー」、重巡「アドミラル・ヒッパー」、空母「エウロパ」、軽巡「ミュンヘベルグ」、駆逐艦5隻であった。

そこまで多くはないが、それでも装甲艦の28cm砲は脅威であるし、日本艦隊（護衛艦以外）の数は上回っていた。

ちなみに、装甲艦とはポケット戦艦とも言える艦種で、重巡とほぼ同等の船体に、巡洋戦艦クラスの28cm砲を搭載したドイツ独特の艦種である。戦艦に対してはその高速を利用して引き離し、重巡に対しては砲力で圧倒すると言う触れ込みであったが、実際の所通商破壊艦という色が濃い。

ポケット戦艦と言う通り名こそあるが、装甲は重巡程度なので戦艦と呼ぶには少しばかり無理がある。

しかしながら、例え装甲艦が戦艦もどきであるにしても、クメツツ提督らドイツ艦隊司令部としては、重巡と駆逐艦、護衛艦相手ならこれで充分と踏んだのである。実際彼らは2月の海戦で英国の巡洋艦を撃破していた。

ただし、その時は装甲艦がもう1隻いたのだが、そのもう1隻である「アドミラル・シェアー」は今回機関故障で留守番であった。

このドイツ艦隊出撃の方は、日本艦隊にも届き、伊丹少将はただちに全艦船に警報を出すと共に、高木少将に対水上戦闘用意を発令した。

終盤戦 8（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668g/>

真の海防

2011年4月6日18時59分発行